

立山町歴史交流ステーション日なた 研 究 紀 要

第 4 号



越中瀬戸焼蹴ロクロ

2026 年

立山町歴史交流ステーション 日なた

はじめに

立山町歴史交流ステーション 日なたは、令和3年4月1日にオープンした歴史民俗資料館です。

立山町郷土資料館（平成7年～平成19年、立山町五百石）、立山町埋蔵文化財センター（平成19年～令和元年、立山町谷口）と変遷を重ね、立山町日中上野の旧日中上野保育所を改修して資料館となりました。

町内からの出土品・民具の展示のほか、古代体験等を通じ、地域資源を活用した交流促進を図ることを目的とした施設です。

学芸員を配置し、展示・活用事業を行うとともに、これに関連した研究も推進しています。

特に町指定文化財などの調査研究は、科学的な分析研究や調査技術の進展により、見直しが迫られ、また将来にわたる保存継承が課題となっています。

当館では、学芸員が中心となって上記の調査研究に取り組んでいます。

本書は、立山町に関連した文化財等の調査研究成果について掲載しております。

令和8年3月

立山町歴史交流ステーション 日なた

目次

調査野帳としてのスケッチブック

—昭和期富山の美術史家／文化財有識者、長島勝正の遺品資料から—	杉崎貴英	1
長島勝正 書誌兼年譜稿	杉崎貴英	23
長林館文庫【長島勝正コレクション】の概要	古川知明	75
福岡瓦工場と越中瀬戸焼復興について	廣田雄介	95
芦峯寺文化六年喚鐘について	古川知明	123
立山線における貨物輸送の歴史	深居賢人	136
令和7年度ミニ企画展「上段地区のお蚕様」展から	森井祐子	159
立山文化遺跡調査の足跡—石原興作スケッチブックより—	古川知明	168
Abstract		210

調査野帳としてのスケッチブック

——昭和期富山の美術史家／文化財有識者、長島勝正の遺品資料から——

杉崎 貴英

(帝塚山大学文学部教授)

「地方文人」という言葉がある。地方における教養人で、地域の教学の振興や文化の興隆に尽くした人のことをいう。(中略) 私は長島先生に接し、昔の地方文人とはこんな人のことをいったものだろうと思った。(中略) 戦後の農地解放その他で、財産はほとんど失われたが、愚痴は聞いたことがない。人柄は汪洋で抱擁力があり、いつも柔和な笑顔を絶やされなかった。細事にこだわらず、大所高所からの観察眼に、大人(たいじん)とはこんな人のことをいうのかと、感心させられたものである。

——八尾正治「偉大な地方文人 長島勝正先生を想う」¹

はじめに

長島勝正(1904～90)は、昭和戦前から戦後に長くわたり、富山県下の美術史ひいては文化財全般に関し、その見識を発揮した人物である。また画家・前田常作(1926～2007)が若き日に学んだことも示すように、東京美術学校で彫塑を修め、帰郷以後に陶芸も手がけ、晩年まで絵筆をとりつづけた芸術家でもあった。

県下の先人を紹介するシリーズ『越中人譚』は長島の章²に、富山県[立山博物館]における一体の銅造神像の展示風景を大きく掲げている。郷土研究者で歌人でもあった廣瀬誠(1922～2005、元富山県立図書館司書・館長)は、逝去に際して捧げた一首に「さすらへし立山神像ひたもとめ尾張の果までたづねたまひき」と、この像をめぐる長島の事績を詠んだ³。明治時代に立山山麓から愛知県下へと転出し、昭和15年(1940)に「銅造立山神立像」の名で国の重要美術品に認定されたこの像は、同42年(1967)に至り、あわや海外流出しかけたところを当時の吉田実県知事により食い止められたというエピソードをもつ⁴。劇的というほかない帰還へとつながるそもそもの端緒をなしたのは、廣瀬が哀傷歌に表現した、戦時下における長島の行動であった。帰県の翌年に国指定重要文化財となったこの像(銅造帝釈天立像、旧指定名称「銅造男神立像」⁵)は、中世立山信仰の代表的遺品であると同時に、長島の記憶を象徴的に物語る存在ともなっていたようだ。

長島の逝去から四半世紀を経た昨年(2025年)、約12,000点に及ぶ遺品資料一括が立山町に寄贈された。多彩な内訳については受け入れに尽力された古川知明氏による別稿(本号75～94頁掲載)を参照されたいが、分野別に編んだ帙入りの写真資料や自筆原稿など、知的営為を如実に伝える資料群はことに目をひく。過半をなす蔵書は、稀覯ゆえの価値はもとより、学知のバックグラウンドを物語る点において光彩を放つ。

本稿では、遺品資料から見出されたスケッチブック類に分け入ってみたい。そこには県下の文化財に関する記録が日々のスケッチと共存しており、いかにも芸術家としてありつづけた長島らしい遺品と言いうる。年代はほとんど明記されていないものの、おおよその使用期間を見定めることもできた。それらは昭和30年代、県下において文化財をめぐる再認識が活況を呈した時期と重なっていることでも注目に値する。

なお、本稿執筆と並行して「長島勝正 書誌兼年譜稿」を試作してみた(本号23～74頁)。あわせての参看を乞う。

1. 人と業績の輪郭

本題に入る前に、長島の人と業績を知るための基本文献を年代順に掲げておこう。

- [a] 昭和 49 年 (1974) 記念誌『長島勝正先生の人と業績』(長島勝正先生の古稀を祝う会)
- [b] 昭和 50 年 (1975) 単著 『越中の彫刻 祈りと美の系譜』(富山文庫 8) (巧玄出版)
- [c] 昭和 58 年 (1983) 単著 『富山の美術と文化』(文献出版)
- [d] 昭和 58~59 年 (1983~84) 単著『立山曼荼羅集成』第 1 期・第 2 期 (文献出版)
- [e] 平成 3 年 (1991) 遺著 『とやまの古美術』(文献出版)
- [f] 平成 14 年 (2002) 太田久夫「県文化財の保護と選定に努めた 長島勝正」

(『越中人譚』第 53 号、チューリップテレビ)

このように、生前の単著とiiいうものは古稀以降の数点なのだが、[a] に太田久夫氏 (1936~、当時・富山県立図書館司書) が編みなした目録のみでも、県下で刊行された図書そして雑誌・新聞への執筆はかなりの数に及ぶ。以後逝去するまでの 15 年ほどの間にも執筆は多く、最晩年に従事しながら生前に完結をみなかった『入善町史』まで、執筆あるいは監修・編集などで関わった自治体史は戦後を通じて少なくない。

[b] は富山県下の出版社による刊行物のため、県外の図書館等での所蔵は少ない。また [c] [d] [e] は、東京都区内ながら小規模な出版社⁶からの刊行であったためか、やはり他県での所蔵は多いとはいえない。郷土人を顕彰するシリーズでの [f] から既に 20 数年が経過する令和のいま、長島勝正という存在を知る人は、富山県内でも少なくなっているのではないだろうか。

ここで、[c] の巻末に載る著者紹介を抜粋しておこう (／は原文での改行位置を示す。以下同じ)。

明治 37 年 (1904) 入善町櫛山に生まれる。／大正 11 年東京美術学校 (現東京芸術大学) 彫刻科塑造部卒業。同校研究科で美術史専攻、現在富山県文化財保護審議委員、富山県史編纂専門委員、富山県郷土史会会長、入善町史編纂監修者等。受賞歴／昭和 47 年第一回文化庁長官賞、同 48 年富山県文化功労賞、同 50 年富山新聞文化賞受賞。(以下略)

これによるのみでも、当時傘寿を迎えようとしていた長島が、地域に生きる美術史家として、また文化財全般にわたる有識者として、そして郷土史家 (地域史研究者) の一人として活動し、歳を重ねてきた人物であることが理解できよう。かつ東京美術学校という環境で塑造の実技を学び、つづいて美術史学を専攻して帰郷後にも、立体造形を創り絵筆を執る芸術家としてありつづけたという側面——それは前掲の著作からはうかがいにくいことでもあり、別掲「長島勝正 書誌兼年譜稿」に諸事績を収めた——にも留意したい。

2. 美術史家／文化財研究者のノートをめぐる近年の動向

スケッチブックに分け入る前に、本稿にかかわる動向にふれておく。近年の美術史学では、過去の研究者が残したノートに光を当て、資料保全や調査研究、展示公開をはかる動きがみられるのである。前提の一つには、1990 年代後半に高まりをみせた、日本美術史学の形成史を問う潮流⁷があったといえる。

2015 年、京都工芸繊維大学美術工芸資料館は「土居次義 記憶と絵画」展⁸を、2018 年には「記録された日本美術史—相見香雨、田中一松、土居次義の調査ノート展—」⁹ (実践女子大学香雪記念資料館との共催・巡回) を開催した。後者の趣旨文から一節を掲げておこう。

日本における美術史学が草創期から形成期に入った大正・昭和期 (中略) 当時は、撮影や複写が容易でないことに加え、社会情勢の変化によるコレクションの散逸や、災害や戦争による文化財の破損など、

作品をめぐる状況が揺れ動き、目の前の作品の記録をとる行為の切実さは一際強いものでした。

相見（1874～1970）・田中（1895～1983）は長島より前の世代の、土居（1906～91）は同世代の日本絵画史研究者である。彼らと同様の「切実さ」は、富山在住にして東京の美術研究所（現・東京文化財研究所）の嘱託であった堀井三友（1885～1942）¹⁰も、そして堀井を郷里の先達とした長島も共有していたに違いない。なお田中・土居のノートについてはその後、東京国立博物館における特集展示「日本美術の記録と評価—調査ノートにみる美術史研究のあゆみ—」（2020年）¹¹での一部公開を経て、2022年5月からは東京文化財研究所ウェブサイト内のコンテンツ「日本美術の記録と評価—美術史家の調査ノート」¹²で紙面がインターネット公開に供された。田中のノートには、富山県に関わる内容も2件見出されることを付記しておく¹³。

最近の例では、彫刻史研究者であった久野健（1920～2007）のノートが、長年勤務した東京文化財研究所（当時は東京国立文化財研究所）に寄贈されたことが大きい。312冊が所内の施設で閲覧に供されるとともに、内容の目録がウェブサイトで公開されている。「全国各地で調査した仏教彫刻の法量や状態等の情報や講演録が記載されており、当時の久野氏の研究の足跡や作品の状態を知るうえで貴重な資料群」¹⁴とは同所の紹介だが、名刺や依頼元からの書面などが貼り込まれるなど、内容はさらに多彩である。ちなみに富山県に関する部分を閲覧してみたところ、『氷見市史』編纂事業における依頼に久野が応えた際の書面・調査記録（1960年7月）を見出せた¹⁵。さらに「第3回日本海文化を考えるシンポジウム」での講演（1983年11月）に際して関係者たちから受けた名刺が貼り込まれるなかに「長島勝正」のそれが含まれていた¹⁶。

地域博物館における展示例もある。亀岡市文化資料館は2014年6～7月開催の企画展「ふるさとの名品—指定文化財の世界—」で、市史編纂事業における中野玄三（1924～2014、元京都国立博物館ほか）の調書を、調査時のスナップ写真とともに展示した¹⁷。同市の文化財調査・保護のあゆみを語る資料の一つとしてであるが、折しもその4月に逝去していた中野の眼と知をしのばせる遺品の観もあった。なお中野は最晩年に、京都府教育庁文化財保護課に在職した当時（昭和32～41年度）を回顧して「とにかくやらなければならない仕事がたくさんありました（中略）高度経済成長のもと、急いで多くのことを成し遂げることが求められたのです。おそらく政治や経済界もそうであったろうし、私が携わった文化財行政もそうだった」と語っている¹⁸。地域や立場は異なるが、長島も同様な時代に富山県文化財調査委員として活躍したのであった。

現役の研究者のノートを展示公開した例もある。「ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡」展（2007～2008年、福岡アジア美術館ほかを巡回）では、宮治昭氏（1945～）の手帳や実測図が展示されていた。宮治氏の調査記録は「文明の十字路・バーミヤン大仏の太陽神と弥勒信仰」展（2024年、龍谷ミュージアム・三井記念美術館）でも展示されたが、そこに記録された文化遺産が後年に破壊され、調査当時には予期されなかったであろう資料的価値をも帯びることとなった例でもある。やはり事情を異にするが、長島のスケッチブックにも、後年に消滅したり、あるいは消息を失った文化財の記録が含まれているかもしれない。

美術史学の外にも目を向けておこう。2015年、九州国立博物館は特別展「日本発掘—発掘された日本列島2014—」の一角に、「発掘現場の臨場感あふれる「野帳」を特別に公開」¹⁹するコーナーを設けていた。その後では、東北リサーチとアートセンター（2019年）・高松市埋蔵文化財センター（2021年）における河内一浩氏（考古学研究者、1961～）の野帳をテーマとした展覧会²⁰を特筆しておきたい。

コクヨの製品「野帳（測量野帳）」はいま一般にも広く用いられるが、当初は測量士向けに開発されたものであった²¹。1959年の発売開始時点でも50代半ばになっていた長島が、これを手にしたことがあったかどうかは知られない。ただポケットに入るほどの紙面サイズ（見開きで16.5cm×19cm）は、デッサンが習慣となっている手の動きを想像する時、いかにも小さすぎるのではないかと思われてくる。芸術家としての日常で早くから馴染んできたスケッチブックを、調査野帳としても自然に活用することとなったのであろう。

3. スケッチブックの概観と、使用期間の検討

(1) スケッチブックの概観

筆者は2025年3月27日、立山町歴史交流ステーション日なたにおけるミニ企画展「小山富士夫の越中瀬戸窯発掘調査展」を拝見した際に、同館にまずは寄託のかたちで収容されていた長島の遺品について案内を受け、瞥見させていただくことができた。大正期から昭和戦後期にわたる、長島の知的営為と活動を如実に物語る資料群としての意義を実感したが、とりわけ強い印象を受けたのが一連のスケッチブックであった。

令和7年度館蔵新資料紹介展(1)「昭和中期の文化財調査記録」展(5月10日～6月1日)では一部が紹介された。この展示が準備される過程で、筆者は学芸員の古川知明氏よりたびたびのご教示をいただき、情報交換を重ねた。文化財調査の記録を含むスケッチブック類に関しては、古川氏の撮影にかかる各冊すべての画像データを数度にわたり電送にてご提供いただいた。感嘆と興趣を新たにするとともに、通覧するなかで、長島の著述あるいは存命中の新聞報道などとの脈絡にたびたび思い当たったのである。

各冊とも多かれ少なかれ、静物【図1】・人物【図2】・風景【図3】などのスケッチが共存している。文化財の記録では、スケッチないし略図を描き、そこに所見を書き込んだものも散見する。対象は仏像彫刻から絵画・工芸などの美術だけではなく、石造物や考古遺物、民俗芸能【図4】にも及ぶ。現地で接した古文書の釈文、自宅での筆記と思われる史料の抜粋も多い。備忘録的な書き込みが、スケッチの周囲にまでなされているページもある【図5】。

内容の多彩さの一方では、記述にも描写にも粗密の幅が大きく認められた。そこには作品に対して長島が下した評価の幅よりも、紙面が使用された時と場における、さまざまな状況を考慮しておく必要があるだろう。文化財調査では、所蔵者あるいは依頼者の都合や意向、現地で作業に費やせる時間、さらにはその時々気候条件などにより、多かれ少なかれ制約がともなうものである。対象のなかには、所蔵者や地元関係者の要望に応じて向きあった(時には、向きあわざるをえなかった)ケースも含まれているのに違いない。

ともかくもスケッチブックからは、長島が実見の機会を得た古美術／文化財にはジャンルを問わず(時には、恐らくはあえて真贋をも問わず)向きあい、多少とも記録を心がけていた様子がしのばれるのである。

(2) 使用期間の検討①——著述との照合

これらのスケッチブックに長島が筆を走らせたのは、85年にわたった生涯の、いつのことであろうか。

各冊にはすべて、紙面の主として左上に「月日」を記入したページが散見する。しかし「年」の記載はほとんどみられない。したがって記録された内容に手がかりを求め、各冊の使用期間を見定める作業が課題となった。以下、各冊については資料の受け入れにあたって古川氏が付与した記号・番号を用いることとする。

【D-6】 【D-6】から例を挙げてみよう。この一冊(表紙に「Design Book」のロゴ)は、用紙の両面に薄く方眼が印刷されており、「11月22日」から「10月10日」まで、2年にわたる日付が散見する。

糸口となりそうな感触をおぼえた記録の一つは、礎石らしきものの実測図であった【図6】。別の方眼紙にあらためて描いた図も貼り込まれている。これに符合する図が、越中史壇会の会誌『越中史壇』第24号(1962年11月刊)に長島が発表した「福野町寺家の三個の礎石」に載っている。この礎石は、長島の報文と同年の7月24日付で福野町の指定文化財となったものである(名称「夫婦岩・皇孫塚」、現・南砺市指定文化財)。

長島は文中で、「昨年の秋雨のそばふるある日」、「木倉大兄」＝木倉豊信(1906～1967、当時富山県文化財専門委員)とともに「院林の常願寺」(南砺市〔旧福野町〕院林、浄土真宗東本願寺派)を訪問する途中に初見したこと、しかし当日は寒さのため実測に至れず、「小春日よりの日、あらためて出掛けて計測した」ことを述べている。【D-6】は「院林 真栗山 常願寺」での記録に始まり(月日の記載なし)、「11月22日」

付の舟橋村個人宅での記録のあと、この礎石の記録(最初のページに「皇孫塚」と書き込みあり)がつづく。

以上により、[D-6]の使用期間は昭和36年(1961)11月頃～翌年10月10日と推断できる。旧福野町における調査記録が多いが、長島は当時『福野町史』(1963年3月刊)の編纂・執筆に関わっていた。ここに記録された調査は、報文を載せる『越中史壇』刊行に先立ち文化財指定の根拠資料ともなったのであろう。

[D-62] 長島の著述との対応が確認できた例を、もう一つ挙げておこう。[D-62]は用紙の枚数が最も多く、静物・人物・風景などのスケッチも最も多く混在している。日付の書き込みをともなう記録は「26日来迎寺」に始まるが、月日の記載は「11月21日」から、その翌々年の「4月25日」までが散見する。

前半に、「4月21日 石動町(杉崎注、現・小矢部市) 埴生若宮山医王院(浄土宗)」での調査を8ページにわたって記録した部分がある【図7】。その2ページ目からは「初江王」以下諸像の法量・墨書銘、像底の図がつづく。長島は昭和33年(1958)8月、木倉豊信との連名で「埴生医王院の十王群像について」を『越中史壇』第14号に発表している。これを糸口とすれば、[D-62]が使用されたのは昭和32年(1957)10月26日～34年(1959)4月25日を含む期間と推断される。

[D-1] 年代特定の手がかりは、親交のあった県下の研究者の著述にも求めることができた。

[D-1]は「2月22日 朝日町境 護国寺」での記録に始まり、日付をともなう記録は翌年の「2月19日 和合町(杉崎注、現・富山市) 西岩瀬／海禅寺」までで、さらに高岡市・富山市での記録がつづく。

2年目の2月6日以降13日以前に、出土品の下駄を「原寸」大で克明にスケッチし、実測値を書き込んだページがある【図8】。図の左には「呉羽町(杉崎注、現・富山市) 中沖／暗渠排水工事中／昨年十一月」と書き添えられている。「昨年」とはいつのことであろうか。

この遺物については昭和38年(1963)12月、近隣の学校教員であった高瀬保(後に富山県史編纂室、1926～96)が「越中・中沖出土の露卯の下駄」(『史苑』24-2)と題する研究ノートを発表しており、「昭和三四年一二月一五日に」これが出土し、その報知を受けた際の状況を詳しく述べている。長島の記録とは月次が異なるものの、スケッチがなされた年を見定めることができよう。すなわち[D-1]は、昭和34年(1959)2月22日から翌年2月19日以降しばらく後までの期間に使用されたものと推断できる。

なお高瀬は報文の冒頭で、この下駄が「富山県文化財調査委員長嶋勝正先生から「越中一品」と折紙づけられた」と述べている。長島が実物に向きあってスケッチをした、その場での讃辞ではなかっただろうか。

(3) 使用期間の検討②——新聞記事の援用

ただ長島に限らず、調査は必ずしも著述に反映されるわけではないし、著述に反映したとしても調査の年代が明記されるとは限らない。そのようなケースに関しては、新聞等が特定のための手がかりを提供する。

筆者は以前、昭和30～40年代の富山県下において文化財の再認識が活性化していた状況に気づき、古彫刻に関する範囲で調査研究状況の概略をまとめたことがある²²。コロナ禍で富山との往復がままならなかった中で起筆・成稿した事情もあり、以前から活用してきた富山県立図書館ウェブサイトの「富山郷土資料情報データベース」および「県内新聞雑誌記事見出し検索」には大いに助けられた。今回も上記のコンテンツを繰り返し活用し、記録のなかの固有名詞をキーワードとして検索を試みてみたのである。

[D-9] [D-9]における日付は果物のスケッチに添えられた「8,13」に始まるが、文化財に関する記録はその次ページの「8月17日 魚津市経田持光寺大徳寺調査」に始まり、その2年後の2月11日の高岡市観音寺・蓮華寺ほかの調査で終わる。3年にわたり使用されたことになるが、その1年目に属する部分に、前後の書き込みとの脈絡が明確でないものの「昭和三十年十月十一日調査」とあり、使用期間の明確な指標となる。スケッチブック類において、「年」の記載をともなう日付はこれのみである。

大徳寺の記録では「聖観音像 木彫 一木 平安初期」云々とあり(スケッチはない)、長島が古い木彫仏

とみたことがうかがえる。『富山新聞』昭和30年(1955)8月21日夕刊には「国宝級の聖観音像 魚津市経田大徳寺 宝物開帳虫干しで発見」の記事がある。また観音寺本尊の聖観音菩薩立像(のち県指定文化財)については「鎌倉初期 藤原式」という判断を記しているが、この像については『北日本新聞』昭和32年(1957)2月13日朝刊に「鎌倉時代の観音像 高岡で発見」の記事がある。これらの符合によっても、文化財調査における[D-9]の使用期間は昭和30年8月17日～同32年2月11日と見定めることができる。

【D-8】 [D-8]における文化財関係の内容は、「上市町周辺(を中心とした)文化財について/3月6日 上市町伊折文化講演」に始まり、同年の「7月16日 富山市西番 正源寺 曹洞宗」で終わる。

「三月二十四日」付の「舟見町十三寺」の記録には、同行者と思しい「水野、野島」の名が書き添えられている。それぞれ、水野徳二(彫刻家・朝日町出身、1915～59)と野島好二(郷土史家・舟見村出身、1905～92)かと予測できた。十三寺(現・入善町舟見)は長島の家があった櫛山の南方8キロ余りのところにあり、本尊として安置される千手観音立像をはじめ5体の木彫像(県指定文化財)は、戦前に堀井三友により平安時代の作として評価されていた²³。富山県立図書館ウェブサイトの「県内新聞雑誌記事見出し検索」で「十三寺」をキーワードに検索し、昭和30年代について得られた情報のうち『北日本新聞』昭和31年(1956)7月13日朝刊記事の見出しに「日展作家の水野氏が修理」とあることに注目すると、[D-8]に記録されたのは、その修理に先立ち「三月二十四日」に十三寺を訪問した際のものかと考えられてくる。

これをふまえて[D-8]を通覧すると、「4月17日 宇奈月町明日 法福寺 稚子(マ) 舞」の詳しい記録があるのが注意をひく【図9】。ふたたび「県内新聞雑誌記事見出し検索」で「法福寺」をキーワードに検索してみたところ、同じく昭和31年の『富山新聞』に、「稚児舞を文化財指定調査 宇奈月法福寺の観音祭」の記事(4月20日朝刊)を見出すことができた。

以上から、[D-8]の使用期間は昭和31年(1956)3月6日～7月16日と推断できる。すなわち[D-9]と並行して使用されたことになろう。

【D-5】 [D-5]は「3月7日/高岡. 二上/射水神社/神像実測」【図10】に始まり(3ページにわたる)、「7月3日 八尾町聞名寺」での調査記録(4ページにわたる)で終わっている。

「5月1日 高岡産業会館 全国やま、ほこ研究大会」での記録は、『富山新聞』昭和35年(1960)5月3日の記事「祭りの本質も探ろう 高岡の全国やま、ほこ研究会終わる」から同催事を参観した際のものとは判明する。この催事に関しては『日本のやま・ほこ』第1集(高岡市教育委員会編・刊、1960年9月)があり、また『回想・高岡市政40年』(高岡市政の思い出刊行会編・刊、1985年)に、市職員としてのこの催事を担当した伊勢宗治の回想が載る。それぞれに、スケッチブックに記録された内容と符合する情報が見出せた。

「6月3日」付の各願寺(富山市〔旧婦中町〕長沢)での調査記録がある。木造弥勒菩薩坐像に関しては「石田茂作博士、藤原トイフ」との一文がみえ、同像の正面・側面の図が赤ペンを併用して描かれ「木屎で螺髪をつぶす」「後補」などの書き込みがなされている【図11】。長島は『越中の彫刻』(1975年)でこの像をとりあげ、「一〇年ほど前に当時の奈良国立博物館館長であった石田茂作博士がこの寺に来て、この像を精査されたところ、頭の螺髪の上に、ねりもので宝髻をつくっていたことを発見され、持物ももとは五輪塔ではなく、薬壺であったことがわかった」と述べている。『北日本新聞』には、昭和35年(1960)6月12日の朝刊に「各願寺(婦中)の弥勒菩薩 藤原時代の作とわかる 近く文化財保護指定を申請」の記事が載る。

以上により、[D-5]は昭和35年(1960)3月7日～7月3日にかけて使用されたものと推断できた。

【D-2】 [D-2]にみられる日付の記載は、冒頭から10ページ目の「8月5日 伏木勝興寺」から、末尾近いページの「宇奈月 進野先生 2月10日」までである。

「富山市新保 東源寺 禅. 曹洞宗」での調査記録には日付がないが、前ページが「10月9日 富山市 新保 光円寺」の調査記録なので、同じ日に双方を訪問したのであろう。

『北日本新聞』昭和35年10月14日朝刊には、「南北朝の作とわかる 富山市新保 東源寺の菩薩座像」の記事が載る(『富山新聞』翌日朝刊にも記事掲載)。これを手がかりとすれば、[D-2]は昭和35年(1960)8月5日～翌年2月10日を含む期間、すなわち[D-5]に続く時期に使用されたものと推断できる。

(4) 補説——長島勝正と新聞記者・図書館人

『北日本新聞』『富山新聞』また『北陸中日新聞』など、富山県下では地域の文化財に関する新聞等の取材・報道は手厚く、充実度も質も高いと思える。その伝統は、あるいは長島の時代に始まるのかもしれない。

令孫の松倉千尋氏によれば、長島の家にはよく新聞記者たちが出入りしており、記者クラブのような観があったという²⁴。また木内哲子氏は「お家はまるでNHK寮の観であった」と回想を記している²⁵。長島の懐の深さ、交流の広さの一端を伝えるとともに、県下における文化財については文化・芸術全般に関するマスコミの姿勢に、長島が少なからぬ好影響を放っていたことを思わせるエピソードではないだろうか。

そして何より、県下の図書館施設における郷土資料(地域資料)の収集・保管そして活用のための目録整備に至るまでの豊かさは、全国的にみても特筆に値する。それは長島との親交も深かった廣瀬誠(県立図書館司書のち館長、1922～2005)によって基礎が築かれ²⁶、長島の古稀記念に際して年譜と業績目録を編んだ太田久夫氏(同館のち高岡市立図書館司書、1936～)らが継承したいとなみの賜物であるのに違いない。

残されたスケッチブックは、長島が交流した新聞記者たち、同志であった図書館人たちの営為を活用することで情報を補い、資料性を高めうる——そうしたことに、小さからぬ意義が認められるのではないか。

4. スケッチブックに記録された、もの・こと——仏教美術を中心とするピックアップ

スケッチブックが擁する文化財の記録は多彩であり、筆者の力量の限界からも一々の注釈を尽くせない。さしあたり本稿では、仏教美術を中心に幾許かをピックアップし、想到しえたところを述べておこう。

(1) 残されていた調査記録——個人蔵(旧井口村)の阿弥陀如来立像

筆者は2017年に、南砺市(旧井口村)の一在家に伝わる一木造の阿弥陀如来立像を調査する機会を得て、平安時代中期、10世紀末～11世紀初め頃の作と評価して報文をまとめた²⁷。その冒頭で、伝聞に基づいて「長島勝正氏もこれを実見したというが(中略)記録が残されていない」と記しておいた。

ところが[D-2]のなかに、昭和35年(1960)「9月3日 東礪波郡井口村」の個人宅における調査記録が含まれていたのである【図12】。スケッチは上半身のみを右斜めから描いたものだが、部分図とはいえ造形をよくとらえている。長島がこの像を高く評価したことは「面貌 豊麗」の語が示していようし、右胸外側での着衣の折り返し部分の表現などに注視し、「古い様式」を看取していたこともうかがえる。また「杉材の如く見えるも杉にあらず／かやか」と、用材についての所見を記しているのも興味深い(次項も参照)。

筆者の調査時には知るに及ばなかったが、長島はこの記録に、「加陽金府」(＝金沢)の「御免除大仏師法橋三代」「良長」(＝斎藤良長)がこの像を「慈覚大師之御作」とした極書(宝暦9年[1759]11月付)の文面を書き写している。この像は鼻先・両手先・両足先・光背・台座などが近世の後補にかかるのだが、恐らくはその修理を斎藤良長が施工した際に、極書はしたためられたのであろう。いま存否を確認できておらず、来歴に関わる情報として貴重である。スケッチブック類にはこの他にも古仏の極書類が記録されている。

(2) 木彫像のスケッチと樹種判断の揺らぎ——大豆谷八幡宮(旧利賀村)の僧形八幡神像

[D-6]には、地藏菩薩を思わせる像のスケッチがある【図13】。簡略なタッチながら、一見して大豆

谷八幡宮（南砺市〔旧利賀村〕大豆谷）の僧形八幡神像（県指定文化財）を描いたものとわかる。「顔長五寸／総高一尺七寸／肩巾七寸／膝張九寸五分」「奥行七寸八分」などと法量が書き込まれていることからしても、長島が現地で実査したものであろう。前のページは「7月15日 利賀 坂上 西勝寺」の記録であり、昭和37年（1962）同日頃に調査したことが察せられる。背面に陰刻されている銘文が記録されていないが、恐らく安置された状態のままで（すなわち背面を現認できない状況で）観察したのであろう。

図の右側には「両手先 桧」、右上には「彫眼 一木」などの書き込みがあるが、注意をひくのは右上の書き込みで一旦「樺材」と記したあと「樺」の字を抹消し、「杉のようなカツラ」とか「針葉樹材」と書き込んでいることである。芸術家としての道を彫刻から出発したためでもあろうか、長島は県下の木彫仏の樹種に早くから関心を寄せていたと思われ、後年の著述では一部の作品に関し「立山杉」など踏み込んだ見立てを記している。長島の逝去後35年余りが経過し、加えてその間に木彫像の樹種に関する調査研究が飛躍的に進展している現在では²⁸、それらの見立ての妥当性は再考されるべきであり、自治体等における文化財解説の類における再生・発信も控えるべきであろう。そうした事情をふまえた上で、大豆谷八幡宮像の記録は、長島の関心とともに、調査時における判断の揺らぎをも伝える点で興味深く思われるのである。

（3）現在まで写真がない古彫刻のスケッチ——白山姫神社（旧井波町志観寺）の神体ほか

[D-1]には「志観寺／白山社／白山姫神社／比咩／御神体一軀」、すなわち南砺市（旧井波町）志観寺地区にある白山姫神社に神体として奉安されるという木造男神立像をスケッチした紙面がある【図14】。同所の地名は廃絶した天台寺院「止観寺」に由来すると考えられており、長島はこの寺号の意味にも関心を寄せていたようだ。少し前のページには「“止観寺”／遮那業／止観業」という書き込みがなされているからである。

この像はもとより非公開なのだが、筆者はこのスケッチを目にするや、『井波町史』上巻（1970年）125～127ページ「井波止観寺」の項に載る「止観寺白山姫（比咩）神社神体」の線画に思い当たった²⁹。キャプションの末尾に「県文化財審議委員長島勝正氏図並びに解説」とあり、スケッチに添えられた「藤原末／樺材一木造。／丈／九寸八分／巾四寸」「直冠直衣／指貫」という書き込みもキャプションの記述に合致する。

『井波町史』下巻（1970年）末尾の「井波町史の成るまで」（長井長左衛門）は、昭和37年（1962）7月、「県文化財調査委員仏像美術（原文ママ）専門の長島勝正氏により、寺社の仏像神体の調査をおこない、止観寺白山社・蓮台寺矢於留社の神体から貴重な史料を得ることができた」と記す。[D-1]では同34年（1959）に使用された部分に属するので、長島は井波町史編纂以前にこの像を調査していたことになる。『越中の彫刻』

（1975年）でもとりあげられているが、写真の掲載はない。調査では神体ゆえに写真撮影ができなかった（謝絶されたか、遠慮せざるをえなかったか）と思われ、現在までこの像の写真は知られない。したがって長島による図と説明だけが手がかりとなるのである。資料性において優るのは、明晰・均一な線をもってリライトされた『井波町史』上巻の挿図よりも、[D-1]のスケッチであることはいうまでもない。

もう一つ、公刊された写真資料がない例を挙げておく。法福寺（黒部市〔旧宇奈月町〕明日）の子院であった千光寺（1952年に千光院から改称）には、秘仏本尊として薬師如来立像が安置されている。近くでは2011年10月に開扉されたが、筆者はこれを拝観しておらず、いかなる像なのかが気になっていた。ところが長島のスケッチブック[D-8]に、簡明な図をとともう記録が見出された。「丈2尺9寸」、「杉材 一木造」「彫眼」で、「両腕、手先、足先後補」とある。興味深いのは描写された像容で、薬師如来とはいいいながら着衣は裙・条帛・天衣と菩薩像のそれであり、頭部は低平な肉髻をあらわすようだが図では形状が明確ではない。元来は菩薩の立像として造立された古仏が、両腕などを失って以後、体幹部にはさほど手が加えられることなく、右手を施無畏印とし左手に薬壺を持つ薬師如来立像として再生されたものかと想像される。

（４）文化財指定の根拠資料となったスケッチ——千光寺（砺波市）の銅造観音菩薩立像

スケッチや記述に粗密の振幅が大きいことは前に述べたが、ひととき入念な描写がなされているのが、[D-9]の「1月29日 芹谷山千光寺」——すなわち千光寺（砺波市）の秘仏本尊、銅造観音菩薩立像（県指定文化財）のスケッチである【図15】。正面・背面・左側面と3方向からのスケッチに1ページずつをあてがい、法量や所見を周囲に記入した紙面は、一点の作品にフォーカスした詳細さにおいて各冊のなかでも際立っている。[D-9]において3年目の部分に属するため、昭和32年（1957）1月29日の記録とわかる。

これにも思い当たるところがあった。この像は同年に富山県文化財保護規則のもと、他9件の文化財とともに5月9日付で県の指定を受けたのだが、同年2月24日の『富山新聞』は、「撮影断られた観音（砺波市千光寺）鉛筆の写しだけで県文化財に指定を申請」と題する記事を載せているのである。秘仏ゆえに写真撮影が許されなかったこの古代小金銅仏の場合、指定の根拠資料とするに存分なスケッチという必要性・使命感のもと、長島は可能な限りの観察と描写をおこなったことであろう。

やがてこの像は、長島が解説を執筆した『図説富山県の文化財 県指定編』（1966年）に正面・両側面のモノクロ写真が載り、五島美術館における展覧会『金銅仏Ⅱ』（仏教美術シリーズⅢ）（1972年）に至って県外での展示公開もなされた。後者を一前提とする大型図書、松原三郎・田邊三郎助『小金銅仏—飛鳥から鎌倉まで—』（東京美術、1979年）には正面・背面の精細な写真が載る。しかし長島がスケッチブックに書き込んだ観察所見は、詳細さにおいて同書の作品解説（田邊三郎助執筆）を超えており、意義を失っていない。

このスケッチではまた、背面を描く紙面の右上に記された「春風駘蕩」という語が目をついた。これのみペン書きであることからみて、調査時ではなく多少の時間ないし日時の経過後に書き込んだものであろう。長島は、前記の『図説富山県の文化財 県指定編』における千光寺像の解説を、「本県内では本覚寺（婦負郡婦中町富崎）の観音（重要美術品）とともにこの時代（杉崎注、奈良時代）の作であるが、受ける感じは、本覚寺像の秋霜烈日の感じに対し、この像は春風駘蕩の趣きがある」という一文で結んでいる。『富山県史』通史編1〈原始・古代〉（1976年）における担当部分でも「本覚寺像（杉崎注、富山市〔旧婦中町〕本覚寺の伝「楊柳観音」立像〔重要美術品〕）が非常に鋭い感じがするのに対し、この像はまろやかで、あどけなく、春風駘蕩の趣きがある」と記している。長島はこの評言を、まずはスケッチブックに書きつけたのであった。

（５）小金銅仏へのまなざし——絵画・陶彫の制作活動とも関連して

小金銅仏に関する記録は、各冊のほとんどにわたりいくつも見出せる。長島が『越中の彫刻』で千光寺像とともにとりあげた古代作例（本覚寺・玉泉寺の菩薩立像）の記録が見当たらないのは残念だが、たとえば千光寺（旧宇奈月町）の阿弥陀如来立像【図16】など、中近世の金銅仏への注視が随所にうかがえる。

長島は、小金銅仏に深い関心そして愛着を抱いていたようだ。立山町歴史交流ステーション日なたが開催したミニ企画展「越中瀬戸焼研究者 長島勝正」展（2023年12月～2024年4月）には絵画や陶芸の作品も並んだが、鶴林寺観音菩薩立像をモデルに描いた作品があったし、陶彫では法隆寺献納金銅仏の一体（158号像）にならう半跏思惟像があった。陶彫といえば2026年2月初頭、ネットオークションにあらわれた一点も特筆しておく。別製の宝珠形頭光をとまなう入念な作（高50.3cm、重さ2.5kgという）で、本体は明らかに島根・鰐淵寺の観音菩薩立像（重要文化財、持統天皇6年〔692〕）を範とするものであった³⁰。

古代の小金銅仏によせる関心・愛着は、若き日に始まったものではなかったか。というのも大正14年（1925）10月23・24日、21歳の長島が学んでいた東京美術学校の講堂で、数多くの金銅仏が展示されたからである。校長・正木直彦（1862～1940）らによる推古会が第4回展覧として開催したもので、事後に刊行された図録によれば「秘蔵諸家の熱誠により六十余点の出陳を得」、さらに至近の東京帝室博物館（現・東京国立博物館）別室でもこの企画にあわせて「御物金銅四十八体仏」（法隆寺献納金銅仏）のうち「十点多」

が展観されたという³¹。長島にとって、郷里の県下に古代の作例が3つも伝世することは大きな喜びであったことであろう。

さて本稿の冒頭で、昭和17年(1942)頃、国の重要美術品の目録に寛喜2年(1230)銘をもつ「銅造立山神立像」についての情報を見出し、はるばる愛知の所蔵者のもとを訪ねたこと、この像が同42年(1967)に劇的な帰還を果たしたことを述べた。小金銅仏への長島の関心は、この像に対する注目も介在して中世にも拡張していたのではないだろうか。昭和13年までには、魚津市千光寺の秘仏本尊、銅造千手観音立像(鎌倉時代、県指定文化財)が、恐らくは堀井三友により価値を見出されている³²。この像は同51年(1976)4～5月、奈良国立博物館の特別展『平安鎌倉の金銅仏』展に出陳されたが、それには長島が関与していた³³。

奈良国立博物館の展覧会といえば、それに先立つ『神仏融合美術』展(1962年)に「立山権現像」(いわゆる矢疵阿弥陀如来像)が出陳されたことが同展の目録から知られるのだが(図版掲載はない)、[D-8]にはその一例である個人(当時は富山市犬島、のち千葉県に転居)蔵品のスケッチがある【図17】。矢疵阿弥陀如来像³⁴のなかでもよく知られてきたもので、いま立山博物館に寄託され常時展示されている。立山町歴史交流ステーション日なたにおける令和7年度館蔵新資料紹介展(1)「昭和中期の文化財調査記録」(先述)では、このページがメインビジュアルとなった。

ちなみに記す。長島は富山考古学会に昭和24年(1949)の設立当初から参画していたが、同会は機関誌『大境』第39・40号(合併号、2021年3月)を「越中の小金銅仏—鉄仏・懸仏を含む富山県所在・所縁遺品の調査報告—」の特集にあてた。2013年12月に始まった事業の成果に基づくもので、中近世の作例を多く対象としている³⁵。刊行後数年を経て知られた長島のスケッチブックからは、そのうちのいくつかに関する記録が見出された。先に記した千光寺阿弥陀如来立像や個人蔵矢疵阿弥陀如来像のほか、[D-62]の南砺市宗善寺阿弥陀如来坐像(前期『大境』p.23)【図18】および同個人蔵地藏菩薩坐像(現・埼玉県蓮田市在住、同前p.33)、[D-9]の同長谷玉神社懸仏(同前p.36)がそれである。

西井龍儀氏は、平成から令和の変わり目になされた「越中の小金銅仏」調査について、「立山山上石造物・関連遺跡調査」(富山県[立山博物館]主宰、1994～97年)が「伏線になっていたのかもしれない」と回顧を綴った³⁶。昭和における長島のまなざしといふなみは、さらにその前史をなすともいいうるだろうか³⁷。

結びに代えて——長島勝正の学知と志向、その総体への視点——

最後になお補説しておきたい。スケッチブックを見つめるなかで——あわせて、別掲の「書誌兼年譜稿」の作成を進めるなかで——思われたのは、長島の学知と志向、その総体をとらえる必要性についてであった。もはや本稿の範囲ではなく、他日の課題とせねばならないが、向後のために若干の視点を記しておきたい。

富山大学名誉教授の高瀬重雄(1909～2005)は、長島の逝去後ほどなく新聞に寄せた追悼文で「おつきあいは四十年以上の長きに及んだ。(中略)竹馬の友ではないが、文化史または美術史研究の同志として、あたかも互いに兄弟のように親しみあい、睦みあってきた」³⁸と綴り、「同志」としての間柄を回想している。

高瀬はここで「文化史」の語を、一般的用法以上の意味をこめて記したかに思える。それを考えさせるのが、1974年、長島の古稀記念に寄せた文中の、『富山県の歴史と文化』(1958年)編纂時の回想である³⁹。

私は、大胆率直に通史編纂の方法論を説いた。私は西田博士の説かれた文化史の理論によって、政治・経済・社会・芸術等のすべての分野にわたりながら、その推移のなかに時代思潮の発展と人間性の展開とをえがくべきであると主張した。しかし、実証史学の伝統になじんでこられた専門家の方々は、なかなかそうした総合的歴史叙述に賛成されない。(中略)いまだからいうけれども、長島委員は最もよく

私の通史の理論を理解し、支持して下さったひとりであった。おかげで私は、孤立無援のいっぴき狼におちいることなく『富山県の歴史と文化』を完成させることができたと感謝している。

文中の「西田博士」は、高瀬が京都大学で師事した西田直二郎（1886～1964）をさす。西田は「一分野史としての文化史ではなく、歴史的事実は文化のなかに具現しているという立場からの全体史的な文化史を提唱」⁴⁰し、『日本文化史序説』（1932年）をものした史家であった。高瀬は、自著に「私どもは（中略）いまはなき西田博士の文化史学派の流れをくむものである」⁴¹、「文化史学派の流れを汲む私としては」⁴²などと綴っていることが示すように、西田の学風を汲むことを自身の拠りどころとして強く意識していた。長島らとともに編纂した『富山県の歴史と文化』は、「その著作の精神に、西田文化史学としてのすじを通すことができた」⁴³、「私としては、ある程度文化史学のエクステンションを果たしたのではあるまいかと思った」⁴⁴と回顧するごとく、高瀬にとって地域を舞台とした文化史学の実践と自負しうる成果となったようだ。

いま残されている長島の蔵書（「長林館文庫」）に、西田の著作は見当たらない。しかし確かでありむしろ重要なのは、『富山県の歴史と文化』編纂当時50代前半であった長島が、高瀬が汲んでいた文化史学の視角におのずと共鳴しうる志向・学知を、早くから自身のうちに醸成していたことであろう。青年期にアトリエでの時間を共にし、生涯にわたり長島を仰いだ画家・前田常作の回想からも、そのことはしのばれる⁴⁵。

先生は、美術以外に、万葉の詩歌の研究家でもあった。国文学や民俗学の書籍も多く、合せて古美術、大蔵経の大部なコレクション等、大変な読書家で、学究肌であった。どちらかと云へば無口で、全て身体で表現される先生であった。

万葉集や民俗学・考古学への関心が早くからあったことは、蔵書はもちろん、戦前の短歌雑誌『はしばみ』などに発表した著述によっても確かめられるし、『民間伝承』『考古学雑誌』などの雑誌購読からもうかがうことができる。もう一つ、高瀬・前田より若い世代である藤井一二氏（1941～）の回想⁴⁶から引用したい。

長島先生の学問は、歴史・美術史だけではなく考古・民俗学などへの造詣も深く、その調査と考証には着眼点の斬新さと学際的な手法が際立っていたし、そこから導かれる結論には新たな発見や知見を含むことがしばしばであった。

文化史学に立つ高瀬の指針に共鳴し、力を与えた長島の志向・学知を、藤井氏は「学際的」という、昭和戦後期に生まれた新しい言葉で言いあらわした。藤井氏はまた、自身が富山県史編纂室在職中に初めて出会った当時の長島について「六十歳過ぎて、文筆に最も円熟した冴えを発揮しておられた頃だったように思う」と回顧している。その頃の「着眼点の斬新さと学際的な手法」がうかがえる著述としては、たとえば「熊野比丘尼、高野聖と浄土真宗の寺」（『富山史壇』42、1968年）を好例として挙げうるだろうか。

さらにまた、長島の志向には——冒頭に掲げたごとく、八尾正治（1920～2008）⁴⁷が「地方文人」の称で讃えたように——学問・芸術という枠組みさえ超える「汪洋」さがあったようにも察せられるのである。

調査野帳としてのスケッチブックは、85年にわたる生涯の一時期に使用されたものだが、美術史家・文化財有識者にして芸術家であり、それらを包摂する志向を抱きつづけた長島の人物像をも物語るように思える。

- ¹ 八尾正治「偉大な地方文人 長島勝正先生を想う」(『芸文とやま』19、1991年)。
- ² 太田久夫「県文化財の保護と選定に努めた 長島勝正」(『越中人譚』53、2002年)。
- ³ 廣瀬誠「長島勝正先生の御霊前にささぐ」(『郷土の文化』16、1991年)。
- ⁴ ①吉田実「海外流出を免れた立山神像」(『芸術新潮』18-11、1967年)、②同「長島さんとの交遊」(『長島勝正先生の人と業績』長島勝正先生の古稀を祝う会、1974年)ほか。一連の関係文献は、杉崎貴英・加藤基樹編「年表 「銅造男神立像」の近現代」(富山県「立山博物館」編『立山と帝釈天—女性を救うほとけ—』2013年)参照。
- ⁵ 富山県 NewsRelease「国指定重要文化財「銅造男神立像」の名称変更について」(生活環境文化部 文化振興課 立山博物館、2015年3月25日付)。本来の性格が帝釈天と解せることは杉崎貴英「立山神像」をとらえなおすために—国指定重要文化財「銅造男神立像」への視点—(前掲『立山と帝釈天』2013年)参照。
- ⁶ 岩田博「追悼・栗田治美さん」文献出版 在庫最終セール」(同『ひとり出版社「岩田書院」の舞台裏』Part2、岩田書院、2008年、初出2003・2005年)を参照。
- ⁷ 1997年12月3～5日、東京文化財研究所が主催した第21回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」(於：東京国立近代美術館)は、このような動向を代表する企画となった。筆者はこれを聴聞していないが、東京国立文化財研究所編『語る現在 語られる過去 日本の美術史学100年』(平凡社、1999年)として記録が公開されている。
- ⁸ 参照：<https://www.museum.kit.ac.jp/20150106.html>
- ⁹ 参照：<https://www.museum.kit.ac.jp/20180625k.html>
<https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/exhibits/archive/rfi34u0000004xad.html>
- ¹⁰ 杉崎貴英「堀井三友の事績—戦前期富山在住の日本美術史／仏教考古学研究者—」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』21、2019年)。
- ¹¹ 参照：<https://www.tobunken.go.jp/exhibition/202007/>
- ¹² <https://www.tobunken.go.jp/researchnote/202203/>
- ¹³ ノート「一九 彫刻手控」(下記ページにて全ページの画像を公開)に2件が見出された。
https://www.tobunken.go.jp/researchnote/202203/tanaka/tanaka1/T_020/
いずれも昭和3年(1928)4月30日以降に、中川忠順(1873～1928.3.21)が遺した書簡類に見出した情報を書きとめたと思われる部分に含まれる。1件には「大正十四年十月十二日高岡市桐木畠前川喜左衛門氏より中川氏へ」とあり、大豆谷八幡宮(旧利賀村)僧形八幡神坐像の略図を、恐らく写真をもとに描く。もう1件は松江市萬寿寺に関する内容だが、「大正十五年十一月十二日、富山市外東田地方、堀井三友氏より中川先生宛にて万寿寺の絵葉書来れる中に」とあり、堀井三友の名が注意をひく。今後に小解の機会を得たい。
- ¹⁴ 「久野健寄贈ノート資料(前言)」https://www.tobunken.go.jp/materials/preface_kuno_note
- ¹⁵ 東京文化財研究所資料閲覧室における当該のノートの請求番号は「kuno_note_043」。
- ¹⁶ 東京文化財研究所資料閲覧室における当該のノートの請求番号は「kuno_note_179」。
- ¹⁷ 亀岡市文化資料館編『ふるさとの名品—指定文化財の世界—』展図録(2014年)にカラー図版掲載。
- ¹⁸ 中野玄三・加須屋誠『仏教美術を学ぶ』(思文閣出版、2013年)149～150頁。また同書は「中野玄三自筆「山越阿弥陀図(京都・禅林寺)」調書」(1970年8月)をモノクロ図版で掲載している。
- ¹⁹ 筆者実見。文言の引用元は九州国立博物館季刊情報誌『アジアージュ』35(2015年1月)。
- ²⁰ 東北リサーチとアートセンター「進化する「野帳」 考古学者 河内一浩の記録生活」〈しらべの細道 vol.3〉、高松市埋蔵文化財センター令和3年度後期企画展(1)「まいぶんヤチャロー河内先生が行く！高松・四国編」・同(2)「まいぶんヤチャロー河内先生が行く！全国・蔵出し編」。筆者はいずれも実見しえておらず、それぞれの開催時のチラシあるいはウェブページによる。
- ²¹ 測量野帳の歴史と現在については、安藤政弘「祝・還暦！ 61年めの始まりに確認したい、コクヨ「測量野帳」の“100年人生”」(アットリビング編集部「@Living」株式会社ワン・パブリッシング、2020年2月4日、<https://at-living.press/item/15991/>)参照。文化財調査に関して参考までに記すと、昭和40年(1965)頃には登呂遺跡の発掘調査でコクヨの野帳が用いられていたようである(2025年3月20日、静岡市立登呂博物館の常設展示にて当該の野帳を実見)。
- ²² 杉崎貴英「富山県下の古彫刻に関する再認識抄史と課題—昭和三十～四十年代前後の活況に注視しつつ—」(『富山史壇』199、2022年)。
- ²³ 『大阪毎日新聞』大正15年(1926)9月20日記事「平安朝初期の珍しい霊像五軀」(『考古学雑誌』16-10〔1926年〕「彙報」欄に再録)。
- ²⁴ 2025年5月10日、立山町歴史交流ステーション日なた館蔵新資料紹介展(1)「昭和中期の文化財調査記録」解説説明会後の座談会にて、松倉氏よりうかがった。
- ²⁵ 木内哲子「玲子覚え書」への道」(同『おかあさんしつかり』自刊、1985年、初出1973年)。
- ²⁶ 廣瀬の見識と実践は、単著『図書館と郷土資料』(桂書房、1990年)や、その書中でも編纂の経緯が語られる、『立山黒部文献目録』(富山県立図書館編・刊、1957年)、『富山県郷土資料総合目録』(同前、1962年)のみからでも鮮明にしのべれる。
- ²⁷ 杉崎貴英「南砺市(旧井口村)所在の阿弥陀如来立像について—平安中期天台系如来像の一作例とその伝世環境—」(『富山史壇』184、2017年)。
- ²⁸ 近時の代表的な成果として、①田鶴寿弥子『ひとかけらの木片が教えてくれること 木材×科学×歴史』(淡交社、2022年)、②岩佐光晴研究代表者『東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究』(科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)(2022年)を挙げておく。
- ²⁹ 『井波町史』に載るこの像の情報については以前、杉崎貴英「井波・浄蓮寺の阿弥陀如来坐像について」(『富山史壇』178、

2015年)でふれたことがある。

³⁰ 木箱の貼札に毛筆で「観音菩薩(陶製)／長島勝正作」(出品時の画像による)。東京都下からのストア出品であった。

³¹ 推古会編『金銅仏』(杉本栄三郎、1926年)。

³² 堀井三友「千手観世音菩薩像」〈口絵解説〉(『高志人』3-8、1938年)。

³³ ①『富山新聞』1976年4月23日記事「魚津の秘仏、晴れの舞台に 千光寺千手観音」、②長島勝正「魚津千光寺金銅千手観音立像」(『富山新聞』同4月19日朝刊)。

³⁴ 一連の遺品に関する近時の基本文献に、①西井龍儀「銅造矢疵阿弥陀如来立像」(富山県〔立山博物館〕編『験佛化現—立山権現と越中の生身仏信仰—』2018年)、②細木ひとみ「寄贈資料・新湊放生津町の矢疵阿弥陀如来像について」(富山県〔立山博物館〕『研究紀要』29、2023年)がある。

³⁵ 「越中の小金銅仏調査」の特色と意義については、杉崎貴英「小金銅仏の調査研究史をめぐる覚書」(『大境』39・40、2021年3月)を参照。なお筆者は富山県考古学会の会員ではないが、懇懇を承け2014年度より調査部会に加わり、報告刊行までの過程に伴走させていただくことができた。

³⁶ 西井龍儀「あとがき」(『大境』39・40、2021年3月)。

³⁷ なお7冊のスケッチブックには、「越中の小金銅仏」調査でも把握されなかった、小さな銅像や懸仏残欠の類(多くは個人所蔵)の調査記録・スケッチがいくつか見出されたことを付記しておく。

³⁸ 高瀬重雄「長島勝正さんの人と業績」(『北日本新聞』1990年5月12日、再録:『郷土の文化』16、1991年)。

³⁹ 高瀬重雄「長島さんと私」(長島勝正先生の古稀を祝う会編・刊『長島勝正先生の人と業績』、1974年)。

⁴⁰ 奈倉哲三「西田直二郎」項(『日本大百科全書』17、小学館、1987年)。

⁴¹ 高瀬重雄「宇佐和気使に関する考察—日本文化史上の和気氏—」(同『日本文化の史的研究』桂書房、1992年)、初出1967年。

⁴² 高瀬重雄『越中の絵図 文化史への抒情』(富山文庫12)(巧玄出版、1975年)。

⁴³ 高瀬重雄「忘れ得ぬ人びと」(同『史林独歩抄』桂書房、1985年、初出1975年)。「恩師西田直二郎博士」に関する回顧を詳しく記し、『日本文化史序説』についても述べている。

⁴⁴ 高瀬重雄『越中の絵図 文化史への抒情』(前掲)。

⁴⁵ 前田常作「〔表題なし〕」(長島勝正名誉会長を偲んで)(『郷土の文化』16、1991年)。

⁴⁶ 藤井一二「山つつじの咲く頃に思う—長島勝正先生のこと—」(『郷土の文化』16、1991年)。

⁴⁷ 八尾は富山県郷土史会の副会長を1972年から、長島からバトンタッチしての第3代会長を1986年から務めた。いずれも「長島会長の懇請によるものであ」ったという(「郷土史会五十年と私」、富山県立図書館・富山県郷土史会編『五〇年のあゆみ』富山県郷土史会、2000年)。

[付記] 本文では、長島勝正氏をはじめ故人に関しては、すべて敬称略にて記述した。諒とされたい。

もう30年近く前、富山への2度目の旅で、井波・瑞泉寺門前に泊まった時のこと。宿の一角にハードカバーのシリーズが置かれているのを見つけた。その一冊、『越中の彫刻』(1975年)を手にとるや、県内の古い仏像・神像が数多く、豊富な写真とともに総覧されているのに気づき、大いに魅力をおぼえた。しかし刊行後20余年を経ていた地域での出版物は、当時在籍していた大学にも、身近な図書館にも所蔵はなかった。

長島勝正というお名前に接したのは、それが初めてではなかったかもしれない。論考「立山・白山の金銅仏」を収める『山岳宗教史研究叢書』は大学の図書館で開架のコーナーに並んでいたし、単著『富山の美術と文化』(1983年)は書庫にあり、富山ゆかりの近世画人・岸駒を研究する同期が参照していたと記憶する。在学中には、恩師の一人が研究室に所蔵していた『立山曼荼羅集成』を長く借覧したこともあった。

それから10年近くして家族の住む高岡との往来が始まり、県下の美術史・宗教文化史について文献収集や探索を続けるにつれ、長島氏の存在の大きさを思い、やがて事績の追跡と顕彰を課題と心得るようになっていた。立山町歴史交流ステーション日なたの展覧会では、古川知明氏のおはからいのもと、令孫の松倉千尋氏・巨摩紀氏、長島氏とゆかりが深い藤井一二氏・喜代美氏ご夫妻、野入潤氏と懇談する機会を得た。太田久夫氏からは、『長島勝正先生の人と業績』のまささらな一冊をご恵与賜ったのはじめ、たびたびご示教を忝くした。古川氏からは数々のご示教に加え今回の寄稿の懇懇をいただいた。各位に深甚の謝意を表す。

なお本稿は、JSPS 科研費 23K00182(研究課題名「仏像作例をめぐる再認識と理解形成の追跡—郷土史／在野研究／仏教考古学に注目して—」、研究代表者:杉崎貴英)による成果を含むものである。



【図1】魚のスケッチ（[D-6 2]）



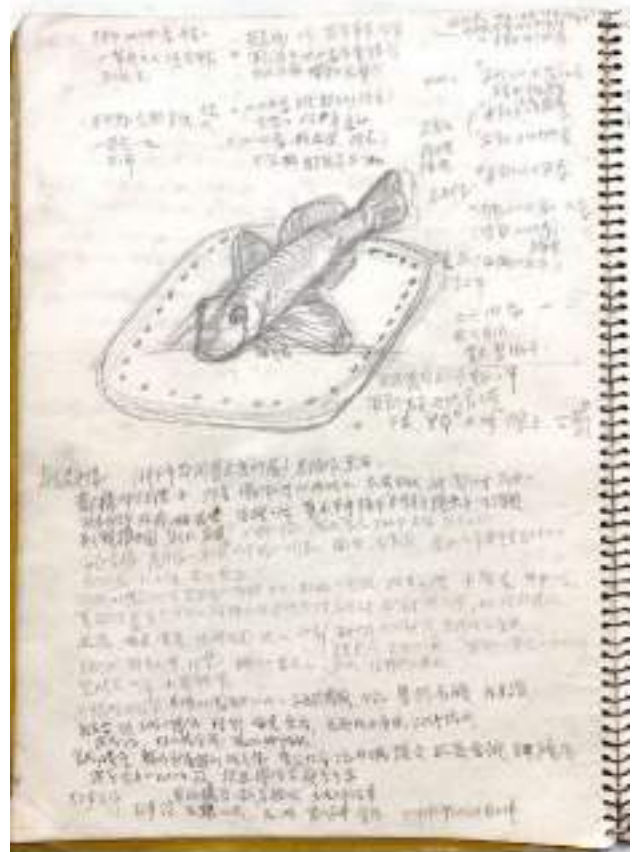
【図2】人物のスケッチ（[D-8]）



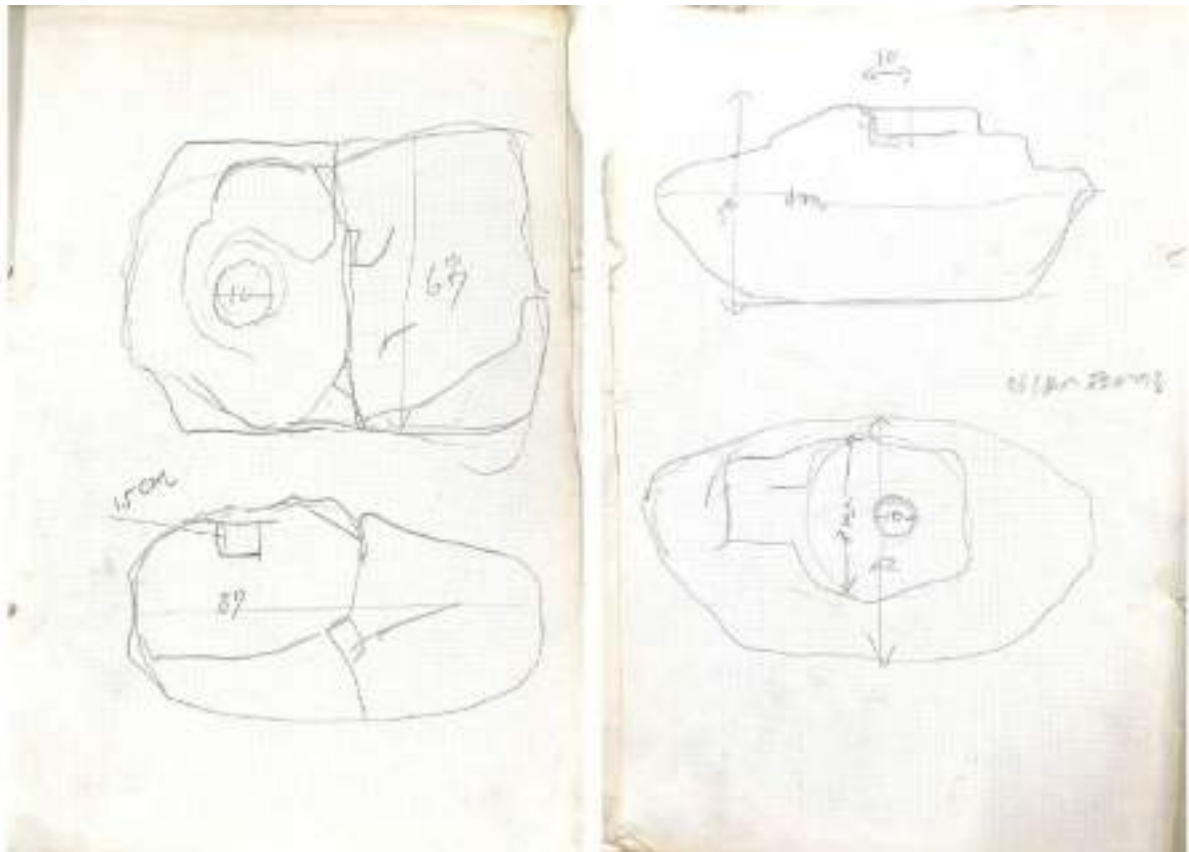
【図3】風景のスケッチ（[D-9]）



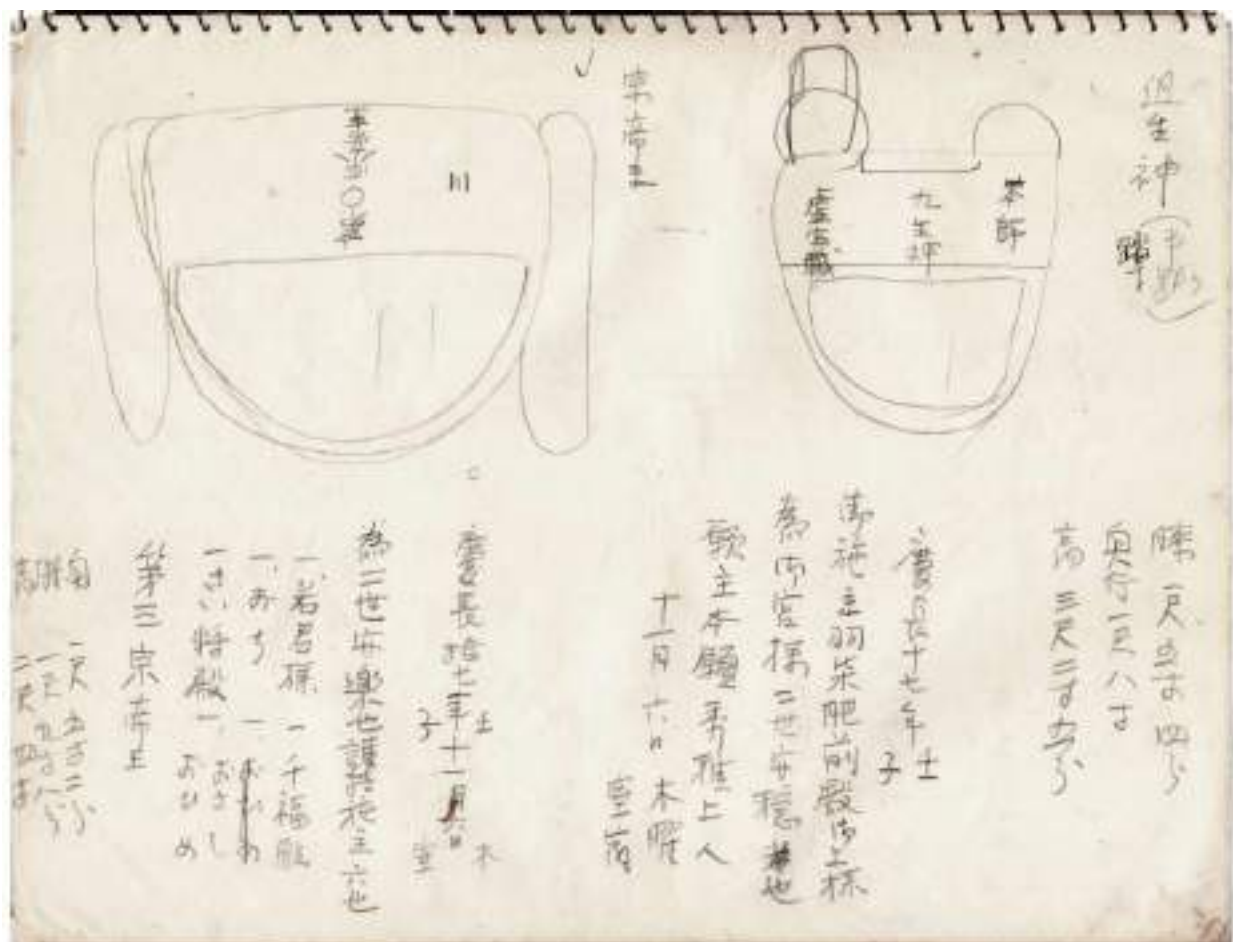
【図4】 民俗芸能のスケッチ
(法福寺の稚児舞、[D-9])



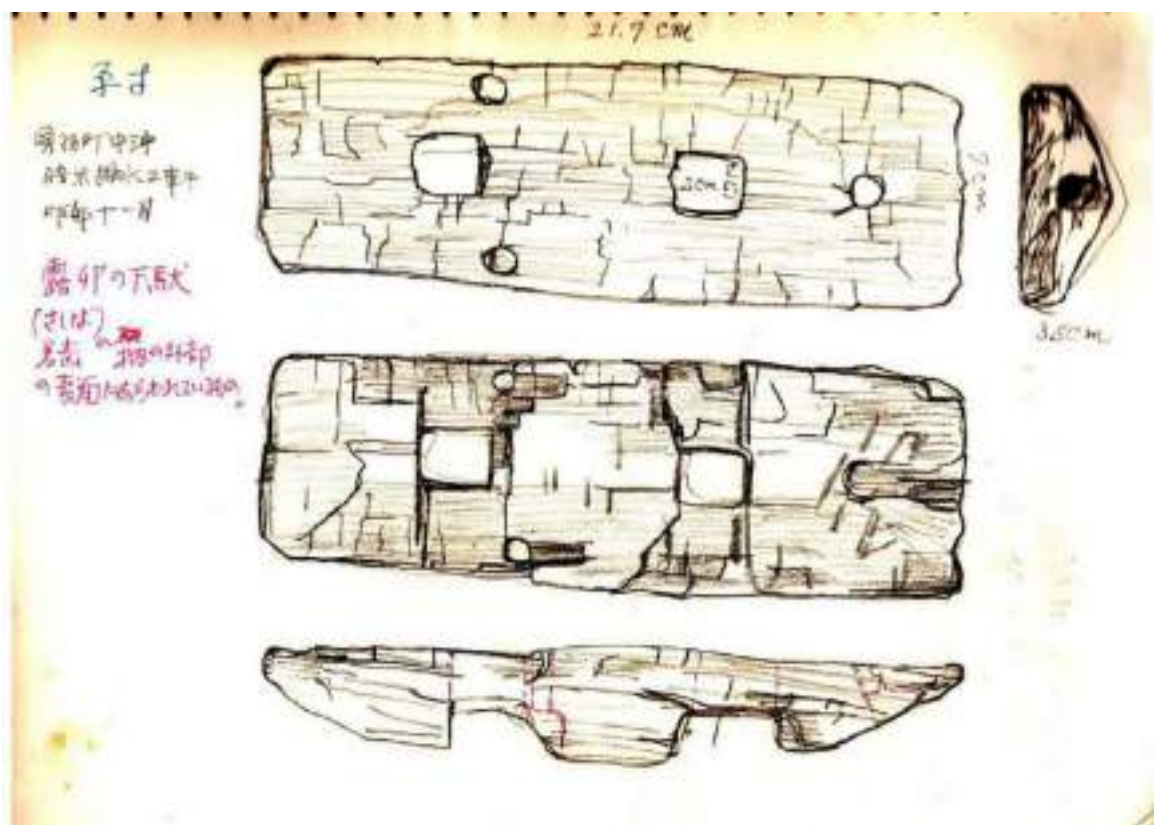
【図5】 スケッチと備忘録が共存するページ



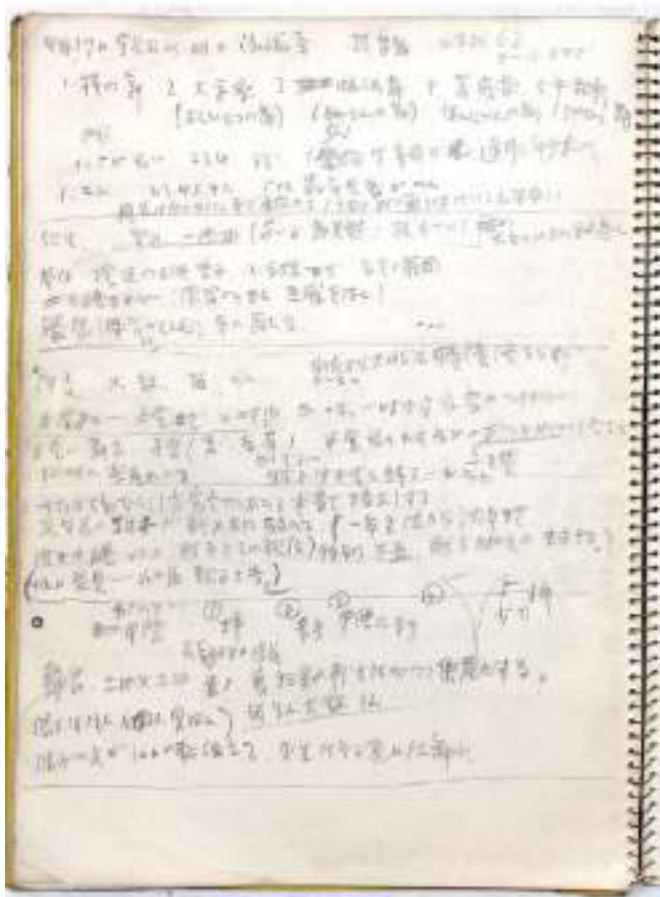
【図6】 礎石のスケッチ・実測記録 (旧福光町の「夫婦岩・皇孫塚」、[D-6])



【図7】医王院（小矢部市）木造十王ほか諸像の調査記録（〔D-62〕）



【図8】下駄（旧呉羽町中沖出土）の原寸大スケッチ



【図9】法福寺（旧宇奈月町）稚児舞の調査記録
（[D-8]）

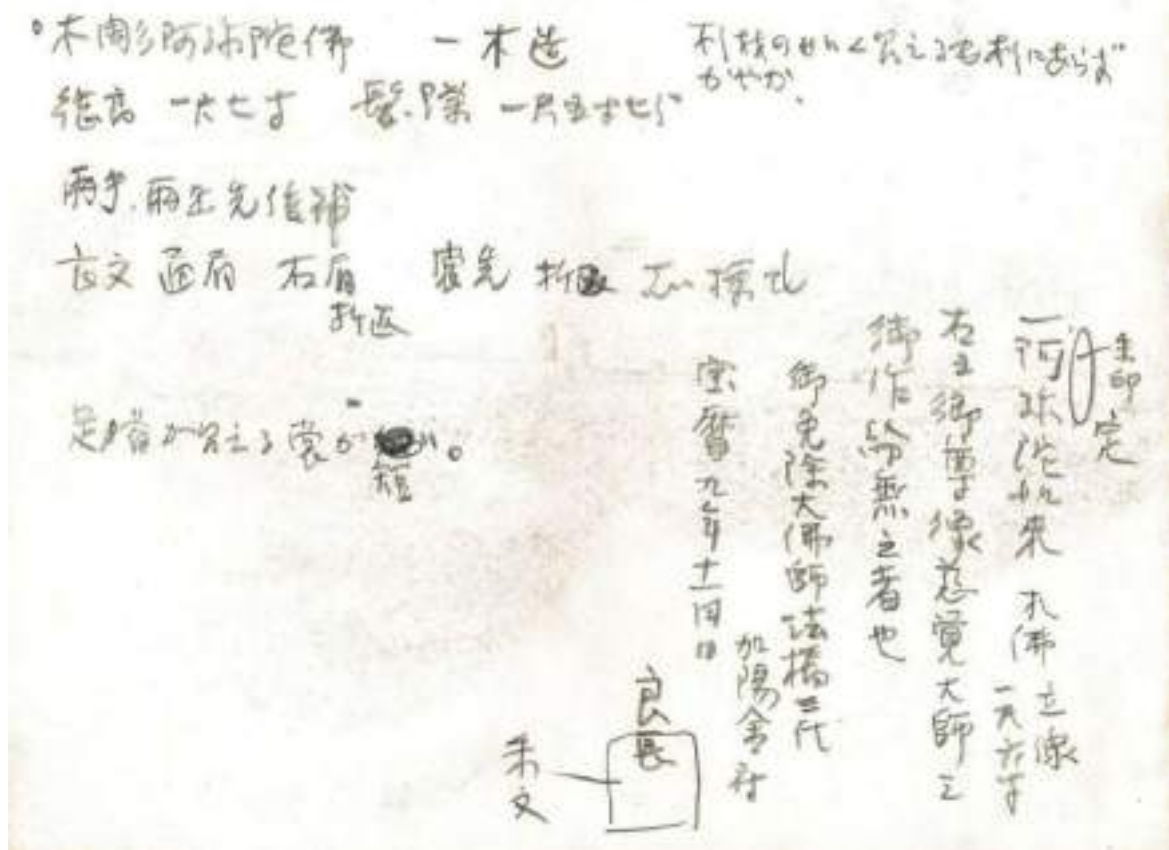


【図10】二上射水神社（高岡市）木造男神坐像
の調査記録（[D-5]、下の2点も同じ）





【図 11】各願寺（旧婦中町）木造弥勒菩薩坐像の調査記録（〔D－5〕）



【図 12】個人蔵（旧井口村）木造阿弥陀如来立像の調査記録（次ページ上段も同じ、〔D－2〕）



【図 16】 千光寺 (旧宇奈月町)
銅造阿弥陀如来立像の調査記録 ([D-8])

【図 18】 宗善寺 (旧福光町)
銅造阿弥陀如来坐像の調査記録 ([D-6 2])



【図17】 個人蔵（富山市犬島〔当時〕）銅造阿弥陀如来立像（〔D-8〕）

*個人所蔵品の調査記録である【図12】【図17】は、紙面上部の所蔵者の氏名・住所が記載された部分を削除して掲出したこととお断りしておく。

長島勝正 書誌兼年譜稿

杉崎 貴英

(帝塚山大学文学部教授)

〔凡例〕

1. 本表は、昭和 49 年 (1974) 刊の『長島勝正先生の人と業績』に記載された同年 9 月までの目録 (太田久夫編) を基礎として作成した。同書では業績を種別に部立てしているが、本表では長島の軌跡を可視化する目的から、年譜・著作目録・長島に言及した他者の著述・参考事項等を、あえて一つの年表に統合する方式で編集した。
2. 年齢欄には、その年に迎えた満年齢を記した。没後については年忌の数え方に準じ、没年を 1 年目として何年目にあたるかを記載した。没後では、追悼文をはじめ長島の人と業績に関し言及する文献の採録につとめた。
3. ●印は長島の著書 (遺著を含む)、◎印は長島執筆の新聞・雑誌記事および共著 (ないし共著中の記事)、○印は談話の記録 (座談会・対談ほか) や、監修・編集の立場で関わった図書、★印は造形作品の制作ないし発表 (公刊文献に写真・言及が確認できた、年代が明らかなもののみを登載)、△印は他者による言及 (新聞記者等によるものを含む) を示す。
4. 同じ月の欄における配列は、必ずしも発行日順や掲載ページ順とはしていない。
5. 新聞記事は、特記しない限りその日の朝刊掲載を示す (夕刊掲載の場合のみその旨を記載した)。
6. 後年の単著に再録された著述には、次のような略号をもって参照情報を添えた。
《→1983》: 長島勝正『富山の美術と文化』(文献出版、1983 年)
《→1991》: 長島勝正『とやまの古美術』(文献出版、1991 年)
7. 書名や記事タイトルの後に〈 〉で括って示した情報は、シリーズ名や通番、雑誌の特集タイトル等である。
8. 適宜「*」印を冠して略解題や参考情報を、[] で括って典拠情報を添えた (数字は年あるいは年月を示す)。
9. 本表内に登載した書誌との相互参照は、[筆者の姓あるいは書名+発表年代] により、適宜略記して示した。また年譜に関する事項などでは、紙面が煩瑣を増すのを避けるため、あえて書誌情報を略したところがある。
10. 文献の把握にあたり、富山県立図書館ウェブサイトで提供されている諸目録 (「図書・雑誌検索」「県内図書館横断検索システム」「県内新聞雑誌記事見出し検索」「郷土資料情報総合データベース」)、国立国会図書館ウェブサイトで提供されている諸目録 (「国立国会図書館サーチ」「国立国会図書館デジタルコレクション」) を繰り返し活用した。ただし本稿までに、現物の確認にまでは及びえなかった新聞・雑誌記事が幾許かは存する。
11. 上記『長島勝正先生の人と業績』の「凡例」は「昭和三十四年以前の新聞掲載のものは省いた」と明記している。それらの追跡は本表までにほとんどなしていないことをお断りし、今後に期するものである。

出生…農学校卒業まで				
明治 37 年	1904	0 歳	8 月	8 月 28 日、誕生。生家は豪農・素封家であった。
大正 2 年	1913	9 歳	4 月	4 月 27 日、父・長島武右衛門が死去し、家督を相続する。また、武右衛門が出資した富山精錬合資会社を相続し社員となる。 『官報』第 238 号 [5 月 17 日付]「富山精錬合資会社登記変更」項 *長島家当主は代々「武右衛門」を襲名していた [藤井喜代美 1991]。
大正 5 年	1916	12 歳	10 月	△『北陸タイムス』10 月 21 日記事「下新所得税調」に所得納税額が「百円以上のもの」が列記されるなかに「△柵山長島勝正」がみえる。 [再録]『北日本新聞創刊 90 周年記念 新聞に見る 90 年』上 (北日本新聞社)
大正 11 年	1922	18 歳	3 月	富山県立農学校 (現・南砺福野高等学校) 卒業。 * [岩倉 1974] …「それは大正六、七年頃ではないかと思う。当時富山県に唯一つしかない福野の県立農学校で、放課時ともなれば、校内を悠々闊歩してまわる風変わりな生徒がいた (中略) やがてかれは、風のように農学校から消え去った」。
東京美術学校在学および在京時代				
大正 12 年	1923	19 歳	4 月	東京美術学校彫刻選科塑造部に入学。 『官報』第 3361 号 [11 月 05 日付]「入学許可」項

				*「入学して見ると驚いた。当時の一年生には十五、六名の富山県人がいた。彫刻科の塑像部には樽谷清太郎、木彫部には村井辰夫がいたし、先輩には本保外次郎、一年上級には伊東隆二がいた。また木彫に高見嘉重がいてよくいろんな話をした」(〔久泉「富山の美術 絵画・彫刻の流れ」1990年〕が「長島勝正の述懐に」として抜粋。出典未確認)。 *「入学してみると、ここには美術史とか工芸史という科目があり、出講してみても驚いた。我国をはじめ、世界各国にそれぞれ立派な芸術作品があるのを初めて知ったからである。田舎の土百姓の学校から来たのだから当然のことであった」 「そんな授業を受けているうちに、私の生れた富山県はどんな有様なのかと考えた。そして在学中も県内各地の古い芸術品を訪ね歩いた」 『富山の美術と文化』1983年「あとがき」
			この年	「入学したばかりのころ」、「郷土出身の大先輩」の彫刻家・佐々木大樹(1889～1978)を戸塚の家に訪問したという。 〔「芸術論はかめ芸術家」1982年〕
			在学中	「(塑造部で教わった先生は) 朝倉文夫と北村西望。朝倉先生はなかなかの実力者で、北村先生は穏やかな人柄やった。同期では、そうね、藤野天光、矩幸成、それに洋画では大沢昌助、あとはパツとしないな、一年うえに小磯良平、猪熊弦一郎、そうそう五年のとき一年に岡本太郎が入って来た。私はどうも遊んでばかりいたが、富山から行ったものはみんなまじめやった。十何人もいたな。浅井景一、村金平、彫刻の樽谷清太郎、村井辰夫、図案の藤井正胤、森田規国(以下略)」〔「美に魅かれて」1975年〕。
大正13年	1924	20歳	6月	△『富山石川福井県下特設電話番号簿』(名古屋通信局)の入善における「電話交換加入者名及番号」の項に「長島勝正」。
大正14年	1925	21歳	6月	△飛鳥園発行の雑誌『仏教美術』第3号の「会員(第2回申込)」欄に、「富山県 長島勝正氏」あり。
			9月	△『東京美術学校一覧 従大正12年至14年』 「彫刻選科塑造部第三年」に「長島勝正 富山」。
			10月	*24・25日、東京美術学校講堂で推古会第4回展覧として古代の金銅仏60余点が陳列、これにあわせて東京帝室博物館でも法隆寺献納金銅仏のうち10余点が陳列された。若き長島が、これを見た可能性は高い。 〔推古会編『金銅仏』〈推古会図録第4回〉1926年〕
大正15年 昭和元年	1926	22歳	この年	結婚。
			3月	*高岡出身の本保外次郎(1901～96、号・蘇堂)、東京美術学校を卒業する。長島が属した彫刻科本科塑造部の先輩にあたり、その後も研究生として在籍した〔『東京美術学校一覧 大正15至16年』1926年〕。基本文献に濱久夫・濱瑞枝『高岡の仏師本保屋の人びと 本保義太郎の彫塑と蘇堂の木彫を中心として』(里文出版、2007年)がある。 *『校友会月報』24-8(1926年3月)に本保の「旅行印象記」が載る。
			この年	西田正秋(1901～88、美術解剖学、この年に東京美術学校に助教授として就任)のノートに「塑四、長島勝正君」と記入あり〔岡部2021〕。
昭和2年	1927	23歳	4月	12～28日、東京美術学校の「修学旅行」(奈良・高野山・京都)に参加。
			6月	◎「四月十四日 第三日 曇 午前の部」〈修学旅行日誌〉 (東京美術学校『校友会月報』26-1) *活字となった著述の最初か。一連の記事冒頭で編集担当者が「本年は旅行中の協同日誌を作つてみたいと思つて毎日それぞれを各科に指名して依頼した」と記す。東大寺の見学を記録し、長島の自筆とおぼしい「法華堂仏体配置」の平面図も載せる。 *「新納先生」(＝新納忠之介、1869～1954、美術院院長)の説明を受け

				たことや、「約二時間三月堂の研究に費し」たことなどを記す。
			9 月	◎「浄土教の美術（修学旅行報告）—第一部阿弥陀堂建築—」 （『校友会月報』26-3） *『日本美術年鑑』（朝日新聞社、1928 年）「文籍一覧」項に書誌が登載されている。 *「彫刻科五年 長島勝正」。副題に「第一部」とあるが、その後の号に続編の掲載は見出せない。冒頭に「修学旅行紀年撮影（本年四月於夢殿前）」の写真を掲げるものの、叙述は紀行文ではなく論文の体で、中尊寺金色堂など見学先以外の遺構を含めた写真・平面図を交える。
			10 月	大村西崖（1868～1927、東京美術学校教授、3 月 8 日没）の銅像のための資金に寄付する [『校友会月報』26-4「故大村西崖先生紀念銅像建設資金」記事（10 月付）に「一金参圓也 長島勝正殿」と記載]。
			この頃	「学生時代」「昭和の初年」、園城寺円満院に円山応挙の絵を目的に訪れた際に、老僧から「明治維新まではこの寺に越中に末寺が多くあった」ことを教えられたという [「郷土の文化」の刊行に寄せて、1986 年]。 *本件は「立山の七不思議（下）」（1965 年）も「長吏猊下が」「手文庫一ぱいの書きつけを出して見せようとされたことがある」と記す。ただし同稿では、それらは中世の記録であったろうことを述べている。
昭和 3 年	1928	24 歳	この頃	「卒業した年であったか、水戸に栗田（年彦）君を訪ねた」 [「越中の書誌学者 広瀬さん」1982 年] *栗田は東京美術学校の同級生で、その父である漢学者・史学者の栗田勤（1857～1930）とも「対座していろいろと承った」という。
			3 月	東京美術学校彫刻科本科塑造部を卒業 [『官報』第 388 号、『東京美術学校卒業生名簿 昭和三年』、『東京美術学校一覧 昭和三至四年』]。卒業式は 24 日であった [『校友会月報』27-1]。
				東京美術学校卒業制作展（3 月 25 日・26 日）に★《裸像》を出品 [『校友会月報』27-1、『日本美術年鑑』1929 年、50 頁]。
			4 月	卒業後も、研究科にて美術史を専攻したという。 *「大村西崖という東洋美術史の先生について少し勉強するつもりだったけど、亡くなられてね。弟子の田辺孝次先生のもとにしばらくいたけど、うちへ帰ってきた」[「美に魅かれて」1975 年]。
				△『官報』第 388 号「有限責任栲山信用購買販売組合変更」の項に、「理事（中略）長島勝正（中略）ハ重任」とある。
			7 月か	*堀井三友、考古学会に高橋健自の紹介で入会 [『考古学雑誌』18-8]。
			10 月	△『富山県郡会議員宝鑑』（北國時事新聞社）「西田武右衛門」項および「長島次右衛門」項の「主ナル親戚」各 5 名中に「長島勝正」の名あり。
			12 月	△『富山県名鑑』（帝国興信所富山支所）に「長島勝正」が 3 か所に記載。 ①「栲山信用購買販売組合」項（理事）、②「個人納税者 下新川郡の部」栲山村の項、③「栲山村役場」項（青年団長）。
昭和 4 年	1929	25 歳	この年	北野の妙堂（永海塚）を吉沢庄作・野島好二と初めて調査する。 [野島好二『黒部歴史散歩』野島好二先生叙勲記念刊行会、1984 年]
			7 月	*『官報』第 753 号（7 月 4 日付）「日本赤十字社録事」項中「特別社員推薦」項の 1786 名（富山県 69 名）中に「長島勝正」。
			10 月	第 10 回帝展（帝国美術院展覧会、10 月 16 日～11 月 20 日、於：東京府美術館）に、安子夫人をモデルとした★《胸像》（婦人頭像）を出品。第三部に新入選する [『時事年鑑』昭和 6 年版、486 頁]。 *作品《胸像》は『日展史』6（1983 年）245 頁にモノクロ写真が載る。
				△青頭巾「長島勝正 水野豊造 佐野庄三郎」〈農村人物月旦 18〉 （『富山県農業雑誌』440、富山県農会事務所）

				* 「(前略) 熱誠なる研鑽は同校卒業後直ちに一かどの青年美術家となつた、彫刻の技術に秀で友人をモデルとした胸像を今回帝展に出品見事入選した(中略) 今や農民芸術の高唱せらる折柄県農学校より君の如き俊才を生みしを誇るとすると同時に、農民芸術の上に創造せられんことを切望してやまない」。
			11 月	△島文蔵(富山市) 編・刊『御大礼奉祝記念写真帖』 * 「下新川郡梶山村」の頁に青年団長として「長島勝正」(写真なし)。
			この年頃か	堀井三友(1885～1942)との親交が始まる。 * 「幸いに「堀井三友」という当時日本の古彫刻や障壁画の研究をし、また全国各地の国分寺跡を踏査した日本的な先輩の学者が富山市の奥田におられたので、よくお宅にお伺いしたり、また各地の調査のおともをした。当時のガラスの種板の入った重い写真機の箱を背負って、上醍醐の高い山に登ったつらは忘れることが出来ない」 『富山の美術と文化』1983 年「あとがき」] * 「堀井三友さんと一しょに国分寺をまわったのが、本当にいい勉強になったと思う(中略) 私より十五、六も年上でしたが、なかなか研究熱心な人でした。(中略) 京都の上醍醐の山へでっかいカメラをかついで登ったり、長崎の対馬の島分寺でスパイと間違えられたり一要塞地帯だからね(笑)」[「美に魅かれて」1975 年]。 * 「昭和四、五年ごろであったと思うが、当時堀井さんは県の史蹟天然名勝記念物の委員であり、また東京高等師範学校の講師でもあった。新進気鋭の美術史家として全国でも知られた存在であった。(中略) その道の先輩である堀井さんの指導を得たいので、いつも奥田の堀井家に入びたりの状態であり、堀井さんの研究旅行には常にお供をして全国歩き廻っていた」[「中川さんの思い出」1976 年]。
昭和 5 年	1930	26 歳	この年	過労で体調を崩したという。
昭和 6 年	1931	27 歳	ころか	* [浅井 1991] …「彼の制作意欲は旺盛で絶間もなく継続されたが過労によって一時期体を壊したこともあって、六～七年頃から塑造よりも油絵に熱中するようになった。其の頃すでに考古学者の堀井三友氏と親交が深く、彼のアトリエに隣接する書庫には、美術書と考古学書と仏典とが書棚一杯にあった。大部の大蔵経等もあった」。
			5 月	△『官報』1309 号「有限責任梶山信用購買販売組合変更」の項に、「理事(中略) 長島勝正(中略) ハ重任」とある。
			この年	* 堀井三友、富山県から県史蹟調査委員を委嘱される。
昭和戦前期(帰郷以後)				
昭和 7 年	1932	28 歳	この年	帰郷。郷里・梶山村の農会長・農業会長に就任する。 『富山大百科事典』下、1994 年「長島勝正」項]。
			11 月	◎「豊後大日山磨崖石仏龕」(『はしばみ』1-9) * この月から同人に。 * 同年 3 月、泊町(現・朝日町)で創刊した文芸雑誌。38 冊を刊行。久泉迪雄「『はしばみ』」項(『富山大百科事典』下、1994 年)参照。 * 「『はしばみ』と僕」(1935 年)によれば、短歌の処女作という。
				◎「鎮西游記」(『はしばみ』1-9)
			12 月	◎「鎮西游記」(『はしばみ』1-10)
			この頃	[浅井 1991] …「七～八年頃から富田民治氏と彼と私と三人で光樹会という名幅の展覧会を当時の商工奨励館や西町ツタヤ喫茶店で度々開いた」
昭和 8 年	1933	29 歳	冬	堀井三友より『国華索引』を贈られる[旧蔵書に現存]。 * 見返しに長島の筆で「昭和八年冬／堀井氏より拝受／山静園草堂」。 2026 年 3 月、立山町歴史交流ステーション日なたで展示、実見。
			1 月	◎「耶馬溪」(『はしばみ』2-1) * 短歌 3 首。

昭和9年	1934	30歳		◎「千代さん」の正体（『はしばみ』2-1）
				◎金森青一・長島勝正「はしばみ考」（『はしばみ』2-1～5、3-1・4）
			2月	◎「鎮西游記」（『はしばみ』2-2）
				◎「山静園雑記」（『はしばみ』2-2）
			3月	◎「追儼」（『はしばみ』2-3）＊短歌4首。
				◎「王朝時代の主として勅撰集に見えたる絵画 —文学と美術との交渉に就て—」（『はしばみ』2-3）
			4月	◎「王朝時代の主として勅撰集に見えたる絵画 —文学と美術との交渉に就て—」（『はしばみ』2-4）
				◎「習作」（『はしばみ』2-4）＊短歌3首。
				◎金森青一・長島勝正・広川淡「三月集会評」（『はしばみ』2-4）
			6月	◎「王朝時代の主として勅撰集に見えたる絵画 —文学と美術との交渉に就て—」（『はしばみ』2-6）
			7月	◎「口絵石彫阿弥陀三尊像に就て」（『はしばみ』2-7） ＊「黒東婦人会の依嘱」により2月から長島が原型を制作、3月中旬から泊町（現・朝日町）の石工舟見袖次郎が彫刻、6月5日完成した碑。 ＊原型を制作した★阿弥陀三尊像を「善光寺式」としたことに関して、善光寺如来についての解説を関係史料を挙げながら述べている。 ＊碑は入善町櫛山の常福寺前に現存するという。写真および藤原（伊東）祐賢筆の銘文は〔森1984〕を参照。また昭和15年6月の項を参照。
			8月	◎「第一回北国美術展覧会評」（『はしばみ』2-8） 14日から使用が開始された、泊駅のスタンプの図案を制作〔1934『旅』〕。
			10月	◎「黒東地方の古仏像」（『はしばみ』2-10） ＊十三寺（現・入善町）、清水寺・神明社・改観寺（現・朝日町）の仏像について述べる。富山県下の古美術を主題とする著述の最初か。
			11月	◎「北の旅の歌」（『はしばみ』2-11）＊短歌7首。
			12月	◎「北の旅の歌より」（『はしばみ』2-12）＊短歌1首。
			1月	◎「もちのはなし」（『はしばみ』3-1）＊署名は「勝」。 ◎「春開く」（『はしばみ』3-1）＊短歌15首。
			2月	△『旅』11-2（通巻119）の「駅スタンプ展覧会」欄、13頁に載る泊駅のスタンプの説明に「考案者 長島勝正氏」。「使用開始 八、八、一四」。
			3月	◎「越中の狛犬」（『はしばみ』3-2） ＊県下の木彫の古例として東薬寺・十三寺・安居寺の各一對を口絵写真も掲げて解説、さらに数例（絵画に描かれた例を含む）に説き及ぶ。 ◎「旅の歌」（『はしばみ』3-3）＊短歌15首。 ◎「山静園閑話」（1）～（6）（『はしばみ』3-3・4・7・10・11、4-1） △『官報』2155号「保証券責任櫛山信用購買販売組合変更」の項に、「理事（中略）長島勝正（中略）ハ重任」とある。
			5月	◎「晩春即興」（『はしばみ』3-5） ＊巻頭掲載。他の同人らとともに短歌2首。
			6月	◎「五月関西の旅から」（『はしばみ』3-6）＊短歌7首。
			7月	◎「山静園詠草」（『はしばみ』3-7）＊短歌2首。
			8月	◎金森青一・長島勝正「七月号を読む」（『はしばみ』3-8）
			9月	◎「歌の栞」（『はしばみ』3-9）＊巻頭掲載。他の同人らと共に短歌1首。 ◎「夏の古寺巡礼」（『はしばみ』3-9）＊短歌10首。 ◎「秘仏の再印象」（『はしばみ』3-9） ◎金森青一・阿部順三・長島勝正「八月号評」（『はしばみ』3-9）
			10月	◎「歌の栞」（『はしばみ』3-10）＊巻頭掲載。他の同人らと共に短歌1首。

				◎「田園秋月」(『はしばみ』3-10) *短歌 15 首。
昭和 10 年	1935	31 歳	1 月	◎「秋日東国行 (1)」(『はしばみ』4-1)
				◎金森青一・長島勝正・広川浹「前号作品合評」(『はしばみ』4-1)
				◎「「やまうば」のはなし」(一)～(三)(『はしばみ』4-1～3)
				★『はしばみ』表紙絵 *鳥獣戯画の模写を「二度刷り」で印刷。
			3 月	2 日、所用で糸魚川に立ち寄り、相馬御風(1883～1950、歌人・詩人・評論家・郷土研究家)を訪問する[『はしばみ』4-3「消息」欄]。
			4 月	◎「釈明」(『はしばみ』4-3)
			5 月	◎「歌会詠」(『はしばみ』4-4)
			6 月	△『公社債年鑑』昭和 10 年版(野村証券調査部)884～885 頁「富山県織物模範工場」に「大株主」の一人として「長島勝正」。
			7 月	◎「「はしばみ」と僕」(『はしばみ』4-5)
				◎吉沢弘・金森青一・長島勝正・広川浹「はしばみ終刊の辞」(同上)
				「長島氏頌徳碑」建立[森 1984]。
			11 月	川勝政太郎(1905～78、史迹美術同攷会主宰)来訪に堀井三友と対応する。 *川勝は、同会の東京坐談会発会例会(16 日)の帰路に「山梨・長野・富山を巡」った。「該地在住の会員」の対応を受け、富山では「堀井三友・長島勝正」の世話になったと記している。 [『史迹と美術』61(1935 年 12 月)川勝政太郎「編輯後記」]
昭和 11 年	1936	32 歳	この年	梶山村農会長、梶山村農業協同組合長を務める(1948 年まで)。 [『越中人譚』53、2002 年]
			1 月	△『民間伝承』5 の「新入会員紹介(一月五日現在)」欄に「富山県 竹内正治 長島勝正 矢崎嘉十郎 若宮彰」。 *同誌は、前年に設立された「民間伝承の会」(日本民俗学会の前身)の機関誌として、柳田國男(1875～1962)の指導のもと創刊された。 6 日付で、株式会社富山県織物模範工場の監査役に就任(『官報』2739)。
				△稲川誠意「農村工芸と楽焼」(『農村工業』3-4) *筆者は県立入善農学校教諭。『満州人名辞典』上巻(1989 年)参照。 *「工芸品に就て独創的作品の試作研究に着眼し、彫刻家にて本校附近に在任(マ)せらるゝ長島勝正氏にこれが指導を依頼し、兎も角同氏の承諾を得るに到り、先づ第一歩として昨年十月本県工業試験場の中本技師の指導に依り、楽焼窯を築造したのである」。
			4 月	富山市で開催された日満産業大博覧会(4 月 15 日～6 月 8 日)に、 ★彫刻《小スキーヤー》を出品、彫刻の部の金賞を受賞する[日満産業大博覧会編『富山市主催 日満産業大博覧会誌』富山市役所(1937 年)]。
				★米澤元健銅像(長島が依頼を受け鑄造原型の制作)の除幕式。米澤は当時入善町長。富山県立入善農学校(現・入善高等学校)創立十周年を記念し同校に建立。原型は 2 月 25 日に県立工芸学校(現・高岡工芸高等学校)に到着し、鑄造がおこなわれた[燕昇司和平『躍進日本の輝き』燕昇司出版部]。この銅像はその後、戦時下に供出された。昭和 37 年の項も参照。
				春 堀井三友らと主唱して「越中史蹟古美術調査会」を結成。
			5 月	30・31 日に東京で開催された、考古学会第 41 回総会に出席。31 日は品川の松田氏別邸で「松田福一郎氏所蔵品展観」があり、これを実見する。 *「本のはなし」(1960 年)に「学生時代、考古学会の展観に松田福一郎氏蔵の立川流聖典がたくさん出陳されていたのを見た」と記するのはこの時の記憶と判断できる。30 日の公開講演会は東京美術学校講堂が会場であったため、「学生時代」の記憶と混同したものか。 *この時の考古学会と展観内容については下記を参照。 『考古学雑誌』26-6(1936 年)

				松田福一郎編『不空菴常住紀年銘目録』（国宝社、1936年） 後者に「立川流儀軌」あり（現・奈良国立博物館蔵）。
			7月	越中史蹟古美術調査会の第1回の実地踏査を、伏木・新湊方面で実施。 *「古瓦を散布せる同町、字国府（コフ）、亭角（オチンカド）の地を表面採集を主として小発掘を行ひ多数の布目瓦と重弧文の唐草瓦の小片を獲た」〔長島1937〕。 *以下各回の見学先は堀井三友解説『越中古美術見学要項』各冊を参照。
			9月	越中史蹟古美術調査会の第2回の実地踏査を、下村・橋下条・野村・高岡方面で実施。 *翁久允（1888～1973）、雑誌『高志人』を創刊。のちに長島も寄稿する。
			10月	越中史蹟古美術調査会の第3回実地踏査、埴生・安居寺方面で実施。
			12月	△『法人個人職業別調査録』第7版（国際探偵社）の「(株)富山県織物模範工場」の項に「(監)」の一人として「長島勝正」。
昭和12年	1937	33歳	この頃	木倉豊信（1906～67、小学校教員、戦後に越中史壇会を結成、富山県史の編纂に従事）との親交、この頃までには始まる〔「木倉君のこと」1968年〕。
			2月	2月28日、富山史学会（於：富山師範学校会議室）にて口頭発表。表題は『越中郷土研究』1-2に載る記録に「阿弥像（マ）のはなし」とある。
			4月	◎「越中国分寺址発見古瓦」（『考古学雑誌』27-4） *「礎石はまだ発掘されぬが、土壇、周囲水田等を発掘せば可能性があるので近々再調査の予定である。／発掘品の写真、実測図、寺址地図、仏像、碑銘等の資料は近日調査記事とともに報告することにする。北陸地方（若狭越前を除く）最初の奈良朝瓦の出土として新資料を加へ得たものと思ふ」。文中で、堀井三友とともに「主唱」して越中史蹟古美術調査会を発足させたことを述べている。
			12月	『史迹と美術』85「会員芳名録」に「(富山)大場直哉氏、長島勝正氏」。 *前々年までには史迹美術同友会に入会していた。1935年の項参照。
昭和13年	1938	34歳	12月	◎「金鶏伝説」（『高志人』3-12） *同年11月3日、米澤元健宅にて高志人社が開催した「入善座談会」の記事中、出席者18名（各自が記名した「記念帳」の紙面が図版で載る）のうち13名による短い文章が配列されるなかに載っている。 *この年1月刊『高志人』3-1巻末の「会員芳名簿」に長島の名がある（71頁最下段）。創刊当初からの会員とみられる〔『越中瀬戸焼歴史研究』1、2025年〕。 *『考古学雑誌』28-12の「日本考古学会会員名簿（昭和十三年十一月末現在）」に「富山県下新川郡梶山村 長島勝正」。県下の会員には他に、湊晨（1914～2003、戦後に富山考古学会会長）、米澤元健（1882～1965、入善町会議員、のち入善町長・県文化財専門委員）が記載、以後も同じ。
昭和14年	1939	35歳	12月	*『考古学雑誌』29-12の「日本考古学会会員名簿（昭和十四年十一月末現在）」に「富山県下新川郡梶山村 長島勝正」。
昭和15年	1940	36歳	1月	△横浜商工聯合調査会編『横浜会社要覧 附録・横浜組合名鑑』昭和15年版（村松博生堂）の「株式会社富山県織物模範工場」の項に「監査役」の一人として「長島勝正」。
			3月	この月頃、砺波市福山から瓦塔片が出土し、中川作次郎と見に行く。 *「砺波市の福山の窯趾（中略）瓦塔の破片が発見されたというので御一しょして見に行った」〔「中川さんの思い出」1976年〕。 *年代は『砺波市史』（1965年）111頁による。
			4月	11～20日、越中瀬戸焼古窯地の発掘調査、富山県日本海電気株式会社内産業振興会の計画として実施され、堀井三友とともにこれに関わる。 *〔『富山新聞』1989年1月〕〔『越中瀬戸焼歴史研究』1、2025年〕参照。

昭和 16 年	1941	37 歳	5 月	＊「皇紀二千六百年奉賛 郷土文化展覧会」開催（21～26 日）。第二展示場の富山市商工奨励館で、上記の発掘調査の出土品数十点も展示された。 長島は「郷土文化展覧会」閉幕後、翌年 1 月上旬までの間に、上記の発掘調査の出土品を整理し、富山電気ビル内に展示したと考えられている 〔『越中瀬戸焼歴史研究』1、2025 年〕。
			6 月	15 日付で、黒東婦人会による忠魂碑が建立されるという〔森 1984〕。 ＊碑の阿弥陀三尊像は原型を長島が制作。昭和 8 年 7 月の項を参照。
			8 月	△産業組合中央会富山県支会（烏帽子田栄一）編『紀元二千六百年記念富山県産業組合史』（産業組合中央会富山県支会）の「保証責任 櫛山信用購買販売利用組合」の記事（116～118 頁）に「組合長理事 長島勝正」。 ＊「櫛山組合役職員」の集合写真に「△印は長島組合長」と説明あり。
			4 月	前田常作（1926～2007、のち画家、当時櫛山在住）、富山師範学校予科に入学。「この頃より、村長で、彫刻家、長島勝正氏から油絵の手ほどきを受ける」〔『前田常作画集 マンダラの光』1980 年「年譜」〕。 ＊〔前田 1991〕…「先生は村の組合長や、後には村長などの公職に就かれていたが、時間を見つけては制作に熱中されていた時代でもあった。写生されるかたわらで、ひしひしとその制作意欲の激しさを、子供ながら身体に感じてならなかった」 「戦争中ではあったが、先生のアトリエには、純粋に美を求める人々がよく集まった（中略）私はその集いの中で、芸術家の誠実な生きる姿勢と表現の厳しさを教えて頂いたように思う」。 ＊前田に関する年譜には、櫛山村立尋常小学校に入学した昭和 8 年の項に本件を掲げるものがあるが（富山県立近代美術館編『前田常作展』図録〔1989 年〕、高岡市美術館編『前田常作展 1956－1972』展図録〔2002 年〕）、本稿ではこちらを採っておく。
			5 月	3～4 日に開催された、考古学会の総会（於：日比谷・松本楼など）に出席する〔『考古学雑誌』31-6、1941 年 6 月〕。
			10 月	富山洋画協会、久泉共三（1899～1993）を中心に発足。長島も参加する。 〔『アトリエのうち・そと 追想文集』（1990 年）ほか〕 ＊前年に結成された「玉翎会」が新メンバーを加え改称したもの。
			11 月	21～23 日、第一回富山文化協会（富山文協）総合美術展、開催（於：宮市大丸）。長島は彫刻の部の代表委員として参画、★陶彫「聖観音立像白釉」・★洋画《青年団長寿像》を出品した〔『高志人』6-12〕。 ＊堀井三友、初日の招待日に出席する。投票後の座談会の出席者 35 名（翁久允ら）には長島の名もみえる。
				24～26 日、富山洋画協会の第一回展、開催（於：宮市大丸）。協会の設立委員として参画する。また★彫刻および洋画を出品〔『高志人』6-12〕。
				『考古学雑誌』の「日本考古学会会員名簿（昭和十六年十一月末現在）」に「富山県下新川郡櫛山村 長島勝正」。
			この頃	洋画家・浅井景一と交流。 ＊「（浅井は）富山文化協会の美術部に加わり、その例会（四日会）によく出席、磯野紫水・久泉共三・中島奎堂・佐藤良成・安達其峰・長島勝正らと交わる」〔『浅井景一画集』浅井景一画集刊行委員会、1990 年〕。
			戦時中	〔「美に魅かれて」1975 年（聞き手：吉崎四郎）〕…「戦争中の疎開で、いろんな作家がお宅に見えたそうですね」「ああ、そのおかげで県展が始まったんだ。小坂勝人、棟方志功、杉山司七、久泉共三らが遊びに来てね。富山でも、一つ県展をやろうと計画したんだ。新潟のデパートへ新潟県展を見に行ったり、知事さんに補助金を申請したりしてね」

				[前田 1991] …「先生は戦時中、正月には御子息と奈良や京都へ取材旅行をされていた」。
昭和 17 年	1942	38 歳	1 月	*15 日、富山県陶磁器工業組合が結成。下記の母体となる [定塚 1974]。
			3 月	富山県陶磁器工業株式会社の創立総会。当時、「工芸陶器」を作っていた長島も、同社の創立に参加する [定塚 1974]。
			5 月	◎『越中陶磁概観』の草稿、この月から執筆が進められたか。 [再録]「越中陶磁史の研究」として遺著『とやまの古美術』(1991 年) に。 *31 日、堀井三友 (1885～1942) 没。
			11 月	◎「山静閑話 大岩の不動様」(『高志人』7-11) *「今月 (九月) の三日、長谷川伸氏一行と数年振りで大岩に詣で二晩もお寺で泊めていたゞき種々中田阿闍梨から承った」話をふまえつつ、大岩山日石寺 (現・上市町) の不動明王磨崖仏について「小生の思ひ付き」を像容・年代・立山信仰との関係について論述したもの。 *日石寺磨崖仏に関し顧慮されていない初期の研究として注目される。
			12 月	*『考古学雑誌』の「日本考古学会会員名簿 (昭和十七年十一月末現在)」に「富山県下新川郡棚山村 長島勝正」。
			この年	重要美術品の目録で「銅造立山神立像」の存在を知り、愛知県庁へ。そこで教えられた所蔵者 (西春村) を訪問。新聞に訪問記を寄稿したという [『越中の彫刻』1975]。 富山県陶磁器工業株式会社小杉分工場の工芸部門としての片口窯で、小杉焼の復興がはかられる (のち、富山県特殊窯業株式会社)。陶工をつとめた一人に長島があり、野上秀磨とともに作陶した [定塚 1974。射水市 HP > 「小杉焼とはどのような焼き物ですか」 (2011 年 6 月更新) も参照]。 *「戦争中、焼物の統合、業者の統合があつて、富山県陶磁器工業という会社に一本化された。これが契機で、小杉で小杉焼復興ののろしをあげ、野上秀三や吉野香岳らと一しょに、原型をつくっては窯で焼いた」 [「美に魅かれて」1975 年]。
昭和 18 年	1943	39 歳	4 月	24・25 日、日本考古学会第 48 回総会が東京で開催。2 日目の晩餐会の出席者に長島の名がみえる [『考古学雑誌』33-6]。 *24 日は東京帝室博物館で催され、同館の石田茂作が「法隆寺再建非再建に就いて」と題して講演している。
			6 月	◎「大陸の発掘」(『高志人』8-6) *冒頭の一文「四月二十四、五日日本考古学会の総会に出た」。第一日「原田教授」の「山東省曲阜県『北宋勝果寺』の発掘」報告のこと。
			7 月	★彫刻作品《宮崎定範卿》を、「郷土の勤皇烈士顕彰彫塑展」に出品。 会期：7 月 1 日～7 日 宮市大丸富山店 6 階ホール 7 月 10 日～15 日 丸越高岡店 4 階ホール 主催：大政翼賛会富山県支部・富山県勤皇烈士顕彰彫塑会・富山県 *「郷土の勤皇烈士顕彰彫塑展の栞」 [『富山県史』史料編 7〈近代下〉 (富山県、1982 年 12 月)] に、「宮崎定範卿 長島勝正 (下新川郡)」。
			この年	前田常作を連れて久泉共三 (1899～1993) を訪問、批評・指導を依頼する。 * [久泉 2002] …「父・久泉共三は当時、富山洋画協会を設立してその主宰となり、父のもとに出入りする洋画家十数人とともに、油絵の制作を中心とした活動を始めていた。長島勝正さんはそのメンバーの一人であり、同氏の門下で同郷の画学生である前田さんを、父に引き合わせるべく同道されたのである」。共三の子・迪雄も立ち会っていた。
			参考	長島の自著『越中の彫刻』(1975 年) 巻末「著者紹介」に「昭和 18 年より引き続き富山県文化財専門委員」とある。 *「文化財」という語は戦後の文化財保護法施行以後に普及したため、

				当初はいかなる委嘱であったかは確認を要する。前年に堀井三友が逝去しており、まずはそれを承け、県の何らかの委員となったものか。 *文化財に関する県の役職への委嘱については〔古川 2026〕を参照。
昭和 19 年	1944	40 歳	この頃か	前田常作（1926～2007）・南桂子（1911～2004）を富山洋画協会に紹介。 *「二人は大戦の末期、メンバーの長島勝正が入善から誘ってきた新進であった」〔『富山の文化往来』1989 年、久泉共三執筆部分 149 頁〕。 *「この会に長島勝正が紹介した最新進の二人が前田常作・南桂子である。戦後の大成を誰も予想しなかった、若き日の才能の開花である」〔久泉迪雄「富山の美術 絵画・彫刻の流れ」1990 年〕。
			1 月	◎「下新川郡の地名考」〈山静園閑話〉（『高志人』9-1）* 魚津・大平・入善。
			2 月	◎「下新川郡の地名考」〈山静園閑話〉（『高志人』9-2）* 梶山。 * 末尾に「(昭和十八年十月二十日)」。
			5 月	△『日本紳士録 47 版』（交詢社）に「模範商事(株)監査」と記載。
			8 月	◎『入善』地名考（『高志』1-3） *『高志人』9-1 掲載「下新川郡の地名考」中「入善」の項に関し追考。 末尾に「翁生」（同誌主宰の翁久允）がコメントを添えている。
昭和戦後期（1）50 代まで				
昭和 21 年	1946	42 歳	この年	この年の初め、富山県美術文化協会の設立発起人に名を連ねる。 〔『富山の文化往来』1989 年〕
			3 月	「天皇の血と人民の血」〈特輯 民主戦線運動の前進〉（『新時代』13-3） * 筆者は「長島勝正」。同名異人の可能性もあり、参考として掲げる。
			5 月	第 1 回県展（富山県美術展覧会）、開催。於：高岡市商工奨励館（5 月 27 日～31 日）、富山中学（現・富山高校、6 月 14 日～18 日）。 * 長島らが開催に向けて尽力した 〔『富山の文化往来』1989 年ほか〕。
			6 月	
			10 月	この月以前、★光誓寺（入善町吉原、真宗大谷派）の梵鐘（銘記に「昭和二十一年十月」）原型を、佐々木大樹・辻堂某と合作する。 〔窪野英夫『入善町の鐘鑿鰐口調査誌』（自刊、1991 年）〕
			この頃	〔高瀬 1990〕…「戦後のはげしい社会変動のなかで、農地解放その他で、素封家の財産はほとんど失われてしまった」。
昭和 22 年	1947	43 歳	この年	この年頃、吉田実（のちの富山県知事）と初めて会う。「長島さんは梶山農協長、私は大島農協長、県の厚生農協連の理事として。」〔吉田 1974〕。 * この年、梶山村の農業会長の任にあった 〔『北國年鑑 昭和 22 年』〕。 ★陶彫《駱駝美人》（らくだの王女置物）を制作。 * 〔定塚 1974〕は昭和 17 年作として掲載するが、作品には「昭和 22 年勝正」の刻銘あり 〔「越中瀬戸焼研究者 長島勝正氏を語る」2024〕。
昭和 23 年	1948	44 歳	この年	杉山司七、中島奎堂と、富山県展の創立に尽力する。
			7 月	○座談会「富山県農業の将来を語る」（『明るい農村』4-1） * 出席者は、長島（「県農業会理事」）と司会 2 名を含む 14 名。 * 同号にはこの記事の次頁に、岩倉政治の随筆「かるめ焼時代」が載る。
				◎「ししの話」 〈日本有畜農業考 1〉（『明るい農村』4-1）
			8 月	◎「接吻と牛酪」 〈日本有畜農業考 2〉（『明るい農村』4-2）
			9 月	◎「ゆふつけどり」〈日本有畜農業考 3〉（『明るい農村』4-3） ◎「江戸時代紀行に見える我が郷土」（『富山教育』13） * 池大雅《三岳紀行》（京都国立博物館蔵）を扱う。
				この頃

昭和 24 年	1949	45 歳	この年	富山農業会常務理事となる。また、富山県文化厚生連合会専務となる。
			1 月	24 日、「県考古学会結成準備会」（於：富山県立図書館）に出席。富山考古学会結成時の会員となる〔富山考古学会『大境』1、1951 年 12 月〕。
			3 月	◎「お雑煮」〈冬の夜がたり〉（『明るい農村』4-9） ＊末尾に「編集部」名義の「一月号掲載予定のところ紙面の都合で本号に回した。読者と筆者の諒解を得たい」という囲み記事がある。
			5 月	20 日、富山考古学会の発会式（於：富山赤十字病院講堂）に出席したか。 宮崎焼の古窯跡を、折谷芳桓（宮崎村長）と調査する〔清原為芳「宮崎焼の系譜と創窯」『北日本新聞』1977 年 11 月 8 日、清原為芳編著『神済鄙語続』（神済歴史文化研究所、1985 年）〕。 ★『明るい農村』5 月号表紙絵 ＊魚の干物あるいは燻製。右下に「勝」。
			7 月	★『明るい農村』7 月号表紙絵 ＊ミニトマトか。「勝」の白文円印あり。
			8 月	28 日、富山考古学会第 1 回例会（於：高岡中部高校）に出席する。 〔富山考古学会『大境』1、1951 年 12 月〕 ★『明るい農村』8 月号表紙絵 ＊瓜に甲虫。目次に記載なし。
			9 月	★『明るい農村』9 月号表紙絵 ＊ザクロか。
			10 月	★『明るい農村』10 月号表紙絵 ＊花。右下に「勝」。目次に記載なし。
			11 月	◎「麦のふんどし」（『明るい農村』5-4）★表紙絵（柿、右下に「勝」）も。
昭和 25 年	1950	46 歳	この頃	入善高校で美術クラブの講師をつとめる〔柚木 1991〕。
			3 月	◎「螢烏賊など」（『明るい農村』5-8）★表紙絵（椿）も。 △「宮崎焼〔下新〕の正体判る 登窯・作品の破片など発掘 薄手の精巧な作品 二百年前のものか 長島氏語る」（『北日本新聞』3 月 23 日） 〔砺波市立砺波郷土資料館編・刊『佐伯安一資料目録』2023 年、81 頁〕 26 日、富山県郷土史会の発会式（於：富山県立図書館）。理事となる。
			4 月	29 日、富山考古学会の第 1 回実地見学調査会（梅檀野村付近）。安川薬勝寺に宿泊しての座談会あり（長島と佐藤種治・早川莊作・中川作次郎）。
			6 月	25 日付で櫛山村長に就任〔『富山県町村合併誌』下巻、富山県、1961 年〕。
			8 月	『百姓惑乱一件留帳』（富山県郷土史会叢書 1）（富山県郷土史会） ＊★装幀を担当。 30・31 日に泊公民館で開催された「黒東美展」に、水野徳二ら 4 名とともに出品する〔『北国年鑑』昭和 27 年版、北国新聞社、1951 年、213 頁〕。
			11 月	★『明るい農村』11 月号表紙絵 ＊菊を描いた青花風の皿に魚。
			12 月	★『明るい農村』12 月号表紙絵 ＊染付の器に花梨。「勝」白文方印。
昭和 26 年	1951	47 歳	この年	富山県文化厚生協同組合専務理事となる。 この年までに富山県重要美術品等調査委員となる。同調査委員会は 1957 年に富山県文化財調査委員会となった。〔古川 2026〕参照。
			1 月	◎「新しい年の課題」（『明るい農村』6-4） ◎「正夢」（『明るい農村』6-4） ★表紙絵も。幼子を背負いはんてんを着て子守をするおかっぱ髪の少女。 画面右端に「勝」。
			2 月	★『明るい農村』2 月号表紙絵 ＊花瓶に水仙。 ★「長島勝正氏洋画展」開催。詳細未詳。 〔『富山県教育要覧 昭和 26 年版』富山県教育委員会、1952 年、105 頁〕
			3 月	★『明るい農村』3 月号表紙絵 ＊椅子の上に眠る猫。左下に「勝」。 『越之下草』（富山県郷土史会叢書 2）（富山県郷土史会） ＊★装幀を担当。 2 日、浅地神明社本殿（昭和 40 年に県文化財に指定）を視察する。 〔藪波村史編纂委員会編『藪波村史』藪波村史刊行委員会、1968 年〕

				*同書「神明社本殿を重要文化財に指定方 申請経過」(173 頁)。 「富山県重要美術品調査委員長島勝正氏」と記載。
			4 月	★『明るい農村』4 月号表紙絵 *馬酔木。
			5 月	★『明るい農村』5 月号表紙絵 *チューリップ。
			秋	*吉沢弘(長島とはかつて共に『はしばみ』同人)、長島の邸宅(山静園)を訪ね、短歌 5 首を詠む [『歌集 小庭』白日社、1973 年]。
			6 月	★『明るい農村』6 月号表紙絵 *金魚 2 匹のいる水槽ほか。
			8 月	★『明るい農村』7・8 月合併号表紙絵 *睡蓮。
			9 月	★『明るい農村』9 月号表紙絵 *菊。右下に「勝」。
			10 月	★『明るい農村』10 月号(第 6 巻第 12 号、通巻第 72 号)表紙絵 *葡萄。
			12 月	△「三観音像、文化財指定に動く 下新舟見町 十三寺安置の木像に国宝級と折紙」(『北日本新聞』12 月 12 日)
昭和 27 年	1952	48 歳	5 月	△「下新川郡梶山村 視野の広い長島村長 生新の気吹込む中川議長」 (村の五人集)(『富山新聞』5 月 3 日) *顔写真を掲載。「◇長島勝正氏(四七)は農学校から美術学校を出て村長となった彫刻もやれば絵もかくという地方では珍しいコースを歩んだ 文展 入選作家で随筆家でもある。この経歴をみてもわかる通り型にはまった村長ではない。それに県下三大読書家の一人にあげられているだけにその広い視野と才能は話の泉の王様にもあげられる。根っからの政治家ではないからうそはつかない、それは役場内の空気をみてもわかる。たまの休日には油絵を無心にかいている姿は全く純真そのものである。」
			この頃	翌年 3 月まで、富山県立泊高等学校の臨時教員をつとめたという。
昭和 28 年	1953	49 歳	6 月	*1 日付で、富山県文化財保護規則が施行される。
			9 月	5 日付の梶山村ほか 6 村および入善町の合併に関する「申請書」において、 県知事への申請者たる各町村長名に「下新川郡梶山村長 長島勝正」。 [『入善町史』資料編 2(歴史史料) 1988 年、602 頁] 30 日付で梶山村長を退任 [『富山県町村合併誌』下巻、富山県、1961 年]。
			10 月	1 日、入善町が発足(当時、県内で最大の町)。町職員バッジをデザイン。 *万葉歌「石ばしる垂水の上の…」から「入」字のモチーフを採り「早 わらびの風情を新生入善町に託し」と語ったという [柚木 1991]。
			12 月	15 日、城端町史編纂委員会、「県文化財保護委員長島勝正氏を招き、第三回委員会を開き、調査事項の検討その他指導を受く」[『城端町史』1959 年]。
			この年	富山県総務部地方課編・刊『市町村合併を語る』の装画を担当。 [富山県総務部地方課編『富山県町村合併誌』上巻(富山県) 1961 年] 梶山公民館長の任にあった [『北国年鑑 昭和 28 年版』]。
昭和 29 年	1954	50 歳	4 月	*石田茂作、4 月 11 日から「北陸の旅」。「その四日目」、日石寺の磨崖仏を五十嵐精一(県教委)の案内で視察後、「先年この寺の裏山から」出土した経塚遺物を教えられ、実査(同「越中日石寺裏山経塚」『考古学雑誌』42-4、1957 年、再録=同『仏教考古学論攷 三(経典編)』1977 年)。
			5 月	14・15 日の両日、「県より長島委員・五十嵐(精一)主事」が城端町に赴き調査をおこない、町史編纂の関係者に助言する。[『城端町史』1959 年]
			9 月	◎「菊」〈随筆〉(『月報入善』創刊号) *別誌名『入善公民館報』 *「週二回朝倉文夫教授が教室に出現すると」と美校時代の回想も記す。 △翁久允「太稚庵日誌」(『高志人』19-10、1954 年 10 月) 9 月 27 日の項 *「円楽寺に入る。(中略)本尊阿弥陀如来を拝する。自分にはよくわからないが、いゝ作品だと思はれた。いづれ長島勝正君に見て貰ふことにする」。円楽寺は富山市願海寺にある浄土真宗東本願寺派の寺院。
昭和 30 年	1955	51 歳	この年	入善町保健衛生課長と企画室長の任にあった [『北国年鑑 昭和 30 年版』]。

			この頃 から	「黒東美術会」の代表として『北国年鑑』昭和31年版(1955年)に初見。 *『北日本年鑑』1959年版(同年)では、活動の拠点を「入善中学校内」と記す。
			5月	◎「さつき」〈随筆〉(『入善町報』2)
			6月	入善町保健衛生課長を辞め、公務員生活を終える〔下掲記事〕。
			8月	この月初め、長女美穂と越後境まで一週間の写生旅行〔下掲記事〕。 △「戦前の地主 長島勝正 芸術家に返咲き」〈わが家十年の歩み6〉 (『朝日新聞』8月24日) *「これからまた制作を始めます。普通の彫塑では手間も金もかかるので、焼物にして新機軸を出したいと思っています」。
			この年	生まれ育った入善町櫛山から、富山市稲荷町に転居(上掲記事以後か)。
昭和31年	1956	52歳	2月	18日、富山県立図書館の第2回郷土文化講座として「富山県の古彫刻」。 *『図書館雑誌』384(1956年3月)「NEWS」欄…「郷土の仏像・神像61点について懇切に説明。終って映画「鎌倉美術」「桃山美術」を観賞した。来聴者50余名」。「県重要美術品調査委員」と記載。
			4月	◎「佐渡は一四九キロ波の上」(『入善町報』13)
			5月	この月、「二十数年振りで母校である福野高等学校を訪れた」。 〔下掲「大井冷光」1956年〕
			6月	◎「越中の古神像」(『越中史壇』8) *△木倉豊信「編後私記」(同号)…「長島氏は故堀井三友氏と共に日本の彫刻を研究して多年苦勞を積まれ、勿論その足跡は県下に洩い」 ◎「ながめいみ一めでたき麗人小町のはなし」(『富山新聞』6月25日) *国立国語研究所編『国語年鑑』昭和32年版(秀英出版、1957年)の「国語関係新聞記事一覧」に「万葉集巻16の“ながめいみ”の解釈」。
			7月	◎「大井冷光」〈越中文学伝2〉(『新富山文学』2) *「実は岩倉君(杉崎注、福野農学校で同窓だった作家・岩倉政治)から「大井冷光」について書けとのことだったから(中略)面識は勿論ないし、作品も殆んど読んでゐない。そこで、当惑したあげく、藁でもつかむつもりで、福野まで出掛ける始末に相成った」。 ◎「異類婚の名残り 愛本ちまき 島の徳平の子孫にうろこ」 〈夏の夜ばなし 越中の怪を語る16〉(『北日本新聞』7月29日夕刊)
			11月	△清水浩雲「浩雲行脚記」(『高志人』21-11) *「長島勝正氏の祖父」の「長島武右衛門翁」について述べる一節あり。 また「勝正氏は最近郷里を引き払って富山市え引越しておられる由」。
			12月	◎「県指定文化財(絵画、彫刻)について」(『教育広報』77) *「文化財調査委員のメモから」欄の木倉豊信ら8名による寄稿の一つ。掲載誌は富山県教育委員会月報(富山県教育委員会事務局)。同号は全30頁中4~22頁を「富山県の文化財」の特集の記事に宛てる。
			この年	富山県文化財調査委員(後に富山県文化財保護審議会委員)に就く。 〔『越中人譚』53、2002年〕〔古川2026〕
			2月	△「五百年痛まぬ大日如来図 長島審議委員が泉福寺寺宝鑑定」 (『富山新聞』2月6日) *2月4日、泉福寺(富山市浜黒崎)で寺宝を調査。「胎蔵界大日如来図(付属四腕不動尊、愛染明王)は縦六寸、横四寸の極彩色密画だが、室町時代中期(一四五〇年)のものとわかった」。写真は「木造延命地蔵尊」(「木造三尺の立像」と住職。
			6月	△富山県立図書館(廣瀬誠)編『立山黒部文献目録』(同館) *8~9頁に「長島勝正氏蔵」の『白山社、立山社、富士社、併善光寺、石尊社、江戸道引』(弘化3年〔1846〕)の書誌が掲げられている。

				*後年、長島が「立山の七不思議（下）」（1965年）で「嫁の親父から彼の父、三代の立山詣の日記をもらった」と述べているものにあたるか。 ○高瀬重雄との対談「伝えられた芸術」 *23日、NHK富山放送局「青年学級の友へ」の時間におけるシリーズ企画「富山県の歴史と文化」で放送。 〔再録〕富山放送局編『郷土をかたる25話』 (NHKサービスセンター、1958年)
			7月	△翁久允「太稚庵日誌」(『高志人』22-8、1957年8月)7月6日の項 *「(持専寺からの) 帰りの車で長島勝正らと同乗／彼は入善の旧家をひき払って今は奥田の方にアパートを建て、アトリエも作ってやつていっている話」。持専寺は富山市〔旧大山町〕小見の真宗大谷派寺院
			8月	21日、木倉豊信とともに「北代大畑の縄文文化遺跡発掘の機会に」、同所の「極楽廃寺址への踏査行」を実施〔後掲「北代極楽廃寺について」〕。
			9月	◎「媼さま 立山の神様を養育 もとはずっと美しい女人」〈立山夜話11〉 (『北陸夕刊』7月9日)
			秋	吉田実県知事の発案・参画のもと『富山県の歴史と文化』の編集、開始。 *1958年に第13回国民体育大会が開催されるのを好機に、この年秋から編纂にとりかかったという〔吉田実「この本を読まれる方へ」『富山県の歴史と文化』1958年〕。 *高瀬重雄との交流はこの編纂時に始まったという〔高瀬1991〕。
			10月	◎「有峯拾遺」(有峰文化総合調査団編『有峯を探る』 上新川郡文化協会・大山町・北陸電力・北日本新聞社) *★表紙絵《有峰の三女神》も担当。 ◎長島勝正・木倉豊信「北代極楽廃寺について」(『越中史壇』12)
			11月	○「県文化財保護委員 長島勝正さん(五二)＝富山市稲荷＝今度は金石文 郷土史探る手がかり」〈わたしの研究〉(『朝日新聞』11月5日) *談話に基づき記者が執筆したものか。写真は「研究中の長島氏」。 *「マッコウくさい研究ですね」という人もありますが、この研究は仏像、仏画の美しさを求めるというだけではなく、天台、真言両宗の寺で、真宗に改宗した寺の多い富山県では、郷土史を探る手がかりにもなるし、その特色をつかめば、当時の富山をしのぶ材料にもなり、中央の影響はどうだったかということを知ることが出来ます。」 11月25日、長島制作の★堀井三友陶像をはめ込んだ堀井三友碑の除幕式。 *△翁久允「太稚庵日誌」(『高志人』23-1、1958年1月)同日項参照。
			12月	◎「越中最古最高の小矢部文化圏」(南砺市立中央図書館蔵、T266/ナ) *孔版印刷、B5判(B4用紙2つ折4枚)。年代の記載はない。内容からこの年12月、あるいは同年度末までに執筆したものと考えられる。
			この年	◎「〔石動町文化財資料調査記録〕」 *小矢部市民図書館蔵(請求記号HT/272/22)。手書き資料1冊。1961年5月の「黒部市荻生五輪塔実測図」と同様、「平野文庫」中の1点。調査日として5月13日の日付あり。「念仏湯」の「阿弥陀仏像(木彫り)」(現・瑞泉寺蔵、県指定文化財)ほか絵画・彫刻類の調査記録。
			昭和33年	1958 54歳 この年 黒東美術会の代表であった『北国年鑑 昭和33年版』。
			1月	◎「犬のはなし」(随筆)(『入善町報』34)
			3月	*石田茂作、日石寺裏山経塚の調査のため来県(「13日から大岩不動の経塚発掘 上市町 北陸では初の発見 県教委が石田博士招き 郷土史へ貴重な史料」『富山新聞』3月9日)。
			4月	『越中鉱山雑誌』〈富山県郷土史会叢書3〉(富山県郷土史会) *★装幀を担当。

				21 日、木倉豊信らと医王院（石動町〔現・小矢部市〕）十王群像調査〔下掲〕。
			8 月	◎富山県史編纂委員会編『富山県の歴史と文化』（青林書院）＊発行者は県 ＊「庶民生活のさまざま」の章と写真を担当。1961 年 3 月の項も参照。 ◎長島勝正・木倉豊信「埴生医王院の十王群像について」（『越中史壇』14） ＊「昨年の秋同町（杉崎注、石動町）臼谷念仏湯の伝泰澄大師作・阿弥 陀立像（本年県文化財に指定された）を調査しての帰途、たまたま新 造成った医王院の山門を一見し、東道役の平野良作先生から同寺閻魔 堂の諸尊のはなしを承った」。「試みに下段の二三体を裏返して見たと ころ」銘を確認、「本年の四月卅一日（マ）」木倉らと「一応の仮調査」。
				◎「盆踊」（『県政のうごき』9、富山県総務課）
				◎「盆おどり」（『入善町報』41）
			9 月	19 日、『富山県の歴史と文化』出版祝賀会（於：富山電気ビル）。 ＊翁久允「太稚庵日誌」（『高志人』23-10、1958 年）による。
昭和 34 年	1959	55 歳	1 月	小柴直矩『越中伝説集』〈富山県郷土史会叢書 4〉（富山県郷土史会） ＊★装幀（表紙に獅子頭を描く）を担当。 ◎「猪と日本人」（『入善町報』46）
			2 月	△重杉俊雄『風土吟藻』（清明堂書店） ＊見返しに★「表紙絵 長島勝正先生」。収録される一編「富山民芸 神 通川の河童と鼈」（玩具類小売卸商三島屋主人名義、初出年代記載な し）に「この道の識者長島勝正先生に意匠原型を、重杉俊雄氏に考案 解説を得ました」とある。これに関し、『伝説とやま』（1971 年、後掲） 358 頁「河童」（重杉の執筆か）に、「長島勝正氏と「神通川の河童」 の飾りオモチャを考案、頒布したことがある」とある。 ＊石田茂作揮毫の日石寺裏山経塚（京ヶ峰経塚）石標が建立さる（「経筒 発掘地に石標 上市町京ヶ峰 石田博士の筆で」『北日本新聞』2 月 13 日）。
			5 月	1 日付発行の寺田初夫『ポットの稲 場長稼業十年』〈北日本新聞隨筆シリ ーズ 1〉（北日本新聞社）の★装幀を担当。 〔再録〕『寺田初夫著作集』〈先賢著作シリーズ 10〉（黒部市立図書館、1997 年）＊『ポットの稲』（抄録）部分の見返しに「表紙絵 長島勝正画伯」。
			12 月	◎「鱒鮎雑記」（『越中史壇』17・18 合併号）
昭和 35 年	1960	56 歳	2 月	◎「本のはなし」（『富山県立図書館 参考室月報』49） ＊「越中の古写経」の項に「かつて学生時代、考古学会の展覧に松田福 一郎氏蔵の立川流聖典がたくさん出陳されていたのを見た。その一に 長い奥書があつて、越中の地名、寺や坊さんの名などがいろいろ出て いたので写したのが見つからない。原本も今度の戦禍でどうなつたか 不明である。この奥書の全文がわかればいろいろな南北朝時代の郷土 のことが明らかになる」。また「（南北朝時代に）すこしおくれて舟峠 で一切経が書写され、その一部が残っていると飛騨側で伝えている」。
				＊石田茂作（奈良国立博物館館長）、来県。浄禅寺（富山市）阿弥陀如来立 像を視察〔「県下初の国宝か 富山市の齒吹阿弥陀如来立像 石田博士 文部省に申請へ」『北日本新聞』2 月 10 日および『富山新聞』同日記事〕。
				＊越中瀬戸焼保存顕彰会、発足〔後掲『越中瀬戸焼』（1960 年）〕。
			4 月	◎「越中瀬戸焼」の真価―上末、末谷口などの窯業地― （『富山新聞』4 月 3 日）
				1 日、富山市郷土博物館で「越中瀬戸焼」展開幕（会期は 14 日まで）。 ◎『越中瀬戸焼』（越中瀬戸焼保存顕彰会）＊長島編。上記展覧会の図録。 〔再録（抄）〕『越中瀬戸 発祥四百年記念誌』（1988 年） ◎「馬上太子像 勇ましい馬上の太子」〈法隆寺の美 19〉 （『北日本新聞』4 月 22 日）

				24 日、富山市郷土博物館で「国宝法隆寺展」開幕（前日が特別参観日）。 * 同日の『北日本新聞』に載る展示作業中らしき写真に、法輪寺吉祥天立像を前にした数人の中に長島の姿がある[『北日本年鑑』1961 年版]。
			5 月	◎「明治末期富山県東部の作業歌」（『越中史壇』19） △高瀬重雄他（座談会）「郷土史の在り方と日本史研究」（『越中史壇』19） * 木倉豊信の発言に「長島さんは最近史料文献がなくても古文化財がのこされている。これを見過してはならない。（中略）あらゆる造形美術などの活用をといっているのは傾聴してよい」。
				8 日、石田茂作（奈良国立博物館館長）の高岡市内における文化財視察・調査に、五十嵐精一・田近東岳（本名政二、彫刻家）らと同行、二上射水神社、慈尊院、越中国分寺跡、西田国泰寺などを巡る。石田は、夕方に富山市へ移動した[「男神像の重要指定はむずかしい 石田博士 古文化財を調査」『北日本新聞』5 月 9 日、および『富山新聞』同日記事]。
				◎「なぜ北陸に文化財が少ないか 致命的な古文書不足 中世以前はブランクの富山県」（『北日本新聞』5 月 10 日） * 同じ誌面に石田茂作「なぜ北陸に文化財が少ないか 不毛でなく未調査 埋もれている修験道の数々」（北日本新聞社 5 階ホールでの講座から）が載る。長島の名によるこの記事も講述の内容に基づくものか。 * 16 日、富山市郷土博物館「国宝法隆寺展」閉幕。
			7 月	1 日付で、入善町の町章が制定。『広報入善』5 月号で公募され、応募作品 820 点から、最終的に長島の裁定で決まったという。 [柚木春雄『町長日記』自刊、1988 年] 7 月 9 日～14 日、立山文化遺跡調査班（調査班長：石田茂作）の一員として現地調査。 * 『立山文化遺跡調査』第 1 編（昭和 36 年度）（立山町史調査会）あり。「立山町歴史・文化財リポジトリ」で WEB 公開されている。
			9 月	28 日の夕方、翁久允邸（富山市）での「半舛会」に招かれ話をする。 * △翁久允「太稚庵日誌」（『高志人』25-10、1960 年 10 月） 「ゲストは長島勝正である。長島君は郷土研究の立場から立山や神社仏閣の古美術について話をすすめた」。
			11 月	★「長島勝正陶磁作品展」（11 月 24 日～30 日、於：富山市郷土博物館）。 [リーフレット（作品目録）。『北日本年鑑 1961 年版』は「陶彫展」と記載]
			この年	宇奈月町文化財調査委員長の任にあった[『北国年鑑 昭和 36 年版』]。
			2 月	22 日、富山市郷土博物館での展覧会「成美会」最終日の会場でスピーチ。 [翁久允「太稚庵はだか日記」『高志人』26-3、1961 年 3 月]
			3 月	◎『富山県の文化財』第一集（富山県教育委員会）* 分担執筆 ◎富山県史編纂委員会編『新訂 富山県の歴史と文化』（青林書院） * 1958 年刊行の初版に対し、ページ数を約半減とし、内容・表現に加筆修正を加えた版。長島は「庶民生活のさまざま」の章と写真を担当。
昭和 36 年	1961	57 歳	4 月	22 日、翁久允、富山ペンクラブ創立の発起人の一人に長島を挙げる。 [翁久允「太稚庵はだか日記」『高志人』26-5、1961 年 5 月] ◎「新しい「立山神」の発見」（『北日本新聞』4 月 27 日夕刊）《→1983》
			5 月	◎「黒部市荻生五輪塔実測図」（小矢部市民図書館蔵、請求記号 HT/714/1） * 稲垣貞雄所有の石造五輪塔（嘉暦 4 年〔1329〕銘）の実測図（縮尺 5 分の 1）。孔版印刷、B4 用紙 1 枚（キャビネ判紙焼写真 1 枚添付）。紙面右下に「実測原図製作者／長島勝正」「印刷 野島好二」「調査年月日 昭和 36.5.18」などを記載。紙面右上ラベルに「290.23／平野文庫」（石動図書館館長を務めた平野良作が寄贈した郷土資料の一つ）。 20 日、富山ペンクラブ発起人会（於：三尊道舎）。世話人の一人となる。

			6月	◎「「広隆寺の弥勒菩薩」と「永仁の壺」(『越中史壇』21) 1日、北日本新聞主催で開催された、バスによる越中における万葉集遺跡めぐりの講師をつとめる [『短歌研究』18-7、1961年7月「NEWS」]。
			7月	17～22日、「立山歴史文化遺跡調査」第2回調査に、立山文化遺跡調査班(団長：岡崎譲治)の一員として参加。 南砺市(旧福野町)安居の斉藤家が所蔵する須恵器の調査を、檜崎彰一(1925～2010、当時は名古屋大学助手)らとおこなう [「岡崎卯一先生と考古学」(執筆：同世話人会)『富山市考古資料館紀要』20、2001年]。
			9月	◎「立山文化遺物調査行」(『教育広報』12-9〔通巻126〕) *第5日(7月21日)の記録に、「うば堂の仏像」を調査し「おんば様」の像底に「永和二年」の墨書銘を発見したことを記す。 ◎「三尊形のアミダ仏」(『朝日新聞』富山版9月5日) 27日、翁久允の「稚庵画賛展」(於：大和百貨店)の設営を重杉俊雄と。 [翁久允「太稚庵はだか日記」(『高志人』26-10、1961年10月)]
			11月	魚津市立図書館、開館。玄関ホールに設置された★多東清吉(建築の寄付者)の胸像は、長島が原型を制作 [『魚津市史』下巻(1972年)466頁]。
			12月	早川莊作(1888～1978)に、所蔵のヒスイ原石を譲る [早川・市島1995]。
昭和37年	1962	58歳	1月	◎富山県教育委員会編『富山県の文化財』第1集(富山県教育委員会) *『長島勝正先生の人と業績』(1974年)に記載。
			2月	16日、高瀬重雄の文学博士学位授与を祝う会(富山ペンクラブ2月例会)(於：三尊道舎)に出席。鯨の陶彫作品を高瀬に贈る。 [平田一郎「雪の日の清筵」『高志人』27-3、1962年3月] *24日、翁久允、重杉俊雄と会い4月8日の「道舎祭」について話す。 「第十回になるから何か記念品を出したいという意向を話すと、長島勝正に三尊像の焼物でもつくってもらったという話になる」 [翁「太稚庵はだか日記」『高志人』27-4、1962年4月] 26日、翁久允を訪問。「長島勝正が来たから、道舎祭の記念に三尊像の焼き物をやろうという話をまとめる。彼は来月七、八日までに原型をつくって見せに来ると」[翁「太稚庵はだか日記」『高志人』27-4、1962年4月]
			3月	10日、翁久允を訪問。「長島勝正君が三尊像の原型をもって来てくれた(中略)約百個ほど作ってもらおうと思っている」[上掲「太稚庵はだか日記」]。
			4月	1日付で、入善町文化財保護委員に任命される [『広報にゅうぜん』76]。 八尾町史編さん委員を委嘱される [『八尾町史 続』1973年「あとがき」]。 *『高志人』27-4(4月刊)の「第十回道舎祭ご案内」欄に「記念として長島勝正氏作陶刻三尊像を贈呈」とある。「道舎」は翁久允が住まい、高志人社の拠点となっていた「三尊道舎」のこと。 6日、翁久允のもとに「三尊像の陶芸を六十個」搬入。重杉俊雄が立ち会う。「あと四十個はお祭後に運ぶと」[翁「太稚庵はだか日記」『高志人』27-5、1962年5月]。 *8日、「第十回道舎祭」。翁久允は「太稚庵はだか日記」(上掲)に「来会回答者は七十六名だったが来れない人もあり署名者六十二名。受付で記念品として長島勝正作陶芸三尊像と折詰を渡す」と記した。同号の青木浩雲「十周年記念道舎祭」に出席回答者の一覧が載る。
			5月	2日、翁久允のもとに「記念の三尊像、残り十九個」を運び、代金を受領。 [翁「太稚庵はだか日記」『高志人』27-6、1962年6月] 15日付で刊行された早川莊作『富山県の石器と土器』(清明堂)の刊行にあたり、重杉俊雄・栗山邦二らと助力する。*早川は県文化財保護委員。
			6月	5日、翁久允のもとに「三尊像の追加楽焼二十体」を運び込む。 [翁「太稚庵はだか日記」『高志人』27-2、1962年7月]

				南砺市（旧福野町）安居の斉藤家が所蔵する須恵器の調査を、檜崎彰一（1925～2010、当時は名古屋大学講師）らと再びおこなう〔「岡崎卯一先生と考古学」（執筆：同世話人会）『富山市考古資料館紀要』20、2001年〕。
			7月	○『立山と黒部』（富山県郷土史会叢書7）（富山県郷土史会） ＊巻末の叢書一覧に、木下秀夫（元県立図書館長）との共編と記載。 井波町史編纂事業の一環として、同町内の寺社の彫像を調査。以後も数回にわたり調査をおこなう〔『井波町史』下巻、1970年、巻末10頁〕。
			8月	「立山歴史文化遺跡調査」第3回（当初は7月6・7日に実施予定だったが延期された）調査に参加。 この月より、富山県遺跡基本調査委員の一人となる〔「岡崎卯一先生と考古学」（執筆：同世話人会）『富山市考古資料館紀要』20、2001年〕。
			9月	「立山歴史文化遺跡調査」第4回調査に参加。
			10月	砺波市史編纂事業の一環としてこの日から開始された、福山須恵器窯跡の第二次発掘調査に際し、湊晨とともに「爾後指導」にあたる。 〔砺波市史編纂委員会編『砺波市史』砺波市、1965年、113～114頁〕 △「彫刻 長島勝正 洋画 松倉美穂（富山市稲荷元町）」 〈季節を造形する 父と子のいる風景8〉（『富山新聞』10月12日夕刊） ＊長島の近況について「二、三日前に郷土の入善高校創設者のブロンズの胸像をしあげ、いまはひと息ついているところだ」と記す。 ＊「おたがいの作品を口のわるい冗談をまぜて批評し合うが「親のものを古いと思わないようじゃ、人類の進歩ありませんよ」とすかさず長島さんがいった。／一心にふでを動かす孫の千尋ちゃんをみる長島さんの目がいつそう細くなった。美穂さんの小さいときを思い出しているのだろうか」。 ＊「写真は千尋ちゃんの絵をみまもる長島さんと美穂さん」。
			11月	◎「福野町寺家の三個の礎石」（『越中史壇』24） 〔再録〕『福野町の文化財』第1集（1970年）。 小矢部市史の編集顧問の一員となり、以後、神社・寺院の調査をおこなう〔『小矢部市史』下巻、1971年、平野良作「あとがき」〕。 富山県立入善高等学校創立四十周年を記念して11月10日付で建立をみた、★米澤元健（入善町長）の胸像の原型を制作。昭和11年の項も参照。 ＊初代の像は戦時中に供出され、のちに入善農学校同窓会により二代目として陶像が建立されたが破損、これが三代目の像という〔森1984〕。
			3月	◎「帝龍寺とその周辺の文化」 ＊同書執筆＝長島・重杉俊雄（船峯観光と文化の会編・刊『帝龍寺と船峯の文化』） ＊本尊十一面観音立像を調査、像内に「千手仏」等の墨書銘を発見。 ◎富山県史編纂委員会編『新訂 富山県の歴史と文化』（青林書院新社） ＊扉には「新改訂増補」と掲げる。1961年3月刊の「新訂」版に基づく一部訂正版。長島は「庶民生活のさまざま」の章と写真を担当。 25日付で富山県文化財保護条例が施行される。その第4章に基づき、長島は県の文化財専門委員となった。〔古川2026〕参照。
			5月	宇奈月温泉開湯40年を記念する頼三樹三郎の漢詩碑（愛本橋東側）建立の発起人に、野島好二、重杉俊雄らとともに名を連ねる〔『宇奈月町史 追録 文化編』1989年、287頁〕。
			7月	この頃、入善町立横山小学校の依頼を承けて★《なかよし埴輪像》を制作。 ＊〔森1984〕による。松尾豊編・上永治写真『富山の野外彫刻』（桂書房、1991年）の「新川地区リスト」に記載。テラコッタ製、同校前庭。 ＊『北日本新聞』1988年9月16日夕刊記事に「高さ60センチ」とある。 ＊同校は1997年、櫛山小学校との統合による桃李小学校の誕生にとも

				ない廃校となり、跡地にある入善勤労者総合スポーツ施設（サン・ビレッジ入善）に閉校記念碑が建つ。
			8月	17～19日実施の富山市（旧婦中町）牛滑遺跡予備調査に参加〔「岡崎卯一先生と考古学」（執筆：同世話人会）『富山市考古資料館紀要』20、2001年〕。
			9月	○前田常作との対談「日本人は個性がない 滞欧5年、帰国後の感じ」 〈日曜対談〉（『北日本新聞』9月8日夕刊） ＊「前田君、富山に帰ってきて文化財をさかんに見て回っていたようだが日本、ひいては郷土再認識という意味だったんだね」（中略） 「芦峯の閻魔堂、大岩の不動尊、庚申塚、本法寺の曼陀羅などいろいろと見ました。それらのひとつひとつが生きている」 ＊前田は「立山のものなら現地に山岳美術館を建てて立山大権現の再現をはかる」という希望を長島に述べている。
				◎「五箇山探さく（上）歴史をたずねて」（『北日本新聞』9月11日） ＊富山県郷土史会の「初の試み」で企画された、利賀谷への遠足に基づくもの。「（下）文化と地形」（9月23日）は重杉俊雄が執筆。
			10月	13日、富山県教育会主催の「郷土文化探訪」第1回。一班の立山山麓方面の指導講師を湊晨と担当した（二班の小矢部方面は平野良作・木倉豊信）。 ＊以後各回の概要は『富山県教育会百年誌』（1989年）157～158頁参照。
			12月	◎「奥能登の薬師さま」（野間三郎編『北陸と海運』〈北陸総合学術調査団報告第1冊〉北陸総合学術調査団・北陸中日新聞社）
			この年	◎『大島村史』（大島村）＊重杉俊雄・八尾正治と分担執筆。
昭和戦後期（2）還暦以後（60代）				
昭和39年	1964	60歳	この年	富山県文化財専門委員の任にあった〔『北国年鑑 昭和39年版』〕。
			1月	7日、富山地学会の例会（於：富山大学地学教室）で、「富山新港周辺の生い立ち（中間発表）」の後半「過去の放生津潟」の「(3)遺跡、古文書」を、高瀬保・小川貞雄と担当〔「富山地学会50年の記録」『富山県地学・地理学研究論集』7、1980年〕。
			3月	1日、富山地学会の特別例会（於：富山大学文理学部第1会議室）で、テーマ「富山新港周辺の地学的諸問題」のもと「古文書からみた放生津潟の変遷と射水平野の形成」を、高瀬保・小川貞雄・長島の連名で発表〔「富山地学会50年の記録」『富山県地学・地理学研究論集』7、1980年〕。 ◎「越中の古彫刻」（『越中史壇』28） ＊木倉豊信「編後私記」に「三十余年の間身を以て調査研究された成果の一端であり、要約でもある（中略）更に詳論を発表して貰うつもり」。 〔再録（抄）〕『福野町の文化財』第1集（1970年）＊同町に関する部分。
			5月	◎「下新川郡史稿」のこと」〈町史編纂すすむ1〉（『広報にゅうぜん』89） ＊同号は「町史編さん事業特集」。「担当部門別調査委員」の一覧には、「文化史」「宗教史」の項に「長島勝正」。 2日、土器・木柱が4月に出土した富山市水橋小出を、県文化財専門委員としての派遣により木倉豊信とともに訪問。大通寺の仏像も調査する。 〔△木倉豊信「再び金剛廃寺を探し求めて」『富山史壇』36、1967年〕
			6月	＊この月に刊行された大橋俊雄編著『時衆過去帳』（時衆史料第1）（教学研究所）の富山県立図書館蔵本には、越中関係の箇所に長島による朱点を加えられている（蔵書検索で確認できる書誌情報にも「越中関係朱点入 施点者：長島勝正」と記載）。ただし長島が施点した年代は未詳。
			7月	＊富山県史編纂室、富山県立図書館内に設置され、木倉豊信が室長に。
			8月	◎富山県等主催『富山県名陶展』図録 ＊解説を吉田実と分担執筆 ＊会期：11月13日～12月2日。富山県民会館の落成を記念した企画。
			9月	◎福野町史編纂委員会編『福野町史』（福野町）

				＊「郷土の山河」「宗教と観光」「索引」をそれぞれ他 1～2 名と分担。
			11 月	◎富山県等主催『富山県時代漆芸展』図録 ＊解説を彼谷芳水と分担執筆 ＊会期：11 月 13 日～12 月 2 日、於：富山県民会館美術館。 大山町史編纂委員会編『大山町史』（大山町） ＊執筆には関わっていないが、石原与作「あとがき」に、長島らによる 「文化財実地踏査を賜った」と述べられている。
昭和 40 年	1965	61 歳	この頃	富山市稲荷町から、同市大町に転居する。
			1 月	＊1 月 1 日付で、多くの彫刻・絵画作品が県の文化財に指定された。 △「絵で結ぶ心 長嶋勝正さん一家」〈わが家は楽し 1〉 (『朝日新聞』1 月 1 日)
			3 月	＊『砺波市史』刊行。編纂の過程では、「各神社の御神体や宝物等の調査」「古美術の鑑定」に長島が協力した〔大島信一「後記」〕。
			4 月	◎富山県等主催『富山県古書画名品展』図録 ＊解説を木倉豊信と分担執筆。 会期：5 月 2 日～6 月 1 日、於：富山県民会館美術館。
			5 月	◎「立山の七不思議（上）」(『富山史壇』31) この月に究菰公園（入善町新屋）に建立された、★袖野與太郎（新屋村長） の胸像の原型を制作〔森 1984〕。
			6 月	20 日、富山地学会・越中史壇会・富山県郷土史会・富山考古学会の合同発表会で「藤原期以前の仏像の分布」を発表〔「富山地学会 50 年の記録」『富山県地学・地理学研究論集』7、1980 年〕。
			7 月	鵜坂神社（婦中町）の奉納額として★「尻打ち祭り」（答祭り）の図を描き、高瀬重雄が源俊頼の和歌を揮毫する〔森 1984〕。
			8 月	20～28 日実施の越中国分寺とその周辺の遺跡第一次調査に参加〔「岡崎卯一先生と考古学」(執筆：同世話人会)『富山市考古資料館紀要』20、2001 年〕。 ＊米澤元健（1882～、元入善町長・県会議員・県文化財専門委員）逝去。
			11 月	◎「立山の七不思議（下）」(『富山史壇』32) ＊「まだ金ボタンの制服をつけていたころの夏休みに、園城寺の円満院門跡を訪ねたとき、長吏猊下が」「手文庫一ぱいの書きつけを出して見せようとされたことがある」などの回想も記す。 ◎「八尾山車の神事」（橋爪辰男『八尾曳山史』前編、自刊）
昭和 41 年	1966	62 歳	1 月	小矢部市史の編集委員の一員となる 〔『小矢部市史』下巻、1971 年、平野良作「あとがき」〕。
			3 月	○富山県教育委員会編『図説富山県の文化財（県指定編）』 （富山県教育委員会） ＊編集委員 5 名の一人に「長島勝正 県文化財専門委員」。 執筆への関与は明確でないが、『長島勝正先生の人と業績』に記載。 △高瀬保「射水平野に於ける過去の生活」（第一港湾建設局伏木富山港工事事務所・富山地学会編『放生津潟周辺の地学的研究』運輸省第一港湾建設局伏木富山港工事事務所） ＊「はじめに」に、「本稿の執筆にあたり富山県文化財調査委員長島勝正氏から直接御指導・御助言をうけ」たことが記されている。
			10 月	10～19 日実施の高岡市越中国分寺跡及び勝興寺周辺調査に参加〔「岡崎卯一先生と考古学」(執筆：同世話人会)『富山市考古資料館紀要』20、2001 年〕。
			12 月	★「長嶋勝正陶作展」（於：富山市郷土博物館）〔『淡交』2-12〔通巻 239〕〕 ＊会期末詳。「きりぬきジャーナル 美術界 12 月の催し」欄。
昭和 42 年	1967	63 歳	1 月	14 日、北日本新聞社主催「明治百年展」（於：富山県民会館）開幕の式典に出席。重杉俊雄の所蔵品 365 点を展示するものであった。 〔翁久允「太稚庵はだか日記」(『高志人』2-3、1967 年 3 月)〕

			○婦中町史編纂委員会編『婦中町史』上巻（婦中町役場） *「凡例」に「本町史の編纂は、次の各位に委嘱した」として監修委員 瀬川安信、常任委員として長島（県文化財調査委員）ら5名を列記。
		3月	◎富山県等主催『富山県百俎展』図録 *解説を吉田実と分担執筆 *会期：3月15日～3月30日、於：富山県民会館美術館。
		7月	△松原敏「ただよあわれな美しさ 元・長島勝正氏邸（入善町櫛山）」 （庭2）（『富山新聞』7月8日夕刊） *長島が富山市に移るまでは「県内でも有数の庭園とされていた」。 転居にともない、屋敷と庭を入善町内の島田甚氏に譲ったという。 *「後年、造りかえられたとはいえ、やはり彫刻家である長島氏の美意識がにじんでいるように思えた」
			23日、重要美術品「立山神像」（現、「銅造帝釈天立像」）の名称で重要文化財。富山県〔立山博物館〕保管）が吉田実知事により県に帰還。その日のうちに、吉田知事・高瀬重雄らとともに像を熟覧・調査する。 *〔八尾1991〕…「立山神像の海外流出をくい止め、県が買い戻した時の思い出は、今も鮮烈である。（中略）私は知事秘書を勤めていた。（中略）公務で上京中の吉田知事から私の方へ「無事神像を入手できたから、富山駅へ迎えに出てほしい」と電話があった。私は、長島先生と、富山大学の高瀬重雄教授と共に、駅前の富山ホテルで神像を拝観した。拡大鏡で部分を子細に調べる、両先生の張り切り振り。吉田知事の会心の笑顔。これらは今も忘れることができない」。 *〔廣瀬1992〕…「私は、高瀬重雄・長島勝正・五十嵐精一・八尾正治ら諸氏とともにこれを富山駅前に出迎え、深く感謝したのであった。皮肉にも、同じ日に大岩山の不動堂〔注：日石寺（上市町）本堂〕が全焼した」。
			◎「不動堂の復元を願う」（『北日本新聞』7月26日） *「県民としては出来るだけ重要文化財を解除しないで復元してほしいものである。これは県民感情としても当然のことであろう（中略）千年の歳月の経る本尊不動明王の霊威をさらに増すものと信じる」。 *同じ欄に梅原隆章「立山信仰と日石寺」も載る。
			◎「大岩山炎上と文化財保護」（『富山新聞』7月31日「朝刊」）
		8月	*木倉豊信（1906～、富山県文化財専門委員・富山県史編纂室長）没。 ◎入善町誌編纂委員会編『入善町誌』（入善町） *「郷土の宗教」の章の一部の執筆を担当（各担当箇所の末尾に記名）。 ◎八尾町史編纂委員会編『八尾町史』（八尾町） *「二、遺物から見た中世以前の八尾」の章の執筆を担当。
		9月	30日、文部省美術工芸課より田中義恭（1934～）・田邊三郎助（1923～）が来県。午後から富山県民会館で「立山神像」の実査。このとき長島は、県知事の吉田実と同席した〔『北日本新聞』10月1日記事〕。
		10月	8日、万葉遺跡顕揚の会（北日本新聞社創立85周年記念事業として前年に発足）第一回調査団の一員として呉羽山へ。重杉俊雄・高瀬重雄・野島好二らと〔翁久允「太稚庵はだか日記」（『高志人』32-11、1967年11月）〕。 *翁はこの折、鵜坂神社（富山市婦中町）で、長島が描き高瀬重雄が揮毫した「尻打ち祭り」の額（1965年を参照）を見たことを述べている〔「越中万葉遺跡」曼荼羅を求めて（『高志人』32-11、1967年11月）、『翁久允全集』10（同刊行会、1973年）に再録〕。
		11月	△吉田実「海外流出を免れた立山神像」（『芸術新潮』18-11〔通巻215〕）。
		12月	◎富山県教育委員会編『図説富山県の文化財（国指定編追加県指定編）』（富山県教育委員会）

				*長島の名はみえないが、『長島勝正先生の人と業績』の記載による。
				9日、富山民俗の会例会（於：富山市山王公民館）で「富山県の石仏の系譜」と題し講述〔案内葉書（平井一雄氏蔵）および同氏の記録による〕。
昭和43年	1968	64歳	1月	◎「怪奇な“万能の仏” 総持寺の千手観音」〈富山県の文化財2〉 （『富山新聞』1月13日夕刊）《→1991》
			2月	◎「遺跡と延喜式の神社」〈シリーズ 越中万葉を顕揚する〉 （『北日本新聞』2月3日）《→1983》 〔再録〕越中万葉顕揚の会編『越中の万葉』（北日本新聞社、1971年）
			3月	◎「郷義弘と佐伯則重」（富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人びと』第1集、富山県） *★表紙絵も担当。
				◎「立山下の後生願はず」（『富山史壇』40） *2頁弱の掌編。「昨冬ある座談会に引っ張り出されて「越中人の特性」のようなことが問題となった」ことを記す。当該の座談会は未確認。
				◎「入善町上野の民俗」（富山県教育委員会編・刊『富山県の民俗』） *掲載図書は、民俗資料緊急調査報告書として編まれたもの。
			4月	富山県史編纂専門委員となる。
			5月	◎「安居寺の聖観音」〈富山県の文化財18〉（『富山新聞』5月11日夕刊）
				◎中田町誌編纂委員会編『中田町誌』（中田町誌刊行会） *分担執筆。同書「あとがき」によれば、昭和42年1月に執筆担当の委員の一人となっている。ただし担当箇所は明記されていない。
			6月	◎「野郎歌舞伎婦女遊楽図」〈富山県の文化財22〉 （『富山新聞』6月8日夕刊）
				◎「木倉君のこと」（『越飛文化』14） *同号は木倉豊信の追悼号。
				◎婦中町史編纂委員会編『婦中町史』下巻（婦中町） *12章「宗教文化」（601～870頁）執筆担当〔瀬川安信「あとがき」〕。
				23・24日、万葉遺跡顕揚の会のバス旅行（能登半島）に同行〔翁太稚（久允）「能登の万葉遺跡めぐり（第一日）」『高志人』33-8、1968年8月〕。
			7月	◎「法華経曼荼羅図」〈富山県の文化財27〉（『富山新聞』7月20日夕刊） 《→1991》
			8月	1～7日に実施された、富山市金草第一古窯跡の調査に参加〔「岡崎卯一先生と考古学」（執筆：同世話人会）『富山市考古資料館紀要』20、2001年〕。
				◎「上日寺古図に見える「常行堂法華堂」ついたり「餅喰地蔵」 （『富山史壇』41） *富山市郷土博物館での富山新聞社復刊800号記念展覧会に展示された表題の図と図中の書き込みを検討、上日寺が「かつて天台であったのではあるまいか」と提起。表題の図は鎌倉末期を下らないとみる。
				13日、呉羽山に建立された万葉歌碑の除幕式に出席。万葉遺跡顕揚の会の一員として〔翁久允「太稚庵日誌」『高志人』33-9、1968年9月〕。
			11月	神奈川県立金沢文庫を訪問〔『金沢文庫研究』152「金沢文庫日記抄」〕。
			12月	◎「熊野比丘尼、高野聖と浄土真宗の寺」（『富山史壇』42） *末尾に「四三、七、九稿」。「先日」調査に赴いた、誓光寺（射水市〔旧大門町〕二口）の縁起に着目、「越中全土に拡がった浄土真宗の前身」について「熊野比丘尼や、高野聖とよばれる人達がすでに念仏を通じて民衆との連りがあったと思われる」という視点を提起した論考。結びの一文「縁起の裏にひそむ真実を見出すように努力するのが学徒のつとめであると思うからである」。この論考は、久保尚文『越中における中世信仰史の展開』（桂書房、1984年）第1章「浄土信仰の展開」が「熊野比丘尼・高野聖・善光寺聖」の項で言及・敷衍している。
昭和44年	1969	65歳	2月	◎「つなし・このしろ・こはだ」（『北日本新聞』2月13日）《→1983》

				[再録] 越中万葉頭揚の会編『越中の万葉』(北日本新聞社、1971年)
			3月	◎「谷口藹山と吉田公均」(富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人びと』第2集、富山県) *★表紙絵も担当。
				◎立山地区民俗資料緊急調査団編 『立山民俗 立山地区民俗資料緊急調査報告書』(富山県教育委員会) *第5章衣・食・住、第10章立山縁起の執筆を担当。 [再録]『中部・北陸の民俗 富山県編』(日本民俗調査報告書集成) (三一書房、1996年)
				◎富山県等主催『富山県酒器名品展』図録(富山県) *解説を執筆 *会期:3月5日~3月31日、於:富山県民会館美術館。
			5月	◎北日本放送編『風土記とやま』(北日本放送) *巻末の「執筆者」欄に「自然と風土担当」と明記。 *続刊の『伝説とやま』『歳時記とやま』との三部作。富山大学の高瀬重雄をチーフに、長島、重杉俊雄、八尾正治との4名が中心となり、「四人で夜を徹して編集に没頭」したという[八尾「県史学界の重鎮高瀬重雄先生を偲ぶ」『郷土の文化』30、2005年]。
			6月	◎「常楽寺の「聖観音」と「十一面観音」」(『富山教育』580)《→1991》 9日、宇奈月町史編纂事業の一環で、野島好二とともに神宮文庫を訪問。 [「神宮文庫日誌」『瑞垣』84、神宮司庁、1969年9月]
			7月	◎「千手観音菩薩像(氷見市・千手寺)」(『富山教育』581)《→1991》 31~8月7日に再び実施された、富山市金草第一古窯跡の調査に参加する [「岡崎卯一先生と考古学」(執筆:同世話人会)『富山市考古資料館紀要』20、2001年]。*前年8月にも実施、長島も参加。
			8月	◎「立山縁起曼陀羅(富山市来迎寺蔵)」(『富山教育』582)
			9月	◎「千体仏図(帝龍寺蔵)」(『富山教育』583)《→1991》 △「長島勝正」〈とやまの顔〉(『毎日新聞』9月6日) *「戦時中は先生不足から中学校の講師を勤めたこともある」「本職の陶芸は自宅裏庭に窯をつくり、趣味として生かしている。時には絵筆もとる。」「古美術に関心を持ち始めたのは美術学校の学生時代。県下をくまなく回っているが、親交に封鎖された文化財は神社や寺院にまだ数多くあるはず。これからは私の余す生涯は文化財発掘にかきたい。立派な文化財も門外不出にすれば腐食、破損し、やがては消えてゆくことを考えると眠れない夜もある」と話す。 [再録] 毎日新聞社富山支局編『とやまの顔』(高崎英之、1971年)
			10月	◎「嘉例沢の磨崖石仏」(『富山教育』584)《→1991》 ◎「歌枕「卯の花山」考」〈シリーズ 越中万葉を顕揚する〉 (『北日本新聞』10月5日)《→1983》 [再録] 越中万葉頭揚の会編『越中の万葉』(北日本新聞社、1971年)
			11月	◎「僧形八幡神像 小矢部市医王院」(『富山教育』585)《→1991》 ◎「立山縁起曼陀羅(来迎寺本)に見えるとばりのうちの女」 (『富山史壇』44・45合併号)
			12月	◎「青磁双魚文鉢(氷見市光禅寺蔵)」(『富山教育』586)《→1991》 ◎宇奈月町史編纂委員会編『宇奈月町史』(宇奈月町) *野島好二「あとがき」によれば「美術、宗教関係」の執筆を担当。
			1月	◎「牡丹花蝶雀文鏡(立山町芦峯寺雄山神社祈願殿)」(『富山教育』587)《→1991》 ◎「丹生の山と万葉人」〈シリーズ 越中万葉を顕揚する〉 (『北日本新聞』1月15日)《→1983》 [再録] 越中万葉頭揚の会編『越中の万葉』(北日本新聞社、1971年)

				◎「狛犬考」(『富山新聞』1月16日「文化」欄) *高岡市気多神社例、福野町安居寺例を上げた上で、「最近県文化財に」 なった「高岡市月野谷御嶽神社の狛犬」に言及、同例の写真を掲載。				
			2月	◎「護国八幡宮本殿・釣殿・拝殿および幣殿(小矢部市埴生)」 (『富山教育』588)				
			3月	◎「十一面観音線刻湖州鏡(朝日町大平 十二社蔵)」(『富山教育』589) 《→1991》				
				◎「石黒宗磨」(富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人 びと』第3集、富山県) *★表紙絵も担当。				
				◎富山県教育委員会編『立山文化遺跡調査報告書』(富山県教育委員会)				
				◎『五箇三村の民俗 越中五箇山民俗資料調査中間報告書』 (富山県教育委員会) *第1章概観、第2章食制および食生活、第4章生産・生業を執筆。				
				◎富山県編『茶道名品展』図録(富山県) *解説を執筆。 *会期:3月14日~4月2日、於:富山県民会館美術館。				
			4月	◎「勇助塗 錆絵鳥の図衝立」(『富山教育』590)《→1991》				
			5月	◎「阿弥陀如来像(魚津市光開寺)」(『富山教育』591)《→1991》 井波町史編纂委員会編『井波町史』下巻(井波町) *執筆には関わっていないが、126~127頁に志観寺村白山比咩神社の 木造神像について、長島による所見が「井波町文化財保護委員会報告 書」にもとづいて摘記され、長島による略図が掲げられている。				
				6月	◎「広上神社の男神像 大門町広上神社」(『富山教育』592)《→1991》 25日、富山市文化財調査審議会の初会合に出席。 [『富山市史』5、1980年、191頁]			
			7月	◎「来迎三尊図 庄川町西蓮寺」(『富山教育』593)《→1991》				
			8月	◎「融通念仏縁起絵巻(八尾町聞名寺蔵)」(『富山教育』594)《→1991》				
			9月	◎「富山県の木地屋」〈越中史夜話16〉(『みんなの県政』21)				
			10月	◎「石山合戦絵縁起八幅(富山市専龍寺)」(『富山教育』596) ◎富山県教育委員会等主催『肉筆浮世絵と仮面展』図録 *解説を執筆 *会期:10月10日~10月27日、於:富山県民会館美術館。				
				11月	◎「松川はなやかなりしころ」(『とやま21世紀』1) ◎「富山県の古彫刻」〈郷土文化講座要旨集〉(『郷土の文化』昭和45年) ◎福野町文化財保護委員会編『福野町の文化財』第1集〈研究文献集録〉 *長島の「福野町寺家の三個の礎石」・「越中の古彫刻」(抄)を再録。 文化庁より、文化財功労者表彰を受ける [『文化庁月報』11]。			
			12月		◎「密陀絵軸盆(城端漆器・東京芸術大学蔵)」(『富山教育』598)《→1991》			
			昭和46年		1971	67歳	1月	◎「狛犬三対(長野県松本市博物館蔵)」(『富山教育』599)《→1983》
							2月	◎「『求聞持法』の本尊 虚空蔵菩薩(漆絵)」(『富山教育』600)《→1991》 △廣瀬誠『立山と白山』(北国出版社) *67頁に「佐伯有頼陶像(長島勝正作、富山県立図書館蔵)」のモノク ロ図版が載る。
				3月				◎「木造聖観音立像(富山県文化財) 富山市総曲輪、松島直治蔵」 (『富山教育』601)《→1991》 ◎『越中五箇三村の民俗 越中五箇山民俗資料緊急調査報告書』 (富山県教育委員会) *第1章概観、第2章食制および食生活、第5章交通・運輸を執筆。 [再録]『中部・北陸の民俗 富山県編』〈日本民俗調査報告書集成〉 (三一書房、1996年) ○小矢部市史編集委員会編『小矢部市史』上巻・下巻(小矢部市)

				*執筆担当は明記されていないが、[下巻の平野良作「あとがき」]によれば、1968年8月からの「編集監修事務」の段階まで、木下秀夫（元富山県立図書館長）とともに深く関わったことが知られる。
			4月	◎「べしみ面 小矢部市峠・渡辺家蔵」(『富山教育』602)《→1991》
			5月	◎「杣田作金唐皮鉢」(『富山教育』603)《→1983》
				◎北日本放送編『伝説とやま』(北日本放送)
				*巻末の「執筆者」中に「長島勝正」。ただし担当箇所の明記はない。
				◎越中万葉頭揚の会編『越中の万葉』(北日本新聞社) *同紙掲載分再録。
			6月	◎「仙人窟の十一面観音石仏」(『富山教育』604)《→1983》
			7月	◎「色絵琴棋書画 湯呑茂八焼 富山市西岩瀬・海岸寺蔵」 (『富山教育』605)《→1983》
			8月	5日～7日、大阪歴史学会古代史部会が富山地方の研修旅行を実施。長島は、藤井一二（当時、富山県史編纂室）・岡崎卯一とともに現地に対応。 [舟尾好正「富山地方研修旅行について」『続日本紀研究』158] ◎「富山藩の美術工芸」〈特集 富山藩の研究〉(『富山史壇』50・51 合併号) ◎「あかものひとかた」(『富山新聞』8月6日) *下村加茂神社「お田植え祭り」でマコモの葉で作られ用いられる、男女一具の人形につき説く。長島の挿絵「あかものひとかた」も掲載。
			9月	◎「女神像 井波 矢於留神社 ウーマンリブの神様」 (『富山教育』606)《→1983》
			10月	◎「金銅仏供器 富山市寺町出土・東京国立博物館」(『富山教育』607) 《→1991》
				◎「越中の古陶」(『毎日新聞』富山版、10月5日～28日に連載)
				*丸山・黒田・景岸・埴生・三助・福光・越中瀬戸・小杉・古府・石戸・興法寺・蓑輪・舟見・茂八・高宮・白馬焼
				△「長島勝正」(毎日新聞社富山支局編『とやまの顔』高崎英之)
				7日、講演のため来県した柏原兵三（1933～1972、芥川賞作家）の訪問を受け取材に応じる。彼の大叔父・柏原与次郎は、長島家から学資の援助を受けた経緯があった[太田久夫「柏原兵三氏の死を悼む」(『北日本新聞』1972年2月26日)、同「柏原さんとの四時間」(『文学DATA』13、1973年5月)、いずれも同『郷土雑纂』第2集(自刊、1986年)に再録]。
			11月	◎「七夕図花瓶 景岸焼」(『富山教育』608)《→1983》
				◎「富山市の文化財展によせて」(『北日本新聞』11月3日)
			12月	◎「鉢伏の不動様 東砺波郡庄川町鉢伏山」(『富山教育』609)《→1991》
昭和47年	1972	68歳	1月	◎「木造十一面観音立像 氷見市大栄寺」(『富山教育』610)《→1991》
				◎「八尾のはなし(4) 国境あらそい」〈越中の伝説13〉(『まもり』238)
			2月	◎「八尾のはなし(5) 飛越国境あらそい」〈越中の伝説14〉 (『まもり』239) *同誌は富山県警察本部刊。
				*「立山連峰の自然を守る会」世話人名簿 昭和四十七年二月現在」に「長島勝正」あり[『富山県史』史料編8〈現代〉(1980年2月)1206頁]。
				△『歴史読本』17-2(通巻192)「今月の話題」欄に載る「33年に一度の公開！鎌倉時代の観世音像」。
				*城端町細野熊野神社で「鎌倉時代のヒノキの観音菩薩立像」発見。
				*「昨年がちょうど三十三年目に当たることから、富山県文化財専門委員長の長嶋勝正氏によって調査が行なわれた」「長嶋委員長は「江戸時代にはすでに真言密教はすたれており、かつて立川流が盛んだったことを物語る証拠を発見するのは無理だが、やはりこの熊野神社の近辺に道場があったと思う」と語っている」。
			3月	◎「牛岳のはなし」〈越中の伝説15〉(『まもり』240)

				◎「岸駒」（富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人びと』第4集、富山県） *★表紙絵も担当
				◎「法福寺の稚児舞 明日の稚児舞 下新川郡宇奈月町明日」 （『富山教育』611）《→1983》
			4月	◎「天下の三奇祭 鵜坂神社の「しもと」祭り」〈越中の伝説16〉 （『まもり』241）
				◎「歌舞妓曳山車 砺波市」（『富山教育』612）《→1983》
				△無署名「瀬戸焼に似た“舟見焼” 保存会を結成し後世に」 （『広報にゅうぜん』180） *保存会が、3月18日に長島を招いての講演会を開催したことを記す。
			5月	◎「婦中のむかしがたり（1）」〈越中の伝説17〉（『まもり』242）
				◎「丸鬘まつり 氷見市千手寺」（『富山教育』613）《→1983》
			6月	◎「婦中のむかしがたり（2）」〈越中の伝説18〉（『まもり』243）
				◎「八尾の曳山」（『富山教育』614）《→1983》
			7月	◎「婦中のむかしがたり（3）」〈越中の伝説19〉（『まもり』244）
				◎「夜高あんどん 福野町」（『富山教育』615）《→1983》
			8月	◎「山田村のはなし」〈越中の伝説20〉（『まもり』245）
			9月	◎「岩瀬名物飛び団子」〈越中の伝説21〉（『まもり』246）
				◎「サンサイ踊り」（『富山教育』616）《→1983》
			10月	◎「富山県と天皇家の人々」〈越中の伝説22〉（『まもり』247）
				◎「オワラ踊り」（『富山教育』617）《→1983》
			11月	◎「越中のむかしむかし（1）」〈越中の伝説23〉（『まもり』248）
				◎「福岡の「つくりもの」まつり」（『富山教育』618）《→1983》
				第一回文化庁長官賞を受賞する。
			12月	◎「越中のむかしむかし（2）「譚海」に見える越中」〈越中の伝説24〉 （『まもり』249）
				◎「願念坊踊り 小矢部市綾子」（『富山教育』619）《→1983》
				◎「見直そう越中舟見焼」（『富山新聞』12月8日）
昭和48年	1973	69歳	1月	◎「推古仏と円空仏」（『富山新聞』1月26日）《→1983》
				◎「越中舟見焼」（『富山教育』620）《→1983》 *前年4月の項も参照。
				◎『草岡神社史』（草岡神社奉讃会） *重杉俊雄・米原寛との共同執筆（分担の詳細については明記なし）。
			2月	◎「二つの火牛戦」〈越中の伝説25〉（『まもり』251）
				◎「騎獅文殊菩薩像 絹本彩色一幅 富山市来迎寺蔵」（『富山教育』621） 《→1991》
				*翁久允（1888～、作家、戦前から『高志人』誌を主宰）逝去。
			3月	◎「屏風にみる近世絵画展」（『北日本新聞』3月5日「文化」欄） *下記の展覧会にちなむ。見出しに「日本の立派な移動壁画」。
				◎富山県教育委員会編・刊『屏風にみる近世絵画展』図録 *解説を執筆 *会期：3月10日～3月25日。於：富山県民会館・高岡市美術館。
				◎「越中の円空仏」（富山県芸術文化協会『芸文とやま』1） *「最近」細入村加賀沢（かがそ）の白山神社で5体（写真掲載）が発見され「県内の円空仏は合わせて十二体になった」ことを述べる。
			4月	△富山新聞社編『越中百家』上巻（富山新聞社） *竹田増一「あとがき」に、「古仏、古画像の鑑定は」長島の協力を得たことが記されている。
				◎「霊猫図 金張引戸着色 岸駒筆 富山市郷土博物館蔵」 （『富山教育』622）《→1991》

			5 月	◎「相説筆 草花図屏風 絹本彩色 六曲半双」(『富山教育』623) 《→1991》
			6 月	◎「源平合戦図屏風六曲一双 金箔押着彩 北村勝山筆 佐藤美術館蔵」 (『富山教育』624)《→1991》
			7 月	◎「大勢至菩薩立像 新湊市曼荼羅寺」(『富山教育』625)《→1991》
			8 月	◎「宝篋印塔板碑 新湊市曼荼羅寺墓地 宝篋印塔を彫り出した板碑」 (『富山教育』626)《→1991》
			10 月	◎「広目天王(曼荼羅寺四天王のうち)」(『富山教育』627)《→1991》 ◎曼陀羅寺編(長島勝正・橋本芳雄・高瀬保執筆)『曼陀羅寺』(曼陀羅寺)
			11 月	◎「五重の石塔 能登 明泉寺」(『富山教育』628) ◎「仏教文化展に寄せて一親鸞聖人生誕八百年にちなみー」 (『富山新聞』11月9日) *富山市郷土博物館で同日~28日開催の「仏教文化展」(富山新聞社共催)を出陳資料6点の写真入りで大きく紹介する記事の左辺に掲載。 *結びの一文に「このように浄土真宗一派という狭い範囲から離れて広く当時の仏教文化のありさまがわかるように列品を集め、陳列することによって理解を深めるようにしたのである」。 県文化功労賞を受賞 [『富山県教育要覧 1974 年版』富山県教育委員会]。
			12 月	◎「奇祭しもと祭」(北日本放送編『歳時記とやま』KNB 興産)
		この年		◎「川島君のこと」(『川島民雄追悼集』川島民雄追悼集刊行会) *川島民雄は、NHK富山放送局プロデューサーであった人物。 *本書は未見。県内外の図書館施設での所蔵も確認できていない。 △木内哲子「玲子覚え書」への道(上掲『川島民雄追悼集』) *「長島勝正氏は、戦後、富山市奥田中学校後に住んでおられ、お家はまるでNHK寮の観であった(中略)私はよく長島氏の家に遊びに行った」。筆者(1921年生)の35歳当時の記憶として記されている。 [再録]木内哲子『おかあさんしっかり』(自刊、1985年) △富山県洋画連盟編・刊『富山県洋画連盟のあゆみ 25周年記念』 *杉山司七の文に「その(昭和21年1月)頃、日本画家の小坂勝人、紺谷英儀君等が毎日のように長島勝正君の家へ集って駄べっているうちに富山に美術センターが必要だということになり(中略)富山美術文化協会の看板をかけた(中略)私は長島君と同行して県の社会教育課長に県展の開催を説いたが賛同を得られなかった(以下略)」。
昭和戦後期(3) 古稀以後(70代)				
昭和49年	1974	70歳	1 月	◎「能面蛙 氷見宗忠作」(『富山教育』630)《→1983》
			2 月	◎「顕栄影像 絹本彩色 高岡市伏木勝興寺蔵」(『富山教育』631) 《→1991》 △定塚武敏『越中の焼きもの』(富山文庫2)(巧玄出版、1974年) *95頁に「長嶋勝正 らくだの王女置物」昭和一七年(高さ27cm)を掲載するほか、長島に関する言及を随所に含む。 *209頁の図版「富山県陶磁器工業株式会社/創立総会招集通知書発送名簿控」(昭和17年3月14日付)の紙面に「長島勝正」あり。
			3 月	2日付で、万福寺(砺波市太田)地藏菩薩立像に関し意見書を記す。 [砺波市立砺波郷土資料館編・刊『佐伯安一資料目録』2023年、31頁] ◎「横江嘉純」(富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人びと』第5集、富山県) *★表紙絵も担当。
				◎「越中瀬戸焼の芸術性」(『芸文とやま』2) *同号の特集「富山文化のふるさとを探る(2) やきもの」のうち。 ほか木内哲子・米田憲三・石原与作・森幸一が越中瀬戸焼につき執筆。

			◎「瑞龍寺につながる中国仏 鳥山家の釈迦如来像のこと」 (『富山新聞』3月30日)《→1983》 『越中瀬戸焼 昔と今展』(於：富山県民会館美術館)に出品。 会期：3月19日～24日、主催：越中瀬戸焼愛陶研究会 *長島は自作の★《灰釉釈迦像》を出品 [同展目録]。 △無署名「朝日町が生んだ天才彫刻家 水野徳二氏」 〈郷土の文化遺産や文化人の足跡をたずねて11〉(『あさひ』223) *水野徳二(1915～59)。「昭和23年(中略)長島勝正氏や阿部順三氏らの協力のもと「とまり焼」を始め」たことなどを記す。
		4月	◎「浦田山王社の獅子舞」(『富山新聞』4月27日)《→1983》
		6月	◎「蓮如自らの鑄造 福光町光徳寺「阿弥陀如来像」〈寺社の土〉 (『富山新聞』6月22日「こころ」欄) *「同寺のご本尊である金銅の阿弥陀如来像」。向かって左斜め下方から安置状態を撮影した写真を掲載。制作時期などにはふれていない。
		8月	◎「魅力あふれる白漆蒔絵 城端蒔絵四百年展に寄せて」 (『北日本新聞』8月6日)《→1983》
		9月	◎「正源寺 聖観音菩薩」(『富山教育』637)《→1991》 △宮内恵樹「講師 長島勝正先生に感謝する」(『富山教育』637) *「昭和四十九年度 第十二回 文化探訪／安曇野の文化を探る」と題し、8月21・22日に県教育会が主催した「長野松本・大町方面」の旅に関する記事の一部。長島の語りやたずまいの印象も記している。
			◎「黒東のほとけたち」(『富山新聞』9月26日)《→1983》
			◎「ぬりものとやきもの」(『チェリー』10)
			△富山新聞社編『越中百家』下巻(富山新聞社) *「郷家」の章の集合写真中に長島の姿もある。また郷家伝来の不動態像について、長島が「鎌倉末期から室町初期」と評価したことを記す。
		10月	◎「奥飛騨の古文化と越中 交流裏付ける数々の遺物」 (『北日本新聞』10月19日)《→1983》 *「私は今年、神岡町とその隣村・上宝村の教育委員会の依頼を受けて、春と秋の二回この二町村の古社、古寺を回り、そこに蔵する古仏、古神像、古仏画などの調査をした」。「国泰寺と飛騨の禅宗」の関係の解明を「飛越文化交流を解き明かす一つのカギ」と結ぶ。
			◎「円空の彫刻の発見 細入村蟹寺で八体、庵谷で二体」 (『富山新聞』10月26日)《→1983》
		11月	3日、「長島勝正先生の古稀を祝う会」開催(於：名鉄トヤマホテル)。 △『長島勝正先生の人と業績』(長島勝正先生の古稀を祝う会) △近影・略歴 △浅井景一「長島勝正氏とのこと」〈長島勝正先生を称える〉 △岩倉政治「わが善友 長島氏」〈長島勝正先生を称える〉 △高瀬重雄「長島さんと私」〈長島勝正先生を称える〉 △前田常作「長島勝正先生」〈長島勝正先生を称える〉 △吉田 実「長島さんとの交遊」〈長島勝正先生を称える〉 △太田久夫編「著述目録」 *太田氏は、本冊子の編集も担当した。 △太田久夫「あとがき」 * [再録] 同『郷土雑纂』第2集(自刊、1986年) * 富山県立図書館蔵本3冊中の2冊は、「長島勝正先生の古稀を祝う会出席者名簿」(110名程が並ぶ)を合綴した状態で保管されている。 22日頃、富山市郷土博物館に寄贈された「富山藩領山方絵図絵巻」についてコメントする [『富山市史』第5巻、1980年、624頁]。

昭和 50 年	1975	71 歳		◎「郷土の貴重な新史料 「富山藩領山方絵図絵巻」の発見 （『北日本新聞』11月23日「文化」欄）《→1983》 ＊富山市郷土博物館の新収蔵品について詳解する。
				◎「歯吹きのア弥陀 富山市浄禅寺」（『富山教育』638）《→1991》
			晩秋	巧玄出版（富山市）に紹介された写真家・風間耕司（1938～2024）と、「晩秋から数十回にわたり」県内各地の社寺を訪れ、彫刻作品の撮影を行う。 『越中の彫刻』（1975年）の長島「あとがき」]
			1 月	◎「石動観音寺の地藏さま（要旨）」（『富山史壇』59・60 合併号）
				◎「富山藩領山方絵図絵巻」（『富山教育』640）
				◎「鎌倉中期の古仏一玉永寺のア弥陀仏」（『富山新聞』1月18日） 《→1991》
				◎「飛騨 越中の文化交流 裏付ける遺物多数」（『岐阜日日新聞』1月27日） 『郷土関係新聞記事索引 第5集』岐阜県立図書館、1979年]
			2 月	◎「越中丸山焼 色絵 人物文 茶碗 鈴木道栄作」（『富山教育』641） 富山県郷土史会の第2代会長となる（初代会長嶋尾正一は前年9月死去）。 ＊[太田 2002]…「史蹟めぐりには率先してガイド役を務め、その車中や行く先々で適切な解説をするのが常であった」。
			3 月	富山新聞社から文化功労者として表彰される [下掲『富山県人』739]。 ◎「堀井三友と金山康喜」（富山県・富山県青少年活動実践協議会編『郷土に輝く人びと』第6集、富山県）＊★表紙絵も担当。 ◎「三十番神像 小杉町十柱神社」（『富山教育』642）《→1991》 ◎「富山藩官窯の特性 越中丸山焼再見」（『富山新聞』3月13日） 《→1983》 ◎「宝洞寺（富山）の千手観音 注目すべき寄せ焼き像」 （『北日本新聞』3月20日） ○長島勝正（話し手）・吉崎四郎（聞き手）「美に魅かれて」〈訪問記〉 （『芸文とやま』3） ＊「先生は、美術品のなかで一番好きなのは、やはり彫刻ですか」 「そう、彫刻だな。何と言っても古いものがあるからね」 [再録] 吉崎四郎『人生を語る』（県民大学校友の会雷鳥会、1992年） ＊長島は初出当時「県芸文協参与・県文化財専門委員」。吉崎（1929～）は京都大学文学部で美学美術史を専攻、富山高校教諭を経て初出当時は県教委芸術文化係長。再録当時は富山県民生涯学習カレッジ学長。
			4 月	◎「魚津千光寺金銅千手観音立像」（『富山新聞』4月19日）《→1983》
			5 月	◎「南無仏太子立像 氷見市飯久保 光久寺」（『富山教育』643）《→1991》 ●『越中の彫刻 祈りと美の系譜』〈富山文庫8〉（巧玄出版） △無署名「長島勝正 松岡正雄」〈話題の人 県内〉（『富山県人』739） ＊冒頭一文に「富山県における郷土の美術文化財研究のナンバーワン」。 △定塚武敏「本格的な美術史書「越中の彫刻」」（『北日本新聞』5月19日） ＊「氏の多大の労苦をもって、一地方の彫刻だけを取り上げた本格的な美術史書といえる」。定塚は当時、高岡市立美術館館長。 ◎「傘鉾のある祭り 城端・神明宮の祭礼」 （『富山新聞』5月31日）《→1983》 富山県郷土史会・富山県立図書館主催「郷土文化講座」第97回として、 『越中の彫刻』の上梓にちなんで「富山の彫刻」を講述する [『郷土の文化』昭和55年「郷土文化講座／主題／講演者一覧」。同号に内容も掲載]。
			6 月	◎「越中の古彫刻をたずねて「五十年」」（『富山と東京』20-5） ＊多久比禮志神社（富山市）の男神坐像2体の法量を計測する長島の姿と、富山市浄禅寺阿弥陀如来立像の顔をモノクロ写真で載せる。

				*本文は「古代人の英知を学ぶ」「浄土思想の影響」「古神像の調査」「異形の阿弥陀如来像」「立山信仰を彩る「立山神像」」の5項からなる。 *「立山神像」について「私は昭和の十年ごろ（中略）愛知県の社会教育課の係官と一緒に赴き（中略）訪ねてこの像を拝んだ」「非常に貴重な彫刻であると思ったので、新聞などに発表したのが起因となって、約三十数年たって富山県に戻ることにしたのである」。 *結び一文に「県内の彫刻を調べてみて、未知の部分が多い。私の一生の内にできなくてもよい、若い人達の叡知がそれを明らかにしてくれる日も近いと思っている」。 △無署名「越中の彫刻」〈良書名著紹介〉（『富山と東京』20-5） *「富山県は古来優れた彫刻が多く「彫刻王国」の観があるが、一貫して通解した本がなかった」。 ◎「立山にまつられていた二軀の仏像 阿弥陀如来坐像（南北朝・上市町）不動明王立像（鎌倉時代・上市町）」（『富山教育』644）《→1983》 28日、神通川でアユの投網にかかり発見された、高村光雲作の銅造《白衣観音》についてコメントする〔『富山市史』第5巻（1980年）681頁〕。 ◎庄川町史編さん委員会編『庄川町史』上巻・下巻（庄川町） *監修者（木下秀夫〔元県立図書館長〕とともに）・編さん委員。上巻の「2 郷土のむかし」・「7 信仰と民俗」の章の一部を執筆。
			7月	◎「筑摩鍋被り祭の図 蜷川観月作」（『富山教育』646） ◎「岸派の蜷川観月展」（『富山新聞』7月3日）《→1983》
			8月	梅野彦八翁顕彰編さん委員会編・刊『四方浦漁民の父梅野彦八翁』 *★表紙絵は長島の作品。
			9月	◎「五ヶ山秋景 織田一磨の越中の絵と立山の歌」（『富山教育』647） 《→1991》
			10月	○『越中一代男』（富山新聞社） *長島の談話が、佐々木大樹（東京美術学校の先輩）・岩倉政治（福野農学校の先輩）に関して載る。 △『歴史読本』20-12（通巻244）「今月の話題」欄 *「親鸞聖人の550回忌法要費345万円也!」。『北日本新聞』7月21日記事に依拠。550回忌を商家で営んだ執行帳が、有沢一雄さん宅（富山市西町）で発見される。「県文化財専門委員長長島勝正さんの計算では三百四十五万円相当の出費だという」。
			11月	◎「旧富山藩の磯部御庭園」（『北日本新聞』11月6日）《→1983》 ◎「越後魚沼神社の大般若経」（『富山新聞』11月16日）《→1983》
			12月	◎「魚沼神社阿弥陀堂（重要文化財）」（『富山教育』649） *口絵裏面（解説本文頁）では「戦後（マ）小千谷、魚沼神社の大般若経（上杉謙信が越中から持ち去った）」。〔渡邊1997〕参照。 ◎「国分寺と国分尼寺」（『富山県史』通史編I原始・古代）
昭和51年	1976	72歳	1月	◎「磯部御庭園 絹本着色 黒部市・中田利男氏義」（『富山教育』650） ◎「躰玄寺の阿弥陀立像 鎌倉初期の名作」（『北日本新聞』1月8日）《→1983》 *躰玄寺（射水市）本尊。翌年4月12日付で県指定文化財。
			2月	◎「天柱石（東砺波郡平村松尾）」（『富山教育』651） ◎「真宗寺院の古仏像―寺宝調査と美術史研究―」（『富山新聞』2月15日） *半ばで「寺宝の調査はえてして古い大きな寺を対象とする場合が多いが、今後は努めてどんな寺でも調査しなければ本当の美術史の研究はできないように思われる」と述べた上で、「昨春」県指定文化財となった舟橋村無量寺本尊阿弥陀如来立像を例示（頭部の写真を掲載）。

			*「富山市の木本博之氏に応急修理を願ひ（中略、県指定後に）さらに本修理にかかり、このほど約七百年前の見事な姿に復原された」。
		3月	◎「見返り阿弥陀像（県指定文化財）安居寺蔵 よそ見をした阿弥陀様」（『富山教育』652）《→1991》 ◎「長井雲坪と石川呉山 忘れられた幕末の南画家」（『北日本新聞』3月2日）《→1983》 ◎「歴史随想 五十年秋のたび」（『富山史壇』62・63合併号） *「私は若いころから「鉄砲玉」といわれていた。行先も告げずによく旅に出るからで、ドンと鉄砲をうてば玉がどこへ行ったかわからないからであるらしい。私のやっている学問はいわゆる歴史学のそれと違ってあくまで原物につかねばならない性質であるので、諸君のやっているように書物の上や文献などではどうにもならない。ことに建築や彫刻は全国各地に散在し、そのあるべき土地の有様によって設計計画されるものない（マ）ので博物館だけでは駄目なのである。 しかし昨年一度引っくり返って、つくづく年だなあとと思った。それからは県内は一人で歩くが県外となると必ずだれかと連れになることにしている」。以下、前年秋の国内各地での見聞を述べる。
		4月	この年度、科学研究費補助金（奨励研究(B)）に研究課題「富山県内・史蹟の歴史的再検討ー文化遺産の地域史への位置づけのためにー」が採択を受ける〔科学研究費助成事業データベース https://kaken.nii.ac.jp〕。 ◎「見つけた「石川呉山」の絵」（『北日本新聞』4月6日）《→1983》 *4月29日～5月30日、奈良国立博物館で特別展『平安鎌倉の金銅仏』開催。県有の「銅造男神立像」（立山神像）ほかが出陳。下記5月25日の『北日本新聞』寄稿に、これを観覧したことが述べられている。
		5月	◎「掛尾公民館 薬師如来坐像と銘文 掛尾公民館のお薬師さま」（『富山教育』653）《→1991》 ◎「立山神像京都にも一舐 富山県蔵より古く柔和」（『北日本新聞』5月25日） 5月に刊行された烏帽子田栄一（富山ぺんくらぶ）の随筆集『はなみずき』に、著者の依頼を承け、挿画として★ハナミズキの絵を寄せる〔烏帽子田栄一『社長覚え書』KNB興産、1978年〕。
		6月	○鼎談「前田常作の世界」（『北日本新聞』5月20日「文化」欄） *津山昌・竹島俊夫と。尾崎同紙文化部長が司会。富山県民会館で開催中だった「前田常作展」（～23日）にちなむもの。 *「前田君は師範学校を出て美術学校へ行きたくてね。うちへいろいろと相談にきた。ところが戦後の困難な時期で（中略）周囲から反対された。結局、進学したが、彼の母親からうらまれましたね」 *「彼の曼陀羅は宗教的に描かないところがよい」 ◎「水墨山水図 石川呉山筆 栗山正道氏蔵」（『富山教育』654） ◎「序文」（富山県郷土史会校注『越中安政大地震見聞録 立山大鷹崩れの記』KNB興産）
		7月	◎「てっせん文聖餅箱 ロンドン大英博物館蔵 ジャパンの正体 中世の輸出漆器」（『富山教育』655） ◎「石川呉山、渡中の事情」（『北日本新聞』7月3日） ◎「海岸寺住吉社頭図屏風から」（『富山新聞』7月4日）《→1983》
		8月	◎『富山県大百科事典』（富山新聞社）*専門委員。多くの項目を執筆。
		9月	◎「勿来の関八幡太郎 結城正明筆」（『富山教育』657）《→1983》
		10月	○長島勝正監修『等通寺同朋史』（高木山等通寺） *『北日本新聞』11月10日に本書刊行を紹介し、住職の子息で執筆者

				の高谷純夫に取材した記事あり。「同寺の宝物調査をした」長島の言葉として「忘れられていた歴史の空白を埋める仕事だ」。
				◎「約五百年前の墨画 舟橋等通寺の蓮如上人像発見」《→1991》 (『北日本新聞』10月9日「文化」欄)
			11月	◎「牡丹鳳凰文飾皿 丸山焼五彩色絵 大沢安三蔵」(『富山教育』658)
				◎「天正年間比叡山各願寺絵馬 婦中町・各願寺蔵」〈越中の絵馬1〉 (『北日本新聞』11月8日夕刊)
				◎「石黒屋権吉奉納の北前船 水橋神社蔵」〈越中の絵馬2〉 (『北日本新聞』11月15日夕刊)
				◎「金銅仏にみる立山信仰」(『北日本新聞』11月17日)
				◎「親は三歳・子は五歳 福野町安居寺蔵」〈越中の絵馬3〉 (『北日本新聞』11月22日夕刊)
				◎「「福」を庶民に分ける 富山市八町・吉祥寺蔵」〈越中の絵馬4〉 (『北日本新聞』11月29日夕刊)
				文化財保護功勞により、勲五等双光旭日章を受章する〔『文化庁月報』99、 『北日本新聞』11月3日〕。なおこの時、越中瀬戸焼の復興に打ち込んだ 釈永庄次郎(立山町在住)も勲六等単光旭日章を受章した。
			12月	◎「岸駒筆「虎図」大絵馬 福光町宇佐八幡宮蔵」〈越中の絵馬5〉 (『北日本新聞』12月13日夕刊)
				◎「立山にあった如意輪観音像 円隆寺蔵(富山市)金銅如意輪観音」 (『富山教育』659)
				◎「「公平絵」絵馬 福野町安居・安居寺蔵」〈越中の絵馬6〉 (『北日本新聞』12月27日夕刊)
				◎「中川さんの思い出」(中川作次郎『餘生録』中川文子編・刊) *「中川作次郎さんにはじめてお会いしたのは、富山市奥田の堀井三友 さんのお宅であった。(中略)その時すでに頭の毛の薄い童顔の中川 さんを堀井さんから紹介された。中川さんは県の社事(ママ)兵事課 の文化財関係の担当者であった。」「中川さんとご一しょしてよく県内 の古社寺を廻った。」「砺波市の福山の窯趾(中略)瓦塔の破片が発見 されたというので(中川作次郎と)御一しょして見に行ったことを覚 えている」。*翌年2月1日の『北日本新聞』記事も参照。
			この年	富山県文化財保護審議会委員となる(～1984年3月)。[古川2026]参照。 ★彫刻《狢を抱く女人》(朝日町個人蔵、別の個人の結婚の引出物)を制 作[森清松編『朝日町ところどころ』自刊、1984年]。
			2月	◎「石川呉山と中川寿伯展によせて」(『北日本新聞』2月1日) *「石川呉山・中川寿伯展」3～17日、富山市立郷土博物館。 *「中川寿伯はもとは小学校の先生であったが、そのころのことは知ら ない。はじめてお会いしたのは県教育委員会の社会教育課で、文化財 を担当しておられたからであった。三十歳をわずかにすぎたわたくし はずい分無鉄砲であつたらしく迷惑をかけたらしい」。 *記事末尾に2名の略歴を記載。中川寿伯(本名作次郎、1889～1961)。
			3月	◎「富山県郷土史会の活動」(『郷土の文化』昭和52年)*同誌の創刊号。
			4月	◎「式正の膳 城端町 善徳寺蔵」(『富山教育』663)《→1991》 ◎「越前焼展」(『北日本新聞』4月25日夕刊) *「越前焼展—古陶から現代まで」23～5月8日、於：県民会館美術館。
			5月	△「有峰街道はもうひとつあった、長島勝正氏が新説」 (『富山新聞』5月20日) *本件は『歴史読本』22-11(通巻274号、同年9月)「今月の話題」欄 で紹介された(「オオミ谷越えを利用／有峰街道がもう一つ」)。

昭和 53 年	1978	74 歳		◎「教養坊が勧進の地蔵尊像 立山文化の手がかり」 (『北日本新聞』5月21日)《→1983》
			6 月	◎「黒馬の絵馬 山下守胤筆 井口村神明社蔵」(『富山教育』664) 《→1991》
				誓光寺(射水市〔旧大門町二口〕、浄土真宗本願寺派)の文化財を調査。 〔棚元理一『仏谷山誓光寺史』誓光寺、1988年〕
			7 月	◎「神岡・常蓮寺の鉦鼓と越中」(『富山新聞』7月15日)
				◎「飛騨で見た聖徳太子像」(『北日本新聞』7月24日)《→1983》
				◎「熊野神社の稚児舞 婦負郡婦中町中名 林歌の舞」 (『富山教育』665)《→1983》
			8 月	△「室町時代の五輪塔発見 富山市水橋町の宝成寺 長島氏が鑑定」 (『北日本新聞』8月21日) *「五輪塔を鑑定する長島勝正さん」の写真が大きく載る。
				◎「橋本家住宅 岐阜県吉城郡神岡町山之村打保」 (『富山教育』666)《→1983》 *解説本文頁では「有峰の民家」と掲題。口絵写真は「藤井一二氏撮影」。
				*石田茂作(1894～、元奈良国立博物館館長)逝去。
			9 月	◎「有峰の旧神像 大山町中地山神社蔵 有峰にまつられていた神像」 (『富山教育』667)《→1983》
				◎「越富奇談 島山物語」(『北日本新聞』9月22日)《→1983》 *『北日本新聞』6月4日に、表題資料の発見に関する記事あり。
			10 月	◎立山町編『立山町史』上巻(立山町) *「美術・工芸」の章を、京田良志(石造美術)とともに執筆。
				△小島梯次「北陸と円空」(『円空研究』別巻、円空学会) *「細入村以外の、以下に紹介する富山県の円空仏は、主として富山県文化財保護審議委員の長島勝正氏の御教示によるものである」として、婦中町光得院(通称善導寺)像、富山市光厳寺像、魚津市託法寺像、氷見市安養寺像について順に記す。
				◎「越富奇談 島山物語 絵巻 木村立嶽筆 立像寺蔵」(『富山教育』668)
			11 月	△「長島勝正」(池端滋写真集『魁百首』プロ・ポンド) *モノクロの人物写真集。76頁(小さな立体作品を制作中と見える顔と手元を、室内向かって左斜め手前から撮影)・77頁(窓辺にあぐらをかいて坐し、煙草を喫しつつ庭をみやる姿を外から撮影)。 *池端滋(1942～、写真家、南砺市〔旧〕平村出身)はその後、長島の『立山曼荼羅集成』で撮影を担当した〔藤井一二 1991 ほか〕。
				◎「富山藩文化財展」(『富山新聞』11月9日)
				◎長島勝正・藤井喜代美「豊かな文化財」 (『富山県の歴史と風土』〈新越中風土記 全三部のうち〉創土社) *「文化編」のうち486～502頁。国・県指定物件を個別に解説する。
				◎「伝統工芸をたずねて」〈特集 日本のふる里・富山のひとと町〉 (全日本青少年育成会『いくせい』5-11)
			12 月	△「貴重な阿弥陀如来像見つかる 新湊市の大楽寺から 長島氏の希望で調査 市文化財の指定急ぐ」(『北日本新聞』12月10日) *「同審議会は県文化財専門委員の長島勝正氏を招き、市内の文化財調査を行ったが、調査対象になかった大楽寺が、長島氏の希望で」調査。
				◎「お馬に乗った聖徳太子 八尾町 鈴木道栄筆」(『富山教育』669) 《→1991》
			1 月	◎「岸駒 「虎」で京都画壇を制覇」〈尊敬する先人たち 郷土史家に聞く①〉(『北日本新聞』1月1日)《→1983》

			◎「利賀で見た屏風の名品ー上野雪岳の作か」(『富山新聞』1月3日) 18日、富山市立郷土博物館協議会委員の代表の一人として市役所を訪問、市長らに「市立美術館の設立に関する意見書」を提出、早期実現を要望する。岡崎卯一・重杉俊雄ら委員12名の連名(『北日本新聞』1月19日)。 24日、県文化財保護審議会委員に再選される(『北日本新聞』1月25日) ◎「有峰の秘宝 絵根来の瓶子」(『富山教育』670)《→1983》
		2月	◎「大石棒 立山町ニッ塚遺跡出土」(『富山教育』671) ◎「雪舟を継いだ長谷川等叔 化政期に京都画壇で活躍」 (『富山新聞』2月24日)《→1983》
		3月	◎「売薬版画「衣襲明神像」 富山郷土博物館蔵」(『富山教育』672) ◎「富山県郷土史会の活動」(『郷土の文化』昭和53年)*巻頭言。 *「もともとこの会は戦前、なき堀井三友先生を中心にして、県内の古跡や古美術を実地に足を運んで調べてみようとした「富山郷土研究会」が母胎となっている」。 ◎『富山の史蹟 はるかなる大地の伝言』(富山文庫10)(巧玄出版) *藤井一二ほか3名との分担執筆。「中世」「近世」「あとがき」担当。
		4月	◎「木造阿弥陀如来立像 魚津市瓜生庵蔵」(『富山教育』673) *表題像は後、市指定文化財に(『北日本新聞』1979年6月9日)。 ◎「中世史の貴重な資料 遊佐氏居館跡の漆器」 (『富山新聞』4月7日)《→1983》
		5月	◎「岸駒の孫たちの絵」(『北日本新聞』5月4日)《→1983》
		6月	◎「とら 岸慶筆 城端善徳寺蔵 岸駒の孫の絵」(『富山教育』674)
		7月	◎「長教寺仁王像 仁王像譲受書 二円五十銭の仁王様」 (『富山教育』675)《→1983》 ◎「保護望まれる仏果印成遺愛の梅」(『富山新聞』7月12日) ◎『富山藩文化財資料集』(富山市教育委員会編・刊) *解説を担当。長島は当時「富山市文化財調査審議会委員」であった。 収録資料は、昭和51・52年度の富山藩文化財展(富山市立郷土博物館主催)に出品されたもの。
		8月	◎「遊佐氏居館出土のおわん 県埋蔵文化センター蔵」(『富山教育』676)
		9月	◎「甲万焼 うちわを持つ少女 大沢安三氏蔵 里帰りした磁器の美人」 (『富山教育』677)
		10月	◎「唐美人 岸駒筆 百塚氏蔵 岸駒の美人画」(『富山教育』678) ◎「百一年目の公開、黒・白神馬 富山藩文化財展によせて」 (『富山新聞』10月24日)《→1983》 ◎「百聞は一見にしかず」(八尾正治編『写真集明治大正昭和富山』〈ふるさとの思い出6〉国書刊行会) ◎「郷土の芸術わかる 井波町の絵馬展によせて」 (『北日本新聞』10月31日) *福野町神明社の《北野社頭阿国歌舞伎図屏風》について「もと同町御蔵町の人達は小屏風を改装して絵馬としていたが、保存のため再び小屏風にもどして保存することにした」と記している。 *井波歴史民俗資料館「絵馬展」～11月5日。
		11月	*佐々木大樹(彫刻家、1889～)、8日に逝去。 ◎「佐々木大樹先生をしのぶ 遺作となった大観音立像(宇奈月町)」 (『富山新聞』11月9日)《→1983》
		12月	◎「高岡の御車山 富山県で初めて国の指定」(『富山新聞』12月10日)
		この年	「文化財調査報告」(福野町文化財審議会委員会編『福野町の文化財』第4集、福野町教育委員会) *対象は個人宅の木造阿弥陀如来立像4点。

昭和 54 年	1979	75 歳	1 月	◎「立山曼荼羅 来迎寺蔵 最古の立山曼荼羅」(『富山教育』680)
			2 月	◎「黒白二頭の神馬 小杉町 十社大神蔵」(『富山教育』681)
				◎「城端別院善徳寺の宝物」(『北日本新聞』2 月 22 日)《→1983》
			3 月	◎「小杉焼の鴨徳利 結城孫四郎氏蔵」(『富山教育』682)
				◎「日本のまつり・越中のまつり」(『芸文とやま』7)
				*特集「富山文化のふるさとを探る・7〈祭〉」。「日本音楽を正当視することによって、子供達に民俗芸術の後継者になっていただけたと思う。そうすれば県内のおまつりの寿命も更に延びることであろう」。
				*末尾に「芸文協顧問」。
				◎「富山県郷土史会の活動」(『郷土の文化』昭和 54 年)
			4 月	◎「小杉焼赤絵向付」(『富山教育』683)《→1983》
				◎「立山血ノ池の“祭神” 如意輪観世音菩薩像
				“寄せ吹き技法”の秀作」(『北日本新聞』4 月 3 日)《→1983》
				*前月市指定となった円隆寺(富山市)の金銅仏。[1976-12]も参照。
				◎「富山県内の経筒のことなど」(『富山新聞』4 月 12 日)《→1983》
				◎「有峰の遺物の再考と鎌倉街道」(『富山史壇』71)
			5 月	◎「「愛本橋」のことなど 加越能古地図展を見て」
				(『富山新聞』5 月 1 日)《→1983》
			6 月	◎「模本十六羅漢 木村立嶽筆(蘇頻陀尊者)」(『富山教育』684)
				◎「来迎阿弥陀三尊図のこと 銀山寺で発見」
				(『富山新聞』6 月 7 日)《→1983》
				*立山町史編纂事業の一環としての町内視察が、6 月より年度内に 8 回実施される[『立山町史』下巻]。長島も編集委員として参加したか。
			7 月	◎「越中瀬戸焼 ひしゃくがけ鉢」(『富山教育』685)《→1983》
			8 月	11 日午後、高岡市立美術館の「緑陰講演会」で「富山藩の美術工芸」と題し、漆芸を中心に藩政期の美術工芸を講述[『北日本新聞』8 月 9 日]。
				富山市郷土博物館の「友の会」発会式(於:県民会館)。会長に選ばれる。
				(『北日本新聞』8 月 12 日)
				◎「広重画越中立山真景(諸国名所百景)大沢安三氏蔵」(『富山教育』686)
			9 月	◎「八幡三神像 西赤尾八幡社 三体のご神像ー五ヶ山西赤尾の八幡社ー」
				(『富山教育』687)
				[再録(抄出)]『上平村誌』(1982 年)455~456 頁 *引用元の記載なし
				△柁村散人(高瀬重雄)「社寺の巡礼」〈随筆〉(社報『おかべ』103)
				*立山町の神社・寺院の巡見について。「偶然にも忘れ難いいくつかの新資料を見出すことにもなった。「犬もあるけば棒に当たる」というのはこのことだと、同行の長島勝正氏と笑った次第であった」。
				[再録]高瀬重雄『続 史林独歩抄』桂書房(1987 年 6 月)
			10 月	◎「焼き物のふるさと「唐津焼」 古唐津と仙厓展を見て」
				(『北日本新聞』10 月 20 日)
				◎「豊臣秀吉書状 前田利家宛」(『富山教育』688)
			11 月	◎「天の岩戸から出現した“仏” 雨宝童子のことなど」
				(『富山新聞』11 月 29 日)《→1983》
			12 月	◎「雨宝童子絵馬 小杉町小白石加茂社」(『富山教育』689)
				*口絵裏面(解説本文頁)では「天の岩戸から現れた雨宝童子」と掲題。
昭和 55 年	1980	76 歳	1 月	◎「自像 横江嘉純作」(『富山教育』690)《→1983》
			2 月	◎「常福寺阿弥陀如来截金文様 常福寺の阿弥陀如来立像
				砺波市大窪常福寺蔵」(『富山教育』691)
			3 月	◎「瑞竜寺仏殿本尊 瑞竜寺仏殿の本尊釈迦三尊」(『富山教育』692)
				◎「創立三十周年を迎えるにあたって」(『郷土の文化』昭和 55 年)

				◎「富山の彫刻」(『郷土の文化』昭和55年)＊1975年5月の講座の内容。
			4月	◎「鯉魚図 木村立嶽筆 広野了介氏蔵」(『富山教育』693)
			5月	◎「木村立嶽とその芸術」(長島勝正監修『没後90年 木村立嶽 郷土が生んだ偉大な画人』富山郷土美術保存会) ＊細野正信「立嶽発見」も収録。長島の肩書きは富山県文化財審議委員・富山郷土美術保存会会長。「図録制作発刊事業」は富山市立郷土博物館が後援。編集は田島英吉(保存会副会長)・清水清智・野入潤。
				◎「近代郷土画家展を見て」(『北日本新聞』5月13日) ＊水橋郷土史料館の、岸駒・吉田公均・谷口藹山を中心とする企画(～5月31日)にちなんで。岸駒の子岸岱の作品を高く評価している。
			6月	◎「立山・白山の金銅仏」(五来重編『修験道の美術・芸能・文学〔I〕』〈山岳宗教史研究叢書14〉名著出版)
				◎「芦葉達摩図 木村立峯筆 開仁夫氏蔵」(『富山教育』694)
				◎「報光寺(富山)に「阿弥陀像」」(『北日本新聞』6月10日)《→1983》
			7月	◎「七福神中ただ一人の日本人ーえびすさまの立像ー 新湊市善光寺 堀岡清氏蔵」(『富山教育』695)
			8月	27日、財団法人富山美術館の評議員会(理事長・吉田実)開催。重杉俊雄・高瀬重雄らとともに評議員に再選[『北日本新聞』8月28日]。
				◎「変った鳥居 新湊六渡寺 日枝神社」(『富山教育』696)
			9月	◎「十界図二幅 富山郷土博物館蔵 紙本彩色」(『富山教育』697)
			10月	◎「大首美人 祇園井特筆 紙本彩色一幅」(『富山教育』698)
			11月	6日、富山市郷土博物館の「富山藩文化財展」で長島の解説と鑑賞会。
				9日、谷口藹山翁没後80年祭絵画展覧会(於：利田小学校)を参観 [谷口藹山翁九十年祭実行委員会編・刊『谷口藹山』1990年]。
			12月	◎「騎竜白衣観音 富山郷土博物館蔵 白衣観音図 紙本水墨 狩野昌運季信筆」(『富山教育』699)
昭和56年	1981	77歳	1月	◎「寒山拾得図 十松立昭筆 紙本彩色 立山町野口十松家蔵」 (『富山教育』700)
			2月	◎「延慶二年在銘鉦鼓 岐阜県神岡町 常蓮寺蔵」(『富山教育』701)《→1983》
			3月	◎「豪雪によせて春を待つ」(『郷土の文化』昭和56年)＊巻頭言
				◎「般若十六善神画像 紙本彩色 細入村大湊寺蔵 立山岩峯寺永真坊旧蔵」(『富山教育』702)《→1983》
			4月	◎「刀尾神社の赤鳥居 富山市本郷」(『富山教育』703)《→1983》
			6月	◎「鬼の念仏 大津絵 富山市民芸館」(『富山教育』704)
				◎「三体になった立山神像」(『富山新聞』6月10日)《→1983》
				★「長島勝正自選展」〈自選展シリーズ第3回〉富山市郷土博物館で開催。 ＊6～30日。『北日本新聞』6月9日に記事・写真掲載。彫刻7点、陶彫・陶器52点、油絵16点。[野入2024]は担当者としての回顧。
			7月	◎「立山曼荼羅 坂木茂氏蔵 仏教臭くない立山曼荼羅」 (『富山教育』715)《→1983》
				◎「有峰の古文化財」(富山県自然保護協会編『有峰の自然』北陸電力)
				◎長島勝正・廣瀬誠・定塚武敏・佐伯安一編『越中の美と心』(創土社) ＊本文では「鑑賞の手引き」のうち「仏教美術」の執筆を担当。 ＊監修は北村西望。長島の東京美術学校塑造部在学期の教員でもある。
				松川べり彫刻公園の企画委員会委員となる[『北日本新聞』7月17日]。
				△八木均『わが家の歴史 兵太郎家』(八木喬) ＊筆者は黒部市在住。1978年7月、同家所蔵の方便方身尊像の評価を長島に依頼したことを述べる(54～55頁)。作品の写真には、その際に長島が箱蓋裏に記した墨書も写っている。

			8 月	◎「維摩居士像 文清筆 大和文華館蔵（重要文化財）」（『富山教育』706） 《→1983》
			9 月	◎「薬師来迎図 砺波市常福寺蔵（県指定文化財）」（『富山教育』707）
				◎「珍しい鳥居の話」（『富山新聞』9月2日・9日「文化」欄） ＊①刀尾神社の「赤鳥居」・②日吉神社の「石鳥居」。
				◎「越中の木地師たち」（『富山史壇』77）
				第4回北陸仏像彫刻展（9月26日～28日、宗教芸術院北陸支部主催、於：富山県民会館美術館）に★「招待出品」〔『北日本新聞』9月23日〕。
			10 月	◎「立山 賽の河原地蔵尊 立山町芦峯寺大仙坊蔵」 （『富山教育』708）《→1983》
				＊10月20日～11月29日、富山市郷土博物館で「越の至宝・古代中世重要文化財展」開催。長島が尽力した。
			11 月	会長を務める富山県郷土史会が県の文化功労者（団体）に選ばれ、2日、県庁での表彰式に出席したと思われる。この時、高瀬重雄（県文化財保護審議会長）も文化功労者に選ばれた〔『北日本新聞』10月30日〕。
				11月15日、『第1回日本海文化を考えるシンポジウム』（於：富山市公会堂）開催。実行委員会15名中に「長島勝正 富山郷土史会（マ）会長」。
			12 月	◎「立山 血の池地獄の帝釈天 立山町芦峯寺大仙坊蔵」（『富山教育』709）
				◎「五箇山の念仏道場 照蓮寺（高山）型の遺風残す」 （『北日本新聞』12月16日）《→1983》
				立山町史編纂事業の一環として、多賀坊（佐伯家）保管の峰本社奉納札を、石原与作・岡崎卯一らと調査〔『立山町史』下巻（1984年）1864頁〕。
				△津山昌「81 とやま文化・美術—現代が関心呼ぶ」 （『北日本新聞』12月29日）
				＊「個展で特にあげるべきは（中略）それに長島勝正、浅井景一、川辺外治などの長老組」。 〔再録〕同『時代の相を求めて—富山の美術20年—』（桂書房、1987年）
昭和 57 年	1982	78 歳	1 月	◎「宝亀三年太政官符一通 大伴家持自署 桜井慶二郎氏蔵（石川県）紙本墨書（重要文化財）」（『富山教育』710） ＊表題の資料は現在、国有。
			2 月	◎「文明七年銘 経櫃 高岡工芸高校蔵 旧摂津多田院の小経櫃」 （『富山教育』711）
			3 月	◎「木彫阿弥陀如来立像一軀（鎌倉時代） 滋賀県信楽町玉桂寺蔵（重要文化財）」（『富山教育』712）
				◎「序にかえて—昨年（昭和五十六年）と私—」 （『郷土の文化』昭和57年） ＊巻頭言。
			4 月	◎「融通念仏縁起絵巻二巻 紙本彩色 八尾町聞名寺」（『富山教育』713） 28日開催の「広瀬誠先生を囲む会」に関し、高瀬重雄とともに発起人をつとめる〔太田久夫「あとがき」、広瀬誠編『広瀬誠著作目録』〔後掲〕〕。 ○入善町史編纂室の開設にともない、監修を委嘱される。 〔『入善町史』資料編1、1986年「あとがき」〕
				◎「釈迦・文殊・普賢三尊 絹本彩色 室町時代 滑川市徳成寺蔵」 （『富山教育』714）
			5 月	◎「史跡とロマンの尾張・三河路」（『富山教育』714）
				◎「県立図書館に原本 「朝倉家録」を出版して」 （『北日本新聞』6月26日） ＊4月刊行の、富山県郷土史会編『朝倉家録』（同会）について記す。 『富山新聞』5月10日・17日にも関係記事あり。 ＊末尾に「（富山県郷土史会長）」。
			6 月	

			7月	◎「金象嵌二つ組銀盃 民野照親作 大沢安三蔵」(『富山教育』715)
			8月	◎「求聞持虚空蔵菩薩 漆絵 室町時代 富山市真興寺蔵」 (『富山教育』716)
			9月	◎「羊歯文葦手蒔絵硯箱 安達其峰作 富山市産業奨励館蔵」 (『富山教育』717)
			10月	◎「灯台(彫金) 山田有方作 富山市立郷土博物館蔵」(『富山教育』718)
				◎「芸術論はかぬ芸術家」 (『佐々木大樹の人と芸術一時流に染まらずー』『平和の像』建立委員会) *『越中の彫刻』(1975年)で佐々木の師を高村光雲と記したところ、 竹内久一と訂正した手紙を佐々木から受信したことを述べている。
				10月8日～11月23日、富山市郷土博物館で「重要文化財展(中世Ⅱ)」 〈越の至宝シリーズⅡ〉開催。長島が尽力した。 *9日午前に長島の解説が行われた[『北日本新聞』10月9日]。
				*10月23～24日、第2回「日本海文化を考える富山シンポジウム」開催。
				△無署名「そとから見たにゅうぜん」(『広報にゅうぜん』302) *吉崎四郎(県教育委員会生涯教育室)がインタビューに答え、「入善 が生んだ芸術家、長島勝正さんや前田常作さんの影響」にふれる。
			11月	◎「神像の美 越の至宝シリーズから」(『富山新聞』11月17日)
				◎「越中の書誌学者 広瀬さん」 (広瀬誠編『広瀬誠著作目録 昭和57年10月現在』広瀬誠先生を囲む会) [再録]「回想廣瀬誠先生」刊行会編『回想 廣瀬誠先生』 (廣瀬裕一、2011年) *吉田実(1910～、参議院議員、元富山県知事)逝去。
			12月	◎「岸駒の墨梅 長浜市大通寺蔵 天明丙午仲秋 岸雅楽助平駒」 (『富山教育』719)
昭和58年	1983	79歳	1月	◎「女神像 建部神社蔵(県指定文化財) 女神像の美」(『富山教育』720)
			2月	◎「一遍上人絵伝越中の部 神戸市真光寺蔵 真光寺本「遊行縁起」(重要文化財)」(『富山教育』721)
			3月	◎「不動明王八大童子像 朴堂祖淳筆 京都市大応寺蔵(重要美術品)」 (『富山教育』722) *久保尚文『越中中世史の研究』第2版(桂書房、1987年)256頁参照。
				◎「郷土の文化」第七輯によせて(『郷土の文化』昭和58年) *巻頭言。ただし同誌における号数の明記は第12輯(1987年)以降。
				◎「美術」(『富山県史』通史編4〈近世下〉第9章第2節)。
				○「鼎談 富山の人物この百年」(『芸文とやま』11) *2月17日、富山県教育文化会館にて(記録：布村弘・高林和子)。 岩倉政治(1903～2000)・大島文雄(1902～91)と。長島は、木村立 嶽・結城正明・納富介次郎・畑仙齡・梶田半古・国方林蔵を挙げる。
				△『富山県史』通史編7〈現代〉(富山県) *須山盛彰執筆部分。 *第1章第4節「民主的改革期の教育・文化」306～307頁「富山県展の 開催と戦後の美術界」に『富山県洋画連盟のあゆみ』(1973年)引用。
			4月	◎「三井晩鐘(近江八景の内) 下保昭筆」(『富山教育』723)
			6月	◎「琴棋書画屏風 木村立嶽筆」(『富山教育』724) *口絵裏面(解説本文頁)では「琴・棋・書・画図屏風」の名で記載。
			7月	◎「金銅聖観世音菩薩立像 婦中町玉泉寺蔵 三国時代(七世紀) 百済作」 (『富山教育』725)
				◎「伊勢・志摩路のたび」(『富山新聞』725)
				◎「婦北の「神々の座」」(『富山新聞』7月6日「文化」欄) *「十日ほど前」に実見した、加茂社(新湊市〔現・射水市〕本江)不

			動明王立像、二上社（富山市「寒江本江」、同市中沖か）聖観音立像をとりあげる。両像の写真を掲載。「射水・加茂のこの地方の二大地方神の神実（杉崎注、前の文中に「かみざね＝ご神体」とあり）であるそのお姿を解明することができたのはよろこばしいことであった」。 *文中で、浄福寺（富山市中老田）は同地の加茂社神宮寺に相当し、本尊の不動明王立像が鎌倉時代作であること、慈尊院（高岡市二上）の「十年ほど前に焼けた坊の本尊」が「慶長何年かの銘のあった観世音菩薩の立像であったように記憶している」と記す。
			*7月15日～9月11日、富山市郷土博物館で「立山信仰の文化財展」〈越の至宝シリーズⅢ〉開催。
			21日、松川べり彫刻公園（富山市）の完成式（於：富山第一ホテル）に出席。「市長から企画委員の横山豊介、長島勝正、津山昌、久泉迪雄、安達勝三の五氏に感謝状が贈呈され」た（『北日本新聞』7月22日）。
			△「複製の「立山曼荼羅集成」が発刊」（『北日本新聞』7月30日） *「第一期十一号、第二期十二号に分けて出版」することも記す。
		この頃	●『立山曼荼羅集成』第一期（文献出版）
		8月	◎「蛙釣り 蜷川観月筆 滑川市称永寺蔵 蜷川観月について 一岸派と蜷川観月展を見てー」（『富山教育』726） △太田久夫「立山曼荼羅の出版に寄せて」（『富山新聞』8月17日） *『立山曼荼羅集成』第一期（文献出版、別掲）の刊行にちなむ寄稿。[再録]同『郷土雑纂』第2集（自刊、1986年）
		9月	△「立山曼荼羅求めて50年 富山の長島さん」（『朝日新聞』9月11日） *全国版の記事。『立山曼荼羅集成』刊行に際しての取材・報道。 ◎「聖観音菩薩（鎌倉時代）寒江本江 二上社御神体」（『富山教育』727）
		10月	◎「称名観瀑図 中土大至良筆 立山町清流荘蔵」（『富山教育』728）
		11月	◎「余白と線の美しさ 「日本画へのいざない」展を見て」（『北日本新聞』11月5日「文化」欄） *富山美術館で開催中だった展覧会（～27日）にちなむ寄稿。 11月12～13日、第3回「日本海文化を考える富山シンポジウム」開催。実行委員会委員15名中に「長島勝正 富山郷土史会（マ）会長」。 *テーマは「東アジアと日本海文化」。「渡来仏と日本海文化」を報告した久野健（元東京文化財研究所、1920～2007）に玉泉寺（富山市〔旧婦中町〕）金銅仏に関し意見を求める〔久野1984〕。この年7月の項も参照。 *『北日本新聞』11月14日は玉泉寺像の写真を大きく載せ「以前からその存在を知っていた」長島が「パネラーとして出席していた久野博士に鑑定を求めた」こと、「長島氏は二十年ほど前、当時の奈良博物館長、石田茂作氏（故人）に、この仏像を見てもらったことがあり、その際、石田氏は「白鳳時代のものだ、大切にせよ」と述べた」ことを記す。 *報告者の一人・江守五夫（法社会学・民族学）は「まとめ討論」の中で、講師控室で長島から、入善町で「60年ぐらい前まであった」「初夜の忌み」の習俗を教えられたことを紹介し、「貴重なデータを得たと喜んでおります」と述べた〔森浩一編『シンポジウム 東アジアと日本海文化』小学館、1984年〕。のち同『日本の婚姻 その歴史と民俗』（弘文堂、1986年）第2編第1章第4節「初夜の性的節制と《トビアの晩》」（初出1983年1月）に「富山郷土史会会長の長島勝正氏より聴取す」と加筆・注記。
		12月	◎「血の池地獄（立山曼荼羅部分） 佐伯彰一氏蔵 静寛院宮寄進」（『富山教育』729） ●『富山の美術と文化』（文献出版）
昭和戦後期（4）米寿以後（80代）……逝去・遺著の刊行まで			

昭和 59 年	1984	80 歳	1 月	◎「花鳥密陀絵蒔絵料紙箱 城端塗 小原次五右門林好作 東京国立博物館蔵」(『富山教育』730)
				△「故郷の文化財を紹介 富山の美術と文化出版 長島さん」 (『朝日新聞』1月28日) *旧稿・新稿に基づく単著を、なお2冊刊行したい希望も語っている。
			2 月	△久野健「富山・玉泉寺の金銅観音像」(『史迹と美術』542) *前年11月のシンポジウムでの、長島との出会いの様子を述べている。
				◎「諸国六十八景 越中青城山 二世広重作 富山郷土博物館蔵」 (『富山教育』731)
				◎「近江国にあった『立山曼荼羅』 立山大権現と佐々成政」 (『富山新聞』2月15日) *「私事で恐れ入るが、長男の嫁の実家は愛知県豊橋駅の近くの花田という所だが、子供のとき、この絵説きを障子に穴をあけておそるおそる地獄のありさまを見た恐怖は今も忘れることができないといっていた。あとで聞くとこれは善導坊の老僧であった」。 *「私が立山曼荼羅の集成をしていることが「朝日新聞」の全国版に紹介されたので(杉崎注、1983年9月11日記事)、それを読んで滋賀県甲賀郡石部町西寺の竹内淳一氏から(中略)来信があった」。 *「ちょうど富山県郷土史会の秋の史跡探訪に」西寺の常楽寺も見学計画に含まれており、一行が同寺を見学中、近くの竹内家で立山曼荼羅(竹内家本、現・富山県[立山博物館]寄託)を拝見したという。 *「立山曼荼羅集成の第二集は目下編集集中であるが、ぜひ、この竹内氏本を加えて全国に紹介したいと思う」。
				△「『富山の美術と文化』 発刊 郷土史家、長島勝正さん」 (『北日本新聞』2月28日「文化ニュース」欄)
				◎立山町編『立山町史』下巻(立山町) *第2章第3節「画家」を水木進と、第3章第1節「神社」、同第2節「寺院」を岡崎卯一と分担執筆。
				△木内哲子「人間柏原兵三とモデル達」 (柏原兵三『浸蝕』〈文学碑建立記念選集下〉桂書房) *柏原兵三(芥川賞作家)の大叔父与次郎が長島家の援助を受けていたことに関し、長島を訪ねて聞き書きする。1971年10月の項も参照。
			3 月	◎「大夫と禿(肉筆浮世絵) 鳥文斉 栄之筆 新湊市 個人蔵」 (『富山教育』732)
				◎「『郷土の文化』昭和五十九年版によせて」(『郷土の文化』昭和59年) *巻頭言
				△『富山県史 通史編6(近代下)』(富山県) *第8章第3節「戦時下の文化」(八尾正治執筆)1208・1212頁。
				△富山県芸術文化協会編『富山県芸術文化名鑑 1983』(北日本新聞社) *「芸術文化人名鑑」に「長島勝正」項あり。「十八年より富山県文化財専門委員、二十三年、富山県展創立に尽力」など記述あり。
				*『富山県史』通史編I中世(富山県)刊行。長島は執筆していない。 楠瀬勝「編集を終えて」は、「第四章第五節四項のうち、「(一)彫刻・工芸」「(二)建築」「(三)絵画」については、専門委員の指導のもとに事務局で執筆した」と記す。同節「戦国期の社会と文化」四項「文化財」は、鎌倉時代以降の中世作品をひろく対象としている。
			4 月	◎「天平美人像 篁牛人筆(一九六七頃)」(『富山教育』733)
			6 月	◎「治国天(癒見) 姥神(葵の上) 放生津八幡宮築山古面」 (『富山教育』734)

昭和 60 年	1985	81 歳	7 月	◎「鷹衝立 横山作太郎（初代白汀）作 富山市個人蔵」（『富山教育』735） △八木均『日々是好日 初老を迎えてつれづれの道』（八木均） ＊同家伝来の方便方身尊像に対する長島の評価〔八木 1981〕を述べる。
			8 月	◎「鬼子母神立像（室町時代）日覚大僧正署名 絹本彩色 細入村楡原上行寺蔵」（『富山教育』736）
			9 月	◎「韋駄天立像 木彫（江戸時代）細入村片掛大淵寺蔵」（『富山教育』737）
			10 月	◎「金銅地藏菩薩立像（江戸時代）上市町小森武安氏蔵」（『富山教育』738）
			11 月	★「長島勝正小品展・ファミリー展」（於：富山県民会館 302・303 号室） ＊「長島勝正 80 歳を祝うファミリー展」（15～19 日）の表題での開催情報 が、『北日本新聞』11 月 9 日「週間ガイド」欄に載る。 ＊「今年八十歳を迎えた記念に小品展を開き、油絵、水彩の作品十九点を並べている」「ファミリー展には娘婿の松倉唯司さん、娘の美穂さん、孫になる松倉さんの長女・千尋さん、二女の巨摩紀さん。おいの阿部美知夫さん（中略）前田常作さん（中略）の六人が油絵などの近作二十二点を出品している」（『北日本新聞』11 月 16 日）。
			12 月	◎「雨宝童子立像 木彫彩色 江戸時代 細入村片掛 八坂社蔵」（『富山教育』739） △森清松編『入善町とところどころ』（自刊） ＊同町内にある長島の彫刻・絵画作品を多くとりあげ、銘文も紹介。
			1 月	◎「立花図絵馬 射水郡下村福王寺蔵」（『富山教育』740） ○座談会「こうきたい 入善の文化づくり」（『広報にゅうぜん』329・330） ＊長島ら 7 名（司会含む）。十三寺千手観音像や前田常作の作品も載る。
			2 月	◎「杉崎廃寺跡 岐阜県古城郡古川町所在」（『富山教育』741） △「立山信仰のシンボル 姥尊座像 5 体 芦峯寺に帰る 100 年ぶり 10 体そろそろ 県が譲り受け」（『富山新聞』2 月 7 日） ＊立山風土記の丘の環境整備計画の一環で、河内美術館から県が譲り受けるのに際し、県教委の依頼により長島が「鑑定」をしたことを記す。 ＊福江充「立山山麓芦峯寺におけるうば尊信仰の研究—新たに発見したうば尊像の紹介も含めて—」（『北陸大学紀要』55、2023 年）参照。
			3 月	◎「独楽盆 富山市民芸館蔵」（『富山教育』742） ◎「郷土の文化」の刊行に寄せて」（『郷土の文化』昭和六十年） ＊巻頭言。「立山曼荼羅集成」の編纂における「いくつかの小発見」にふれる。
			この頃	●『立山曼荼羅集成』第二期（文献出版） ＊〔高瀬 1990〕は「第三期の仕事は完結をみずして」終わったと記す。
			4 月	◎「十三仏図 紙本彩色 大山町小原屋部落共有」（『富山教育』743） △「立山曼荼羅」を集大成 富山の長島さん（『朝日新聞』4 月 15 日） △「立山曼荼羅図を集大成 長島勝正さんに聞く」（『北日本新聞』4 月 28 日） ＊「立山信仰の歴史を正しく知ることのできる貴重な史料をきちんと残したい」と長島さんは衰えぬ情熱をみせている。 ＊「長島さんが、立山曼荼羅にひかれるのも、立山信仰が歴史のかなたに消えようとしているからだ。「立山信仰には明らかになっていない部分がある。最近全国的に研究者が増え、宗教学、民俗学、歴史学などさまざまな研究がされるようになった。県内の研究者は実際をよく知っているからいいが、文献だけで研究している人からは、珍説や異説が出ている。山岳信仰の専門家ではないが、長く文化財にかかわってきた者として、史料はきちんと整備しておきたかった」と話す。

			*「ライフワークとして、さらに曼荼羅の収集と出版を続けたいと長島さんは意欲を燃やしている」。 △藤井喜代美「立山曼荼羅集成」の完成によせて」〈書評〉 (『富山新聞』4月1日) *「かなり以前から長島氏は、曼荼羅が県内だけでなく信者の多かった三河、尾張、遠江あたりでの発見の可能性を予想されていたが、第一期の刊行後、全国紙などの報道を機に「立山曼荼羅新発見」の報が相次いで県外から寄せられた。それらはさっそく第二期に(中略)収録されており、今回の出版の意義をさらに高めることとなった」。 *筆者は元富山県史編さん室員。[藤井喜代美 1991] 等も参照。
		6月	◎「草花図屏風 喜多川相説筆 絹本彩色 黒部市蔵」(『富山教育』744) 13日、小矢部市聖泉寺における「虚空蔵菩薩城山鎮座四百年記念法要」のあと、「石動山から来られた虚空蔵菩薩」と題した記念講演をおこなう。 (『北日本新聞』6月12日「東西南北」欄)。 26日、越飛歴史民俗史料庫を視察する。 [細入村史編纂室編・刊『越飛歴史民俗史料庫所蔵目録』〈室報3〉1985年]
		7月	◎「姥尊像 木造一木造 室町時代～江戸時代初期 立山町風土記丘資料館蔵」(『富山教育』745)
		8月	◎「雨宝童子立像(江戸時代初期) 木彫一木造 射水郡大門町広上神社広道社蔵」(『富山教育』746)
		9月	◎「男神像坐像(平安時代末) 木造一木造 射水市大門町広上神社広道社蔵」(『富山教育』747) *杉山司七(1895～)、逝去。 *10月の項を参照。 *9月12日付で、清水寺(朝日町)および福王寺(下村〔現・射水市〕)の木造毘沙門天立像、富山市個人蔵の絹本着色聖徳太子像が県の文化財に指定される。これ以降、美術工芸品の県指定は本表の時点までない。
		10月	◎「船絵馬「長宝丸」入善町春日春日社「永榮丸」入善町横山諏訪社」 (『富山教育』748) ◎「県展創設の父、杉山司七 大先輩をしのぶ」(『富山新聞』10月2日) *「私たちから十歳も年長であるから学校では顔を合わせなかったが、戦争中、彼は富山に疎開していたので親しくしていた」「疎開中に、亡くなった中島奎堂さん、小坂勝人君などと、彼のしり馬にのって、当時の第一回民選知事館哲二さんのところへ押しかけて、文化国家うんぬんという看板をかけるのなら県展ぐらいはつくらねばならぬと談判した思い出がある。こうして県展が出来たのである。これが富山県にいたころの杉山さんの第一の仕事であったと思う。全国で最も早く県展が開かれるようになったのは彼の努力のせいである」。 △前田常作「立山曼荼羅に思う 霊界の世界のドラマ」 (『北日本新聞』10月19日「文化」欄) *後半で「このほど、長島勝正氏(富山市)が、県内外に伝わる立山曼荼羅図二十四点をまとめ、集成として出版された」と意義を述べる。
		11月	△橋本芳雄「法悦の山里―氷見市論田の仏教信仰―」(梅原隆章教授退官記念論集刊行会編『歴史への視点―真宗史・佛教史・地域史―』桂書房) *十柱神社(氷見市熊無)の阿弥陀如来坐像(高130cm)について、「富山県文化財審議委員長島勝正先生の鑑定によれば、胴体以下は後世の補修であるが、頭部は藤原時代という」と記す。
		12月	◎「十一面千手観音像 銅鑄像 掛仏残欠 宇奈月町山本氏蔵」 (『富山教育』749)
		この年	*石原与作(1906～、郷土史家・越中瀬戸焼も研究)逝去。

昭和 61 年	1986	82 歳	1 月	◎「宋胡録（スンコロク）青磁鳥形水注 富山美術館」（『富山教育』750）
			2 月	◎「向狐図絵馬 入善町東狐稻荷社」（『富山教育』751）
				◎「栄光へのあゆみ展－健康とスポーツ－」（『富山教育』751）
				*『北日本新聞』2月1日に「立山風土記の丘資料館 博物館に改称」の記事、同3月7日に「立山博物館 64年度までに完成」記事が掲載。
			3 月	◎「草花図屏風一双 伊年印 伝宗達筆 紙本彩色 宇奈月町山本氏蔵」（『富山教育』752）
				◎「立山曼荼羅」（『立山を考える－昭和五十九年度文化ゼミナール「立山」講義録一』富山市民文化事業団） *結び一文に「またどんな絵がどこから現れるかも知れないから、今まで集めた立山曼荼羅集成も更に増補するようになるかも知れない」。
				◎「郷土の文化」の刊行に寄せて」（『郷土の文化』昭和六十一年） *巻頭言。「もう年も八十を過ぎたので足・腰が不自由となって、あまり研究旅行に出掛けられなくなったが、若い時は鉄砲丸といわれたほどよく歩いた。そしていろんなものを見たり、調べたりした」。
				○魚津市教育委員会『魚津の文化財』（魚津市教育委員会） *「あとがき」に、編集に協力した一人として長島の名が記される。
			4 月	◎「藤原鎌足公像（室町時代）絹本着彩 富山美術館」（『富山教育』753）
			5 月	富山県郷土史会の会長を、八尾正治に交代〔八尾「会長就任のあいさつにあわせて「郷土の文化」の刊行をよろこぶ」『郷土の文化』12、1987年〕。 △楠和子『歌文集 山茶花』（富山印刷興業社） *1975年の県教育会主催「文化探訪」の参加記「美濃文化探訪の記」に「解説は、バスガイドならぬ長島勝正先生で、くわしく参考になった」。
			6 月	◎「春日鹿曼荼羅図（室町時代）絹本彩色 富山美術館」（『富山教育』754）
				◎「序」（入善町史編さん室編『入善町史』資料編1〈自然・考古〉入善町） *「入善町史編さん監修」者として執筆。
				富山県郷土史会名誉会長となる。
			7 月	◎「渡宋天神像（室町時代）等歳筆 紙本墨画淡彩 富山美術館」（『富山教育』755）
			8 月	◎「迅雲来迎 阿弥陀三尊図 鎌倉時代 富山美術館」（『富山教育』756） *口絵裏面（解説本文頁）では「迅雲阿弥陀三尊来迎図」の名で記載。
			9 月	◎「春日稚児文珠像（室町時代）絹本彩色 富山美術館」（『富山教育』757）
			10 月	◎「僧形坐像（平安時代末期）男神坐像（鎌倉時代中期）婦負郡婦中町鵜坂神社蔵」（『富山教育』758）
			11 月	◎「院展と結城正明」（『北日本新聞』11月8日「文化」欄） *「元県文化財専門委員」。1980年の木村立嶽展に来館した細野正信に照会し、「いくつかのことが明らかになった」と記し後半を述べる。
			12 月	◎「木製郷土玩具 にわとり 鯉つかみ たぬき 東砺波郡利賀村産（現代）」（『富山教育』759）
昭和 62 年	1987	83 歳	1 月	◎「松に雀図 岸竹堂筆 紙本水墨淡彩 明治三十年作 富山市郷土博物館蔵」（『富山教育』760）
				◎富山市史編さん委員会編『富山市史』通史上巻（富山市） *古代編第4章第4節「古代美術と工芸」の執筆を担当。
			2 月	◎「宝珠紙絵馬 木版手彩色 富山市八町吉祥院発行」（『富山教育』761）
			3 月	◎「ヒボクラテス像 銅版画 結城正明作 富山市郷土博物館蔵」（『富山教育』762）
			4 月	◎「倭国御器肇筒井社地図 絹本彩色 庄川町小西久夫氏蔵 ろくろ師の祖神と崇敬される惟喬親王絵図」（『富山教育』763）
			7 月	◎「なまよみ」の甲斐路の文化探訪〈昭和62年度 文化探訪テキスト〉

				『富山教育』765) *前号巻末に案内掲載。善光寺・大善寺ほか。7月30・31日開催。 翌年度は木下秀夫(元県立図書館長)が講師として同行した。
			12月	△高瀬重雄「廣徳館のことども」(『富山史壇』96) *「金山方象氏の申し出」の節に「何か月かの熟慮の間に私は、畏友の長嶋(マ)勝正氏の意見をも懲(マ)した。長嶋氏は、美術の専門家であって、かつ互いに永年にわたって富山県文化財保護審議委員の仕事に携わってきた間柄だったからである」。1979年のこととして記される、金山家所蔵の孔子画像(廣徳館旧在)の寄贈の申し出に関して。 [再録]同『日本文化の史的研究』(桂書房、1992年)
昭和63年	1988	84歳	2月	△太田久夫「富山県大百科事典」(『富山教育』771) *末尾に「筆者の言葉」を添える。「長嶋勝正先生が、本誌に長い間、郷土の文化財について解説しておられました。先生の事情によって、昨春来休載になっていましたが、今度正式に止めることにしたので、私に後を引き継ぐようにとおっしゃいました。(中略)とうていその任ではないと思いましたが、「何でも良いから」という先生のおすすめで引き受けた次第です。それ以来、テーマをどうするか思案しましたが、今年は郷土を学ぶのに参考になる資料の紹介をしようと思います」。
			9月	△「長嶋勝正 なかよし埴輪像」〈野外ギャラリー 学び舎Ⅱ⑤〉 (『北日本新聞』9月16日夕刊) *「制作の依頼を受けて、長嶋さんは「子供たちが親しめるものを」と即座に埴輪を思いついた。(中略)「物資不足でしたから、ブロンズなんてとても無理。安く上がる粘土にぴったり、とも思ったんです」(中略)この十年長嶋さんは像を見ていない。少し記憶もうすれかけたが「近いうちに見にきたい」という。末尾にプロフィールも添える。
			11月	*浅井景一(1902～、洋画家)逝去。長嶋とは東京美術学校で同期。 ◎「ひとり独立の画業 浅井景一君をしのんで」(『富山新聞』11月20日) [再録]『追想文集 アトリエのうち・そと』 (浅井景一画集刊行委員会、1990年)
平成元年	1989	85歳	1月	△黒田トシクニ「初の越中瀬戸フォーラム ―発祥史の通説に疑問 山下窯 小二郎窯でない」(『北日本新聞』1月19日) *筆者は「越中瀬戸の会」代表。フォーラムは15日、ボルファートとやまで開催。開催は、長島の「昭和十九年の草稿「越中陶瓷概観」がきっかけであった」という。記事にはその一部を抜粋している。 △「越中瀬戸焼のなぞ解明へ 長嶋氏の幻の原稿見つかる」〈とやま文化〉 (『富山新聞』1月22日) *富山県民会館での「越中瀬戸焼発祥四百年記念展覧会」(会期:1月18日～22日)の開催時に掲載された、7段にわたる大きな記事。 *「戦後の昭和二十二年ごろまとめた「越中陶瓷概観」の草稿が、このほど陶芸家・釈永由紀夫氏の祖父の故・庄次郎氏(元越中瀬戸庄楽窯元)の立山町上末の自宅で見つかった。B428枚に、びっしり約1万1千字書かれている。(中略)長嶋氏のこの考え方は当時発掘調査した『鷹巣氏の見解を基にしたものである』が、鷹巣氏の正式な報告書が見つかっていないだけに注目されよう」「長嶋氏は「長い間、探していた原稿が見つかり、うれしい。立山町の釈永庄次郎さんの所で滞在して草稿したような記憶がある」と話している。 *本件、[長嶋1947][古川2025『越中瀬戸焼歴史研究』]参照。 [再録]『月刊文化財発掘出土情報』1989年3月号(通巻75)
			3月	○宇奈月町史追録編纂委員会編『追録 宇奈月町史 歴史編』*監修(総括)。

				△太田久夫「富山県教育会と私」(『富山県教育会百年誌』) *昭和48年の「文化探訪」で長島の代役で講師を務めた思い出を記した後に、「長島先生はまた、長い間巻頭に、文化財の紹介・解説をして来られました。一身上の都合で、一昨年休筆されましたが、その年の秋、私を呼び寄せて「自分の後を引受けて何か書くように」とおっしゃいました。私があちこちへ書き散らしたのを御覧になったうえでのことでしょうが、大変なことになったと思いました」と回想。 [再録] 同『古城の杜』(自刊、1996年)
			4月	△前田常作『心のデッサン』(佼成出版社) *「辺地の少年だった私の目を美術へ向けてくださったのは、村長だった長島勝正という先生です。(中略)村の学校の美術教育には特に力を注がれました。(中略)私はほとんど毎日、先生のアトリエに入り浸っていました。先生は、勉強のために最新のフランスの画集や日本の主要作家の画集を集めておられました。私は先生に自分の描いた絵を見ていただく一方で、書庫の中で画集を見るのが楽しみでした」。
			5月	◎「野村満花城先生を偲びて」 (野村満花城生誕百年記念顕彰会編・刊『野村満花城』)
			6月	*重杉俊雄(1908～、郷土史家)逝去。
			10月	*松島健編『仏像を旅する 北陸線』(至文堂)刊。同書に収録の野入潤「立山を光背にもつ仏たち」は、当初は長島に原稿執筆が打診されたが、長島の意向を承けた出版社が野入に依頼したものという[野入氏談]。
			11月	△富山新聞社学芸部編『富山の文化往来 昭和のアルバム』(富山新聞社) *第3部「美術」(久泉共三・東一雄執筆部分)に長島の名が散見。 [再録] 同『美のこころ 美のかたち』(久泉迪雄の本3)(桂書房、2014年)
			5月	9日午前4時30分、心不全により自宅で逝去[下掲記事]。
平成2年	1990	後1		△「元県文化財保護審議会会長 長島勝正さん死去」 (『北日本新聞』5月10日) *「昭和18年から県文化財専門委員、38年から59年まで県文化財保護審議会委員として埋もれた文化財の発掘、保護に努めた。／特に鎌倉初期の「立山神像」を愛知県で発見、海外流出寸前に食い止め県有化、国重要文化財指定にこぎつけたのをはじめ、県内外に散在していた「立山曼荼羅」を探し求めて、現存の25点を確認。「立山曼荼羅集成」として出版するなど立山信仰の研究に力を注いだ。／また県史編さん専門委員を務め、立山、宇奈月など多くの市町村史誌編纂に加わった。戦後の県展創立にも尽力」。
				△高瀬重雄「長島勝正さんの人と業績」(『北日本新聞』5月12日) *見出しに「里帰りした立山神像」「文化財保護に多大の貢献」。 写真「ありし日の長島勝正さん」。 *「察するに長島家は、積善の長者の家であり、長島さん自身もおおらかな、抱擁力のある柔和なお人柄だった(中略)いつ会っても、春風のような温かさを感じる応対ぶりであった(中略)清廉高潔の人は、去ってしまった」。 [再録]『郷土の文化』16(富山県郷土史会、1991年3月)
				△廣瀬誠「故長島勝正氏を哀惜して」(『富山新聞』5月15日) *「不朽の「立山曼陀羅(マ)」集成」を著作」「文化財の調査保存に業績」。 *「研究家であると同時に美術作者で、絵画・彫刻・陶芸に腕をふるわれたが、その制作は美術史研究によって支えられ、研究はまた制作によって深々と裏打ちされていた」「よく魚の絵を描き、魚の置物を創られた。そのため浜へ行って網にかかった魚を見てまわられたという」。

				[再録(抄)] 末尾の「弔いの短歌五首」は[廣瀬 1991]の8首中に再掲。
			6月	*五十嵐精一(1912～、元富山県教育委員会、富山県郷土史会顧問)逝去。昭和16年頃から県の社寺兵事課・史蹟名勝天然記念物調査会に勤務以来、ほぼ一貫して文化財保護行政に関与。長島が共にした行動も多い。『郷土の文化』16(1991年)「五十嵐精一顧問を偲んで」。 △加藤貞雄(聞き手)「前田常作に聞く―曼荼羅への旅―」(富山県立近代美術館ほか編『前田常作展 曼荼羅への旅』目黒区美術館ほか) *「私の生まれた富山県の田舎の村長さんが長島勝正とおっしゃって(中略)素晴らしいアトリエがあって、私はいつもそこに出入りしていました。小学校を終わる前から、そこで村長さんと一緒に絵を描くようになったのが始まりです。(中略)村長さんが芸術家ですから学校の設備なんかも整っていた(以下略)」
			7月	△久泉迪雄「ある日の浅井先生」 (『追想文集 アトリエのうち・そと』浅井景一画集刊行委員会、1989年) *「(富山市西田地方町の家)に父・久泉共三を訪ねてくる富山洋画協会のメンバー)の中で、とりわけ子供の私に親近の気持ちを抱かせたのが、浅井景一先生であり、長島勝正先生であった」。 *同書には長島の「ひとり独立の画業」(1988年)も再録されている [再録] 同『美のこころ 美のかたち』〈久泉迪雄の本3〉(桂書房、2014年) [再録(抄)] 高志の国文学館編『久泉迪雄の書斎から』(桂書房、2021年)
			8月	△「新盆を迎える人々」(『北日本新聞』8月12日) *5月10日記事と重複する言述を含む。同記事と同じ顔写真掲載。
			9月	△久泉迪雄「富山の美術 絵画・彫刻の流れ」 (同『美のこころ 美のかたち』〈久泉迪雄の本3〉桂書房、2014年) *末尾に「(一九九〇年九月十日稿)」とあるため、ここに掲げる。 *「昭和戦前期の富山の美術」「彫刻家群像」の章で長島に言及。 [再録(抄)] 高志の国文学館編『久泉迪雄の書斎から』(桂書房、2021年)
			10月	○入善町史編さん室編『入善町史』通史編(入善町) *入善町史編さん係名義の「あとがき」は、末尾に「編さん事業の当初からお力添えを頂いておりました長島勝正先生が、本年五月にご逝去なされましたことをつけ加えさせていただきます」と記す。
			11月	△富山県立図書館編『富山県立図書館の50年』(富山県立図書館) *第Ⅰ編「通史」の「富山県郷土史会の発足」の項で長島に言及する。 △太田久夫「富山の美術と文化」(『富山教育』786) *口絵解説。「長島勝正先生は、今年五月九日八十五歳を一期に、その生涯を閉じられた(中略)長島先生を偲びつつ、本書が郷土研究に活用されるよう祈念する」。20余年後、[太田 2011]に再録されている。
			3月	△八尾正治「偉大な地方文人 長島勝正先生を想う」(『芸文とやま』19) △「長島勝正名誉会長を偲んで」(『郷土の文化』16) *「本会の育ての親」「単に富山県郷土史会だけではなく、富山県の芸術文化界のリーダーでいらっしゃいました」 △「長島勝正先生略歴」 △廣瀬誠「長島勝正先生の御霊前にささぐ」*短歌8首、5月9日詠。 「さすらへし立山神像ひたもとめ尾張の果までたづねたまひき」 「立山の曼陀羅あまさずとり集め刷りし業績いつかほろびむ」 「さかなの絵さかなの置物生けるが如き君が制作わが家を飾れり」 「淡々とまた飄々とありし君風の如くにおもかげに立つ」他。 △八尾正治「長島勝正先生に捧げる弔辞」*5月12日付 *「今でも私達のまぶたに焼き付いているのは、会の主催事業である
平成3年	1991	後2		

				「史跡めぐり」の一環として、富山県の文化財を探訪した折の、先生の極めて含蓄の深い、熱のこもった説明であります。 △高瀬重雄「長島勝正さんの人と業績」＊〔高瀬 1990〕を再録。 △前田常作「〔表題なし〕」 △柚木春雄「郷土の先賢・勝正先生」 〔再録〕同『続町長日記』（自刊、1997 年） △木内哲子「人生の恩人 長島勝正先生」 △藤井一二「山つつじの咲く頃に思う―長島勝正先生のこと―」
			10 月	●『とやまの古美術』（文献出版） △藤井喜代美「編集を終えて」（上掲、長島勝正『とやまの古美術』） ＊「古稀を過ぎてからのお仕事の半数以上に、何らかの形で関わらせていただいていた」筆者が、回想と本の成り立ちを述べる。また、長島の祖母モリ存在に注目し、長島家の近代にも光を当てている。 △「故長島勝正氏遺稿集「とやまの古美術」刊行」 （『北日本新聞』10 月 19 日） ＊「藤井さんが遺稿集刊行を思いついたのは昨年 12 月。（中略）長編論文「越中陶器概観」が立山町の陶芸家の自宅に半世紀以上眠っていたことや出版社の強い勧めもあり十カ月がかりで発刊にこぎつけた」。
			11 月	＊1 日、富山県〔立山博物館〕が立山町に開館。 △前田常作・内田あぐり（対談）「絵師派の展開〈描く〉という仕事の中で」（『武蔵野美術』84） ＊前田「富山の私の恩師が長島勝正という方で、彫刻家でもあり絵描きでもあり村長さんでもあった方なんです。素封家でしたから、いろんな文人墨客がよく来るわけなんですね。その中に東京の美術学校を卒業した野口安次郎という日本画家がいらした」（以下略）。
平成・令和期				
平成 4 年	1992	後 3	1 月	＊久野健編『仏像集成 2 日本の仏像〈中部〉』（学生社）刊。富山県の部は京田良志（1932～2003）が執筆。ただし久野は 1983 年 11 月、第 3 回「日本海文化を考える富山シンポジウム」で面会した際に得た長島および野入潤の名刺に「学生社解説たのむ人」と鉛筆で記入しており（いずれも東京文化財研究所が蔵する久野健のノートに貼付）、計画段階では長島への執筆依頼が検討されていたことが察せられる。
			5 月	△吉崎四郎編『人生を語る』（県民大学校友の会雷鳥会） ＊『芸文とやま』3（1975 年）所載の長島へのインタビューを再録。
			7 月	△無署名「長島勝正」項 （『富山県姓氏家系大辞典』（角川日本姓氏歴史人物大辞典 16）角川書店）
			9 月	△稗田董平「長島勝正」項 （富山県文学事典編集委員会編『富山県文学事典』桂書房） ＊「短歌にも親しみ、長歌をも試作した」「万葉雑考」などもある。 △米田憲三「短歌時代」項（上掲書） ＊昭和 21 年 8 月創刊の短歌雑誌。「初期主要同人には…長島勝正…」。 ＊上掲書では他に、稗田董平「芸文とやま」項、久泉迪雄「金森青一」・「はしばみ」項が、文中に長島の名を挙げる。
			11 月	△広瀬誠『立山のいぶき』（シー・エー・ピー、1992 年） ＊157 頁で「長島勝正作の有頼の陶製胸像」について述べる（図版なし） ほか、立山信仰史に関する長島の見解・業績に数か所であげられている。
			この年	＊野島好二（1905～、富山県郷土史会理事、黒部市文化財調査委員）逝去。
平成 5 年	1993	後 4	3 月	7 日～25 日、入善町教育委員会による郷土作家展シリーズ第 4 弾として「長島勝正絵画展」開催（於：町民会館ギャラリー）。展示指導＝松倉唯司。

				『広報入善』427 (1993年2月)。同429 (4月) に写真と記事あり]
			12月	△岩倉政治 (盤若一郎画) 『風のまにまに』 (富山新聞社) *出身校の福野農学校について記す章の一つ「31 出身者 大井、稲塚、長島ら」に「大人の風格の長島」の節あり。「戦後二年目の春、ふとしたことでほとんど三十年ぶりの彼と入善の自宅で再会した。彼は梶山村長になり、同時に美術のことでは県下で並ぶものもない大家になっていたが、昔福農校の廊下で見た、あの風格は少しも変わっていなかった。そして、以後限りなくぼくらは近くなっていった」。
平成6年	1994	後5	3月	△神保成伍「戦後郷土美術の胎動」(高岡市立美術館編『高岡近代洋画の歩み 郷土洋画壇の指導者たち』展図録) *富山県美術文化協会の発足、富山県美術展 (県展) の始まりについての記述中に、長島の名を挙げている。
			8月	△松倉唯司「長島勝正」項 (『富山大百科事典』下、北日本新聞社)
平成7年	1995	後6	6月	△広瀬誠・清水巖『山と信仰 立山』(佼成出版社) *47頁に「有頼陶像 (長島勝正作)」のモノクロ図版を掲載。
			9月	△久泉迪雄「富山県美術展、その創設前後のこと」(県展50回記念展実行委員会・富山県民会館美術館編『県展の草創期に活躍した作家たち』展図録) [再録] 同『美のこころ 美のかたち』(久泉迪雄の本3) (桂書房、2014年)
			11月	△早川清・市島昇『父 早川荘作の伝記 越中考古行脚』(越中石器の会) *101～102頁に、昭和36年12月、長島が「秘蔵していた」「たて20cm、よこ10cm余り高さ7cmもある丸型のヒスイ原石」を早川荘作に譲り、早川が「所蔵する品々から」「物々交換」したエピソードを記す。
平成8年	1996	後7	11月	舟見城址館 (入善町) 第2回企画展「郷土の作家展」に長島作品が展示。 『広報入善』472 (1996年11月)。会期は12月15日まで]
平成9年	1997	後8	5月	渡邊三省『越後歴史考 越後の新田系諸族および謙信、戊辰戦争など』(恒文社) *かつて東京の学会で、長島に存否を尋ねられた大般若経 (魚沼神社蔵、1975年の項参照) について回答、現地調査に対応した体験を記す。
			8月	△柚木春雄「郷土の先賢、勝正先生」(同『続町長日記』自刊) * [柚木1991] を再録したもの。 △前田常作・吉崎四郎・遠藤和子「鼎談2 みやあらくもん」 〈とやま文化の潮流29〉(『北日本新聞』8月7日夕刊) *前田は長島を回想し「芸術家のサロン」のような戦時下の様子も語る。 [再録] 北日本新聞社企画・編集『とやま文化の潮流』(同社、1997年)
平成10年	1998	後9	3月	△村澤城山著編『富山書画文人名鑑～万葉時代より現代まで～』 (美術骨董全国大会本部事務局) *「入善町」の部に「長島勝正」を立項。「骨董品の事を質問に行けば気軽に、教えておられ、箱書きもした」。
平成11年	1999	後10	3月	△東一雄・松村唯司ほか「座談会」(50周年記念誌発刊委員会編『50年のあゆみ 富山県洋画連盟50周年記念誌』富山県洋画連盟) *冒頭の東一雄の発言:「洋連ができる以前となると戦前になりますが、松倉さんの養父である長島勝正さんや (中略) 曾根 (末次郎) さんも加わってもらって高岡の大和で発表会を開いたり (中略) そういう土壌の中で終戦を迎え、新しい文化活動が生まれてきたわけです」。
			6月	△無署名「長島勝正」項 (日本歴史学会編『日本史研究者辞典』吉川弘文館)
平成12年	2000	後11	5月	*岩倉政治 (1903～、小説家) 逝去。長島と農学校時代の同窓 [岩倉1974]。
			11月	△八尾正治「郷土史会五十年と私」 (富山県立図書館・富山県郷土史会編『五〇年のあゆみ』富山県郷土史会) *長島について「風格ひょうひょう、怒った顔を見たことがない」と回

				想。副会長（1972 年）・第 3 代会長（1986 年）への就任は「長島会長の懇請によるものである」と記す。 △太田久夫「郷土史会との関わりについて」 （富山県立図書館・富山県郷土史会編『五〇年のあゆみ』富山県郷土史会） *「史跡めぐり」について「歴史的なことは長島先生が車中や行く先々で適切な解説をされるのが常であった。また、長島先生のお陰で、時には秘仏を拝観する機会もあった」。また第 102 回郷土文化講座（1975 年 5 月）前田常作「私の見た立山曼荼羅」は、「長島先生の縁で」招くことができたことなどを記す。 〔再録〕同『続 古城の杜』（自刊、2006 年）
平成 13 年	2001	後 14	8 月	△前田常作「私と富山大空襲」〈富山大空襲 55 周年のつどい記念講演〉 （『語り継ぐ富山大空襲』会誌第 4 集、富山大空襲を語り継ぐ会） *師範学校卒業後の昭和 22 年を回顧、「長島勝正先生のお世話で東京教育大（現筑波大）の研究生になり、富山県教委から「出向」の扱いで東京都の新制中学・忍ヶ丘中学校に勤めることになった」と述べる。
平成 14 年	2002	後 13	1 月	△久泉迪雄「前田常作一生の根源への遡及と曼荼羅の世界」 （同『美のこころ 美のかたち』〈久泉迪雄の本 3〉桂書房、2014 年） *末尾に「（二〇〇二年一月八日）」とあるため、ここに掲げる。 *冒頭に「前田常作展」（二〇〇二年 高岡市美術館）を滞りなく終えて、その反響の大きさを反芻している。久泉は当時、同館の館長。 〔再録（抄）〕高志の国文学館編『久泉迪雄の書斎から』（桂書房、2021 年）
			3 月	△広島市立中央図書館編『若杉慧資料目録』（同館） *「書簡類」の 114 頁に、昭和 37 年 3 月 7 日付の葉書（「長島勝正 代野島好二から若杉慧」）について記載あり。 *同館 HP で WEB 公開。若杉慧（1903～87）は作家・石仏研究家。
			11 月	△太田久夫「県文化財の保護と選定に努めた 長島勝正」（『越中人譚』53） *「該博な勝正の知識は美術分野に止まらず、民俗や文学などにも及ぶ幅広いものであった。民俗緊急調査にあたっては入善町上野や五箇山を担当し、それも食制や交通運輸について執筆していることから分かるのである」。 *太田（1936～、書誌作成者・郷土研究家、元富山県立図書館等）は 1974 年、長島の高橋に際し『長島勝正先生の人と業績』を編んだ。 〔再録〕同『続 古城の杜』（自刊、2006 年）*図版は省略されている。
平成 15 年	2003	後 14	5 月	*京田良志（1932～、元県立高校教諭・石造物研究者）逝去。
平成 16 年	2004	後 15	4 月	△藤田富士夫「反響詠んだ黒部川ヒスイ／やさしく学べる「祈りの顔」」 （紙面批評）（『北日本新聞』4 月 29 日） *斎藤悦琳（1937～2016）「とやま祈りの顔」連載に関し「かつて富山県には、県文化財保護審議委員を務めた美術史家、長島勝正さんがいた。仏像研究の大家であった。長島さんが平成二年に亡くなってから今日まで、県内で仏像を正に鑑定できる人を寡聞にして知らない」。
			11 月	*高瀬重雄（1909～、富山大学名誉教授・日本史研究者）逝去。
平成 17 年	2005	後 16	10 月	*廣瀬 誠（1922～、元富山県立図書館司書・館長、郷土研究者）逝去。
			11 月	△久泉迪雄「富山の洋画史 ことはじめ」 （富山県立近代美術館編『とやまの洋画史 入門編』展図録） *「「曼荼羅」で知られる異色の現代作家前田常作の才を見いだしたのは、東京美術学校出身の作家・評論家の長島勝正だが（以下略）」。 〔再録〕同『美のこころ 美のかたち』〈久泉迪雄の本 3〉（桂書房、2014 年）
平成 19 年	2007	後 18	5 月	△横山豊介「松川べり彫刻公園」〈わが半生の記 越中人の系譜〉 （『北日本新聞』5 月 28 日）

				*横山による連載8回目。昭和56年3月、富山市長の提案を承け、当時県彫刻家連盟委員長の横山は彫刻公園設立の委員長となり「学識経験者の津山昌氏、長島勝正氏、久泉迪雄氏らを委員に迎え」という。 [再録]『わが半生の記 越中人の系譜』第V巻(北日本新聞社、2008年)
			10月	*前田常作(1926～、武蔵野美術大学名誉教授・洋画家)逝去。
平成20年	2008	後19	11月	*八尾正治(1920～、富山県郷土史会名誉会長)逝去。
平成21年	2009	後20	1月	△久泉迪雄「県文化課勤務」(わが半生の記 越中人の系譜) (『北日本新聞』1月28日) *久泉による連載8回目。久泉は昭和51年4月、吉崎四郎の後任として県芸術文化係長に就任。「その最初のころの仕事に(中略)前田常作氏の個展(県民会館)があった。前田氏は美術史家の長島勝正氏が同郷の新人として期待を寄せていた。長島氏がすでに戦中、私の父のところへ前田氏の作品の批評を請いに見えていたから旧知の間柄で、行政の担当者として氏にまみえるのは、奇縁というしかなかった」。 [再録]『わが半生の記 越中人の系譜』第X巻(北日本新聞社、2009年)
平成23年	2011	後22	7月	△太田久夫『富山県の基本図書 ふるさと調べの道しるべ』(桂書房) *富山県教育会『富山教育』誌の口絵解説(1988年2月～)を一冊に。 *[太田1990]を再録するほか、「あとがき」の冒頭で長島にふれる。 「(前略)口絵を担当することになったのは、長島勝正先生に勧められたからであった。六年前の正月、洋画家の前田常作先生にお会いしたとき、「長島先生の……」と言うと、先生はすかさず「長島さんは偉い人だった」と言われた」。前田は2007年10月13日に逝去。
平成25年	2013	後24	10月	△杉崎貴英「「立山神像」をとらえなおすために―国指定重要文化財「銅造男神立像」への視点―」(富山県[立山博物館]編・刊『立山と帝釈天―女性を救うほとけ―』展示解説書) △杉崎貴英・加藤基樹編「年表「銅造男神立像」の近現代」(上掲書)
平成28年	2016	後27	12月	△太田久夫「思い出の人々」(同『続々 古城の杜』自刊) *今村光男(1942～2010)の項に「(富山県郷土史会の)年二回ほどの会合のとき、今村さんは会長の長島勝正先生を乗せて来られた。だんだん分かったのであるが、今村さんは長島先生の運転手役を務めておられたようである」。続いて、『長島勝正先生の人と業績』(1974年)などの「印刷をお願いした」思い出などを記す。
平成29年	2017	後28	5月	*『郷土の文化』42「特集 富山県郷土史会のあゆみ」。会誌最終号。長島は同会の第2代会長を務めた。
			11月	*富山県郷土史会編『郷土研究を志す人へ』(桂書房)刊行。同会は、本書刊行をもって1950年から66年間の活動を終え、解散した。
平成31年	2019	後30	3月	△杉崎貴英「堀井三友の事績―戦前期富山在住の日本美術史／仏教考古学研究者―」(『帝塚山大学考古学研究所研究報告』21)
令和2年	2020	後31	9月	*松倉唯司(1928～、富山短期大学名誉教授・洋画家、長島の娘婿)逝去。
令和3年	2021	後32	2月	△高志の国文学館編『久泉迪雄の書斎から―“悠かなり 富山の文化”―』(桂書房) *寄稿部分を除き小林加代子執筆。 *同題の企画展(会期:2月6日～3月27日)の解説図録として刊行。 *久泉(1927～2024、元県職員・歌人)が同館に寄贈した長島の実稿「越中瀬戸焼の芸術性」(『芸文とやま』2〔1974年〕所載)も展示された。 *『高志の国文学館紀要』6所載「久泉迪雄氏寄贈資料目録」も参照。 △岡部昌幸「近代美術資料―西田正秋新資料『美術解剖学講義日記』―」(『帝京史学』36) *西田正秋(1901～88、美術解剖学、東京芸術大学名誉教授)が使用したノートを翻刻。東京美術学校に助教授として就任した大正15年

				(1926)の使用部分に「塑四、長島勝正君」という記入が見出される。
			5月	△太田久夫「県立工芸高校・富山県農学校同窓生群像(26) 青井忠治 須賀木仙 桜井鴻有 村田吉生 滝田実 高原耕造 藤井 尚治 笹島英樹 朝倉外治 長島勝正」(『富山県人』1291)
令和4年	2022	後33	12月	△杉崎貴英「富山県下の古彫刻に関する再認識抄史と課題—昭和三十～四 十年代前後の活況に注視しつつ—」(『富山史壇』199)
令和5年	2023	後34	10月	5日、「長島勝正氏自筆原稿」一式(越中瀬戸焼等に関する昭和17年頃 の自筆原稿)が、立山町在住の個人から同町に寄贈される。 [『立山町文化財年報—令和5年度—』(立山町教育委員会、2024年7月)]
			12月	9日～翌年4月21日、立山町歴史交流ステーション日なにて、 ミニ企画展「越中瀬戸焼研究者—長島勝正—」開催[担当=古川知明]。 *長島の陶彫・絵画作品、自筆原稿等を展示。 *『日なた歴史通信』8(2023年12月、WEB版)、[『立山町文化財年報— 令和5年度—』(立山町教育委員会、2024年7月)]に記事・写真掲載。
令和6年	2024	後35	1月	△「立山 長島勝正氏(美術史家・入善出身)の功績紹介 越中瀬戸焼の歴史、整理 初公開自筆原稿も展示」 (『北日本新聞』1月9日) *風間耕司(1938～、写真家)逝去。『越中の彫刻』(1975年)写真担当。
				△古川知明「「越中瀬戸焼研究者 長島勝正」展の紹介」(『越中瀬戸焼歴史 通信』2) *同誌は越中瀬戸焼歴史研究会 HP で WEB 版を公開。
			6月	22日～9月28日、立山町歴史交流ステーション日なにて、ミニ企画展 (1)「東京帝室博物館の越中瀬戸窯発掘調査」開催[担当=古川知明]。 △野入潤「長島勝正先生についての記憶」(『越中瀬戸焼歴史通信』3) △古川知明(座談会記録)「越中瀬戸焼研究者—長島勝正氏を語る」 (『越中瀬戸焼歴史通信』3)
令和7年	2025	後36	4月	△古川知明「石原与作未公表遺稿「立山御神像銘の考察」の紹介—長島 勝正遺品から—」(『立山町歴史交流ステーション日なた研究紀要』3) △古川知明「長島勝正による越中瀬戸焼研究—原稿「越中陶器概観」をめ ぐって—」(『越中瀬戸焼歴史研究』1〈特集:復興期の越中瀬戸焼研究〉) *同誌は越中瀬戸焼歴史研究会 HP で WEB 版公開。同特集は古川氏の単独 執筆。他章も長島関係の記述を含む。前年8月初出、翌年8・11月改訂。
			5月	10日～6月1日、立山町歴史交流ステーション日なにて、館蔵新資料紹 介展(1)「昭和中期の文化財調査記録」開催[担当=古川知明]。 *長島のスケッチブック類・仏画作品等を展示。下掲の記事で紹介。 △「銅造帝釈天立像 調査記録を紹介」(『北日本新聞』5月10日)
			11月	△古川知明『越中瀬戸焼関係人物・団体事典』(『越中瀬戸焼歴史研究』2) *越中瀬戸焼歴史研究会 HP で WEB 版を公開。同12月に改訂。 △『越中瀬戸焼歴史研究』3〈特集:復興期の越中瀬戸焼研究2〉*WEB版。
令和8年	2026	後37	3月	4～22日、立山町歴史交流ステーション日なにて、館蔵新資料紹介(3) 「長林館文庫 長島勝正コレクション展—富山県文化財調査委員・長林館 主人 長島勝正の前半生—」開催[担当=古川知明]。 *長島の自筆原稿や作品、旧蔵書のうち稀覯に属するもの等を展示。 △「長島さん(美術史家/入善出身)の足跡伝える 歴史交流ステーシ ョン 自筆原稿や書籍120点 立山」(『北日本新聞』3月7日) △杉崎貴英「調査野帳としてのスケッチブック—昭和期富山の美術史家/ 文化財有識者、長島勝正の遺品資料から—」 (『立山町歴史交流ステーション日なた研究紀要』4) △杉崎貴英「長島勝正 書誌兼年譜稿」(同上) △古川知明「長林館文庫【長島勝正コレクション】の概要」(同上)

年代未詳	入善町中央公民館にある彫刻《裸婦》を制作 [森 1984]。
	八幡社（入善町櫛山）の、獅子頭を描いた奉納額を制作 [森 1984]。

■「書誌兼年譜稿」に添えて（覚書）■

作成を通じて想到したことや注意を惹いたことは少なくないが、今回は若干を摘記するにとどめておく。
在学中の著述「浄土教の美術」と未発表分の原稿 2026年3月の「長林館文庫 長島勝正コレクション展」では「浄土教の美術—第一部阿弥陀堂建築—」（1927年）の自筆原稿が展示された。『校友会雑誌』に続編の掲載は確認できない。原稿を収めたファイル「自編／浄土教美術資料」には、「三 阿弥陀仏像」と冒頭に題した大部の未発表原稿が残されていた。これが第三部ならば、第二部は浄土教絵画を扱う内容であったか。なお美術研究所編『東洋美術文献目録』（座右宝刊行会、1941年）は「浄土教の美術」の略書誌を登載する。
短歌雑誌『はしばみ』の重要性 長島が同人として参加した稀観の歌誌『はしばみ』は、巻末の「消息」欄なども含め、28～31歳当時の著述・行動・学知・交友をうかがう上で大きな手がかりとなる。上記「長林館文庫」展で親しく披見できたが、本稿までに存分な把握・活用をなしえなかったことをお断りしておく。

「立山神像」初見の年代と、未確認の著述をめぐって 1967年に県有に帰したいいわゆる「立山神像」（現指定名称「銅造帝釈天立像」）に関し、長島は『越中の彫刻』（1975年）において、この像の存在を知ったのは「昭和一七年ごろ『重要美術品目録』に」載る情報を見出したのが契機だったこと、「早速、愛知県庁の社会教育課をたずね、係長に同行してもらい、当時の所蔵者（現・名古屋市）を訪問したこと、「この訪問記を新聞に書いたので、県内でも反響があ」ったことなどを記している。正確な年代（重要美術品に認定された昭和15年2月23日以降となる）や当該の新聞記事は本稿まで確認できず、なお今後の課題となった。

県下の展覧会企画との関わりほか 遺品から見出されたノートには、「国宝法隆寺展」（1960年）の準備に関わる内容が含まれていた。以後「仏教文化展」（1973年）など、県下での文化財関係展示企画の数々への関与も、長島の業績として称揚の要があろう。ほか新聞記事等や遺品中のスケッチブック（本号掲載の別稿を参照）からは、さまざまな事績・行動が浮かび上がる。本稿に登載しえたのはそれらの一部に過ぎない。

歴史民俗資料調査カード 文化庁は1970年代前半、国立歴史民俗博物館設立準備の過程で、各都道府県の文化財関係者に「歴史民俗資料調査カード」の作成を依頼した。統一された書式による膨大なカードはいま同館に所蔵され、インターネットにデータベースが公開されている。「長島勝正」で検索を試みると、「調査者」欄にその名を記す127件がヒットした。和田一郎との連名とする11件（石黒信由関係資料、昭和47年12月14日付）を除く116件は昭和48年1月12日～同49年10月14日付で、建築、仏像など美術工芸品、民具など文化財の諸ジャンルに及ぶ。その時点での県指定文化財が少なくないが、令和元年に南砺市指定文化財となった「白山宮信仰関係資料」のうち彫刻4件や、未指定文化財も多く含まれており注目される。

（参照：https://khirin.rekihaku.ac.jp/db/nmjh_rekimin_h/list/0.html）

インターネット上での紹介 一般の仏像愛好者たちにより形成・運営されてきたサイト「日々は古仏愛好」（旧称「神奈川仏教文化研究所」）中の朝田純一「埃まみれの書棚から～古寺、古佛の本～」(2003～2015年)第12話「地方佛～その魅力にふれる本～《その4》各地の地方佛ガイドあれこれ【中部編】」を特筆しておきたい。その富山県の項では、長島のプロフィールと単著3冊（1975・1984・1991年）を紹介している。

（参照：<https://kanagawabunnkaken.web.fc2.com/index.files/kobutuaikou/shodana/shodana50.htm>）

【付記】 作成の過程では古川知明氏のご示教・ご厚意にあずかることたびたびであった。また補充の段階にあった2026年3月3日、高岡市立中央図書館で閲覧中に、偶々来られていた太田久夫先生がお声がけくださった。幸運に乗じて草稿をお渡しし、ご高閲を願った。翌々日には「長林館文庫 長島勝正コレクション展」をご一緒に観覧することもかない、往路の車中では草稿をご評価いただき大いに励みとなった。記して感謝申し上げる。

なお本稿は、JSPS 科研費 23K00182（研究課題名「仏像作例をめぐる再認識と理解形成の追跡—郷土史／在野研究／仏教考古学に注目して—」、研究代表者：杉崎貴英）による成果を含むものである。

【追記】 校正の段階で、古川知明氏のおはからいのもと、太田久夫先生に再びのご高閲をいただくことができた。拝受したご教示には、把握が及ばずにいた著述および他者による言及の書誌が数件にとどまらず、また微細なしかし重要な要修正箇所のご指摘も数件ならずあった。[付記]に記した3月初めの段階からも10数頁は増幅していた煩瑣な紙面の隅々にまで、校閲の眼を及ぼしてくださったことを実感し、恐懼の至りであった。さらにその後、複写も添えてくださってのお便りで再びのご示教を賜り、書誌兼年譜としての精度を終盤にいたるまで高めることがなかった。深甚の感謝を記し、今夏に卒寿を迎えられる先生の益々のご健勝をお祈り申し上げたい。

長林館文庫【長島勝正コレクション】の概要

古川 知明

(歴史交流ステーション日なた学芸員)

立山町教育委員会は、令和6年度において、古美術研究家長島勝正氏が生涯にわたって収集した書籍・絵葉書などのほか、文化財調査記録、長島自身が制作した絵画・彫刻・陶芸作品等約12,000点の寄付を受けた。

これは、令和6年度歴史交流ステーション日なたで開催したミニ企画展「越中瀬戸焼研究者 長島勝正」展を契機として、展示品を借用した長島氏ご遺族との交流の機会を得た。長島氏の死後35年経過した住居には氏が残した作品や収集書籍等が多数保管されており、近く住居解体の予定があるためそれらの資料をどう処分したらよいかの相談があった。長島氏は富山県の文化財保護に尽くした人物であり、復興期の越中瀬戸焼の調査振興に努めるとともに、昭和期の立山文化遺跡調査に参加、また吉田実知事とともに重要文化財帝釈天立像を国外流出から救った立役者であり、立山町とは深いゆかりを持つ人物である。これらのことから、前記長島氏資料について立山町教育委員会が寄付を受けることが決定し、整理・保存することとなったものである。

資料の調査・保存・管理・活用は、教育委員会所管歴史交流ステーション日なたが担当した。整理にあたっては、ご遺族との連携を手配いただいた藤井一二・喜代美ご夫妻（ともに長島氏が県史編纂協力時に編纂室員として親しく交流された）のご協力や、帝塚山大学杉崎貴英教授の長きにわたる長島氏の業績調査（特に帝釈天立像に関して）および当館における展示指導等のご尽力を得て、資料評価を行ないつつ進めたものである。

長島氏の事績は、これまで多数の人物評が作成されている。古稀記念として太田久夫氏らによる年譜・著作が作成されたりなどしたが、いずれも昭和40年以降の華々しい古文化財に関わる活動を中心に描写されたものである。今回の寄付資料には、長島氏の前半生の足跡を明らかにする情報が多数含まれており、それらを解析することによって、長島氏の人生後半における活動のルーツに迫ることができると思われる。これらの一部は本書掲載の杉崎論文（P1～75）にも反映されている。

なお下記において【記号-番号】は、その記述の根拠となる資料の一次整理番号を示す。この番号を引用できる一覧表は、今後立山町ホームページに掲載予定である。

1 長島勝正の由緒

勝正は、明治37年（1904）富山県下新川郡^{くぬぎやま} 梶山村（現入善町梶山）に生れた。生家は代々武右衛門を名乗り、300町歩（300ha）の農地を所有した梶山村の豪農・大地主であった¹⁾（写真1・2）。勝正氏はその9代目にあたる。父は8代目武右衛門、母は^{つぎ}楓である。父武右衛門は「長島幻華山人」の雅号を使用した【一般書籍2142】。

長島家の家紋は、丸に三ッ扇紋、菩提寺は浄土真宗常福寺（入善町梶山）である。

大正2年（1913）年8代武右衛門が死去したため、勝正は若干9歳で家督を相続し、武右衛門が出資した富山精錬合資会社を相続した²⁾。母は若くして死去した。

大正12年富山県立農学校（大正10年富山県立福野農学校に改称）卒業後、東京美術学校彫刻撰科塑像部に入学した。3年目から彫刻科専修科で修業し昭和3年（1928）3月卒業した（卒業生名簿【E-42】）。在京中豊島区長崎に居を構えそこから通学した。

同年梶山青年団長となり、梶山信用購買組合組合理事となった³⁾。しかし東京でも制作活動が続いていたとみられる。研究生として残ったと記すものもある⁴⁾。在校中から葵橋洋画研究所に所属した（【一般書籍2328】、写真5）。昭和4年には第10回帝展に入選し、帝展作家として真価を発揮した。入選作品は妻の安子がモデルであった（【A-133】実物、【B-536】絵葉書、写真14）。

昭和7年頃梶山の家に帰り、昭和10年「長島氏頌徳碑」を梶山字東稻場3502番地2に建立した（【B-457・493】、写真3・4）。

昭和11年農協組合長に就任した。同年富山市主催日満産業大博覧会彫刻の部で金賞を受賞した⁵⁾。

同年富山県織物模範工場(株)の監査役となった⁽⁶⁾。

帰郷後は、郷土史家堀井三友の助手を務め、越中国分寺に関する調査研究を手伝った⁽⁷⁾。堀井からは昭和8年『国華索引』を贈呈された⁽⁸⁾。

昭和15年東京帝室博物館の越中瀬戸窯発掘調査に堀井と共に参加、堀井の死後発掘品の整理・展示や県内陶磁史の執筆等を行った⁽⁹⁾。昭和16年から18年の日本考古学会総会に会員として出席した⁽¹⁰⁾。

昭和23年頃富山に疎開していた日本画家小坂勝人らや県内メンバーとともに富山県展の創設に貢献した。

昭和23年から28年3月までのうちいずれかの期間、泊高等学校・入善高等学校の臨時教員を勤めた⁽¹¹⁾。生徒らとともに奈良公園など修学旅行記念写真が残る（【B-539】）。

昭和25年梶山村長となり、昭和28年まで務めた⁽¹²⁾。同年合併により入善町となった。勝正は、同町梶山支所梶山公民館長⁽¹³⁾、のち入善町企画室長となった⁽¹⁴⁾。しかし1年で退職した。

梶山の実家アトリエ（写真52・54）には、俳句や短歌、絵画関係者が集まった。のち疎開した小坂のほか、画家前田常作⁽¹⁵⁾・版画家南桂子等が集い、サロン化したという。

昭和30年頃勝正は入善から富山市稲荷町に転居した。稲荷町の地は堀井三友の居宅からわずか700mの地であった。その後昭和40年富山市大町に転居し、終生そこで暮らした。勝正の残した文化財調査用スケッチブックには、大町の居宅の間取計画図が数ページにわたり記載されており（写真6・7）、自ら案を練ったようだ。邸内にはアトリエとして愛用した居室のほか、作品などを掲示した部屋などがあり、多くの文化人が出入りした。

昭和26年勝正は富山県重要美術品調査委員であった⁽¹⁶⁾。この委員にはもう一人中川作次郎が任命されており、中川は富山県史蹟名勝天然記念物調査委員でもあった。昭和30年には富山県重要美術品など調査委員⁽¹⁷⁾、翌31年には富山県重要美術品等調査委員⁽¹⁸⁾の肩書であった。翌32年には、史蹟名勝天然記念物調査委員（会）と県重要美術品等調査委員（会）を統合し、富山県文化財調査委員（会）となった⁽¹⁹⁾。勝正が富山県文化財調査委員を名乗ったのは、昭和31年6月が最も古く⁽²⁰⁾、これは、統合以前の昭和29年において『富山県教育要覧』に「文化財調査委員会の運営」という項目が記述されていることから⁽²¹⁾、両委員（会）を合せて文化財調査委員会と総称していたと理解される。いつからそのような名称が使われはじめたのかは不詳である。勝正はこの「文化財調査委員」を早くから使っていたようである。

その後昭和38年4月1日富山県文化財保護条例が施行され、正式に14、15人からなる文化財専門委員が置かれた⁽²²⁾。勝正はこの委員長となっている。のち1976年富山県文化財保護審議会⁽²³⁾となって現在に至る。勝正は昭和59年3月まで委員を務めた⁽²⁴⁾。

これ以後の勝正の事績については他書及び本書杉崎書誌年譜（P23～75）により詳細を知ることができるので、ここでは割愛する。

その中でも特筆すべきは、昭和49年古稀記念として出版された長島勝正先生の古稀を祝う会編『長島勝正先生の人と業績』【富山書籍 T367】に、経歴及び著作目録が詳しくまとめられたことである。これは富山県立図書館にいた太田久夫氏が編集された労作で、現在も補遺が続けられていると聞く。

家族について触れたい。勝正の兄弟には妹睦子^{むつこ}、弟美武^{よしたけ}がいた。6歳下の美武は千葉大学農学部へ進学し、園芸を学んだ。美武は造園に関する書籍を収集し、独自の分類整理を行ない、のちに長島家蔵書「長林館文庫」に加えられた。わずか21歳で死去した。

勝正は妻として阿部安子を迎えた。安子は泊村（現朝日町泊）生れで、魚津高等女学校卒業後東京赤坂の山脇高等女学校家事専攻科を大正15年卒業した⁽²⁵⁾。明治42年生れ、勝正とは5歳違いである（写真48）。

遺された写真類には、魚津・山脇時代の同級生と思われる制服姿の女学生の単独写真が多数残る。当時は写真館で撮影した肖像写真の交換が流行したという。このほかピアノを演奏したり音楽会の記念写真もあり、音楽が趣味であったものか。美武もピアノを演奏したらしく、安子と共通した趣味で結ばれていたと思われる。

勝正夫妻には、3 人の子供があった。長男は武右衛門（10 代）、次男は早世、長女美穂^{よしほ}である。武右衛門は勝正の死後平成 22 年、入善町旧宅跡東隣接地の長島家墓地を新調した（写真 1-3）。旧墓石に彫られた「安政四年丁巳八月出来／長嶋屋武右衛門」の文字は新墓標に踏襲した。これにより江戸後期には長島家の屋号が「長嶋屋」であったことがわかる。美穂は、金沢美術工芸大学で洋画を学び、洋画家松倉唯司と結婚した。その子千尋氏・巨摩紀氏が現在勝正の旧居宅・遺品を代表管理している。

松倉唯司は長林館文庫の一部を借り出し、参考美術資料として活用していたため、松倉家に保管されていたが、今回それらも加え整理した。

これらのことから今回松倉氏の絵画・図書等も勝正資料に含めて寄付されたことを付記する。

2 長島勝正資料の全体概要

勝正が遺した資料群は、大別すると、(1)本人制作品、(2)本人自筆原稿、(3)文化財調査記録、(4)資料ファイル、(5)長島武右衛門家文書、(6)書籍類、(7)写真類、(8)コレクション品、(9)その他がある（表 1）。これらを総括して「長林観文庫」と呼ぶこととした。

(1) 本人制作品

絵画・彫刻・陶芸がある。

絵画には、洋画 69 点、水彩画 164 点（うち色紙 104 点）、水墨画 2 点、陶芸 29 点、石膏彫刻 12 点、木版画 48 点、その他 1 点の計 335 点がある。

仏像・魚・花・干支等を題材とするものが多く、サイン・落款を押すものもある。

製作年代が判明するものは、1929 年から 1980 年の 15 点のみである。

洋画（油彩画、写真 25～28）は静物を主体とし、特に果実・魚類が多い。風景画は少数である。カンバス単体と額装のものがある。カンバスに題名を残すものは少ない。作品にはサイン 28 点、落款 1 点がある。

水彩画（写真 30～33）は、仏像画を主体とし、ほかに静物が少数ある。ほとんどは一枚物で表装されていない。作品にはサイン 31 点、落款 17 点がある。落款印は、のちに越中瀬戸焼など陶磁器の箱書きにおいて、鑑定し識箱としたものに署名・押印した印と同一である。

色紙は仏像・魚・花・干支等を題材とし、サイン 90 点・落款 1 点がある。

彫刻（写真 14）は、石膏による人物像・壁掛面で、頭像が多い。作品にはサイン 3 点、落款 1 点がある。

陶芸（写真 15～24）は、素焼着色の埴輪像が 4 点ある。勝正は特に埴輪を好んだという。このほか陶像・陶俑 12 点、平面的フォルムの魚等の作品、デザインした香合等計 10 点がある。実用的な器物はない。後期の陶器は黒部阿古屋野窯で焼いた。陶芸品には、釘書のあるもの 8 点、押印のあるもの 5 点がある。

特に代表作の一つといえる「騎駝人物」【A-11】（写真 17）は、『越中のやきもの』⁽²⁶⁾ 95 頁に紹介された。同誌では昭和 17 年とされたが、台座にある釘書には「昭和二二年／勝正」とあり、昭和 22 年の作である。全体に灰釉が掛かり、人物の顔の釉を拭うなどしている。胎土・釉薬からみて越中瀬戸窯（釋永庄次郎窯）で焼いたものと推定される。勝正は釋永庄次郎宅へよく出入りしており、制作のため長く逗留することもあったという。

木版画は、仏像・静物・魚・花を題材にしたものである【A-183～192】。

(2) 本人自筆原稿

「自編 浄土教美術資料」と題する自作資料ファイル【C-113】には、袋とじ原稿用紙束 2 点、青焼き資料（東京美術学校蔵矢代教授美術史講義用図譜の一部か）2 点、台紙貼付の絵葉書 1 点・写真 46 点・トレース図 10 点が含まれていた（写真 35）。

袋とじ原稿用紙束 2 点は、勝正自筆原稿である。

自筆原稿【C-113-1】は、表紙に「修学旅行報告／浄土教の美術／第一部 阿弥陀堂建築／彫刻科第五年／長島勝正」とあり、大正 15 年 4 月に举行された東京美術学校 5 年次の修学旅行の成果をま

とめたものである。全 35 丁、挿図写真 4 点を貼付挿入しており、校正用の赤が入っている。これは『東京美術学校校友会月報』第 26 巻第 3 号（1927 年 3 月）に掲載された勝正著「浄土教の美術」の原稿である。冒頭には奈良法隆寺夢殿前での記念写真が掲載されており、この原プリントが後述の(7)写真類に含まれていた【B-539-024】（写真 35）。

この内容は、杉崎論文中「在学中の著述「浄土教の美術」と未発表分の原稿」（本書 74 頁）でも評価されているとおり、勝正の書いた最初の本格的な論考である。

もう一つの自筆原稿【C-113-2】は、「三 阿弥陀仏像」のタイトルではじまり、全 165 丁にも及ぶ膨大な原稿である（写真 36）。掲載先は未確認である。修正は多くあるが赤の校正がないことから未公表であると思われる。内容は表題のとおり阿弥陀仏像に関する所見である。これも本格的な内容の論考である。表題からみて、この原稿作成以前には「二」なる原稿が存在していたと推定される。前記修学旅行報告が「第一部」として書かれたとすれば、本稿はその連作の「第三部」として書かれた可能性がある。杉崎氏は「これが第三部ならば、第二部は浄土教絵画を扱う内容であったか。」と推測する（前出論文）。

(3) 文化財等調査記録

勝正が実地調査を行った際の記録を掲載したスケッチブック群・ノートである。スケッチブック 6 冊【D-1・2・5・6・8・9】、ルーズリーフノート 1 冊【D-10】がある。

勝正は昭和 30 年代、文化財調査にはスケッチブックを抱えてでかけ、調査結果をメモするとともに、必要なものはスケッチした。デッサン的なものや実測図的なものまでバラエティに富むが、その描写力はすばらしい。現在では実見できないものや、所在が確認できないものも含まれており、貴重な資料である。

この詳細と評価については、杉崎氏の論文（本書 1～22 頁）を参照されたい。

(4) 資料ファイル

仏像や文化財などの写真・絵葉書・印刷物切り抜き・メモなどは、自作のファイルを作成し、台紙にそれらを貼付けて収納した。ファイル外面には「彫刻 平安朝初期」「絵画 上代仏画」「建築 古代」などの見出しを書き込み、分類した。2282 点の台紙・一枚もの資料を、51 件のファイルに分けて収納してある【C-92～140・168・179】。これらには長林館文庫番号が付与されている（写真 35）。

(5) 長島武右衛門家文書

長島家に代々保管されていた古文書類である。これらは柳行李【G-1】に雑多に詰め込まれていたもので、総数 1097 点に及ぶ。これらは、古くは江戸時代中期天明 2 年（1782）以降の切高証文が主であり、主に明治以降の証文類など長島家出納関係の文書が多い。これら古文書に関しては、性格による大別作業が終了しているが、各文書の目録作成は着手していない。今後の整理が待たれる。

(6) 書籍類

勝正氏は、先代の購入品も含め 5000 冊以上の蔵書を所有していた。富山県内書籍・一般書籍・和綴本・雑誌・図録目録・骨董目録・その他がある。

このたびの分類整理は、国立国会図書館が提供する日本十進分類法（NDL）新訂 10 版に基づく分類番号と整理番号を併記して図書館ラベルを貼り付けた。富山県内書籍には番号前に「T」の記号を付与した。

県内書籍は 369 冊がある。一般書籍は 2976 冊がある。美術・文化財関係がもっとも多く、中国関係の和綴本もみられる。洋書類（雑誌含む）原書については今回整理番号付与が困難なため整理番号付与は行わなかった。約 600 冊がある。

雑誌は 118 種類 2026 冊がある。このうち県内雑誌は 11 種である。雑誌のうち、短歌同人誌『はしばみ』（はしばみ社／泊町）は勝正も同人として参加した。県内図書館の所蔵が少なく貴重である。

なお、雑誌のうち『富山教育』127 冊については、『長島勝正先生の人と業績』作成のため藤井喜代美氏が長島家から借用したままとなっていたため、今回を機に返却され蔵書に加えることとした。

図録目録は、文化財展・美術展等の目録である。335 冊がある。月報類は 21 種 83 冊がある。

骨董目録は、東京・京都等で開催されたオークション用印刷目録で、27冊がある。

以上の総計 6216 冊である。

(7) 古写真

(4)資料ファイルに含まれる写真を除き、長島家蔵アルバムと箱入りのバラ写真がある。

バラ写真は 536 枚があり、勝正夫妻のほか、長島家家族及び関係者、長島家及び周辺の風景写真等がある。勝正の 10 代から 30 代頃の写真が含まれる。この年代の勝正の写真はほとんど公開されておらず貴重である【B-26～535、538～540、542】、**写真 39～56**）。

(8) コレクション品

各地で収集した土産品類等 347 点である。このうち「観光絵馬」と俗称される小型絵馬 285 点があり、コレクションの主体である【C-77】。これらは勝正のみならず家族・遺族が収集したものも含む。

(9) その他

前述のとおり勝正の義息洋画家松倉唯司氏の洋画・陶芸 112 点【I-35】及び関係資料 34 点がある。関係資料には、唯司氏が東京芸術大学在学中の受講ノート【I-6・7】、富山県教員時代の講義ノート【I-12～14】、自筆随筆を記載したノート【I-15】、煙草箱紙 58 点を貼り付けたスクラップブック【I-8】がある。煙草箱紙は、大学学生時代に収集したものとみられ、喫煙者であったことと、デザインデータ収集の目的もあったとみられる。

なお松倉氏の収集した書籍・雑誌は前出書籍類に含めた。

3 「長林館文庫」について

寄付を受けた資料を今回「長林館文庫」と名付けたのは、収集書籍類に蔵書印である「長林館文庫」の朱印（表 2-1 角印 1）が押されていることによる。長島家重掛箱の蓋（69.1 cm×35.9 cm）【G-4】には、表に「山静園」、裏に「長林館 長島氏」と墨書されているものがあつた（写真 8）。長島武右衛門家を「長林館」とも呼んだのであり、これに由来するものであろう。

この「長林館文庫」は、父八代武右衛門またはその父から開始された書籍（和書）収集に端を発するものとみられる。勝正が年長頃の長島家書斎を写した写真には、八代武右衛門の収集とみられる図書が並んでいた【B-101・121・332・406】。この頃の図書の一部には「長島蔵書」の押印（角印 10）がある。これらは 1866 年から 1894 年発行の和綴本で、父武右衛門が買い求めたとみられる。他の和綴本のうち『天地』（【一般書籍 2140】）や『手天地人』（【一般書籍 2142】）には明治 42 年 12 月「大橋店ニテ求ム」等の記載があり、東京目黒区大橋にあった書店であろうか、東京での購入が多い。後者には「長島幻華山人」の記入があり、これは父武右衛門の号または雅号とみられる。和綴本の半数以上には「長林館文庫」押印がなく、中国史や能楽に関するものが多いことから、これらは父武右衛門の収集本であつたとみられる。勝正は父の収集本のうち一部を「長林館文庫」に繰り入れたのであろう。

勝正は、購入した書籍に手書きで名前や購入年月、購入場所を手書きした。これにより学生時代に購入した書籍を 11 冊抽出することができた。これらは絵画史・建築史・社寺案内・仏像・考古学・文学に関するものであり、大学講義や専攻に関連するものである。『茶器の見方』【一般書籍 1286】には「今泉講師」とあり、今泉雄作⁽²⁷⁾の講義を受講したことがわかる。

11 冊のうち大正 12 年から昭和 3 年発行書籍 4 冊【一般書籍 26・44・48・59】には「長島文庫」の押印（表 2-1 角印 11）がある。勝正は当初「長島文庫」として自身の収集図書を整理し始めたと思われる。

「長林館文庫」として登録された最も古い書籍は、長林館文庫番号 4 の『紫波郡昔話集』【一般書籍 426】である。これは昭和 18 年 6 月 1 日に購入されたものである。このことから、「長林館文庫」として図書受入・目録作成が始まったのは、昭和 18 年 4、5 月頃と推定される。これ以後、以前から長島家にあつたもの、勝正や美武が購入したものにも新たに番号を付し、長林館文庫印を押して台帳登録を進めたものであろう。なお、この整理登録作業は、櫛山時代の番頭が担当し行なっていたという。それは 3 冊のノートのうち 2 冊【B-7・8】に番号・書名などが順に記載された（写真 11）。書籍には、表紙などに「長林館文庫」の朱印が押され、整理番号が扉や題名頁上部に手書きされた。台

帳によれば 4785 冊となっている。書籍台帳原簿の作成は、櫛山時代に担当した番頭（池原さん）が行っていたという。その後稲荷町・大町に移転後にも多くの図書が収集追加されたが、それらには朱印は押されなかったようだ。

弟美武も学生時代から書籍収集・整理を始めた。大学での園芸研究に関するものが中心である。それらは当初「長嶋蔵書」の印に番号を手記入していたが、のち特注で四隅に「長島蔵書」と印刷した紙ラベル(1)により番号を付けて整理した。昭和 8 年美武の死後これらも「長林館文庫」に加えられた⁽²⁸⁾。また勝正の長女美穂の蔵書もごく少数であるが「長林館文庫」に加えられた。

勝正はまた、「長林館主人」とも名乗った（『東京美術学校卒業生名簿』昭和 5 年 12 月【E-42】表紙に手書き 写真 9）。長島家当主は代々そのように名乗ったのであろう。

4 「山静園草堂」について

先述のとおり、重掛箱の蓋【G-4】には、表に「山静園」の墨書があった（写真 8）。この「山静園」は、長林館の中にあった離れの名称とみられる。この離れに勝正夫妻が暮らしたものとみられる。

勝正はその後「山静園草堂」の語句を使うようになった。

「山静園草堂」と書籍に記入し始めたのは、昭和 8 年『国華索引』【一般書籍 1033】が最も古い（写真 10）。この表紙裏に「昭和 8 年冬 堀井氏より拝受 山静園草堂」と自筆で記した（前出）。堀井氏とは堀井三友のことである。その後昭和 16 年頃まで計 10 冊に見える。

また勝正は、B4 判袋とじ原稿用紙に「山静園草堂」と印刷し、自分用とした。この原稿用紙を使った自筆原稿には、「42 病院の窓」ほか【D-84】、「灌仏一はなまつりと甘茶一」【D-98】がある。いずれも未完成稿・書き直し稿であり、完成稿の掲載については確認できない。おそらく『はしばみ』への掲載目的であったろう。

勝正の参加した短歌同人誌『はしばみ』には、タイトルに「山静園」の語句を使った随筆を複数回投稿した（「山静園雑記」2 巻 2 号（1933）、「山静園閑話」3 巻 3 号～4 巻 1 号（1935）に 6 回）。

昭和 17 年以降この「山静園草堂」は使われなくなったのであるが、これは堀井の死と関連があるのだろうか。

5 書籍に付された蔵書印・ラベル

(1) 蔵書印

書籍類の多くには、先述のとおり「長林館文庫」という蔵書印の朱印が押された。このほかにも蔵書印及各種押印がある。

蔵書印には、角印 12 種・丸印 3 種・名前印 1 種の計 17 種類を確認した（表 2）。

父八代武右衛門収集品には、角印 5 が押された【一般書籍 2140・2142】。

勝正の学生時代時代収集品には角印 3・4・7 が押された【一般書籍 515・550・1286・1463】。また大正 12 年から昭和 3 年頃の収集品のうちには角印 11 が押されたものがある。これらの一部はのちに角印 1 が追加されたものもある。

先に、長林館文庫として整理を始めたのは昭和 18 年 4、5 月頃と推定したが、その当初は手書きで「長林館文庫」と書いた【一般書籍 426】。また長林館文庫番号が小さいものでは、どの印も押さないものが多く見られる【一般書籍 1478・1634・1977】。それ以後に角印 1 が使われ始めたと思われる。具体的な年月は不詳である。

一方美武も精力的に書籍を収集した。専門である園芸関係のみならず、勝正のために『通俗二十一史』【一般書籍 813～824】、『通俗日本全史』【一般書籍 842～852】、『大日本史』【一般書籍 945～949】、『大日本地誌』【一般書籍 950～956】のほか、『漢籍国字解全書』【一般書籍 985～1009】などシリーズものを購入した。これらには角印 2・4・5 を押印した。これは勝昌が東京を離れ、千葉にいた美武に購入を依頼したことによるものか。

遺族が保管していた印章現物は 3 個がある。

①「長林館文庫」【A-161】は、角印 1 に該当する。印面は縦 56 mm・横 21 mm、高さ 42 mmの篆刻用石

材（蠟石）で、周縁はところどころ使用により欠損している。

②「長島家翼」【A-162】は角印4に該当する（写真12）。印面は縦21mm・横21mm、高さ47mmの篆刻用石材（蠟石）である。側面3面には文字刻銘がある。刻銘内容は次のとおりである。

「燕香先生所蔵金、／石是夥第出示乞為／品定之誠甲子三山者／也因顔所度■曰」「第一蔵庫
蓋紀実／ウ乙巳中秋前一日／作于占越山下／年道人閑誌」「明治丁未之夏八月／於長嶋仁台高
囑／鑲香刀」

銘文によれば、明治38年長島仁台（八代武右衛門か）の依頼で鉄香⁽²⁹⁾がこの印章を製作した。印石は、甲子三山産の蠟石⁽³⁰⁾である。印章が完成し納品したのは明治40年で、このとき銘文を彫った。勝正はこれを継承した。

③「長島君家」【A-163】は、丸印1に該当する（写真13）。直径28mm、高さ28mmの木製で、植物の根を利用し彫刻を施したものか。

これら3点以外の印章は現存しない。

(2) ラベル

分類用数字等を手記入した紙ラベルを貼ったものがある。

既存品3種、専用印刷品1種を使い（表3）、書籍背下端・表紙裏に貼ってある。

ラベル1は、縦38mm、横50mmの紙片で、薄黄緑色のデザインを用いる。四隅に「長島蔵書」と小さな文字を配置する。三段枠に区分し、上段「第 門」、中段「第 號」と左書きする。上下2枚を並べるものもある。

各ラベルには角印・丸印などの割印を押すものが多い。単独で角印・丸印を題名頁等に押すものが主体で、書籍掲載やシート式の写真や挿図の中には、一枚ずつ台紙と本紙にかけて割印を押すものもある。

ラベル1には、割印として角印4を押すものが発行年の古い書籍に多いことから、八代武右衛門が印刷し図書整理を始めたものと推定される。これには浄瑠璃本も含むことから、浄瑠璃系本（和書）は父武右衛門の趣味だったことがわかる。

6 絵葉書

古建築・古美術・文化財を主なテーマとして収集されたもので、次に絵画が多い。

絵葉書専用ファイルやスクラップブックに整理して収納したものは、14冊744枚がある【C-1～9・27・66・68～70】（写真37・38）。【C-68】には唯一背見出しがあり「写真集 九州」と記載している。テーマごとに分類しつつ収集したものである。

残る半数は研究テーマごとに分類した「資料ファイル」（前出2-4）に、台紙に貼り付けて収蔵したものである。21のファイル中に計768枚がある【C-92～104・127・139・168・179】。またこのファイルから脱落したとみられるものが4件19枚がある。以上の計は1531枚である。

このほか、観光地・名所・寺院等の組写真・バラ写真が25件72枚がある。これ等を含めた総数は1603枚に及ぶ。

勝正は卒業後の昭和4年以降、堀井三友の助手として全国の国分寺の調査に随行していたらしい。文化財写真や絵葉書はこの時に収集したものが多いと思われる。

7 長島家に関する古写真

長島家に関する古写真は、先述のとおり、主として「御重掛 長林館蔵」と書かれた木箱【G-7】に、バラで474枚【C-27～500】が入っていた。このほか、整理された2冊の写真アルバム【B-538・539】に46枚がある。

これらの写真の多くには、撮影された人々の氏名や撮影年月日、地名その他の情報を記載したものは少ない。裏書等のない写真のほとんどは、台紙から剥がされた痕跡があり、かつて写真アルバム等に貼り付けられていたものと推定される。入善から富山への移転の際に必要なものだけをアルバムから剥がし、木箱に入れて保存したものとみられる。

写真の内容は、櫛山にあった長島武右衛門家の旧状、勝正の父母・祖父母・兄弟の成長の様子、妻安子の家族、東京美術学校時代の生活、及びそれ以降の職歴を裏付けるものである。写真には被写体の名前や年号等がな物が多いことから、確定できるものを定点とし、それと比較しながら人物同定や年代推定を行い、またこれらと各人物の年譜を照合しつつ種別ごと、年代順に配列を試みた。まだ検証が済んでいないもの多々ある。

これらの作業により、生前から富山に移転するまで（昭和初期から昭和40年代）における勝正の生活の概略が明らかになった。それを示したのが**写真 39～56**である。この内容については、年譜をまとめた本書杉崎論文（P23～74）も参照しながら見ていただきたい。

8 美術学校卒業直後の生活

勝正は東京美術学校彫刻科を卒業したが、その前後の状況については曖昧である。

前書では1928年本科卒業後、専科に進んだと目録は説明するが、昭和5年12月『東京美術学校卒業生名簿』【E-42】では本科卒業以後在席を示す公式記録はない。

『西洋美術史概説』【一般書籍 2328】の裏扉には「葵橋洋画研究所 長島勝正」とデザイン文字で書かれたものがある（**写真 5**）。そこには「東京美術学校」の文字もあり、在校中または卒業後しばらく東京に居住したとの話と整合する。その際に「葵橋洋画研究所」⁽³¹⁾に在席していたものであろう。

9 越中瀬戸焼の製作・識書について

勝正は、昭和15年堀井三友の助手として東京帝室博物館による越中瀬戸窯の発掘調査に参加した⁽⁹⁾。これを契機に、以後越中瀬戸焼への関心を深めていった。このころ越中瀬戸焼では、越中瀬戸焼研究所から青原長八窯が独立したばかりで、また釋永庄次郎も試作を行っていた。長八は昭和17年に死去したため、研究所には吉野香岳が招聘された。勝正は主に庄次郎の元へ通い、陶器ではなく陶像を中心に制作していたとみられる。その一方、富山における越中瀬戸焼歴史研究の推進者と期待されていた堀井も昭和17年死去したため、勝正がそれを継承する動きがあった。それが自筆原稿「越中陶磁概観」28枚である。これは1991年「越中陶磁史の研究」と改題し『とやまの古美術』に収録され、釋永行雄氏により立山町に寄付された⁽⁹⁾。先述の昭和22年「騎駝人物」【A-11】は、このような中で戦後まもなく制作された。庄次郎窯での制作と推定したのはこのような事情を背景としている。

これ以後、越中瀬戸焼において自分の作品を焼くと共に、越中瀬戸焼の鑑定を行ない、識書を数多く行った。

なお立山町所蔵品のうち石田コレクションに次の3点が含まれている。

- ・【石田 159】（**写真 19**）は、陶像唐美人【A-13】（**写真 18**）と同形のものである。底面に「香岳」の刻印が押され、越中瀬戸焼千寿窯初代吉野香岳⁽³²⁾の窯で焼いたことがわかる。共箱の蓋表には「唐美人」、裏には「唐美人 勝正塑／昭和五十六年夏日／長島勝正（朱印）」とある。この印は他の日本画にも見られる（**写真 34 右端**）ので、主に本人作品に使用したものであるが、鑑定した識箱にも使用するものがある。

- ・【石田 52】（**写真 22**）は、勝正の作を原型とした陶製獅子1点である。共箱の箱蓋裏書きには、「原型長島勝正先生／越中瀬戸吉野香岳先生合作／須坂天山題（朱印）」とあり、勝正の獅子陶像を千寿窯で焼いたものである。台座裏面には「香岳」の刻印がある。箱書は須坂天山⁽³³⁾で、この陶像に「無心」と銘名した。

- ・【石田 132】蛇褐釉小服茶碗の識書には、「昭和癸丑 師走／富山県文化財専門委員／長島勝正／識（朱印）」とある（**写真 24**）。癸丑は昭和48年である。識書の押印（**写真 24-2**）と同じ印は他の日本画にも見られる（**写真 34 右端**）ものである。

結語

勝正氏の死去後約 30 年にわたりご遺族によって保全されてきた遺品が一括して立山町に寄付されたことは、勝正氏の立山文化遺跡調査への参加、国重文帝釈天立像調査・保存への関与、越中瀬戸焼復興期における発掘調査・歴史的研究への関与とその後の陶芸活動、さらには翁久允など立山町関係者との交流などさまざまな局面における氏の貢献を顕彰する意味で、望外の喜びといえる。

これらの資料によって、特に昭和期の古美術・古文化財分野における画力を生かした丹念な調査・記録活動は、亡失した文化財等もふくみ、また現在見ることの困難な文化財の貴重な記録として貴重である。これは当時の文化財的所見の浅い事を考慮しても、重要性に余りある成果である。

書籍や文化財絵葉書にしても、県内機関には所蔵しない貴重なものが少なからず含まれている。これらは今後適切に保管されるとともに、適時公開すべきものといえる。

なお筆者の在職中、勝正氏に関係するミニ展示を 6 回開催した。何れも越中瀬戸焼に関連する内容を取り扱う中で氏の名前が浮上してくるものであり、それらは以下のうち最後の⑥展示へ結実していったと言える。

- ①令和 5 年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ企画展「越中瀬戸焼研究者 長島勝正」展(12. 9～6. 4. 21)
- ②令和 6 年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ企画展「東京帝室博物館の越中瀬戸窯発掘調査」展 (6. 22～9. 29)
- ③令和 7 年度立山町歴史交流ステーション日なた館蔵新資料紹介展(1)「昭和中期の文化財調査記録」展 (5. 10～6. 1)
- ④令和 7 年度立山町歴史交流ステーション日なた館蔵新資料紹介展(2)「江戸時代の越中瀬戸焼―注目される寄付資料から―」展 (6. 7～6. 24)
- ⑤令和 7 年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ企画展「復興期の越中瀬戸焼」展 (10. 15～12. 14)
- ⑥令和 7 年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ企画展「長林館文庫 長島勝正コレクション展―富山県文化財調査委員・長林館主人 長島勝正の前半生―」展 (6. 7～6. 24)

最後に、本「長林館文庫」長島勝正コレクションは、本書刊行日現在、基本的な目録は作成済みであるが、詳細なデータベースの作成分析については今後の課題である。国内でも知られ、県内を代表する古美術・古文化財保存に貢献した長島勝正の業績を顕彰するため、これらのコレクションを一括して保存（歴史資料または民俗文化財などへの指定等）するとともに、公開のための調査研究が望まれるところである。

謝辞

当コレクションの寄付にあたっては、ご遺族（代表松倉千尋氏）のご厚情を得た。

また令和 5 年度展示及び本稿の作成にあたっては、次の方々のご指導ご協力を得た。記して感謝の意を表します。

松倉千尋	松倉巨摩紀	石田茂雄	浦畑奈津子	太田久夫	窪 邦雄	釋永由紀夫
杉崎貴英	高野靖彦	西井龍儀	野入 潤	藤井一二	藤井喜代美	藤田富士夫
間野 達	前田精造	三鍋久雄	森井祐子			
かなくれ会（代表 加藤聡明）	富山県立図書館	富山市郷土博物館	立山町図書館			
立山町文化財保護審議委員会（委員長 佐伯勉）						（順不同・敬称略）

注

- 1 品川哲夫 1986「長島武右衛門」『立山を仰いで ふるさとの先賢』第 3 集
- 2 『官報』1913 年 5 月 17 日
- 3 『富山県名鑑』帝国興信所富山支所 1928 年

- 4 浅井景一 1974「長島勝正氏とのこと」『長島勝正先生の人と業績』長島勝正先生の古稀を祝う会編
- 5 日満産業大博覧会編 1937『富山市主催 日満産業大博覧会誌』富山市役所
- 6 同社は明治35年政府が全国6か所に設立した模範工場の一つで、富山市大泉にあった。『法人個人職業別調査録』第7版 国際探偵社1936年
- 7 「越中国分寺址発見古瓦」『考古学雑誌』27巻4号 日本考古学会1937年
- 8 国華社編 1933『国華 索引』国華社【一般図書155】。この表紙裏に勝正は「昭和八年冬 堀井氏より拝受 山静園草堂」と書き込んでいる。
- 9 古川知明 2025「長島勝正による越中瀬戸焼研究一原稿「越中陶瓷概観」をめぐって―」『越中瀬戸焼歴史研究』第1号 越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ（初出2023）
- 10 昭和16年から18年の会員名簿、第46回～第48回総会出席者名に長島の名前が見える。「雑録」『考古学雑誌』第31巻第6号1941年、同第32巻第6号1942年、同第33巻第6号1943年
- 11 旧制泊高等女学校・入善農学校は、昭和23年学制変更により泊高等学校・入善高等学校となった。窪邦雄氏によれば、勝正は昭和28年3月まで泊高等学校の臨時教員であったという。
- 12 北国新聞社、富山新聞社、福井新聞社共編 1950『北国年鑑』昭和26年版 北国新聞社
- 13 北国新聞社 1952『北国年鑑』昭和28年版
- 14 北国新聞社 1954『北国年鑑』昭和30年版
- 15 前田常作（1926-2007）は入善櫛山出身の画家・版画家。武蔵野美術大学学長・理事長。曼荼羅を主題とした抽象絵画と、『日本百観音』巡礼版画で知られる。2012年のニューヨーク近代美術館企画展「Tokyo 1955-1970: A New Avant-Garde」に出品した。長林館文庫に初期の洋画1点【C-36】のほか版画2点がある。
- 16 富山県教育委員会編 1952『富山県教育要覧』1951年。重要美術品調査委員は2名、勝正は絵画・彫刻部門担当。
- 17 富山県教育委員会編 1956『富山県教育要覧』昭和30年度。重要美術品調査委員は勝正を含め6名を掲載。
- 18 富山県教育委員会編 1957『富山県教育要覧』昭和31年度。重要美術品調査委員は勝正を含め6名を掲載。
- 19 富山県教育委員会編 1958『富山県教育要覧』1957年。委員は長島を含め13名を掲載。
- 20 長島勝正 1956「越中の古神像」『越中史壇』第8号 越中史壇会。1983年富山県芸術文化協会編『富山県芸術文化名鑑』北日本新聞社には、昭和18年より富山県文化財専門委員と記す。この頃にそう称していたかもしれない。
- 21 富山県教育委員会編 1955『富山県教育要覧』昭和29年度。委員は長島を含め6名を掲載。
- 22 富山県文化財保護条例（昭和38年4月1日施行）第21条 『富山県報』昭和38年3月25日号外(1)
- 23 富山県教育委員会編 1978『教育要覧』No.28
- 24 富山県教育委員会編 1983『教育要覧』1980 No.33
- 25 山脇高等女学校は、明治36年牛込区白銀町に實脩女学校として設立、のち高等女子實脩学校となった。明治41年高等女学校令により山脇高等女学校と改称、家事専攻科を併設した。昭和10年丹後町に移転、昭和25年に山脇短期大学を設立した（山脇学園公式ホームページ）。
- 26 定塚武敏 1974『越中の焼きもの一原始から現代まで一』富山文庫2 巧玄出版
- 27 今泉雄作(1850-1931)は、文部省入省、岡倉天心とともに東京美術学校の創立に携わった。同校教授、京都市立美術工芸学校校長、東京帝室博物館美術部長を歴任した。茶道・香道などの伝統文化にも通じ、陶磁器研究や『君台観左右帳記』研究で先駆的な業績を残した（吉田千鶴子1999「今泉雄作伝」『茨城大学五浦美術文化研究所紀要 五浦論叢』6号）。東京文化財研究所アーカイブデータベースによる。
- 28 美武は、昭和5年2月に入善で買い求めた専門書（【一般454】）に、「死が晩であつても今日読む事が必要だ。それだけ死が軽くなるから。求め得られた事は喜ばしい」とメモを残している。美武は昭和8年に死去しており、昭和5年にはすでに病気で死を覚悟していたとみられる。
- 29 明治期の篆刻家には古川鉄香がいるが、詳細は不明（東文研アーカイブデータベース）。
- 30 那須連峰の北部、甲子山（1547m）を主峰とする山々。この山麓茄子蠟石鉾山（栃木県那須塩原市）では良質の蠟石が採取された。
- 31 葵橋洋画研究所は、明治31年（1898）菊池鑄太郎が白馬会洋画研究所を開設し、翌年、赤坂区溜池町合田清工房に移転、東京美術学校卒業生や一般洋画専攻者の研究機関となった。菊坂研究所・駒込研究所の開設に伴い、白馬会葵橋洋画研究所と改名。明治44年の白馬会解散後も存続したが、大正12年（1923）の関東大震災後に姿を消した。

出身者に小林万吾・白瀧幾之助・湯浅一朗・和田三造・岸田劉生・岡本帰一・清宮彬・木村莊八・牧野虎雄等がいた。

32 初代吉野香岳は、吉野香岳は、越中瀬戸焼窯元「千寿窯」初代窯元。明治36年（1903）小松市八幡生れ。京都市陶磁器伝習所卒業、東田作松に師事し「梅山窯」を築いた。大村窯・岩木窯などを築き、昭和14年北大路魯山人窯芸研究所「星岡窯」で作陶後、富山県工業試験場を経て、越中瀬戸に居を移し福岡窯で作陶した。戦後釈永庄次郎の庄楽窯に専属陶工として再度勤め、1959年に千寿窯を築窯して吉野香岳と名のり、越中瀬戸焼の名手となった。平成11年（1999）死去。古川知明 2025「2 陶工編（復興期） 吉野香岳」『越中瀬戸焼 関係人物・団体事典』（越中瀬戸焼歴史研究 第2号） 越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ

33 須垣天山は、本名久作。富山市の印刷会社経営者。大正15年に薬袋など売薬関連の業務を手掛けた。陶磁器などを趣味とし、天山と号した。千寿窯へよく出入りし、陶作を行なった。翁久允との親交も深かった。古川知明 2025「3 人物編 須垣久作」『越中瀬戸焼 関係人物・団体事典』（越中瀬戸焼歴史研究 第2号） 越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ

区分	品目	件	数量
A	本人作品（陶芸品・絵画等）	194	337
B	長島家書類・古文書・家族写真	546	1572
C	コレクション(写真・絵葉書・版画・絵画等)	211	2794
D	自筆メモ・スケッチブック・書簡	110	235
E	パンフレット・資料・新聞記事・写真等	152	197
F	文房具・絵画道具	43	140
G	家具等	24	24
H	その他	8	8
I	松倉唯司関係（作品含む）	25	136
小計		1313	5443
図書			3707
雑誌	月報含む	139	2109
洋書			600
総計			11859

表1 長林館文庫全体概要一覧



立山町収蔵庫における長林館文庫保管状況（書籍類）



同左（書籍類以外）



写真 1-1 長島邸跡地・墓地（南から）
（下新川郡入善町櫛山）



写真 1-2 長島邸跡地から東（泊方面）



写真 1-3 長島家墓地（東から）
（下新川郡入善町櫛山）



写真 2 長島邸正面 【B-99】

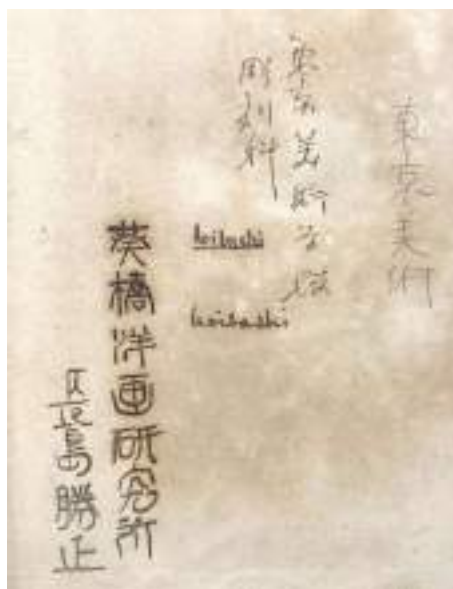


写真 5 「葵橋洋画研究所」と書いた
書籍裏扉【書籍／一般 2328】



写真 3 長島氏頌徳碑竣工式 昭和 10 年 【B-457】



写真 4 長島氏頌徳碑現況（入善町櫛山公民館敷地内）

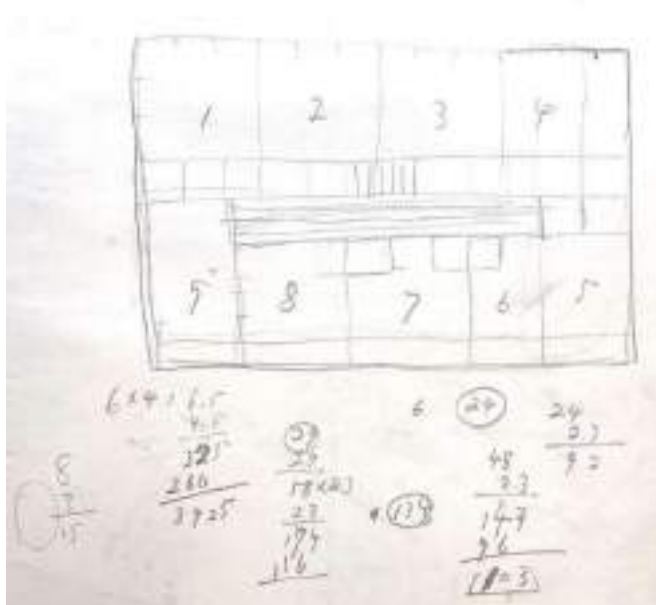


写真6 勝正がスケッチブックに描いた間取図【D-9】
下の計算式は各部屋の面積か



写真7 勝正がスケッチブックに描いた間取図【D-9】
上は1階、下は2階か



写真8 「長林館」「山静園」と書いた木箱蓋【G-4】



写真9「長林館主人」手書き
昭和5年12月名簿【E-42】

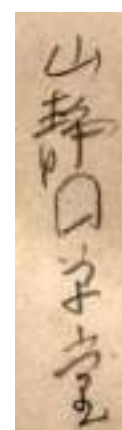


写真10「山静園草堂」と書いた書籍
昭和16年11月購入【書籍一般232】



Handwritten Japanese text on a book cover: 長林館文庫蔵書原簿巻二.

写真11 「長林館文庫」目録原簿【B-8】

番号	区分	印字	寸法(mm)	印影	備考
1	角印	1 長林館文庫	56*20		石印あり
2	角印	2 長嶋蔵書	39.5*18		長島美武(弟)旧蔵書
3	角印	3 長島家翼	26.5*26.5		
4	角印	4 長島家翼	20*20		石印現物あり。明治40年8代武右衛門期作成。
5	角印	5 長島之印	14*14		ラベル割印に使用 長島美武(弟)旧蔵書
6	角印	6 長嶋蔵書	14*14.5		ラベル割印に使用
7	角印	7 長島	12.5*12.5		
8	角印	8 勝	19*17		「民族」表紙に押印
9	角印	9 長島	12.5*12.5		昭和04年
10	角印	10 長島蔵書	23*23		
11	角印	11 長林館文庫	50*40		昭和03年810
12	角印	12 山静園			資料ファイル表紙に押印

表 2-1 蔵書印影一覧

番号	区分	印字	寸法(mm)	印影	備考
13	丸印	1 長島■家	径28		木印あり
14	丸印	2 長島	14*10		「みずゑ」に押印
15	丸印	3 長嶋蔵書	11.5*9.5		長島美武(弟)旧蔵書
16	丸印	4 長島	12*9.2		
17	名印	1 勝正	28*16		1391(1944)

表 2-2 蔵書印影一覧

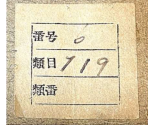
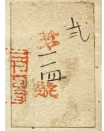
番号	区分	印字	寸法(mm)	印影	備考
1	ラベル	1	50*38		印刷。四隅に「長島蔵書」長島美武(弟)旧蔵書
2	ラベル	2	25*25		
3	ラベル	3	23*23		青縁印刷
4	ラベル	4	45*30		赤印で「第」「号」

表 3 蔵書ラベル一覧



写真 12 角印 4 【C-162】

写真 13 丸印 1 【C-163】





写真 14-1 第 10 回帝展入選作「陶像」 モデルは妻安子
【B-536】絵葉書をトリミング、石膏



写真 14-2 第 10 回帝展入選作「陶像」
【A-133】石膏



写真 15 埴輪 馬
【A-150】



写真 16 埴輪人物【A-126】



写真 17 陶芸「騎駝人物」【A-22】



写真 20 陶芸「ひらめ」(彩色)
【A-1】



写真 21 陶芸 香合「しし」【A-156】



写真 23 陶芸
菩薩立像【A-147】



写真 18
陶芸
唐美人【A-13】



写真 19
町蔵品
【石田 159】



写真 22 陶芸置物
獅子 銘「無心」
町蔵品【石田 052】



写真 24-2
同右 印



写真 24-1 勝正識書
蛇褐釉小服茶碗 (1973)
町蔵品【石田 132】



写真 25 洋画【A-15】



写真 26 洋画【A-140】
板絵 法輪寺虚空蔵菩薩像



写真 27 洋画【A-140】裏書



写真 28 洋画 花
【A-17】板絵



写真 29 水墨画 菩薩
立像 1976 年 【A-121】



写真 30 水彩画 虚
空蔵菩薩坐像【A-171】



写真 31 水彩画
普賢菩薩坐像【A-41】

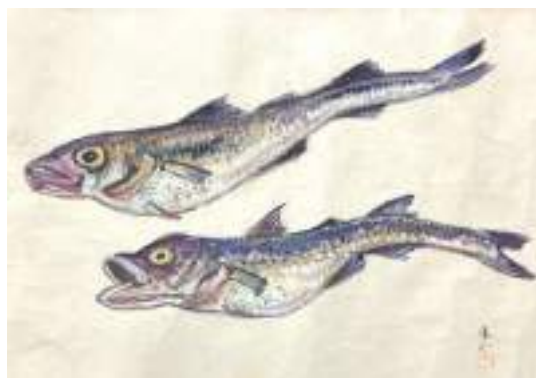


写真 32 水彩画 魚【A-176】



写真 33 水彩画 雛【A-170】



写真 34 制作品（絵画・陶芸等）に見る印影・釘書各種



写真 35 「自編 浄土教美術資料」ファイルと自筆原稿
【C-113-1】「浄土教の美術」



写真 36 自筆原稿【C-113-2】「三
阿弥陀仏像」



写真 37 絵葉書帳表紙と貼付状況【C-7】



写真 38 絵葉書帳表紙と貼付状況【C-4】



写真 39 長島邸内庭園【B-227】



写真 40 長島邸内温室【B-41】



写真 41 長島家書斎 右は美武【B-101】



写真 42 勝正の父母
父 八代目武右衛門、母 梶
【長島家仏壇に保管中】



写真 43 幼少期の勝
正 3 兄弟
美武・勝正・睦子【B-160】



写真 44 勝正・美武
【B-188】



写真 45 東京美大 2 回
生 1924 年【B-30】



写真 46 勝正妻子（左端）と妻安子実父ら
（長島家庭園にて）【B-186】



写真 47 勝正作品 卒業製作？
1928 年「裸像」？【B-538 001】



写真 48 妻安子
1926 年【B-137】



写真 49 東京美術学校前での卒業式 昭和 3 年（1928）【B-497】



写真 50 勝正近影【B-32】



写真 51 同右 59 頁挿図「修学旅行紀年撮影」の原版写真
法隆寺東院夢殿前 美術学校修学旅行 1927 年 4 月 【B-539 024】



東京美術学校校友会月報 1927 年 9 月



写真 52 長島家アトリエ 1932 年（昭和 7）【B-490】



写真 53 勝正と安子 【B-159】



写真 54 アトリエでの彫刻制作風景 【B-140】



写真 55 梶山信用購買販売利用組合長時代
（『富山県産業組合史』117 頁写真原版）【B-182】



写真 56 泊高校教員時代 修学旅行引率
後列中央が勝正 【B-539-001】



令和5年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ展「越中瀬戸焼研究者 長島勝正」展



令和7年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ展「昭和中期の文化財調査記録」展



令和7年度立山町歴史交流ステーション日なたミニ展「長林館文庫 長島勝正コレクション」展

立山町歴史交流ステーション日なたにおける 長島勝正氏関連展示チラシ



昭和52年9月 福井県越前陶芸村にて（撮影者不明） 富山県郷土史会研修旅行で訪れたか

福岡瓦工場と越中瀬戸焼復興について

廣田 雄介

1 はじめに

立山町歴史交流ステーション日なたの令和7年度ミニ企画展(2)として「復興期の越中瀬戸焼展」(開催期間:令和7年10月25日(土)~12月14日(日))が開催された。展示では、昭和前期における越中瀬戸焼復興の取り組みを、瓦工場の経営者であった釋永庄次郎や福岡作光らの活動を中心に紹介された。

本稿では、越中瀬戸焼復興に取り組んだ福岡作光が経営していた福岡第一及び第二窯業場(以下、福岡瓦工場と呼ぶ。)に焦点をあて、当地区の瓦生産活動について報告する。本報告は、福岡作光の子で昭和40年代まで瓦工場主として勤務していた福岡孝光氏(昭和9(1934)年生まれ)からの聞き取り調査を中心にまとめた。本稿を通じて、瓦生産者たちがどのような技術をもち、どのような生活をしてきたかを把握することで、越中瀬戸焼の復興に至った背景を探っていく。

2 上末・上瀬戸の概要

瓦の生産活動が行われた富山県中新川郡上段村上末・上瀬戸(現、富山県中新川郡立山町上末・上瀬戸)は県中央にある富山市の南東方向、中新川郡の南西部に位置し、富山平野より一段高い段丘上にある。村の大部分は平地であり、山地は全面積の2割ほどで、上末・上瀬戸は山の麓にある⁽¹⁾(図1)。

上末、上瀬戸周辺では主として呉羽山層に相当する古期礫層の含礫砂質粘土層が3~4m程度の厚さで堆積しており、上末から芦見の一部にかけては下部に花崗岩の砂及び粘土層を挟んでいる。また、上縁は漸次凝灰質とする傾向があり、これと共に砂は少なく粘土質となる⁽²⁾。

上末は、良質な陶土が産出したこと、燃料となる赤松等の樹木が豊富にあったこと、水に恵まれていたことなどから、古来、須恵器の生産が行われていた。周辺には奈良時代、平安時代に使用された窯跡が多く発掘されており、その周辺から須恵器の破片が多く出土している⁽³⁾。上末という地名の由来としては、末庄の上の方の端にあるためや、末は陶の字から転じて名付けられたなど、様々な説があるが、その起こりは奈良時代と推定されている⁽⁴⁾。奈良時代・平安時代に須恵器生産が行われた上末であるが、平安時代末期からは土師器・瓦器などが生産される。そのような状況のなかで、瓦器より堅く焼きしまった無釉のすり鉢等や原始的鉄釉をかけた古瀬戸風の陶器が焼成される。ただし、その当時はまだ尾張などからの陶工の移動はなかったようである。陶工の移入は前田氏による越中支配の確立によって行われる。越中新川郡が前田氏の支配下になるのは天正15(1587)年で、新川郡は初代藩主前田利家の代官によって采配され、兄である前田五郎兵衛安勝がその任にあたった。この頃、尾張瀬戸村から陶工小二郎が招かれ、上末に「山下窯」を築いたと考えられている。文禄2(1593)年には尾張国からきた陶工彦右衛門が窯を築き、その後、孫市や市右衛門、長八等が築窯している。江戸時代にかけて窯数が増加し、江戸後期まで20基以上の窯が築かれた⁽⁵⁾。窯業が盛んになるにつれ民家も増加し、上瀬戸・下瀬戸等の字が誕生する。

越中瀬戸焼は、このように16世紀末から操業が開始され、加賀藩の「瀬戸役」として近世を通じて生産された瀬戸・美濃系陶器の焼物である⁽⁶⁾。製品に関しては、室町時代末期には、黄瀬戸釉の印花文皿・香炉・向付、江戸時代初期には室町時代のものに加え、鉄釉の茶碗・徳利・壺等が出土している。江戸時代中期には、白釉・黄瀬戸釉・飴釉・茶釉・天目釉が多く使われ、茶碗・茶入れ・皿・片口・徳利・壺などの器種が製作され、末期にはこの当時に全国的に流行した銅緑釉の製品や鉄釉の鴨徳利に加

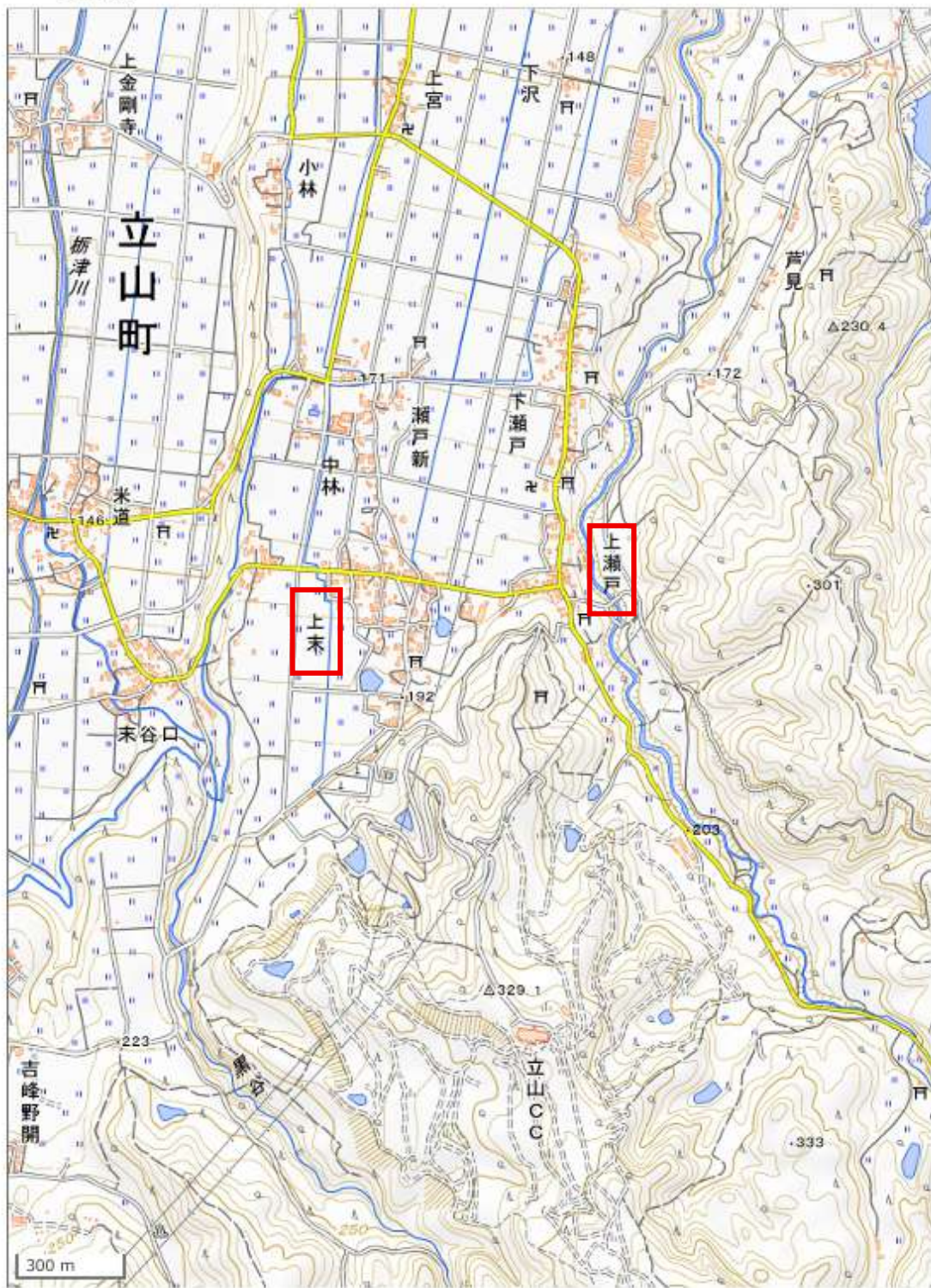
え、植木鉢・水甕・イワなど多種多様な製品が生産されている⁽⁷⁾。このように長期にわたって、焼物を生産することができた理由として定塚は「一帯に大量の良質陶土があること、背後に山地をひかえていて燃料の薪木が得られやすいこと」、「藩の産業保護政策によって専業権が認めら」れていたこと、さらに、「村全体が組織的に生産に従事」していたことを挙げ、胴窯の事例から窯業と農業とが相互扶助的に結びつき、江戸時代には、村全体が農陶両立で窯業生産に従事していたことを示している⁽⁸⁾。専業陶工が登窯、一般農民が胴窯を操業していたという説は、近年の調査で否定されている⁽⁹⁾が、元禄時代、越中・加賀・能登地方での冬場の稼ぎ方を郡村別にまとめた『農隙所作村々寄帳』では「一、瀬戸焼仕候 神田村宗右衛門与下 下瀬戸村 同 瀬戸新村 町袋村平助与下 上瀬戸村」⁽¹⁰⁾とあり、当時から農業の副業として陶業が知られていたことが理解できる。また、池田城の落人が伝えたと言われ、現在、立山町の民俗芸能に指定されている米道踊の一節や中新川郡上市町地方の糸くり歌の一節に瀬戸のロクロが唄われている民俗事例⁽¹¹⁾から、越中瀬戸焼が周辺地域の人々の中でも広く知られていたことが理解できる。越中瀬戸焼の流通については、西は石川県加賀市八間道遺跡、南は岐阜県飛騨市江馬氏館跡、東の上越市春日山城跡から、北の北海道上ノ国漁港遺跡まで分布しているが、17世紀前半では、金沢市～上越市までの範囲が中心で、それ以遠は点的に分布している。そして、幕藩体制の整備による、陶器生産体制の再編により、17世紀後半から18世紀にかけて流通範囲が減少し、県内一円が中心となる⁽¹²⁾。

越中瀬戸焼は「一見藩窯の如く見られるが、窯跡出土品や伝性する越中瀬戸を見ると一般住民の日用雑器の方が量産されていて、越中国内の民需に応じた窯業地に発展したもの」⁽¹³⁾とされており、明治維新による廃藩によって大きな打撃を受けたものの、その後なお数十年間は、骨瓶やイワ⁽¹⁴⁾等の生産が行われた。しかし、交通網が整備され、安くてきれいで堅牢な陶磁器が大量に流入したことにより⁽¹⁵⁾、大正期頃には、ほとんどの窯が閉窯することになる。

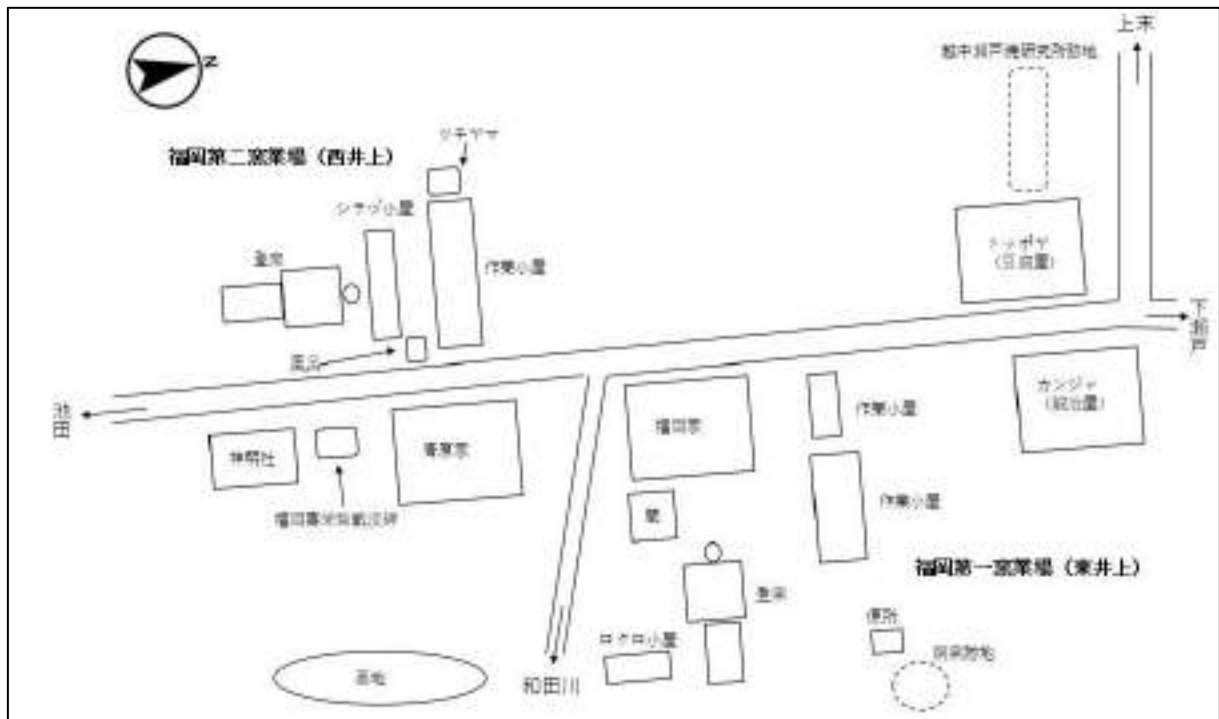
越中瀬戸焼の陶業が衰退する一方、明治時代には防火と美観の面から粘土瓦の需要が増加し、明治初年に、従来、越中瀬戸焼の窯であった上瀬戸の武右衛門窯・七兵衛窯・善太郎窯が瓦専業窯に移行する。その後、明治40(1907)年には沢永久左衛門の窯を初めとして、上末でも瓦製造が行われるようになる。大正・昭和にかけて、機械化・石炭の導入等の近代化がはかられ、昭和30年代には瓦工場数21、従業員百数十名に達し、富山県でも代表的な瓦産地にまで成長する(図2・写真1)。昭和30年代後半頃から、燃料効率の面から従来の登り窯を改良窯やシャトル窯、トンネル窯へと切り替えていくが、昭和40年頃より、瓦の需要減少や県外産品に押されるようになり、工場閉鎖が相次ぎ、昭和60年代にはすべての瓦工場が閉鎖し、現在は瓦製造から転業した施工業者が数軒存在する⁽¹⁶⁾。



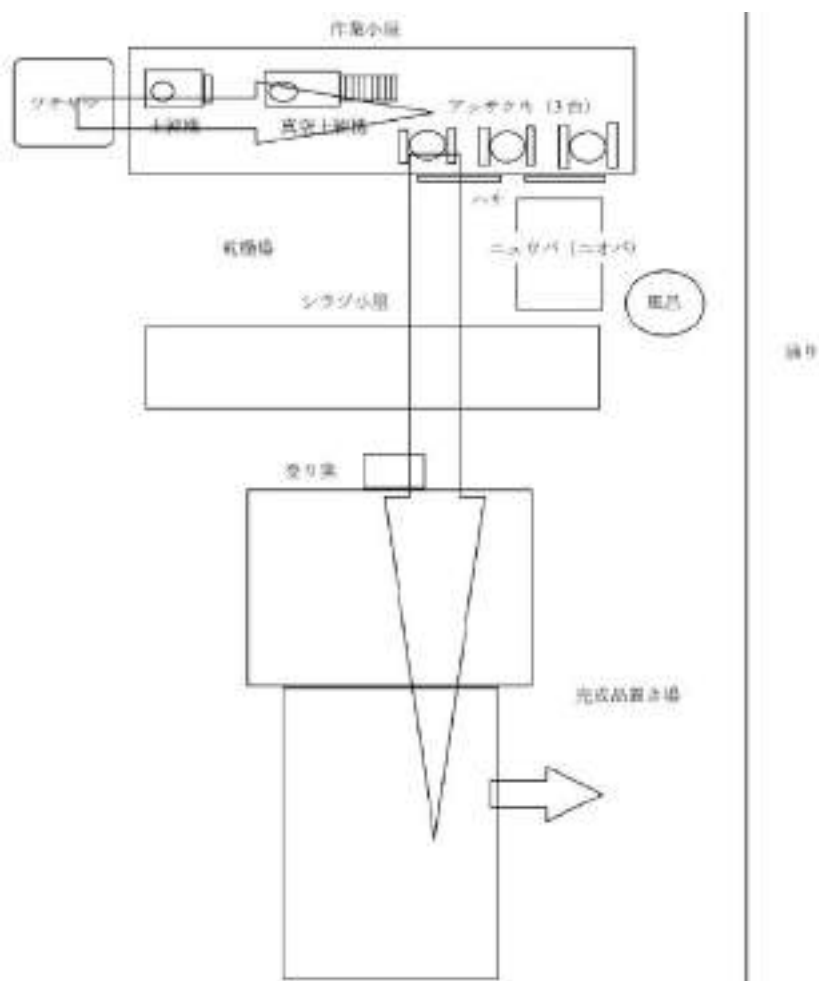
【写真1】上瀬戸、上末の瓦工場（福岡孝光氏提供）



【図1】上瀬戸、上末（国土地理院地図より。赤枠は筆者追加。）



【図3】福岡瓦工場と周辺の配置図（筆者作成）



【図4】福岡第二窯業場（筆者作成）

矢印は粘土（瓦）の動線を示す。

き継ぐ。昭和初期には十数名の職工が当工場で瓦生産に従事していた。昭和 18 年頃から 2 年間程度、不二越の溶鉱炉用の耐火煉瓦を製作した。終戦後、福岡第一窯業場は柴草信次に、第二窯業場は城川範之に 5 年間の契約で貸した後、再び作光が引き継いだ。作光が工場を貸した理由としては越中瀬戸焼の復興のためと聞き取りをしたが、実際はその時期に復興活動をやめており、村会議員となっていることから政治活動に専念するためとも考えられる。昭和 27 年から作光の子である孝光氏が引き継ぎ、昭和 45 年頃まで工場での瓦生産を行った。

(2) 工場の配置図

瓦工場は既に閉鎖され、工場建屋は既に解体されているため、聞き取り調査から昭和初期～中期の配置及び工場建屋内を再現した（図 3・4）。

4 福岡瓦工場での生産活動

上末・上瀬戸の瓦工場では昭和 30 年代頃まで登り窯によって、釉薬瓦を生産していた。瓦の流通範囲は、中新川郡全域、下新川郡黒部川以西から上新川郡東岩瀬方面、及び富山市で、昭和初期において、上段村内唯一の工業であった。昭和初期～昭和中期の福岡瓦工場の瓦生産について記述する（写真 2・3・4）。



【写真 2】福岡第二窯業場（福岡孝光氏提供）



【写真 3】福岡第二窯業場（福岡孝光氏提供）



【写真4】福岡第二窯業場（福岡孝光氏提供）

(1) 採土

採土、土の運搬は瓦工場の職工や小遣い稼ぎによって、行われた（写真5・6）。上末、上瀬戸では、ほとんどの土地で粘土が採れ、「村内で掘っていないのは、家と工場が建っている土地ぐらいである」と言われるほどであった。農家に金を払って、一時的に借りた田や工場が所有している土地や山の露頭などから粘土を採った。ただし、山の露頭からは粘土が多く採れず、石等が混じっていたため採土の頻度は低かった（図5）。田での採土では、表層の黒土を90cmほど掘ると、粘土層が現れた。粘土層は場所によって異なるが、90～360cmほどの幅があった。約4m四方を2名でケンズコウ（先端がとがったスコップのこと）を使って掘り出し、黒土は横にためておく。90cmほど掘ると、同時に運搬する者が登り降りできるように隅に階段をケンズコウを使って作る。運搬する者は藁で作った背中当てをつけ、運搬道具であるツンプリを背負ったまま階段を降り、粘土を入れ、粘土を担いだまま、工場内のツチャマ（粘土を保管する場所）まで運んだ。ツンプリは、マンサクの木と藁縄で作った籠状の運搬道具で、冬のワラシゴトの際に工場の職工たちが製作した。工場から採土場所が離れている時は、昭和30年頃まで農家から馬と馬車を借りてきて、運搬に使用することもあった。福岡瓦工場では農家のヒサダ、モリ、ナカガワ、マルヤマから馬を借りた。昭和20年頃までは、近隣の村々の子どもや女性も小遣い稼ぎとして、粘土の運搬を行った。採土は男性2名で行い、運搬は5～6名で行う。男性はケンズコウ3杯、女性は2杯、子どもは1杯を基準に運んだ。1杯は約10kgほどである。昭和30年頃になると、一輪車などが使用されるようになり、その後はベルトコンベアや自動車による運搬も行われるようになった。一輪車を使用する際は、田に木の板を敷いて一輪車が沈まないようにした。写真には自動車が横に写っていることから、昭和30年以降に撮影されたものだろうか（写真7）。自動車は穴の中までは入ることができないため、ツンプリで自動車そばまで運搬する。粘土を掘り終わると、横にためた黒土を戻し、再び田として利用した。



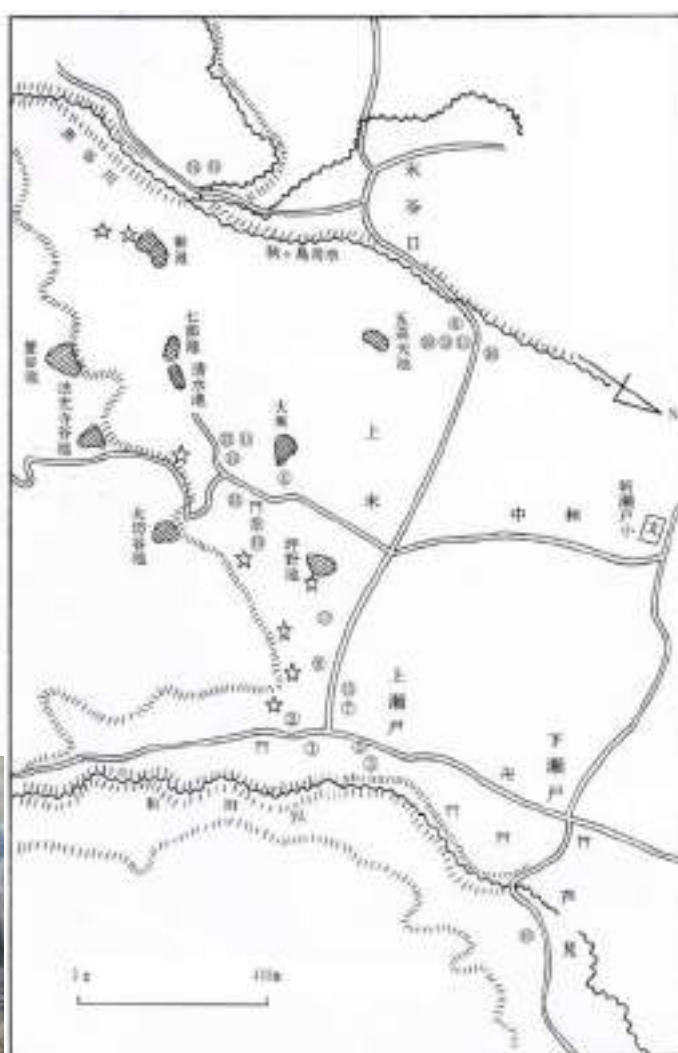
【写真5】採土（福岡孝光氏提供）



【写真6】採土（福岡孝光氏提供）



【写真7】採土（福岡孝光氏提供）



【図5】瓦工場及び粘土採取場の分布

（越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988『越中瀬戸一発祥四百年記念誌一』所収越中瀬戸瓦窯分布図より転載、立山町 1965『上末地区の瓦粘土について』及び聞き取りをもとに一部修正）

(2) 土練

ツチヤマから取った粘土を足で踏み込む、ツチフミの作業を行った。ツチフミは2名で行った。粘土に水をかけて、柔らかくし、つきたての餅より若干固めの柔らかさになるまで踏んだ。

最寄り駅となる立山軽便鉄道立山駅（現在の岩峠寺駅）の新設により、大正時代後期、瓦工場に機械・石炭が導入された。鉄道によって、機械・石炭が立山駅に降ろされ、馬車によって工場まで運ばれた。

大正時代後期から、粘土は、土練機を使用して練った。土練機は愛知県碧南市のマツシタ工場から購入した。土練機の作業では、土を土練機に入れる者、土練機から出てきた粘土を真空土練機まで運ぶ者の2名が必要であった。土練機の上部から入れた粘土は、下から押し出される。その練られた粘土を手で細長く伸ばし、U字型に曲げて折れなければ、よく練られている証拠であった。崩れたり、折れたりすると、もう一度、土練機に入れ直した。

(3) 荒地製作

瓦の大きさに切りそろえた粘土板である荒地を製作する。荒地製作をアラジダシと呼んだ。はじめにマスヅクリを行う。ツチフミの作業をした2名が行う。踏んだ粘土を手や板を使って、長方形にする。アテガイボウ（定規型の道具）とタケベラを使って、線を引く。1つの長方形を横に2等分、縦に瓦の厚さ30枚分できるように線を引く。切る時は針金を2名で持って横に切る。次に縦に切り、切れた粘土を地面に置き切断を繰り返し、荒地を製作する。

大正時代後期から、荒地製作には、真空土練機を使った。真空土練機に粘土を入れる者、荒地を切り、地面に並べる者、荒地を運ぶ者の3名が必要であった。真空土練機は1分間に3枚程度を切断できた。土練機で練った粘土はそのままと固く成形に適さず、また、乾燥時に割れてしまう恐れがある。そこで、真空土練機を使って、もう一度練り直すと同時に、空気を抜く必要があった。

(4) 成形

荒地を瓦の形に成形する。成形の作業を「瓦を切る」と言った。大正時代以前はすべての瓦が手作りで製作された。荒地を4枚ずつ成形担当者のところまで移動させる。成形は専門の職工が地面に座った状態で行う。ロクロのように回転するキガタ（木型）（写真8）を石の台の上に差し込んで使用した。地面に座った状態で行い、まず、キガタに荒地を置き、バンバと呼ばれるたたき棒で瓦の形にし、ユミと呼ばれる道具で余分な粘土を切り取った。切り取って余った部分は再び荒地用粘土に利用した。ユミで切り取った後、鹿の皮を水にひたしたナデカワでこすり、手を切らないように面取りをした。成形すると、キガタを石の台から取り外して、荒地を横の地面に並べた。並べる際にはコツが必要であり、失



【写真8】昭和30年代頃の瓦工場内部（『新瀬戸地区のうつりかわり』より転載）
天井に吊り下げられている道具がキガタ。

敗すると、ドミノ倒しのように崩れ、使いものにならなくなってしまう。10枚程横に並べたら、成形担当者はキガタと一緒に後退して、作業を繰り返した。1日300枚製作するのが一人前であった。成形の際は加工も一緒に行う。ユキドメ等を接着させる際はガサカキと呼ばれる竹製の櫛状道具で接着面両方に傷をつけ、水で溶かした粘土を接着剤がわりに使用し接着させた。

大正時代後期より、成形機を使用した。成形機での成形は、多くは女性の職工が行っていた。しかし、大正期に近代化（機械化）された後でも、ヒラガワラに比べて、マルなどの需要が少ない瓦は昭和20年代頃まで、キガタを使い、手作りで成形が行われていた。

土練、荒地製作、成形の作業は作業小屋の中で行われ、それぞれ分担して作業が行われていた。この3種類の作業が効率よく行えるよう、作業小屋の外にあるツチヤマから作業小屋内の土練、荒地製作、成形まで粘土（瓦）の動線が一方の動きになるように機械が設置されていた（図4）。機械の修理は上瀬戸の成瀬鉄工所で行われた。作業小屋は吹き抜けの状態で、雨が降ると、小屋に簾をかけて、雨が横から入るのを防いだ。

(5) 鬼瓦の製作

鬼瓦はスミオニ、チュウオニ、クラオニ、ミツギリ等の種類があった。スミオニ、チュウオニはノシ3段、クラオニは4～5段、ミツギリは9段の大きさであった。ミツギリはその大きさから3分割でき、それぞれを針金で固定した（写真9・10）。鬼瓦は手作りの成形と石膏型での製作の2種類が行われていた。鬼瓦製作の際の石膏型技術の流入については、当地では昭和初期頃と言われており、それ以前はすべて手作りの成形が行われていた。

手作りによる鬼瓦の製作にはかなりの技術が必要であり、当地には鬼瓦を専門に製作する職工が数名存在した。手作りの成形は、マスヅクリによって製作された荒地を、鬼瓦の形に切断して、立体的な形へと接着させる。細かい細工に関しては、別々に成形し、徐々に接着させたり、掘り上げたりする。道具としては、切断に使用するユミや細かい調整を行うタケベラ、面取り用のナデカワ等が使用された。石膏型の技術が流入した後でも、ナナツギリ等の神社や寺の鬼瓦は特注品で、手作りの製作が行われた。

石膏型製作は、まず、手作りによって製作された鬼瓦の正面を上にしておき、石膏の厚みを考えながら、粘土で壁を作り、壁の内側に石膏を流し込む。移動させるときや保管の際の利便性を考えて、大型の石膏型はノコギリなどで切断し、数個に分けた。

石膏型による鬼瓦の製作方法の流入によって、比較的簡単に誰でも鬼瓦を製作できるようになり、大量生産が可能になった。ただ、石膏型での製作でも上手下手があり、下手な者が行くと、粘土と石膏型の間に空気が入り、その分だけ後で粘土を詰め直す手間が余分にかかることになった。スミオニ、チュウオニなどの小、中規模の鬼瓦の製作は、まず、石膏型に灰等を入れ、粘土板を石膏型の中に入れた。石膏からはずし、粘土が乾く前に、ヘラ等を使って、加工する。クラオニ、ミツギリなども基本的に製作工程は同じであるが、石膏型がいくつかに分かれているため、藁縄できつく締めた後、製作にとりかかった。クラオニは1名で1日5つほど製作した。石膏が粘土の水分を吸ってしまい、これ以上の数を製作すると石膏型が破損する恐れがあった。ミツギリ以上の大きさになると、石膏型が流入しても1日1個が限度であった。



【写真 9】ミツギリ（福岡孝光氏提供）



【写真 10】ミツギリ（福岡孝光氏提供）

(6) 乾燥

荒地の乾燥は普通 1 週間、梅雨時には 20 日ほどかかった。乾燥方法は基本的に 3 種類あった。30cm～40cm 間隔で地面に縦に置いて乾燥、木のハサでの乾燥、シラヅ小屋の中の乾燥棚での乾燥の 3 種類である。地面で乾燥させる際は、朝一番（7:30 頃）に地面に置く。1 日に表と裏を交互に反転させることで、全面が乾く。朝露等で地面が乾いていないときはムシロを敷いて干した（写真 11）。ハサでの乾燥の際は、10 段ほどのハサに 2 人 1 組、手作業で瓦を設置した。多くの人数が必要であり、また、大変な作業であったので、他の乾燥方法に比べ、行う頻度は少なかった。ハサは工場内に常設されていた。屋外での乾燥の最中、雨が降ると、工場の職工は作業を中断して、全員で荒地を急いで屋内に入れた。一方、シラヅ小屋は吹き抜けだが、屋根付きで雨を防ぐことができた（写真 12・13）。乾燥の多くはシラヅ小屋の中の乾燥棚で行われた。乾燥棚は 4 段ほどであった。しっかり乾燥させると荒地の色が茶色から白色に変化して、シラヅとなる。上記の乾燥方法の他に登り窯の上で乾燥させることもあった。上記 3 つの方法である程度乾かしてから、登り窯の上で余熱を使って乾燥させた。乾燥が終わると、肩に 4 枚ほど担いで登り窯の脇まで運んだ。

乾燥の際、一番気をつけなければならなかったのは、天気であった。荒地に雨が降ってしまうと、その荒地は使うことができなくなってしまう。雨が降るか降らないかは、西の空に雲があるかどうかで判断した。また「立山の方に虹が出れば晴れ、西の空に虹が出れば雨が降る」と言われていて、このようにして翌日の天気を判断していた。



【写真 11】瓦の乾燥（福岡孝光氏提供）
写真の奥は副業で行っていた椎茸栽培用の木



【写真 12】福岡第二窯業場のシラヅ小屋（福岡孝光氏提供）



【写真 13】法要（福岡孝光氏提供）
奥に見えるのが福岡第二窯業場のシラヅ小屋

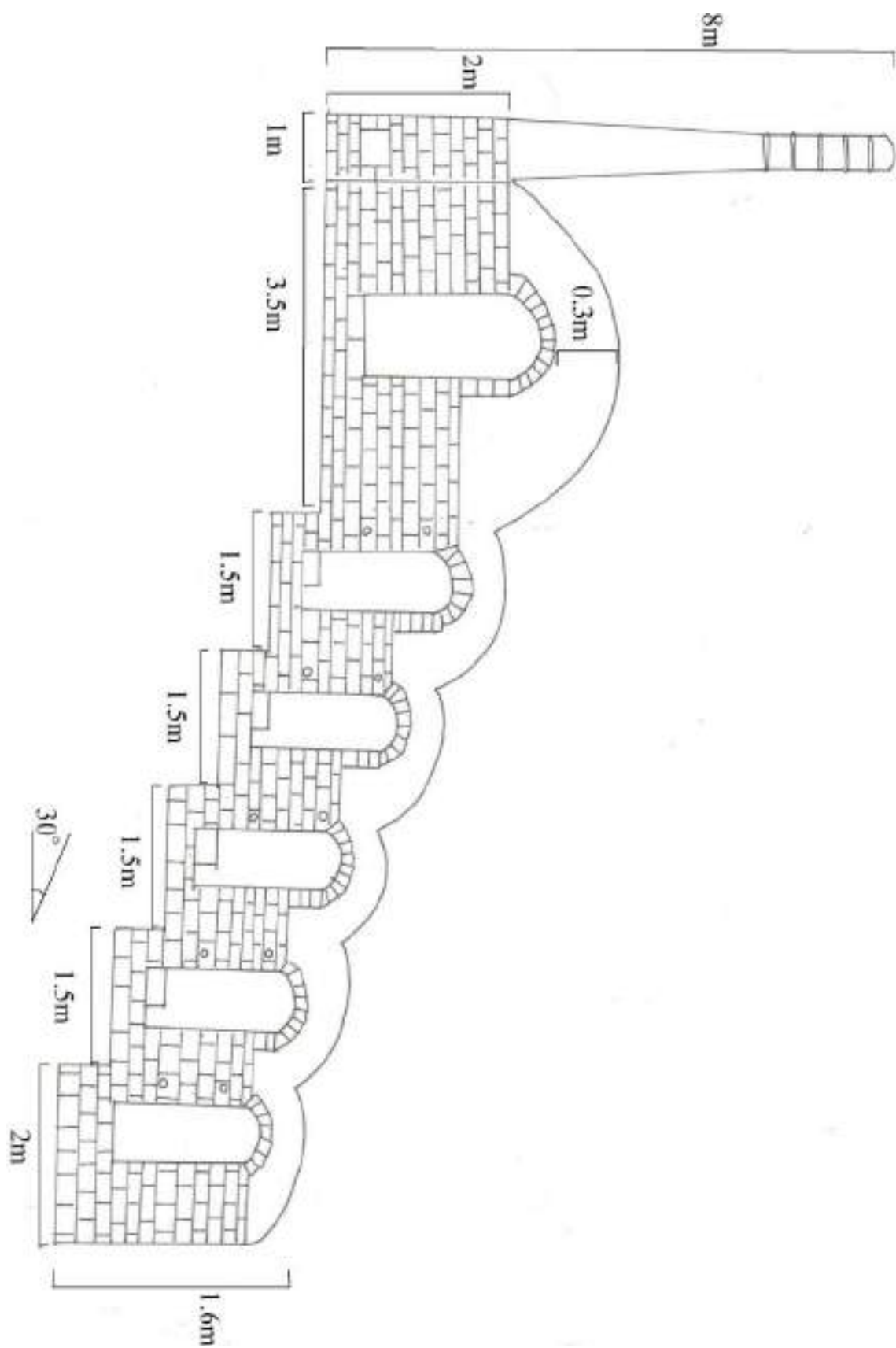
(7) 窯入れ

福岡瓦工場の登り窯の構造を示した（図6・7）。登り窯は最上部の素焼きの部屋とその下のいくつかの本焼きの部屋からなる（部屋は登り窯を構成するなかの1つの窯のこと、袋ともいった）。素焼き部屋は、本焼き部屋に入る瓦をすべて入れることができる大きさで、約80坪（約4000枚）程の瓦を入れることができた。素焼きの部屋に瓦を積むことをスヤキヅメ、本焼きの部屋に瓦を積むことをホンヅメと呼んだ。スヤキヅメには5～6時間ほどかかった。スヤキヅメは瓦を6段積み、その内下の4段はヒラガワラであり、列は11列であった。一方、ホンヅメは1～3段目にヒラガワラを積み、その上にその他の役瓦を積んでいく。鬼瓦がある場合は1、2段目にヒラガワラを積み、その上に鬼瓦を積んだ。1段目はヒラガワラ13枚を立て、次の部屋に通じる穴（サマ孔）の側に煉瓦を置く。この煉瓦の部分は最も焼きにくく、瓦は置かなかった。2段目、3段目はヒラガワラ17枚をそれぞれ積む。合計12列積む。穴（サマ孔）は1部屋に13個あいている。積む前に瓦の下にマクラ（30cm×20cm、厚さ15cm）を敷く。瓦の下に幅3cmほどの溝（11列）があくようにして積む。この溝をヒノミチと呼び、部屋全体に熱がいきわたる工夫である。ちなみに、マクラは瓦のマスヅクリと同じように製作し、天日で干したもので、釉薬をかけずにそのまま素焼きして作られた耐火煉瓦である。昭和20（1945）年頃まで製作されたが、後に小矢部市石動から購入することになる。福岡瓦工場で製作されたマクラは耐火度が低く5年程度が寿命であった。ヒラガワラを積む際は、セン（写真14）とサンと呼ばれる緩衝材を瓦と瓦の間に差し込む。センは4cm×1cmほどの円錐状のもので、工場で働く女性の職工や男性職工の妻たちが粘土で製作した。積めた瓦と瓦の上部に2つずつ付ける。さらにその上にサンと呼ばれる30cmほどの細長い粘土製の棒のようなものを敷く。サンは真空土練機で作った荒地を細く裁断して作った。センとサンは瓦が焼きあがると金槌などで壊し、瓦のみを回収する。さらに、薪・石炭が入る溝にドストルを設置する。ドストルは空気を取り入れ、火を効率よく燃焼させるために設置する。石炭が導入されてから設置された。本焼きの第1室は薪が入る溝が大きいので35cm、他の部屋は15cmと、溝の大きさに合わせたドストルを設置した。ドストルもセンと同じように女性たちが粘土で手作りした。ドストルは薪・石炭などの燃料が乗るため、真ん中を厚くして、強度を高めている。ドストルをたくさん組み合わせて窯に設置することで、ドストルの下に空間ができ、そこから、窯の外に伸びるパイプから空気が送られる。また、その空間には、燃料のカスなどが落ちる。特に石炭のカスはたまりやすいので、焼成後の掃除は必須であった。瓦を積み終わると、窯の出入り口にマクラを積み、隙間に粘土を塗って密閉した。

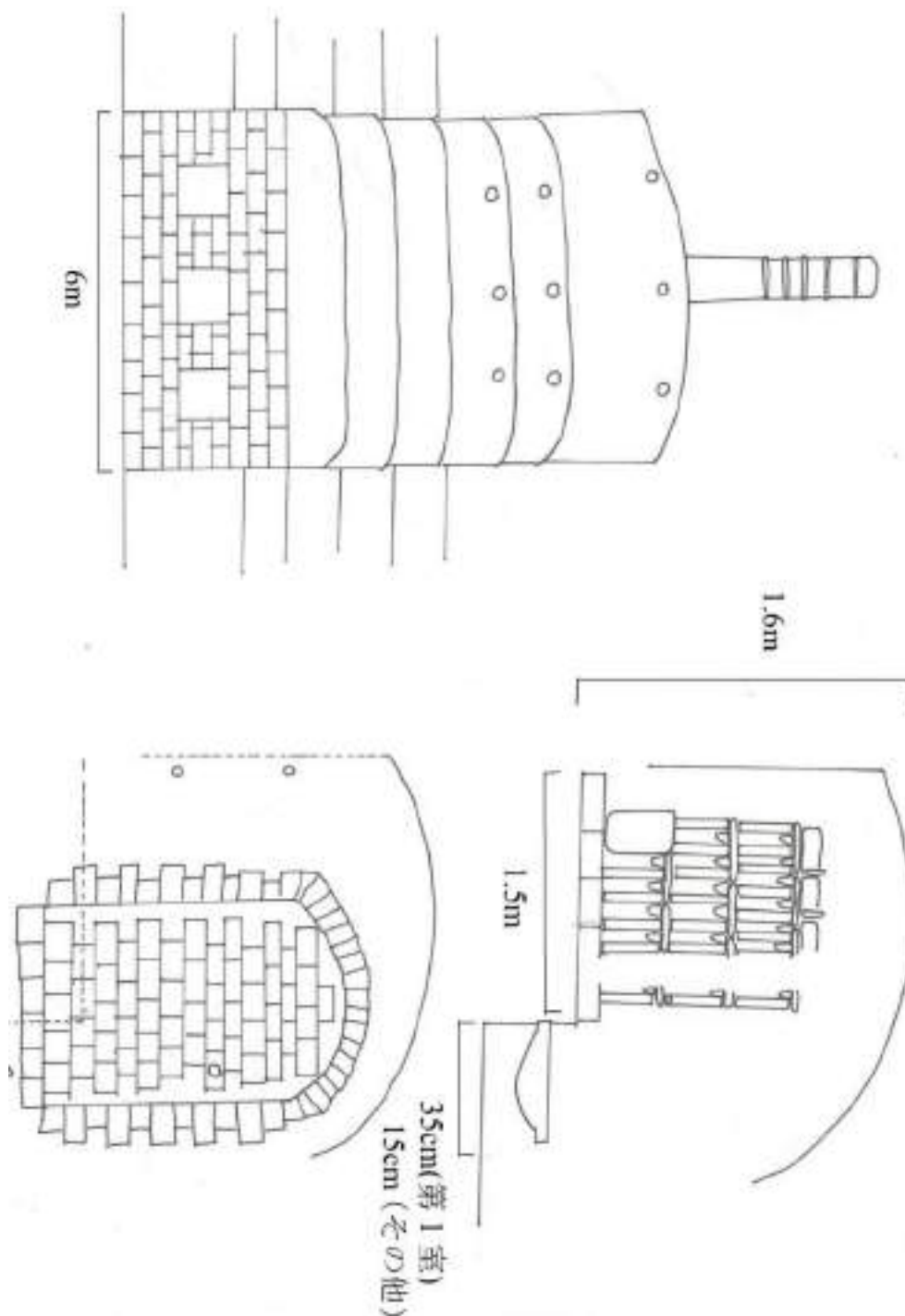
1年間の仕事が終わっても素焼き窯には瓦を残して置き、来年すぐに焼成をはじめることができるようにしておく。



【写真14】焼成後のセン（筆者撮影） 長さ約4cm



【図 6】 福岡第二窯業場の登窯（筆者作成）



【図7】福岡第二窯業場の登窯（筆者作成）

(8) 焼成

瓦の焼成作業をカマタキと呼んだ。素焼きを行った瓦を取り出して、窯の脇に置いた釉薬の入った桶にその瓦をつけ、本焼きを行って、瓦は完成する（写真15）。石川県の名山と月尾から粉末状の釉薬を調達し、水にとかして使用した。福岡以外の瓦工場は県内のアサノ等から釉薬を調達した。本焼き部屋第1室には、前方に火床は3つ、40cm四方の穴があいていた。また、本焼き部屋の両脇には1つ焚口がついていて、直径20cmの丸い穴であった。窯の側面には、焚口に加え、焚口の下部にある空気取り入れ口、そして、焚口に最も遠い所に、イロミに使う直径5cmほどのノゾキアナがいくつかあいている。窯の内部には部屋と部屋の上に13個穴（サマ孔）があいていて、この穴から炎が上部の部屋へと移動

する。穴は縦 30cm、横 15cm の長方形の穴で間隔は瓦 1 枚分の大きさごとにあいている。火床、焚口には取り外しできるような粘土製の蓋がつき、燃料を入れる際は、蓋を外した。焼成作業は朝 4 : 00 から開始する。4 : 00 ~ 14 : 00 まで 10 ~ 15 分間隔で燃料を入れた。14 : 00 ~ 19 : 00 の間は第 1 室の焚口から 10 ~ 15 分間隔で燃料を入れた。その後、第 2 室 19 : 00 ~ 24 : 00、第 3 室 24 : 00 ~ 5 : 00、第 4 室 5 : 00 ~ 10 : 00、第 5 室 10 : 00 ~ 15 : 00 と、同間隔で 10 ~ 15 分間隔で燃料を入れた。

上末上瀬戸で生産された瓦は釉薬瓦である。本焼きでは、部屋が 1200℃に達しなければ、瓦がしっかり焼くことができず、釉薬が溶けない。炎の色が青白くなることも温度を見る目安だが、口（サマ孔）付近の瓦は最も焼けにくいので、この瓦がしっかり焼けているかどうかを確認する必要がある。そこでノゾキアナから 1m 程の長さの木の棒を窯内部へ放り投げる。その木は窯内部が高温状態なので、自然発火するが、燃えた際の光が瓦にあたって反射すれば、十分焼けていることになり、次の部屋に燃料を燃焼させる。燃焼が不十分であれば、再度焼き直しを行う。ノゾキアナから片目をつぶって、瓦の焼け具合をのぞき込む。十分焼けていれば、瓦が光沢しており、焼成が不十分であれば瓦がくすんだ色になるという。この確認作業のことをイロミと呼んだ。このイロミを行う者は、同時に燃料を窯に入れる作業を担っており、基本的に窯の両脇に 2 名必要である。そのうち、1 名は工場の経営者である工場主（オヤカタ）であり、もう 1 名はカマタキ専門の男性職工（ヤキコ）が行った。福岡工場のヤキコは小沢善三郎が務めた。小沢は窯入れとカマタキを専門とし、瓦製造は行わなかった。オヤカタとヤキコは、ノゾキアナから光の反射具合を見て、焼きあがりを確認する。燃焼後は窯が熱いため、1 ~ 2 日間そのままにしておく。

焼成の際、燃焼された空気が部屋内に対流し、煙突から煙が出ないことがある。その状態が続くと空気が窯の中に入っていかず（酸素欠乏）、火力が上がらない。そこで、煙突下部の焚口で、火を燃やし、対流している空気を強制的に導き、煙突から煙が出るようにした。この作業のことを「火を呼ぶ」と言い、イロミ同様、ヤキコまたはオヤカタが行った。曇りの日や梅雨時など、湿気の多い日は煙がでないので、火を呼ぶ作業を行った。

福岡瓦工場以外の他の工場でもヤキコは大抵 1 名でオヤカタと 2 名で焼成作業を行っていた。特定人物が行う理由として①責任がある作業、②1 日中の過酷な仕事なためとのことである。

燃料は薪、石炭を使用した。薪は松を使用し、1 回の焼成で 600 束は必要であった。薪は下沢のマツウラ等、山仕事従事者から買い取り、工場内のニューバ（ニオバ）に運んだ。カマタキはノゾキアナか



【写真 15】釉薬の運搬（福岡孝光氏提供）
肩に担いでいるのは釉薬が入った桶

ら薪を窯内部に均等に投げ入れる必要があり、熟練した技術が必要であった。一方、石炭は大正時代より使用されるようになり、北海道から輸入された石炭を富山市岩瀬から鉄道によって運んだ。石炭だけで瓦を焼く場合、1回の焼成で2t半くらい必要であった。石炭は薪より火力があがりやすいが、燃えカスがよくて、掃除が必要であるため、通常は薪と石炭の両方を燃料とした。

登窯は高温になるため、大雨や台風等の天候が荒れているときは焼成を行わなかった。地震があった時などは窯が崩れて村が火事にならないか心配したという。

(9) 窯出し

窯の熱が下がるまで、数日間そのままにしておくことが基本であるが、登り窯は毎回、冷えた状態から温度をあげるのは手間がかかるので、工場によっては少くとも熱くても我慢して、瓦を取り出して、すぐ次の焼成作業を開始するところもあった。福岡瓦工場では1日冷まして窯出した。ハンマーなどを使って、窯の出入り口を崩し、窯の中に入った。窯の中は40℃以上の温度で大変暑く過酷な作業で、ワタの入った大きな手袋をはめて作業をした。焼けた後、センなどが瓦にくっついているので、金槌で叩き落とし、5枚ずつ瓦を取り出した。熱いので、職工数名で交替して作業を行った。瓦は工場の脇に5枚ずつ藁縄で縛って積んだ。

焼成時に失敗し、破損した瓦は工場の敷地に埋めたり、近くの和田川（コクロ）に廃棄したりした。

(10) 出荷

瓦は立山町や富山市を中心に販売された。馬で運んだが昭和20年代後半から自動車で運搬した。各地で瓦のタノモシ（頼母子講）が行われた。タノモシでは10～20名程度で瓦を購入したい者が集まり、瓦のオヤカタも含めて酒を飲んだ。講の中から世話人を決め、1～2か月に1回程度、17:00頃に世話人の家に集まり、22:00頃まで続いた。瓦の購入・葺き替え順番は瓦の更新時期等を考慮して話し合いで決めた。福岡瓦工場では流杉・大島・下富居・荏原、滑川市柴、立山町附近に出荷した。瓦葺きの作業も福岡瓦工場が担っており、工場では専門の瓦葺きとして3名程度人を雇っていた。瀬戸・芦見・中林の人で瓦製作を行うことはなかった。

(11) 職工たちの生活

次に職工たちの組織形態や生活等を中心に記述する。瓦工場のトップは工場主（オヤカタ）であり、工場の経営者であり、上段村瓦製造業組合の組合員である。福岡喜三郎、作光、孝光がオヤカタである。オヤカタは瓦工場での作業工程を手作りの鬼瓦製作以外、すべて把握している。オヤカタは「工場の作業で最も責任がつく」カマタキをヤキコとともに行う。親方は代々、親から子へと引き継がれていく。オヤカタの子は学校を卒業すると、瓦工場の職工として働き、年輩の職工たちから、作業内容などを教えてもらい、技術を修得していく。ただし、鬼瓦製作の技術は教わらなかった。その後、オヤカタが引退すると、子がオヤカタとなる。

オヤカタの下に工場長がおり、作業の責任者となっていた。作光、孝光時代には福岡仙次郎が工場長を務めた。福岡仙次郎は鬼瓦を製作することはなかった。毎朝、工場長によって職工たちは今日の仕事内容を指示される。

工場長のもとで働く職工のほとんどが上末、上瀬戸、またはその周辺で生活する人々であり、3種類に分けられる。瓦生産のみに従事する者、瓦生産に加え、鬼瓦をテヅクリで生産する者、カマタキ作業を行うヤキコの3種類である。瓦生産に従事する者は機械を動かし、土練や成形を担当する。瓦工場働く女性はすべて、瓦生産のみに従事し、カマタキや鬼瓦の生産をすることはなかった。ヤキコは親方とともにカマタキを行う。1昼夜窯を見ていなければならず、工場の職工の中でも特に過酷な作業に従事する職工であった。そのため、工場では優遇された存在であり、工場にあった風呂に入る際はオヤカ



【写真 16】 福岡瓦工場の職工（福岡孝光氏提供）



【写真 17】 福岡家家族と瓦職工（福岡孝光氏提供）

瓦の種類	値段（ヒラガワラ〇枚分）	備考
ヒラガワラ	1 枚	棧瓦のこと
カラクサ	2.5 枚	
ユキドメ	2 枚	雪止がついた棧瓦
ケラバ	3 枚	右（大ケラバ） 左（小ケラバ）
ノシ	1 枚	棟に使う
マル、ガンブリ	3 枚	棟に使う
メド	メド3枚でヒラ1枚	棟に使う
ミツギリ	不明	鬼瓦の一種
クラオニ（オニガワラ）	4 5 枚	鬼瓦の一種
チュウオニ	不明	鬼瓦の一種
ショウオニ	不明	鬼瓦の一種
スミオニ	不明	鬼瓦の一種

【表 1】福岡瓦工場の瓦の種類と値段（筆者作成）

タの次に入ることができる職工であった。鬼瓦を生産する職工はテヅクリの鬼瓦、石膏型製作に従事した。特に手作りでの鬼瓦作りには、相当な技術が必要であり、上末・上瀬戸でも、鬼瓦生産の技術を体得していなかった。その技術は親から子へと引き継がれていく。

当地の瓦職工の中には、経済的事情等から別の瓦工場へ移動したり、別の仕事に転職したりする者もいた。これは、瓦生産がかなり重労働であったためと言われているが、そのような状況の中でも、瓦工場のオヤカタの家族やオヤカタと親戚関係にある職工は、長年にわたってオヤカタのもと瓦生産に従事しており、当地の瓦工場は家族的・親族的な経営が行われていた（写真 16・17）。

工場で瓦や鬼瓦を手作りする際に使用するガサカキやヘラなどの道具はその作業を行う職工が所有しており、自分で製作したものであった。一方、キガタは道源寺の大工サカイに作ってもらったもので、その管理は瓦工場が行っていた。大工はキガタの他に登り窯の建屋や作業小屋などの工場の施設も建設した。

瓦工場では、同時に屋根葺き作業も担当した。生産した瓦を、馬につけたニグルマで、運搬する。昭和 20 年代後半は車で運搬するようになった。家に到着すると、瓦棧を屋根に打ち込みながら、瓦と瓦棧を銅線で結びつけて葺いた。当時はヨンキュウバン（四九判）と呼ばれる瓦を使用しており、1 坪 49 枚葺いた。だいたい一軒 80 坪ほどだったので約 4000 枚の瓦を葺くことになる。屋根葺きにはその家の近所の人たちも手伝いにきており、屋根葺き職工は作業を行うとともに、彼らに指示を行った。

瓦の値段はヒラガワラ何枚分という計算を行った（表 1・写真 18～20）。ヒラガワラの値段は瓦製造業組合が決めた。

職工への賃金に関しては、昭和 20 年代以前は、瓦 1 枚いくらという具合に出来高払いで支払われており、このことをウケトリと呼んだ。ウケトリの頃は半期に 1 回、盆と暮れに賃金が支給された。ウケトリは出来高払いなので、夜も寝ずに仕事をした。その後、瓦製造業組合の指示で日給制に変わり、支給日も 1 か月に 1 回となった。鬼瓦の製作は他の職工に比べ給料が高かったが、石膏型が普及すると他の職工と同様の給料となった。鬼瓦手作りの頃はより給料が高い工場へと工場を移動していた鬼師だが、石膏型の導入により給料が一定となり、同一工場に定着するようになった。



【写真 18】カラクサ（筆者撮影）
※唐草模様は福岡瓦工場独自（模様右側は葺の鍵を表す）



【写真 19】スミオニ（筆者撮影）



【写真 20】ミツギリ、ライヨケ、クモ（筆者撮影）

日給制に変わったことと同時に、労働時間も決まり、7:30～17:00 までとなる。休憩時間は 10:00～10:30、12:00～13:00、15:00～15:30 の 3 回あった。

瓦工場は冬季間（1 月～3 月）休業する。その間、職工たちは、副業で行っていた稲作で出た藁を利用して、瓦を運搬する際に使用する藁縄などを作ったり、粘土を運搬するツンプリの修理などをしたり等、ワラシゴトをした。生産された藁縄やツンプリは瓦工場の所有物となる。また、登り窯の修理も、休業期間中に行う。登り窯を構成するマクラの寿命が 5 年程度であるため、修理は 5 年に 1 度行う。修理は工場で働いている職工たちで行ったが、特に昔から工場で働いている職工が中心となって、指導し、行った。まず、窯の天井部分を大型のハンマーで破壊する。そして、窯内部に木の棒と板を設置し、粘土を塗り直して天井を作った。板は木舞を藁縄でいくつも連結したもので、木の棒は丸太のようなものであった。1 つの部屋を 4 分割し、それぞれ 3 本の棒を設置した。木の棒と板は大工が作ったもので、持っていない工場は持っている工場に借りた。塗る粘土は新しい粘土と以前窯の天井に使用していた粘土を粉々に粉碎したものを混ぜて使用した。以前使われていた粘土を混ぜることで、天井がより強固になった。粘土を塗った天井は 2 か月間ほど乾かし、毎日、バンバと呼ばれる叩き棒を使って叩きしめた。また修理の際はマクラも新しい物に交換した。マクラを積む際は交互に積んでいく。その積み方を小口積みと呼ぶ。マクラの間に水で溶いた粘土を塗り、接着剤として利用した。修理が終わると支えとして使用していた木の棒と板を取り外した。

瓦の焼成で発生した煙によって、上末・上瀬戸は真っ黒になったと言われている。昭和初期～20 年代生まれの瓦職工たちによると、夏、寝る時に窓をあけておくと、翌朝起きたら、体が真っ黒であったということがよくあったそうだが、「お互い様」ということで、苦情を言う者はいなかったという。また、

職工たちにとって、工場から立ち登る煙は瓦を生産していることを意味しているもので、他工場の煙を見て、「あそこの工場の煙が上がっている、自分たちの工場もがんばらなければ」と労働意欲を高めた。しかし、昭和 40 年代後半になると、瓦工場の燃料に重油を使用する工場が増え、煙は有害なものとして、周辺農家などから苦情を言われることもあった。

登窯をもつ瓦工場では火事がたびたび発生した。火事によって登り窯が損壊する被害が発生した。登り窯は生活空間から離れた場所にあるため、人が死傷する被害はなかったが、火事になり登り窯を再建させている間は瓦を生産することができず、また、復興の費用（特に登り窯を保護する建屋の建設費）もかかり、経済的には大損害であった。焼成後、窯の温度を下げるため、数日間はそのままにしておくのが基本だが、前述した熱効率の問題や、瓦の出荷を早く行おうとするあまり、温度が十分下がっていないのに、窯を開けてしまう。その際にでた窯内部の余熱によって火が発生してしまう。火事の発生後、瓦組合員やその瓦工場で働いている職工やその親戚などが、火事の始末をするために、テツダイにきた。彼らは酒などを持ってきて、燃え残りの片づけなどをした。このことをカジミマイ（火事見舞い）と呼んだ。片づけが終わった後、工場のオヤカタがカジミマイに來た者に酒や食事などをふるまった。このように火事がよく発生したため、瓦のカマタキの際は窯に塩を播き、手を合わせて、祈った。信仰に関しては、昭和初期以降において、太子講などが行われていたことは確認できなかったが、福岡瓦工場には聖徳太子が描かれた掛け軸があったということから、昭和期以前は太子講が行われていたと考えられる。

5 福岡瓦工場と他地域の瓦生産との比較

前章では上末、上瀬戸の福岡瓦工場の生産活動について記述したが、本章では県内外の瓦工場と福岡瓦工場の生産活動を比較する。瓦生産地に関する調査報告書や市町村史には瓦生産の概要や歴史が記載されており、その記述から注目すべき事項を抜粋し比較することで、瓦生産活動の特徴及び各地域の関係性を見ていく。

(1) 砺波市の谷口製瓦

富山県砺波市福山において明治時代に創業した谷口製瓦では昭和 20 年頃、土練機が導入された⁽¹⁹⁾。福岡瓦工場は大正時代に機械導入が行われており、谷口製瓦より早い時期に行われた。上末・上瀬戸での導入の背景は前述したように工場周辺の交通機関の発達が大きく影響していた。

谷口製瓦の瓦製作道具は近隣の桶職人、石膏型は福井県の山東戈治氏、鬼瓦は安念宗一郎氏が製作した。石膏型は注文すれば型を山東氏自らが考えて作ったため、工場側では細かな指示はしなかったという⁽²⁰⁾。福岡瓦工場では、キガタは近隣の大工、石膏型及び鬼瓦は当地の鬼師や瓦職工が製作した。どちらの工場も木製の製作道具は近隣の木工関係職人に製作を依頼している。一方、鬼瓦の生産について、谷口製瓦は外部の者に依頼しているが、福岡瓦工場では工場内の職工が製作しており、生産活動が工場内で完結している。

谷口製瓦での釉薬は当初、石川のタナベから調達した原料を配合して使用、後に射水の浅野（浅野化学工業株式会社）が大門で作るようになった釉薬を使用した⁽²¹⁾。浅野は上末、上瀬戸の瓦工場が釉薬を調達していたところと同一企業と考えられる。福岡瓦工場も石川県から釉薬を調達していた。

福岡瓦工場では製作道具は現存していないが、福岡孝光氏の聞き取り調査から、谷口製瓦と共通した道具を使用していたことが分かった。竹製の櫛状道具を「ガサ」（谷口製瓦）、「ガサカキ」（福岡瓦工場）、窯詰め用に瓦と瓦の間に挟む「栓」（谷口製瓦）、「セン」（福岡瓦工場）と呼称されており、同一の名称であることも確認できた。

焼成後の登り窯からの窯出しについては谷口製瓦では1週間冷まして取り出した⁽²²⁾。一方、福岡瓦工場が1～2日間冷まして取り出したとされ、焼成した瓦を冷やす時間に大きな差がみられた。福岡瓦工場でも1週間程度冷ます必要があったことは認識していたが、窯温度を上昇させる利便性と大量生産における効率性から早急な窯出しを行っていた。

(2) 魚津市・上市町の瓦工場

魚津市西布施黒沢の瓦工場は明治35年頃に能登からきた瓦職人が焼き始めたのがはじまりとされる⁽²³⁾。上中島村の下椿瓦工場では粘土運搬は女性や子供の仕事で、ツンプリを背にした女性たちが、男性に粘土を入れてもらい、工場まで運んだ。「嫁にやるなよ小椿野の瓦場へ、三度ゾロくて瓦かつぎ」と歌われたほど、粘土の運搬は過酷な作業であったという。瓦職人が石川県鹿島郡金丸、羽咋郡柳田から来て瓦を作った⁽²⁴⁾。下中島村の瓦工場でも能登から職人が来ていた⁽²⁵⁾。上市町柿沢村の瓦工場では明治8年、能登国羽咋郡から瓦職人を雇い入れ、技術を導入したことから始まった⁽²⁶⁾。

魚津の瓦工場の事例から、福岡瓦工場同様、粘土運搬はツンプリという道具を女性や子供が使用して運搬していたことが分かる。また、瓦生産のはじまりは石川県の瓦職人が大きな影響を及ぼしていたようである。

(3) 能登安部屋瓦

福岡瓦工場、魚津市や上市町の瓦生産地の事例から、生産の起源において石川県の瓦職人が関係していることが分かった。それでは、発祥とされる石川県の瓦生産について、能登の安部屋瓦の生産を通して見ていく。

安部屋瓦では瓦細工道具である竹の櫛状の道具を「カッキヤブリ」または「ガサ」と呼んでいた⁽²⁷⁾。

窯積みを使用する栓ころの製作は親方の仕事であった。職人より荒地を購入し、大栓・中栓・小栓を製作した⁽²⁸⁾。

彫刻的な鬼瓦を製作する職人が複数存在し、彼らは鬼瓦を作るだけでなく、七福神やだるまの人形「ヒネリモノ」を製作した⁽²⁹⁾。

窯積みを済ませると、登り窯の出入り口に煉瓦をつみ、粘土で目土をする。この際に割木を投げ入れる所と瓦の焼き具合を見る口をつける。この口を色見口と呼んだ。登り窯内部に設置するドストルは粘土で製作し、石炭を焚いた⁽³⁰⁾。

窯出しは火の止まった翌日より、作業にとりかかった。瓦を栓の挟んだまま一抱えにして戸口の所まで出した。窯の内部がまだ熱いのでサッキョリの仕事着をつけて行った。

大正初期頃まで、釉薬の原料の石粉、マンガン等を単品で仕入れ、各工場において木臼で調合した。マンガンや紅柄の粉末は、原料屋（名山商店）よりカマス入りでわけてもらった⁽³¹⁾。

ある程度の腕をもっている職人、学校を卒業したばかりの職人は越中へ出稼ぎに行った。越中の方が能登に比べ、賃金がよかったので、次男・三男はこぞって越中へ出稼ぎに行った。長男は家の者が出しなかった。当地以外にも鹿島郡高階村、鳥屋村、鳳至郡鹿波など、能登の若者が主に出稼ぎに行った。出稼ぎ場で職人をして、家庭をもち、その地に落ち着いた者、金を残し工場をもち親方になった者もいた⁽³²⁾。

「ガサ」や「栓」という名称は福岡瓦工場や谷口製瓦でも同一であった。富山県と石川県の瓦生産道具の名称で共通点を見出すことができ、このことは石川県の生産道具が富山県に瓦職人が流入したことに伴い、普及した可能性が考えられる。流入の背景は前述のとおり高い賃金を求めた瓦職人が富山県で仕事を求めたことである。富山県への出稼ぎは石川県でも広く知られた活動であった。福岡瓦工場の創設者である福岡喜三郎も石川県の出稼ぎ者の一人であったと考えられる。

鬼瓦生産者が人形をつくることは石川県でも広く行われていた。安部屋瓦の生産活動では、名山商店との関係が確認できた。名山は福岡瓦工場の釉薬を手配していた企業と同一と考えられる。

(4) 新潟県北蒲原郡安田町・笹神村の瓦工場

新潟県の瓦生産を北蒲原郡笹神村及び安田村の事例をとおして見ていく。

笹神村の瓦業のはじまりは越前国栗原の瓦職人が瓦を生産したことがはじまりであるという⁽³³⁾。湿気の多い晩秋の時期は軒先にハサ（稲架）を作って干し、乾かないときは窯あぶりといって燃えている窯の上にのせて乾かした。明治半ば頃から登り窯が導入された。煤を掃きながら瓦を取り出す窯出しの作業は最も汚く嫌われた作業であった。大規模な工場では、焼成の作業をする者を窯小屋の衆、瓦師と土踏み職人を合わせて職場の衆と呼んで区別した。窯小屋の衆は各地を渡り歩いたという⁽³⁴⁾。

安田瓦で有名な安田村の瓦は天保年間、越前国敦賀の者が当地の者に瓦製造の方法を伝授したことが起源とされる。瓦の乾燥もできない冬の時期に瓦生産を休業し、土堀りに従事した。冬の3か月で1年間使用する粘土を採集した。粘土の運搬は轆轤を使用し、雪上を運搬した。明治時代以前には坊主窯という炭焼窯のような窯で焼成したが、後に登り窯となった。登り窯は焼きあがるのに36時間程度要した。昼焚き納めして、翌日の昼に、窯出し作業にとりかかった。窯出し作業は大変重労働であった。瓦屋は短命と言われ、焼成作業を眠らないで行わなければならなかったためだという。焼成は窯元と職人の2名で行った。4、5年に1回程度、窯の積み直し作業が必要であった⁽³⁵⁾。

新潟県の瓦生産の起源は福井県とする事例が確認できた。富山県の起源が石川県であることから新潟県との違いがあることが確認できる。焼成作業の人数や窯の修理等は福岡瓦工場と共通する点があった。

(5) 小括

富山県内の瓦工場や石川県、新潟県の瓦工場と福岡瓦工場の比較を行った。その結果、粘土運搬道具や生産道具、生産活動等に共通点がみられた。また、富山県の生産地の一部は明治時代に石川県の職人が県内で瓦を生産したことがはじまりとされる。福岡瓦工場も石川県を起源とする工場の一つであるが、石川県の影響はその後も職人の流入や釉薬の関係等、昭和時代まで継続的に関係性があった。また、出稼ぎや渡り等、瓦職人が流動的に活動していた事例も確認できた。今後は北陸の瓦生産活動を広域的に捉え、技術的な流れや各地域の瓦生産地との関係性をさらに調査していく必要がある。⁽³⁶⁾

6 越中瀬戸焼と福岡瓦工場

越中瀬戸焼の陶器製作が途絶えていた昭和初期、瓦工場のオヤカタであった釋永庄次郎と福岡作光が中心となって復興が行われた。当時、瓦生産に伴う粘土減少を危惧していた福岡作光⁽³⁷⁾は富山県工業試験場・富山県・上段村等の協力により、青原秀吉による作陶支援を行った。釋永庄次郎も工業試験場の紹介で陶工を招き、瓦工場内で作陶させた⁽³⁸⁾。

本章では福岡瓦工場の生産活動と越中瀬戸焼との関係性を3つの視点から検証し、越中瀬戸焼の復興に至った要因を瓦生産の側面から考察する。

(1) イワの生産

「3 福岡瓦工場の概要 (1)福岡瓦工場の歴史」に記載したとおり、福岡瓦工場を創設した福岡喜三郎は石川県から来た瓦職人であったが、地元住民の加藤キノと結婚し、加藤家が所有していた窯を引き継ぐことになる（写真21）。加藤キノは工場では瓦生産が行われるかわら、昭和初期頃まで、粘土でイワ（漁網用の錘）を生産し、胴窯で焼成を行っていた⁽³⁹⁾。越中瀬戸焼を「うつわ」だけではなく、「やきもの」全般として考えると、イワも粘土で作られた生活用具、越中瀬戸焼として捉えることができる。瓦生産に従事していた福岡作光も母親のキノによるイワの生産、胴窯の焼成作業を実際に見ていたと思

われる。明治から昭和の時代は、一般的に越中瀬戸焼が途絶えた時代と認識されているが地元の人々にとっては、「やきもの」としての越中瀬戸焼は依然として継続されており、身近な存在であったと捉えることができる。



【写真 21】福岡家家族（福岡孝光氏提供）
前列中央が福岡(旧姓：加藤)キノ

瓦生産とイワ生産を比較してみると、瓦生産は工業として分業体制が確立されていた。瓦製作、手作りによる鬼瓦生産、登り窯のカマタキはそれぞれの作業過程において特定人物によって行われ、瓦を完成させるには複数の人物の手が加わった。一般的に瓦工場は施設や燃料等の資本を有することから、窯元と職人が分化する傾向があることが知られている⁽⁴⁰⁾。一方、小規模な作業であるイワ生産は、製作も胴窯による焼成作業も、一人で行われた。生産体制の面から考えると、イワ生産は陶芸家たちが自ら成形や焼成等を行う現在の越中瀬戸焼生産と共通する点があるのではないだろうか。

(2) 地域外の職人

職人世界では、腕を磨くために各地の職場を訪ねて廻る習慣があり、職人の技術向上を支える一方で、迎える側も手軽に労働力を入手することができる仕組みであった。この行為を「渡り」、関東地方一円では「西行」、これをおこなう職人を「渡り職人」「流れ職人」「飛び職人」と称した。特に瓦職人、鬼瓦専門の職人である鬼師には近年まで渡りの習慣が色濃く残っており、一軒の瓦屋にしばらく滞在して仕事をした後、また別の瓦屋へと移っていった⁽⁴¹⁾。初対面での挨拶「仁義を切る」方法等、訪れる側にも迎える側にも独特な作法があった⁽⁴²⁾。

前章では富山県のいくつかの瓦工場では地域外、石川県からの瓦職人の流入があったことを確認した。明治・大正時代の高岡市伏木では、石川県出身者の職人が多く働いており⁽⁴³⁾、前章の事例のとおり魚津市、上市町の瓦工場の起源は石川県であった。各地の職人が渡り職人であったかどうかは不明であるが、福岡瓦工場でも地域外の職人について以下2名を挙げることができる。

【1 福岡喜三郎】

福岡瓦工場の創設者で、前述のとおり石川県高松町出身の瓦職人であった。明治時代に上瀬戸に移り住んだと考えられるが、その経緯等は不明である。明治時代は特に石川県の瓦職人が富山県に流入した時期であり、その流れの一つとして捉えることができる。

【2 宮島嘉一郎】

上瀬戸では、現時点で聖徳太子像が2体確認されているが⁽⁴⁴⁾、どちらも石川県七尾市細口町出身の

宮島嘉一郎が製作した像（写真 22）である。福岡作光が昭和 20 年代に瓦工場を城川範之に貸した際、城川が石川県から上瀬戸に呼び寄せた瓦職人が宮島で、数年間瓦生産に従事した。2 体の聖徳太子像は顔の形状や服装が異なり、モデルが異なることが分かる。聞き取り調査によると宮島は福岡家が所蔵していた聖徳太子像の掛け軸をもとに聖徳太子像を 1 体作成したとされ、「為福岡作光氏」と刻銘された像が、福岡が作成を依頼した像で、掛け軸をモデルとして作成したものと考えられる。

宮島が渡り職人であったかどうかは確認できなかったが、埼玉県の渡り職人の事例では渡り職人が訪問先で聖徳太子像を作成したことが確認でき⁽⁴⁵⁾、腕を磨く渡り職人が訪問先で瓦以外の人形を製作する習慣があった可能性も考えられる。

福岡瓦工場でも地域外の職人の流入を確認することができた。越中瀬戸焼の復興においては、富山県工業試験場の協力により複数の陶工が招かれ、作陶している。他地域の者の流入に寛容であった瓦生産という環境が越中瀬戸焼の復興がすすんだ要因の 1 つと捉えることができる。



福岡秀司蔵陶像 正面



福岡秀司蔵陶像 背面刻銘



神明社横陶像 正面



神明社横陶像 背面刻銘

【写真 22】上瀬戸の聖徳太子像（古川知明 2024「越中瀬戸焼能登鬼師造聖徳太子像について」『越中瀬戸焼歴史通信 No. 4』越中瀬戸焼歴史研究会より転載）

(3) 鬼師たち

福岡瓦工場には鬼瓦を専門に製作する職工が数名存在し、米谷定雄・加藤与次郎・青原兄弟が鬼瓦製作専門の職工で、特に、ナカセト（中瀬戸）と称されていた青原儀祐と青原秀吉の兄弟は、上末・上瀬戸でも最も優れた鬼瓦の製作技術を保有していたという⁽⁴⁶⁾。青原家は元和7（1621）年に瀬戸村中央部に窯を築いた長八の子孫とされており、その窯があった場所を中瀬戸と称しており、青原家の屋号となった。青原秀吉は後に越中瀬戸焼復興期に活躍する陶工であり、青原儀祐は昭和29年に再建された富山城の鯢を成形した鬼師である。

鬼師たちは、鬼瓦を手作りしていた頃は瓦工場に所属しているわけではなく、各工場で依頼された鬼瓦を製作したとされ、依頼に応じて工場内を移動した。他の瓦生産者にはできない精巧な鬼瓦を製作することができたことから賃金も高かった。昭和初期頃に石膏型が流入したことにより、鬼師が製作した鬼瓦の石膏型が普及し、鬼師以外も鬼瓦を製作することが可能となった。そのため、鬼師も瓦工場に所属し、鬼瓦以外の瓦も生産するようになったという。賃金も工場生産者として一律となった。ただし、昭和初期以降も特注の鬼瓦生産は鬼師が担当した。鬼師がいない工場では、別工場に所属する鬼師に製作を依頼し、鬼師は別工場に出張し製作した。このように鬼師は①機械化された瓦生産においても巧みな技術をもった職人的要素が非常に強い、②鬼瓦生産の特殊な技術から1つの瓦工場に所属しない流動性の高さを持つ、という一般の瓦職工とは異なる特徴を有していた。

(4) 小括

瓦生産と越中瀬戸焼の復興を「イワの生産」「地域外の職人」「鬼師たち」の3つの要素から検証してみた。福岡作光たちが越中瀬戸焼の復興を志した昭和初期は既に安土桃山時代より続いた越中瀬戸焼の「うつわ」生産は既に消滅しており、その面影はイワ生産や残された陶器のみでしか把握できなかった。そのような状況の中で瓦生産の経営者の復興の意思に基づいた行動、鬼師たちの巧みな技術、富山県工業試験場の協力等により復興活動が行われた。復興活動の過程で多くの地域外の陶工等が流入することになるが、地域外の陶工が活動を行えたのは瓦生産という地域外の職人にも比較的寛容で流動的な環境があったことが要因の一つとして捉えることができる。

7 おわりに

企画展「復興期の越中瀬戸焼」展では当時の轆轤や古写真、生産された陶器を展示し、瓦工場のオヤカタであった釋永・福岡2名の取り組みを中心に紹介された。その中で当時の関係資料・情報の整理が行われ、関係者の動きや富山県工業試験場の支援等、復興活動に至った背景の掘り下げが行われた⁽⁴⁷⁾。

本稿では企画展で紹介されなかった瓦生産活動を中心に取り上げた。越中瀬戸焼の復興にはさまざま要因を導き出すことができる⁽⁴⁸⁾が、復興が行われた現場である瓦工場、瓦生産活動に焦点をあてた論考はなかった。今回、瓦生産活動を詳細に調査することで、福岡瓦工場を含む富山県の瓦工場が石川県の瓦生産地と関係性があったこと、地域外の職人を受け入れる瓦生産独自の環境があったこと等を明らかにした。これらの瓦生産の背景が越中瀬戸焼復興にも影響を及ぼしたと考えられる。

付記

本稿は平成27（2015）年に筆者が新潟大学に提出した卒業論文「越中瀬戸焼の復興と瓦産業」（指導教員：池田哲夫教授（当時））を大幅に加筆編集し作成いたしました。聞き取り調査では福岡孝光・淳子氏をはじめ、上末・上瀬戸の方々から大変貴重なお話を伺うことができました。また、執筆に当たっては立山町歴史交流ステーション日なたの古川知明学芸員にお世話になりました。末筆ながら心より感

謝し、厚くお礼申し上げるとともに、今後も先輩・諸兄のご指導・ご教示を賜れば幸甚であります。

注

- 1 上段村教育會 1935『上段村誌』上段村教育會 P2
- 2 日本セラミックス協会北陸支部 2001『北陸の瓦の歩み』能登印刷出版部 P135
- 3 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988『越中瀬戸―発祥四百年記念誌―』日興印刷株式会社
- 4 郷土誌実行委員会 2002『新瀬戸地区のうつりかわり』荻生印刷
- 5 定塚武敏 1974『富山文庫2 越中の焼き物』巧玄舎
- 6 宮田進一 1998「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史―地域間交流の視点から―』雄山閣出版株式会社 P164
- 7 定塚武敏 1974『富山文庫2 越中の焼き物』巧玄舎 P147-152
- 8 定塚武敏 1974『富山文庫2 越中の焼き物』巧玄舎 P142-144
- 9 古川明知 2025「越中瀬戸焼「胴窯」について」越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ
- 10 米原寛他（翻刻・現代語訳）1973『日本農書全集5 農事遺書・耕作早指南種稽歌・農業蒙訓・農隙所作村々寄帳』社団法人農山漁村文化協会 p330
- 11 立山町米道踊保存会 1965年『米道踊』P2-3、大田栄太郎 1974『16 日本の民俗 富山』p273、以下が唄の一節（下線は筆者追加）
○米道踊 甚句
めでた めでたの今のむ酒は 天の岩戸にホンネ湧き出づる（コリヤセー ドンセ）
酒という字は 三水扁に酉よ 酔がまわらにやホンネ唄やせぬ
お酒のむ人皆神さまか おみき上らぬホンネ神はない
嫁に行くなら米道村へ 稲に黄金のホンネ波が打つ
池田山へは行きたはないが 瀬戸のろくろはホンネ見たござる
○糸くり歌（中新川郡上市町地方）
池田山へは行きたはないが 瀬戸の轆轤は見たござる
種（地名）は千石山だといえど 折戸 蓬沢なお山だ
下田の勘兵衛は大高持よ 4000ケラバ（稲を積んだニオ）を107つ
上市車にアワヅム（阿波鍾）かけて 傍に綿おけや糸になる
- 12 宮田進一 1998「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史―地域間交流の視点から―』雄山閣出版株式会社
- 13 村上正名 1983「近世古窯巡礼記7 越中瀬戸」『陶説』369 P46
- 14 廣田雄介 2024「越中瀬戸焼の陶鍾（イワ）について―民具という視点から―」『富山市民俗民芸村村報 民村』10 富山市民俗民芸村
- 15 定塚武敏 1974『富山文庫2 越中の焼き物』巧玄舎 P183
- 16 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988『越中瀬戸―発祥四百年記念誌―』日興印刷株式会社 P52-53
- 17 高松町史編纂委員会 1974『石川県高松町史』能登印刷株式会社 P569、高松町教育委員会 2003『たかまつ物語 地域を彩った人々』橋本確文堂 P95
- 18 古川喜代吉 1930『越中瀬戸焼陶窯ニ就テ』P23、古川知明 2025「3 人物編 福岡作光」『越中瀬戸焼 関係人物・団体事典』（越中瀬戸焼歴史研究 第2号）越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ
- 19 谷口製瓦における瓦製作道具調査会 2015『谷口製瓦における瓦製作道具調査報告書―富山県砺波市福山に所在する現代瓦製作道具の調査―』P13
- 20 同上 P21-22
- 21 同上 P21
- 22 同上 P22
- 23 魚津市編纂委員会 1972『魚津市史 下巻 近代のひかり』魚津市役所 P281
- 24 同上 P283-P284
- 25 同上 P286
- 26 新上市町誌編纂委員会 2005『新上市町誌』上市町 P253

- 27 能登安部屋瓦協同組合 1981『能登安部屋瓦の歩み』P81
- 28 同上 P82
- 29 同上 p86
- 30 同上 p93
- 31 同上 P98
- 32 同上 P104
- 33 笹神村 2004『笹神村史 通史編』笹神村 P351
- 34 笹神村 2002『笹神村史 資料編4 民俗』笹神村 P253-P256
- 35 安田町 1997『安田町史 民俗編』安田町 P92-107
- 36 宮城県では愛知県、新潟県、山形県の瓦職人が働きに来ていた。宮城県松山町では新潟県北蒲原郡郡から2名の職人が住み込みで働いていた（東北歴史資料館 1993『東北歴史資料館 資料集34 宮城県の瓦職』東北歴史資料館 P50、99）
- 37 廣田 雄介 2025年「福岡作光「越中瀬戸焼に就て一言原稿」からみた越中瀬戸焼の復興」『立山町歴史交流ステーション日なた 研究紀要』第3号
- 38 立山町歴史交流ステーション日なた「復興期の越中瀬戸焼」展示解説書 2025.10.25 発行
- 39 廣田 雄介 2024年「越中瀬戸焼の陶錘（イワ）について一民具という視点から一」『富山市民俗民芸村村報 民村』10 富山市民俗民芸村
- 40 東北歴史資料館 1993『東北歴史資料館 資料集34 宮城県の瓦職』東北歴史資料館 P32
- 41 三田村佳子・宮本八恵子・宇田哲雄 2008『日本の民俗11 物づくりと技』吉川弘文館 P65-68
- 瓦屋の渡りの習慣が濃厚に残っていた背景について『宮城県の瓦職』P32では①製造する瓦の種類が多く、特殊な技術を要するものがある、②冬期には製造を中断する地域がある、という事情があると述べられている。
- 42 埼玉県立民俗文化センター 1986『埼玉県民俗工芸調査報告書 第4集 埼玉のかわら』明亜 P294-299
- 埼玉の瓦屋の西行の事例では、以下のきまりがあった。
- 訪れる側（西行する職人）
- ・午後3時前にこないと礼を失する
 - ・入る場所は泥場
 - ・自分の修業した親方の場所と名前、自分の生まれた場所と名前を言って仁義を切る
 - ・ヘラやカマのような道具は持参 等
- 迎える側（親方）
- ・必ず一宿一飯の世話をする
 - ・断る際には次の家までの旅費として草鞋銭をわたす 等
- 43 日本セラムックス協会北陸支部 2001『北陸の瓦の歩み』能登印刷出版部
- 44 古川知明 2024「越中瀬戸焼能登鬼師造聖徳太子像について」『越中瀬戸焼歴史通信 No.4』越中瀬戸焼歴史研究会
- 45 埼玉県立民俗文化センター 1986『埼玉県民俗工芸調査報告書 第4集 埼玉のかわら』明亜 P297-298
- 「事例3 小川町角川の北岡家の場合
- （中略）西行で、竹のヘラと手先で人形をこしらえる人がいて、「面白いから使ってみようか」ということになり、雇ったという。この人は色々な人形をこしらえたので、この人の作った人形を、人形棚をつくって陳列しておき、欲しい人には売っていた。この人は瓦もつくって、三年間いたという。この家では、この人のつくった聖徳太子像を今でも床の間に置いて毎朝ごはんを供えている」
- 46 その他の瓦工場では、例えば山元瓦工場では山元清光が、釈永瓦工場では青原が鬼瓦の製作を行った。
- 47 立山町歴史交流ステーション日なた 令和7年度ミニ企画展(2)「復興期の越中瀬戸焼展」展示解説書 2025.10.25 発行、越中瀬戸焼歴史研究会「越中瀬戸焼歴史通信」No.6 2025.11.3 発行 Online ISSN 2758-6731
- 48 古川知明 2025「1 越中瀬戸焼復興の背景」『越中瀬戸焼歴史研究 特集：復興期の越中瀬戸焼研究2』第3号 ONLINE ISSN:2760-0920

文化六年芦峯寺喚鐘について

古川 知明

(立山町歴史交流ステーション日なた学芸員)

1 経過等

立山町芦峯公民館に長く保管されていた喚鐘がある。

この喚鐘は、宿坊相真坊付近の一角にあった集落の火の見櫓に半鐘として吊るされていたもので、その撤去とともに降ろされ、公民館に保管されたものである^[1]。撤去時期の詳細は不明である。

地元関係者からの情報提供により、現物を確認し、調査のため地区同意を得て今回調査に至ったものである。

2 喚鐘の概要

喚鐘は、撞座上方、全体からみると中央の一部が最大約 6 mm 程度凹んでいるが、それ以外は状態が良く、破損及び顕著な錆化は認められない。

全体の大きさは、総高 52.5 cm、下端口径 30.0 cm、重さ 18.3 kg である。

龍頭(紐)は、左右に龍頭を外向きに置き、上は蓮華座に乗った宝珠形である。宝珠の中央には、宝珠文とそれを支える蓮弁様文様を浮彫りする。A・B 両面とも同形文様で、吊り下げのため摩耗が著しく、A 面下部の竜頸部分が特に顕著である。宝珠下部には三葉の蓮弁があり、弁脈を線彫する。宝珠の左右には大ぶりの蓮弁を配し、弁脈を立体的に表す。宝珠下には竜首の縄状の文様が下垂する。その両側には鱗がある。側面には鋳継目を残し、鋳張りを研磨して除去する部分もある。宝珠自体の高 4.8 cm、幅 5.0 cm、厚さ 2.1 cm (写真 1-1)。

左右の龍は、頭頂に先端が丸い角をもち、耳・目・鼻・上顎を立体的に表現する。龍頭の最大幅 12.5 cm、全体最大高さ 11.2 cm、幅 4.0 cm。中央の穴高さ 4.0 cm 幅 4.1 cm。

笠形は、なだらかな碗状である。下端径 17.7 cm、笠高 5.0 cm。頂部には龍頭方向と平行して、左右に長さ 4 cm、4.5 cm、幅 5 mm 程度の二本の湯口痕があり、研磨仕上げされている (写真 1-2、図 4-

①)。この湯口痕の延長線上にはシワが見られる。これは鋳境と推定される^[2]。また細粒状の瘤も 1 個見られるが、成因は不明である^[3]。

鐘身は、高 41.9 cm である。乳の間 4 面・池の間 4 面・撞座 2・草の間・駒の爪と上帯・縦帯・中帯出構成される。

上帯は二本の細い隆起線を一周する。

乳の間は、4 区画があり、各区 9 個計 36 個の乳がある (写真 1-3)。乳は径 14 mm、高さ 17 mm で、先端部は同心円文がある。各区画は高さ 9.4 cm、上幅 9.2 cm、下幅 13.0 cm。

池の間は周囲を隆起線で囲む。4 面ともに刻銘がある。各区画は高さ 13.2 cm、上幅 13.0 cm、下幅 13.2 cm (写真 1-10~1-13)。刻銘内容は後段で述べる。

縦帯は、3 本の隆起線の上に 2 面を配置する。全体で 4 箇所×2 面である。各面幅 2.2 cm、長さ 25.4 cm。下端が屈曲して三角形形状となるもの 2 か所、下の撞座に接するもの 2 か所が、それぞれ対面にある。各面幅 2.2 cm、最大長さ 25.4 cm。縦帯 4 箇所のうち 3 箇所に刻銘がある。願意・願主・奉納年月・鋳物師名を刻む。

縦帯 4 面のうち刻銘のある①面の下部、撞座 A の上には、後出的な窪みがある。縦約 13 cm 横約 10 cm の範囲で、中央が最も深く約 6 mm の深さである。中央部に点的な衝撃が加わったものとみられる (写真 1-5)。

撞座は、相対する縦帯と中帯の交差する部分 2 箇所があり、竜頭の基部の延長線上にある。池の間刻銘面より 1.2 cm 突出している。外形は直径 5 cm である。外縁は八葉の複弁蓮華文を浮彫りし、中房は直径 3.0 cm、中の蓮子は、中央 1 個+周辺 8 個の計 9 個である。蓮子部分を中心に 2 箇所とも摩耗



半鐘の類例 (岩峯寺)

が認められ、特に撞座Bの摩耗が顕著である（写真1-6）。

中帯は、高さ1.2 cmの断面蒲鉾状の横帯の上に2本、下に3本の隆起線を配置する。

草の間は、高さ1.9 cmで、上方に高さ5 mmの空間をあげ、下に高さ1.4 cmの唐草文を一周させる。唐草文は右下から左上へ延びる唐草で、一つの横幅3.5 cm、全周で24個を配する（写真1-14）。

駒の爪の外縁は丸みをもって立つ。高さ3.0 cm。下面は幅3.0 cmで平らである。内縁は径24.5 cm、内縁端は9 mmほど高い。

鑄継目は、外面の池の間の上部を一周する。鐘下端から23.4 cm上の位置にある（写真1-4）。外型が二段であったことがわかる。鑄継目の鑄張りは一部研磨して整形している。

内面の笠形内頂部から4.5 cm下に段があり、この直下に鑄継目とみられる線が一周する（写真1-16）。

笠形頂部の厚み4 mm、池の間部分で3.5 mm、撞座部分の厚み1.6 cmである。

笠形の内面頂部には、2か所の鉄鑄の小突起がある。それぞれ直径11 mm、高さ1.5～2 mmの円形状で、8.6 cm離れている（心心間9.7 cm）。この2箇所を結ぶ直線は、表の竜頭基部を結ぶ直線と約50度（130度）ずれている（写真1-16、図4-②）。これは中子（内型）が浮かないよう鉄製の型持ちを使った痕跡とみられる⁴。

中の間以下の表面部分には、薄い緑青が見られ、若干の錆化が認められる。全周のうち5分の1は下端から15.7 cmまで、残る5分の4は下端から約13 cmまでであり、凸形の段差が生じている（写真1-15）。この理由は、半鐘使用時に設けられていた雨除けの小屋根などの影響によるか。

3 刻銘の概要

縦帯3面・池の間4面には、計343文字の刻銘がある（7頁・図3）。

それらは、願意・寄進先・寄進者・世話人・年月・鑄物師名などを彫り込む。

それらの内容等から、縦帯①→池の間①→池の間②→縦帯②→池の間③→縦帯③→池の間④の順で理解される。なお縦帯①は、撞座Aの上部に所在する。

(1) 縦帯① 隆起線をはさみ、2行で「為先祖代々 覚法浄定門／為先祖代々 為無縁」とある。為先祖代々・為無縁は願意（供養目的）である。覚法浄定門は、願主または寄進者名で、戒名とみられる。浄定門は禅定門のこととみられる。

(2) 池の間① 上に横書きで「為先祖代々」と願意を示す。

右端の「伊那郡大川原村 宮下佐市郎」からはじまり、計8人の寄進者名を8行で記載する。すべて俗名である。

居住地は、信濃国伊那郡の大川原村2人・廉塩村（鹿塩村）2人、筑摩郡の小俣村1人・本町3人である。伊那郡の2村は、下伊那郡大鹿村に含まれ、駒ヶ根市南東にあたる。小俣村は松本南部に所在する。本町は松本城下町内本町に含まれる。

(3) 池の間② 上に横書きで「為先祖代々」と願意を示す。

右端の「安曇郡仁科大塩村 中村清兵衛」からはじまり、寄進者名6人と講集団名1つの計7件を8行で記載する。

居住地は、信濃国安曇郡大塩村の俗名2人、筑摩郡埋橋村の俗名1人・戒名3人、同埋橋村の女中念仏講中1人である。

安曇郡仁科大塩村は、北安曇郡美麻村に含まれ、大町市北部にあたる。

筑摩郡埋橋村は、松本城下町南西部にあたる。3人の戒名者は子供であり、末尾の御代沢房右衛門の血縁者か。埋橋村女中念仏講中とは、高齢女性を中心とした念仏講で、女人念仏講・尼講等とも呼ばれる。信州松本における念仏講の活動は、文化文政期における石造物建立⁵が主体的である⁶。念仏講名が判明する具体例としては、松本市四賀地区の寛政6年（1794）等順名号塔に「板場取出女中念仏講」がある。

(4) 縦帯② 隆起線をはさみ、2行で「父 榎誉量玄信女／文化六巳己年七月 榎誉懸淑本栄」とある。戒名者である榎誉量玄信女・榎誉懸淑本栄の二人の父に対する供養を目的としたものであるが、父とは、縦帯①にある覚法浄定門を指すものか、池の間②文末の御代沢房右衛門をさすものか、両者

とも該当しないか、不詳である。寄進日である文化6年は西暦1809年である。

(5) 池の間③ 9行を刻む。

冒頭の5行は「芦峠／為当山両大権現法楽／為同 御姥尊法楽／同 宝伝坊現住／法林草居」とあり、寄進先・寄進目的・寄進受入窓口者を示す。当山両大権現とは、立山両大権現のことであり、これは伊弉諾尊・天手刀雄命の二柱をいう。この本地は阿弥陀如来と不動明王である^[7]。法楽とは仏前に舞楽などを奉納演奏することで、ここでは音色の良い喚鐘を奉納するという意味である。立山大権現・姥尊は中宮寺のことをさし、中宮寺への寄進であることを示す。寄進の取り持ち者(仲介・受入)は芦峠寺宝伝坊の法林であった。草居(くさのい)は草庵などと同義語とみられる^[8]。

残る4行は世話人3人の所在地・氏名である。「世話人／信州筑摩郡埋橋村 御代沢弥惣次／三代沢半三郎／庄内村 三溝庄蔵」とあり、信濃国筑摩郡埋橋村の御代沢弥惣次・沢半三郎(三代目)、同郡庄内村の三溝庄蔵である。埋橋村・庄内村はいずれも松本地域である。

(6) 縦帯③ 隆起線をはさみ、2行で「御鑄物師松本住／勅許 濱石見掾藤原清綱作」とある。本鐘作成の鑄物師名を示す。松本城下町に居住する濱石見掾清綱である。清綱に就いては後段で述べる。

(7) 池の間④ 寄進者とみられる15人の名前である。俗名は長沢義種・御代沢義一の2人である。2行目智貞比丘尼以下計13人は戒名者である。内訳は、比丘尼1・居士3・大姉1・信士4・信女3・善童子1である。

以上の刻銘については、追刻はなく、すべて鑄造初期の文化6年のものである。

4 世話人・寄進者について

(1) 世話人・寄進者の分布(図1・表1)

世話人・寄進者のうち、居住地名が判明するものは8箇所がある。

信濃国松本地域(筑摩郡)を中心に、北は松本から約40km離れた北安曇郡、南は約70km以上離れた下伊那郡の三か所にまたがる。

世話人3人はいずれも松本地域である。

世話人・寄進者の人数からみると、35人のうち松本地域が26人と74%を占める。埋橋村女中念仏講の構成員数は不明であるが、複数人が参加している場合はこの率はさらに大きくなる。

これらの人々はいずれも信濃国在住者であり、宝伝坊の檀那場が信濃国であることと一致している。



図1 寄進者の居住地分布

(2) 世話人・寄進者の内訳(表2)

刻銘者35人は、世話人3人とその他寄進者34人に分かれる。

俗名者は16人(45.7%)、戒名者は19人(54.3%)で、戒名者が多い。

男女別は、俗名者はすべて男性、戒名者は男性10人、女性9人である。

戒名者のうち、男性在家出家者を示す禅定門は1人、女性在家出家者を示す比丘尼は1人である。

縦帯②に記載の一般戒名者は、「誉」字を含む戒名であることから、浄土宗系信徒と思われる。夫婦と推定される。男性戒名者には、下に居士が続くが割愛したとみられる。

6 宿坊宝伝坊法林について

本喚鐘は、当山両大権現及び御姥尊へ奉納されたもので

郡名	村名	現行地名	人数	団体	世話人数
安曇郡	仁科大塩村	北安曇郡美麻村大塩	2		
	小俣村	松本市笹賀小俣	1		
	本町2丁目	松本市中央	1		
筑摩郡	本町4丁目	松本市中央	2		
	埋橋村	松本市埋橋	21	念仏講	2
	庄内村	松本市庄内・中央	1		1
伊那郡	大川原村	下伊那郡大鹿村大河原	2		
	鹿塩村	下伊那郡大鹿村鹿塩	2		
不明			3		
			35	1	3

表1 世話人・寄進者所在地と人数一覧

俗名者		戒名者			
男	女	男		女	
16	0	禅定門	1	比丘尼	1
		居士	3	大姉	1
		信士	4	信女	4
		禅童子	1	童女	3
		不明(居士?)	1		
16	0	計	10	計	9
16					
		19			

表2 世話人・寄進者内訳

あり、松本地域を中心とした人々からの寄進の受入窓口は宝伝坊が担った。これは信濃国が宝伝坊の檀那場であったことによる。

当時の宝伝坊住職は、刻銘によれば法林であるが、宝伝坊由緒によれば、文化6年時の住職は38代「體静」であり⁽⁹⁾、法林の名は見えない。

法林は善道坊⁽¹⁰⁾41代住職であり、明和2年(1765)から安永9年(1780)に奉職した⁽⁹⁾。本喚鐘の寄進年代は、刻銘が正しければ法林が善導坊から宝伝坊へ移ってしばらく経った後のことになる。

7 松本鋳物師 濱石見掾清綱について

元禄12年頃(1688 - 1704)の松本城下に三輪・濱・田中・小野の4家の鋳物師があったとされる。

濱・田中家はともに河内国丹南郡の鋳物師で、代々勅許御鋳物師信濃国左方惣官を称した⁽¹¹⁾。

濱家の由来は、天正12年(1584)松本領主小笠原貞慶が初代伊右衛門清賢を招き、松本城近く飯田町通称鍋屋小路に居住した。伊右衛門家は代々石見掾を名乗り、水内郡大工職を与えられた。「勅許御鋳物師」として信濃国鋳物師相談役を務めた⁽¹²⁾。

9代清綱は、本名太郎兵衛、寛延3年(1750)生れ、文化14年(1817)死去した⁽¹³⁾。「書留帳」によれば、嘉永年間まで、8代正香⁽¹⁴⁾等とともに信濃国内外品276点を鋳造したとされる⁽¹⁵⁾。

清綱の名がある史料として、寛政2年(1790)10月「松本鋳物師浜清綱梵鐘見積書」がある⁽¹⁶⁾。

これらによれば、本喚鐘は、清綱晩年の作ということになる。

8 宝伝坊への仏像寄進

宝伝坊への寄進は、この喚鐘のほか、天明7年(1787)10月に姥堂姥尊像の脇立観世音菩薩立像がある⁽¹⁷⁾。これは下行村新井氏⁽¹⁸⁾ら信州の人々による寄進である。木造か銅造か不明である。

9 評価

本喚鐘は、芦峯寺集落の火の見櫓の半鐘として転用されていたものである。梵鐘・喚鐘の多くが、明治初期の廃仏毀釈や太平洋戦争の金属製品供出により転地あるいは消滅してしまった中、本喚鐘はそれらから逃れ、現在まで伝承された貴重な資料といえる。特に芦峯寺から一度も外へ出なかったことで、その価値はきわめて大きい。

本喚鐘は、信濃国松本地域の人々により、芦峯寺宿坊宝伝坊を通じ、立山両大権現・姥尊へ奉納された。具体的には両者を祀る中宮寺へ寄進され、喚鐘として使われた可能性が示されるが、これを裏付ける史料は未見である。

松本地域の人々による立山への寄進には、寛政元年(1789)・文政8年(1825)の仏像寄進が知られる(表3)。本喚鐘はその間にあたる文化6年の寄進事例として新たに確認できたものであり、文化文政期頃における松本地域の人々の立山信仰に基づく寄進活動の活発化を示す資料といえよう。

謝辞

本稿の作成にあたり、芦峯寺集落(総代佐伯健次)、佐伯照代、立山町芦峯公民館、西井龍儀氏(小矢部市文化財保護審議委員)、清水克朗氏(富山大学芸術文化学系教授)、高野靖彦氏(富山県[立

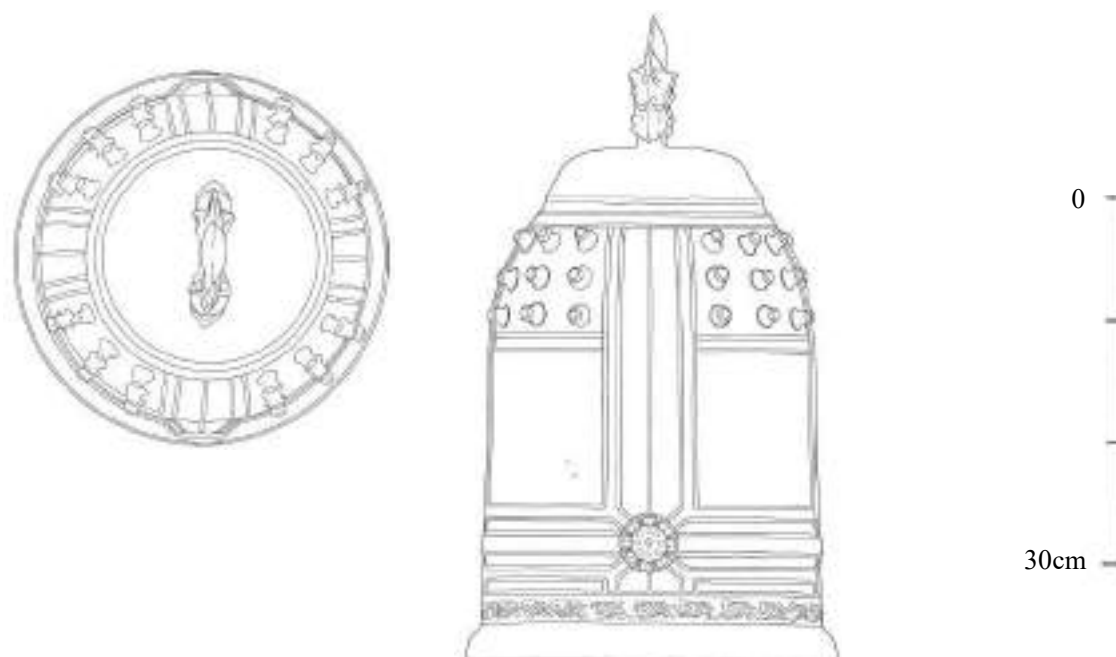
和暦	西暦	種別	名称	現在地	寄進先	寄進者・施主等	鋳物師	備考
安永4	1775	梵鐘	立山老婆堂鐘	上市町本敬寺	芦峯寺 金泉坊	真興寺(三次)	富山 山本五郎左衛門家種	三次面刻銘 文政7年徳成寺→本敬寺
寛政1	1789	銅製仏像	延命地藏菩薩	福井県永平寺	芦峯寺 教蔵坊	信州松本	信州松本 濱石見掾清綱	『立山町史』推定年代
寛政1	1789	銅製仏像	聖観音菩薩	輪島市総持寺祖院	芦峯寺 教蔵坊?	信州松本?	信州松本 田中伝右衛門	
文化6	1809	喚鐘	芦峯寺喚鐘	立山町芦峯公民館	芦峯寺 宝伝坊	信州松本ほか	信州松本 濱石見掾清綱	総高52.5cm 口径30.0cm
文政5	1822	梵鐘	姥堂広前宝鐘	富山市念法寺	芦峯寺 善導坊	三河国豊橋講中	三河 中尾与惣治	
文政8	1825	銅製仏像	延命地藏	小矢部市観音寺	芦峯寺 教蔵坊	信州松本町立山講中	信州上田 小島大治郎弘孝	教蔵坊→閻魔堂前→長楽寺→観音寺
嘉永6	1853	喚鐘	立山五越喚鐘	立山町善入寺	立山五ノ越鐘楼	東水橋惣同行	富山 河辺家政	総高64.0cm 口径37.5cm

表3 江戸時代後半の立山寄進一覧

山博物館] 館長)、立山町文化財保護審議会・同委員各位、立山町教育委員会の各位には、多大なご協力・ご教示を得ました。記して謝意を表します。

注

- 1 芦峯寺佐伯照代氏による。
- 2 富山大学芸術文化学系清水克朗教授のご教示によれば、熔湯が湯口からの流れが時間差により表面に酸化皮膜などを形成し、湯が満たされるにつれて合流するものの、その境に痕跡が生じてしまったものか。
- 3 清水教授によれば、注湯の直後、笠形の部分のみ先に引き上げて、その際にまだ凝固していない湯の雫が付いてしまった可能性があるという。
- 4 清水教授のご教示による。
- 5 名号塔・念仏供養塔などの建立をいう。
- 6 松本市教育委員会編 2016『「松本の念仏塔と念仏行事」調査報告書』
- 7 加藤基樹 2017「立山権現[矢疵阿弥陀如来]の史料的考察—立山信仰と生身仏信仰—」『研究紀要』第24号 富山県[立山博物館]、加藤 2019「「立山信仰用具」覚書—活用と課題—」『研究紀要』第26号 富山県[立山博物館]
- 8 富山県[立山博物館] 高野靖彦館長のご教示による。
- 9 「明治六年 由緒書上帳 立山芦峯寺東神職」『越中立山古記録』Ⅲ 越中資料集成別巻2 26号文書 桂書房
- 10 善道坊の檀那場は三河国。
- 11 松本市教育委員会ホームページ
- 12 宮下史明 1968「文献に現われた信濃の鋳物師」『信濃』218号 信濃史学会
- 13 中川弘泰 1977『近世の鋳物師 真継家を中心として』近藤出版社
- 14 正徳3年(1713)生れ、天明2年(1782)死去した(注12による)。
- 15 今井泰男 1988『信濃の鉄』銀河書房
- 16 『長野県史』近世史料編第5巻3 1052号文書 長野県史刊行会 1972
- 17 福江 充 2024「立山信仰を受容した信濃国の人々—特に立山芦峯寺教蔵坊との関係において—」『北陸大学紀要』第56号掲載中史料
- 18 下行村の所在地は不明。史料を所蔵する新井氏は大町市在住であることから、安曇郡内に所在したのであろう。



喚鐘概略図

図2 芦峯寺喚鐘【文化6年（1809）
7月 松本鋳物師濱石見掾清綱】
3Dオルソ図
（総高 52.5 cm、口径 30.0 cm）



上面



中央：竜頭 A 面



中央：縦帯①面・撞座 A 面



中央：竜頭 B 面・縦帯③面



中央：縦帯②面・撞座 B 面



A 面



B 面

龍頭部分拡大 (最大幅 12.4 cm、高さ 10.8 cm)

図 2 3Dオルソ図



1 竜頭 A面



2 鈴形 頂部の湯口痕



竜頭 B面



3 乳



5 撞座 A 上部の凹み



同上 シワ痕



6 撞座 A



4 外型鑄継目



撞座 B



同上 点線で図示

写真1 部分写真



7 縦帯①刻銘



8 縦帯②刻銘



9 縦帯③刻銘



10 池の間①刻銘



11 池の間②刻銘

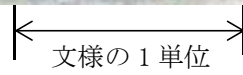


12 池の間③刻銘



13 池の間④刻銘

写真1 部分写真



14 草の間 唐草文（部分）



15 下部錆化部分



同左 点線で図示

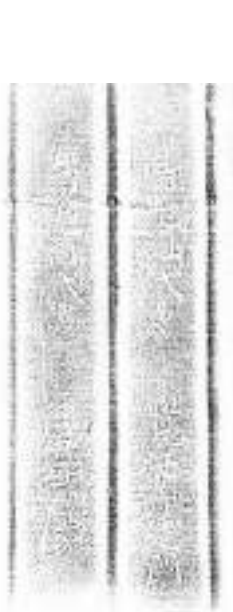


16 笠形内面の鉄製型持ち痕

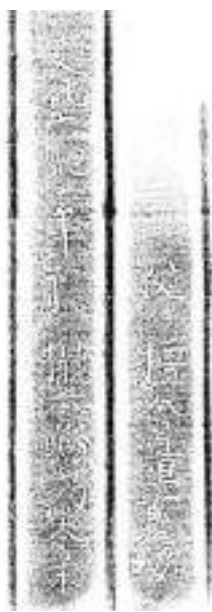


同左 解説

写真1 部分写真



為先祖代々	覺法淨定門
為先祖代々	為無緣



文化六已巳年七月 父 榎譽量玄信女 楊譽懸淑本栄

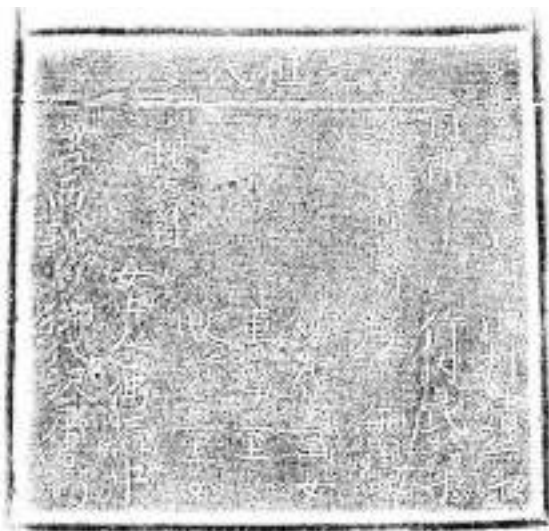


御鑄物師松本住
勅許濱石見掾藤原清綱作



伊那郡大川原村 宮下佐市郎
同所 瀧沢常藏
同郡廉塩村 川井佐兵衛
同所 松尾猶藏
筑摩郡小俣村 高山文次郎
同郡本町二丁目 塚田喜右衛門
同本町四丁目 伊沢幸吉
酒仕幸助

図 3 拓影



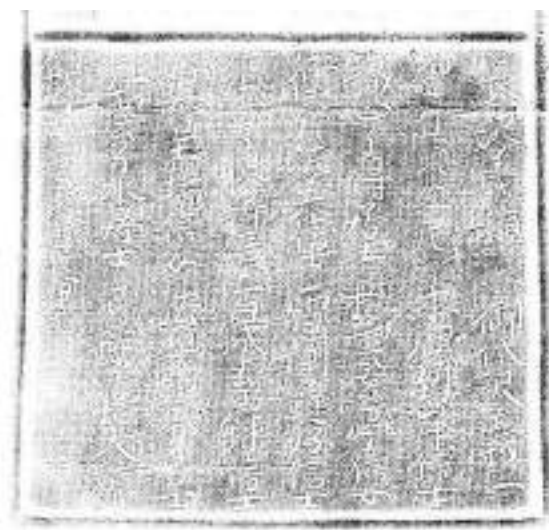
6 池の間②刻銘

安曇郡仁科大塩村 中村清兵衛
 同所 竹内武兵衛
 筑摩郡埋橋村 為 無縁
 妙智童女
 惠浄童女
 映紅童女
 女中念仏構中
 埋橋村
 為両親 御代沢房右衛門
 為先祖代々



7 池の間③刻銘

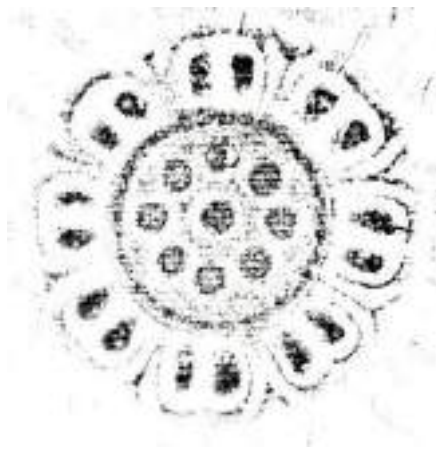
為当山両大権現法楽
 為同 御姥尊法楽
 同 宝伝坊現住
 法林草居
 信州筑摩郡埋橋村
 御代沢弥惣次
 世話人 三代沢半三郎
 庄内村 三溝庄蔵
 芦峯



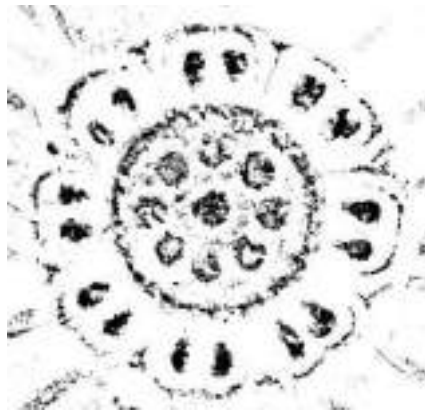
8 池の間④刻銘

長沢義種
 智貞比丘尼
 識心了得居士
 御代沢義一
 本応到岸信士
 梅雲玄亭信女
 雪軍道好信士
 須亨沢辨信女
 百成素鍊信士
 法知界居士
 好誉玉瑞信女
 月珊了指大姉
 江雲了水居士
 积量屋入善童子

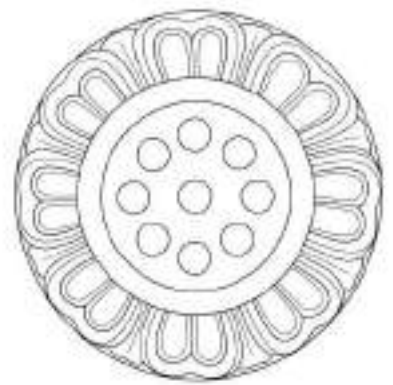
0 10cm



9 撞座 A



撞座 B



0 5cm



图3 拓影

10 草の間唐草文 (部分)

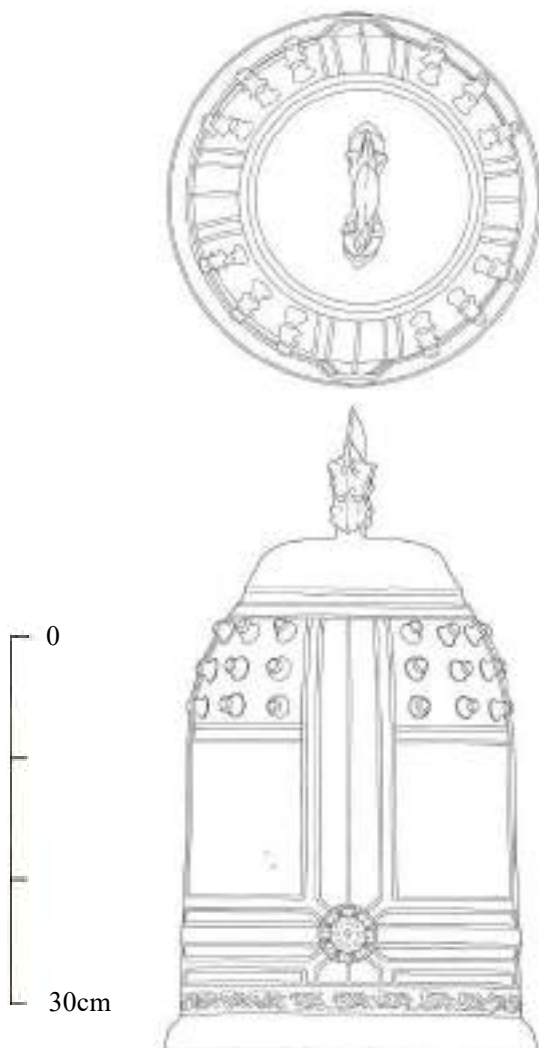


图5 喚鐘概略図

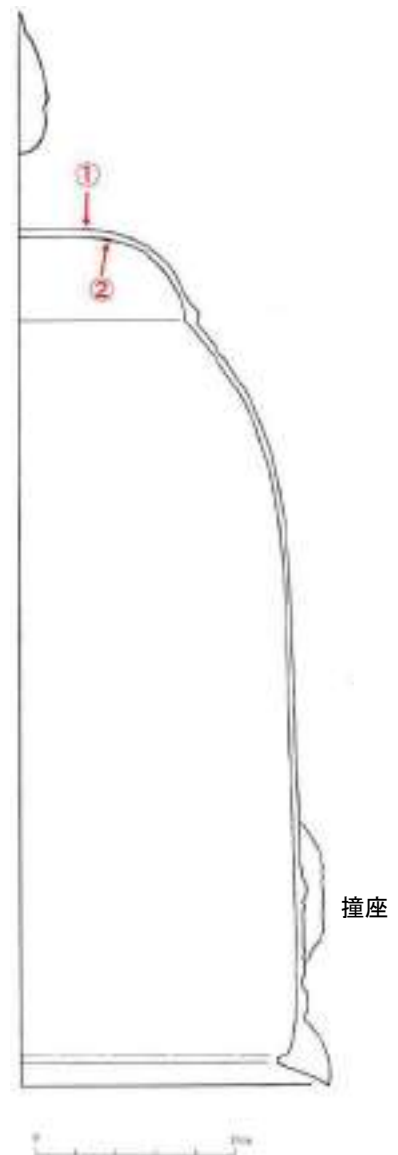


图4 喚鐘断面図

立山線における貨物輸送の歴史

深居 賢人

(富山高等専門学校鉄道部)

1. 立山線の概要

立山線は富山地方鉄道が運営している全線単線の路線である。立山線は本線との分岐駅である寺田駅から五百石駅・岩峠寺駅を経由して、アルペンルートの玄関口立山駅を結んでいる。現在は地域輸送のほかにアルペンルートの観光客の輸送にも大きな役割を果たしている。

2. 立山線の歴史

立山線の歴史は 1911 年から始まる。この年の 4 月、中新川軽便鉄道（のちの立山軽便鉄道）が滑川～五百石間の軌道敷設免許を申請・取得した。2 年後の 1913 年の 3 月、不二越線の前身である富山軽便鉄道が富山～笹津間の軌道敷設の許可を取得し、軌道の敷設工事を始めた。同年 6 月、立山線の前身立山軽便鉄道によって滑川～五百石間が開通した。翌年の 12 月、富山軽便鉄道は全線を開通させ、営業を開始した。1920 年、雄山鉄道が現在の上滝線・立山線にあたる堀川新～藤橋（現在の南富山～立山）間の敷設免許を取得した（なお、免許申請前に雄山鉄道は社名を立山電気鉄道に変更した）。1921 年 3 月、立山電気鉄道は富山県営鉄道に社名を変更するとともに堀川新駅を南富山駅に改称した。同年 3 月、立山鉄道は五百石～立山駅（現在の岩峠寺駅）間を開業させ、滑川～立山間の直通運転を開始した。同年 4 月、富山県営鉄道は南富山駅～上滝駅間を蒸気運転にて運行開始した。4 カ月後の 8 月、富山県営鉄道は上滝駅～岩峠寺駅間を開業させ、さらに 2 カ月後の 10 月に岩峠寺駅～横江駅間を開業させた。1923 年 4 月、富山県営鉄道は横江駅～千垣駅間を延伸開業させた。1926 年、富山県営鉄道は南富山駅～千垣駅間を 600V で電化し、電車運行を開始した。1930 年、立山鉄道は同年に設立された富山電気鉄道と合併し、翌年 8 月、富山電気鉄道は寺田駅～五百石駅間を開通させた。1932 年、富山電気鉄道と立山鉄道が並走している状態にあった富山電気鉄道の上市口駅～五百石駅間を廃止した。1933 年、経営不振が続いた富山鉄道（旧：富山軽便鉄道）は堀川新駅～笹津駅間を廃止するとともに稲荷町駅～堀川新駅間を富南鉄道に事業譲渡した。1936 年、富山電気鉄道は五百石駅～岩峠寺駅間を特殊狭軌の 762mm から狭軌の 1067mm に改軌し電化した。1937 年富山県営鉄道は架線電圧を 1500V に昇圧させるとともに、千垣駅～栗巣野駅間を延伸開業させた。1943 年、太平洋戦争激化に伴う大合併により、富南鉄道、富山県営鉄道は富山電気鉄道に吸収合併されるとともに、富山県営鉄道は千垣駅～栗巣野駅間を日本発送電に事業譲渡し、2 社は解散した。1943 年、旧富南鉄道の稲荷町駅～南富山駅間を電化し、全線で直通運転を開始した。終戦後の 1946 年、旧富南鉄道の富山駅～稲荷町駅間を電化し、富山駅～栗巣野駅間の直通運転を開始した。1954 年、立山開発鉄道は日本発送電から小見駅～栗巣野駅間の線路・施設・鉄道車両および、栗巣野～千丈ヶ原間の敷設免許とそれに付随する利権を譲受した。これは立山開発鉄道の一大プロジェクトである立山黒部アルペンルートの開発を促進するためである。同年 8 月、千丈ヶ原を千寿ヶ原に改称後、栗巣野～立山仮駅（真川橋梁の架設に時間を要したための仮設駅）間を延伸開業した。翌年の 1955 年、立山仮駅～千寿ヶ原駅（現在の立山駅）を延伸開業し、立山仮駅を廃止した。これにより現在の富山地方鉄道の路線網がすべて形成されるに至った。1962 年、立山開発鉄道は小見駅～千寿ヶ原駅間を富山地方鉄道に事業とそれに関連する利権を譲渡し、1970 年には国鉄からの直通列車の運転に備えて千寿ヶ原駅を立山駅に改称した。

なお、1969 年まで稲荷町～南富山～上滝～岩峠寺～立山間を「立山線」、寺田～岩峠寺間を「五百石

線」と呼称していた⁽¹⁾。この文章では1969年以前の呼び方で統一する。

3. 語句

本文を読む上で必要となる語句などをまとめた。

(1) 駅名⁽¹⁾（旧駅名→現在の駅名）

- ・山室駅→不二越駅
- ・堀川新駅→南富山駅（富山県営鉄道は開業時から南富山駅としていた）
- ・上滝公園下駅→大川寺駅
- ・立山（たちやま）駅→岩嶺寺駅
- ・尖山（とがりやま）駅→横江駅
- ・横江駅→上横江駅（廃駅）
- ・小見駅→有峰口駅
- ・千寿ヶ原駅、千丈ヶ原駅→立山駅

(2) 廃駅一覧⁽¹⁾

- ・富山田地方駅→電鉄富山～稲荷町駅間に存在した駅。1969年廃止。
- ・上横江駅→横江～千垣間に存在した駅。1997年廃止。
- ・芦嶺寺駅→本宮～栗巣野駅間に存在した駅。1946年ごろに廃止。
- ・栗巣野駅→芦嶺寺～立山駅間に存在した駅。1981年廃止。
- ・立山仮駅→1954年開業 1955年廃止。千寿ヶ原延伸までの仮駅。

(3) 路線名一覧⁽¹⁾（旧鉄道名→現在の路線名）

- ・中新川軽便鉄道→立山鉄道（立山軽便鉄道）
- ・立山鉄道（立山軽便鉄道）→立山線 五百石～岩嶺寺駅間
- ・富山電気鉄道→立山線 寺田～五百石間
- ・富山軽便鉄道（富山鉄道）→本線 電鉄富山～稲荷町間、不二越線 稲荷町～南富山駅間、笹津線 南富山～地鉄笹津駅間（廃止済み）
- ・富南鉄道→不二越線 稲荷町～南富山駅間
- ・富山県営鉄道→上滝線 南富山～岩嶺寺駅間、立山線 岩嶺寺～栗巣野駅間
- ・日本発送電、立山開発鉄道→立山線 有峰口～立山駅間
- ・飛越線→高山線
- ・北陸線→北陸本線、のちのあいの風とやま鉄道

(4) 主な地名一覧⁽²⁾

- ・和田川→極楽坂山、鳥ヶ尾山間の谷間を流れる川。小見付近で常願寺川に合流する。
- ・小口川→中地山付近を流れる川。千垣集落付近で常願寺川に合流する。
- ・小見→有峰口駅周辺。
- ・藤橋、千寿ヶ原、千丈ヶ原→現在の立山駅周辺。
- ・亀谷→和田川沿いに位置する集落。小見集落の上流に位置する。
- ・東坂森谷→大坂森山と鍬先山の間にある谷。
- ・猫巾、猪根→有峰ダム近辺の地名。正確な場所のはっきりしていない。
- ・松ノ木、松木→現在の横江駅～千垣駅の間地点の対岸にある地名。
- ・河戸→和田川流域に存在した集落の名前。

(5) 主な専門用語

- ・軌間→線路の幅。1067mm を狭軌、1067mm 未満を特殊狭軌と呼ぶ。
- ・軽便鉄道→軌間が 1067mm 未満の鉄道。なお、富山軽便鉄道は社名に軽便鉄道とあるが、当初から狭軌の 1067mm で開業していた。
- ・専用線→企業などが本線から分岐させて作った専用路線。
- ・架線電圧→電車に電気を供給する架線にかけられた電圧。
- ・有蓋貨車→屋根付きの箱型の貨車。
- ・無蓋貨車→屋根なしのトラックの荷台のような形状の貨車。
- ・貨物上屋→貨物を雨などから守るために設けられた屋根。
- ・機廻線きまわせん→機関車を付け替えるときなどに使用する線路。
- ・鉄道省→のちの日本国有鉄道（国鉄）、JR の前身。
- ・省線→鉄道省所有の鉄道路線。
- ・‰（パーミル）→千分率。1000m で何 m の高低差があるかを示す。
- ・～面～線→ホームを「面」、線路の数を「線」として表したもの。
- ・キルン→セメントを焼成するための回転窯。
- ・インクライン→ケーブルカーの一種。
- ・索道→ロープウェイ。
- ・搬器→荷物や人を運ぶためのゴンドラ。
- ・単線循環式索道→1 本の支曳索（搬器を支え、動かす線）が循環して動く索道。
- ・骨材→コンクリートなどを作る際にセメントなどと混ぜ合わせる砂利などのこと。
- ・バラ積み→鉱石などを梱包せずそのまま積載すること。
- ・ブリッジ現象→粉体が圧力や荷重により滑りにくくなり、排出を妨げる現象のこと。
- ・エアスライド→ブリッジ現象を防ぎ、円滑な荷扱いを助ける装置⁽³⁾。

4. 立山線の貨物輸送の概要

立山線における貨物輸送は稲荷町駅～立山駅間（寺田～立山駅間）の全線で行われ、積み荷は主に米などの農作物や工業関係の資材、水力発電事業に関する資材であった。荷主は農協をはじめとし、立山製紙、不二越鋼材工業、日満亜麻紡（後の日本繊維）、日清紡績、小野田セメント、富山セメント、北陸電力、富山県電気局などであった^{(1)・(3)～(6)・(18)}。

以下、戦前、戦中、戦後、最盛期、晩期に分けて説明する。

5. 戦前

(1) 立山軽便鉄道

『大山町史』によると立山軽便鉄道は開通時に有蓋貨車を 6 両、無蓋貨車を 12 両、機関車を 3 両用意していた。（後年に貨車を 2 両増備した。）主な積み荷としてはボール紙・米・カマス・肥料・石炭などで、これらを年間 7200 トン程度輸送していた。仲介役を担う運送店は丸一と丸通の 2 社あった。開通当時から大口の顧客として立山製紙を抱えており、立山製紙単独で年間 8500 トンほどを輸送していた。その他に榎町駅などからは味噌やラムネ・餅・柿・ウドン・衣類などを発送していたという記録が残る⁽⁵⁾。後年には荷主の堅調な増加や増車、増便による輸送力の増強、富山県営鉄道と立山駅（富山県営鉄道の岩嶺寺駅）で接続したことによる連絡運輸の開始も相まって、輸送量は年間 2 万トンを超えるほどに成長した。1931 年には一時的ではあるものの、枕木・レール・金具などを年間 1 万トンほど輸送

したという記録が残されている⁽⁵⁾。これらの貨物の仲介は丸通が担った⁽⁵⁾。

しかし軽便鉄道ということから輸送力は限界を迎えており、また施設の老朽化も顕著であったことから、後年になり改軌・電化されることになった。

(2) 富山軽便鉄道・富山鉄道

富山軽便鉄道・富山鉄道は開業当初は旅客、貨物ともに順調な滑り出しを見せていた。神岡・猪谷方面へ向かう唯一の鉄道路線であったことや、神岡鉱山から産出される鉱石輸送が堅調に増加していたからである。神岡にある神岡鉱山は、神岡～笹津間に特殊狭軌の専用軌道を敷設し、笹津にて富山鉄道に貨物を積み替え、富山まで鉱石を輸送していた⁽²⁾。こうした背景から会社の株式の大半は神岡鉱山が、残りは沿線の有志が引き受ける形になった。富山鉄道は他にも神通川流域の水力発電事業に関する工事資材の輸送を独占して行っていた。こうしたことから分かるように笹津～富山間の輸送は富山鉄道の独占状態であり、また堀川新駅～富山駅間には富山県営鉄道からの直通貨物列車の乗り入れのほか、不二越鋼材工業をはじめとした大口荷主がいたため経営は順調だった。経営の順調さを物語るように、富山鉄道は1929年まで株主に配当を続けていた。しかし1929年、現在の高山線にあたる飛越線の笹津駅～富山駅間が開通すると、富山鉄道の経営状況は一変する。一大荷主である神岡鉱山が輸送経路を富山鉄道経由から飛越線経由に切り替えたからである。また同時に、水力発電関連の資材輸送も飛越線経由に切り替えられた。全国へ直通輸送ができる国有鉄道に対し、富山駅での貨物の引き継ぎが必要で、余計なコストがかかる富山鉄道にもはや勝機はなかった。

飛越線開通直後こそある程度の需要があったものの、徐々に荷主は数を減らし、末期には荷主がほばいない状況となった。沿線住民から国有化を求める運動も起こったが、全区間で飛越線と並走し、競合関係にある路線が国有化されることはなく、結果として笹津駅～堀川新駅間は廃止、堀川新駅～富山駅間は新会社である富南鉄道に77万3150円で売却された。堀川新駅～富山駅間が廃止されずに残存したのは、富山県営鉄道と北陸線の連絡を維持するためや、山室駅に隣接した不二越鋼材工業や日満亜麻紡などの大口荷主があったためである⁽¹⁾。富南鉄道は、富山県営鉄道と密接な関係を持ちながらも合併されることはなく、戦中の県内交通大統合まで独立した経営を維持していた。

(3) 富山県営鉄道

① 開業

富山県営鉄道は常願寺川、真川、小口川、和田川などの豊富な水力資源を開発するために開通したこともあり、当初から貨物輸送を重視して開業した路線である。富山県営鉄道は県営企業であることに加えて、荷主は主に県や国ということもあり、輸送量は堅調に推移していた。

開業当初、富山県営鉄道は蒸気機関車2両、ワブ1形、ワ1形などの鉄道省と同型の木造有蓋貨車が10両、木造無蓋貨車が11両用意され、車両基地は南富山に設置された。当初こそ電化開業を予定していたが、工事費などのかねあいから蒸気動力で開通することになった。また、工期の短縮や建設費の削減を目的にレールや分岐器は鉄道省の払い下げ品を使用し、軌道の敷設工事は地元企業に受注しての開業となった。1920年に南富山駅～上滝駅間が開通すると、同年中に岩嶺寺・横江まで到達した⁽¹⁾。貨物は、富山駅から富南鉄道経由で堀川新駅まで運ばれた後、富山県営鉄道に引き継がれ横江まで運ばれ、横江駅で立山軌道(路線は立山軌道が所有し運行は富山県電気局が担当)に乘せ換えて、そこから立山軌道によって建設現場まで運ばれた。その関係もあり、横江駅は行き違い設備と留置線を有する3面3線のターミナル駅として整備された。2年後の1923年に千垣まで延伸されると専用軌道との接続点は千垣駅になり、それ以降横江駅は左岸に位置する集落への物資輸送、後述する石灰の輸送の拠点となった。

② 電化

やがて上滝・松ノ木・中地山発電所が完成すると、富山県営鉄道全線を電化する案が浮上した。これには主に3つの狙いがあった。

第一は、燃料費を削減するためである。詳細は後述するが、富山県営鉄道は開業以来慢性的な赤字に苦しんでいた。赤字の大半は蒸気機関車の運転に必要な石炭などの燃料費であり、これの削減が求められた。そこで、石炭を必要としない電車の導入が検討された。電車を導入すれば石炭などの燃料費を削減できるうえ、必要となる電力は自社で賄うことができ、相当な経費を削減できると考えたからだ。

第二は、勾配区間での速度向上が求められたからである。蒸気機関車は加速力に劣り、特に勾配区間では列車遅延の原因となった。富山県営鉄道の路線のうち、上滝駅から上滝公園下駅間や岩嶺寺駅から先の区間は30%前後の急勾配が連続し、蒸気機関車では十分な加速ができない状況だった。一方で蒸気機関車より加速性能が高い電車であれば勾配区間での速度向上が期待でき、輸送時間の短縮や増便が期待できる。こうした点からも電車の導入が求められた。

第三は、真川発電所が当初の計画よりも多くの資材を必要としていたからである。これまでの輸送量では、必要とされる資材を運びきれず、建設工事の遅れが懸念された。前述の通り、蒸気機関車は加速性能に劣り、また貨物の牽引力も高いものではなかった。勾配区間では加速力の低さから速度が低下し、輸送時間が延びてしまったほか、立ち往生を防ぐために貨車の減車が必要だった。こうしたことは輸送量の低下に直結し、早急な解決が求められた。電化により列車の速度や加速力、牽引力が向上すればこれまでよりも多くの列車を長編成で運転できるようになり、輸送量を増やすことができる。輸送力の増強といった観点からも早急な電化が求められた。

結果として1927年1月に電化工事が着工され、同年6月に完工した。架線電圧は600V、変電所は岩嶺寺に設置され、現在でも建物は保線詰所として岩嶺寺駅4番線付近に現存している(写真1)。また同時に、電気機関車と電動旅客車を導入することとし、この時新製された電動旅客車は日立製のデハ1～3、日立製(汽車支店製)デニハ4、電気機関車は日立製のデキ1であった。後年、昇圧に合わせて汽車支店製のデニハ5と日車支店製のデハ6が増備された⁽⁶⁾。このうち、デニハ4とデニハ5は客室と荷物室をもつ荷物合造車であり、旅客と荷物を輸送することができた。これらの車両数の増加に対応するために千垣駅には車庫が建設され、電化に合わせて千垣から先の小見・本宮・栗巣野・藤橋に至る富山電気局専用線(ガソリン軌道)が開通して、富山県営鉄道との連絡運輸を開始した⁽⁷⁾。これにより1930年真川発電所が完成した。

③ 経営の悪化

しかし、一見順調に見えた富山県営鉄道の経営であったが、実際には慢性的な赤字に苦しんでいた。赤字の主な原因としては周辺の水力発電設備の建設が一段落したことや、沿線人口が少ないこと、それに伴って定期貨物の取扱量が少ないことが挙げられる。発電所建設工事は大きな利益をもたらすが、長期的な利益にはつながらず、工事が終われば輸送も終わる。沿線人口が少なければ定期貨物は少なく、安定的な利益をもたらすことはできない。また、こうした経営面での問題のほか、電化工事も慢性的な赤字の原因となった。電化当時、富山県営鉄道は電化路線であることを誇示するために「竈柱」と呼ばれる鉄骨トラス組の架線柱(写真2、写真3)を設置した。竈柱は通常の木柱よりも高強度で耐久性に優れている反面、非常に高額だった。竈柱の採用により電化工事には想定よりも多くの費用がかかってしまった。こうした高コストな設備の導入が初期投資を必要以上に大きくしてしまい、累積赤字を拡大させた。結果的に、富山県営鉄道は真川発電所建設時や大川寺遊園開業時を除く全ての年度で赤字を計上した。

富山県営鉄道は開業した当初こそ藤橋延伸を目論んでいたものの、慢性的な赤字や、県の財政状況の悪化から千垣から先への延伸費用が捻出できなくなった。1927年には千垣から藤橋までの延伸用の敷設免許が失効し、延伸計画は頓挫した⁽¹⁾。

④ 転機

転機が訪れたのは1934年、有峰ダム建設工事の開始である⁽⁴⁾。有峰ダムのような巨大なダムの建設には多くの資材を必要とするため、鉄道による輸送が欠かせない。富山県営鉄道は有峰ダム建設工事の開始に際して、従来の常願寺川右岸に軌道を敷設する計画を千垣駅付近に橋梁を架設して左岸に渡し、左岸を渡って藤橋へ延伸する計画に改めた(写真4)。これはガソリン軌道が千垣付近で左岸に渡し、路盤が左岸にあったことなども理由である。

これに対して右岸に位置する芦峯寺集落の住民は、集落を訪ねる登山客の減少や利便性の低下を危惧して県庁での座り込みなど猛烈な反対運動を行った。建設工事は一時休止状態に陥ったものの、芦峯寺集落の対岸に建設する予定の芦峯寺駅まで渡る橋を架橋することを条件に建設工事は開始されたが、肝心の対岸へ渡る橋は県の財政状況の悪化を理由に建設されなかった。軌道敷設免許は1927年に失効していたため、着工前に再取得の上、1937年、晴れて栗巣野延伸をやり遂げた。それと同時に全区間の架線電圧を1500Vに昇圧した。千垣から先は建設費削減のためか、架線柱は木柱、路盤は一部区間を除き富山県電気局専用軌道のものを転用していた。この時転用されなかった区間は、本宮から金谷川間である。この区間の専用軌道の軌道は、山を迂回するために急曲線で敷設されていた。しかし、普通鉄道がその急曲線を走行するのは不可能であったため、県営鉄道は当該区間に隧道を建設し、専用軌道の路盤は放棄した。

終点の栗巣野駅(写真5・写真6)には3線の貨物線(留置線)に加えて、旅客線、機廻線(通過線)、引上線、貨物ホームに面した荷役線が設けられた。貨物ホームにはセメントの濡損を防ぐために大規模な木造貨物上屋が建設された。また、富山県電気局専用軌道との積み替え拠点が千垣から栗巣野に変更されたため、栗巣野駅には貨物の積み替えホームも設置された。

栗巣野延伸後、有峰ダムへのセメント輸送は栗巣野駅から有峰近傍の猫巾を結ぶ全長11kmの和田川索道に切り替えられた。和田川索道は富山県営鉄道栗巣野延伸に合わせて新設された1条の単線循環式索道である。索道の搬送能力は毎時43トンであり、後年設置されるものと比較すると搬送能力はかなり低かった⁽⁴⁾。この索道は戦後、セメント輸送の拠点が小見駅に変更されるまでメインルートとして使用された。

富山方面から栗巣野駅までの貨物輸送には1927年の電化に合わせて日立製作所が製造したデキ1形1号機(のちの富山地方鉄道デキ8000形8001号機)(写真7)と自社の木造有蓋車、木造無蓋車⁽⁶⁾と省線から富南鉄道経由で直通してきた貨車を使用した。また、栗巣野駅から藤橋、水谷方面への物資輸送は富山県電気局専用軌道(砂防軌道)を使用して行われた。

⑤ セメント輸送の増加

1938年、大山石灰販売組合から石灰の原石山を購入した富山セメント(東邦製鋼)株式会社は小見駅付近に小見セメント工場を設立し、操業開始した(1938年建設開始、1941(1942)年操業開始の可能性もある⁽¹⁸⁾)。原石山から採掘された石灰石は鶴瓶式昇降機を使用して和田川近くまで降ろされた後、セメント輸送路を使用して工場内に運び込まれた。ちなみに、富山セメントの輸送路は一般道と立体交差する構造であり1937年に全通し、その橋脚が和田川沿いに現存している(写真8)⁽⁷⁾。富山県営鉄道は工場で生産されたセメントを輸送するために鉄製有蓋車テ30形テ31～テ40、テム50形テム51～テム60、鉄製有蓋緩急車テフ10形テフ11、テフ12を新製した。これらは従来の木造車と異なり、積み荷の濡損

を防止するため鉄製であった。富山県営鉄道と東邦製鋼株式会社は、貨物輸送の開始に合わせて、小見駅の粟巣野方に専用線（東邦製鋼専用線）を敷設した。この専用線は、築堤上の本線と工場の敷地を結ぶために勾配のつけられた単線の線路であり、富山県営鉄道の他の駅では見られない大規模なものであった。

しかし、当時の規制などで小見セメント工場には1キルンの設置しか認められなかったため、セメントの生産量は多くなかった。そのため、後年になり富山セメント（東邦製鋼）小見セメント工場は富国セメントに買収されてしまった。買収後もしばらくは富国セメント小見工場として操業していたものの、富国セメント葛生第2キルン可動枠確保のため、1940年に小見セメント工場は閉鎖されてしまった⁽⁶⁾

（1942年に満州に主要設備を移転した記録が残っているため、事実上の閉鎖状態になったのは1942年の可能性もある⁽¹⁸⁾）。これも当時の規制が厳しいための措置であり、もしこの規制がそれほど厳しくなければ富山セメント（東邦製鋼）小見セメント工場は独立した経営を続けられたかもしれない。ちなみに小見セメント工場閉鎖についてはキルン可動枠確保という目的のほかには他社にセメント設備を売却するため、というのも理由として考えられる。住友大阪セメント株式会社の調べによると、社内史年表の1940年11月に「富国セメント 富山セメント二見工場設備を満州本溪湖洋灰公司へ売却（原文ママ）」とあり、富国セメント富山工場の設備が満州に売却されたことが分かる。（「富山セメント二見工場設備」は「富山セメント小見工場設備」の誤記と考えられる）⁽⁸⁾。満州本溪湖洋灰公司の正式名称は「本溪湖洋灰股份有限公司」⁽⁹⁾であり、本溪湖洋灰股份有限公司は1935年に中国遼寧省にある本溪湖周辺に設立されたセメントを扱う株式会社であったようだ⁽¹⁰⁾。本溪湖洋灰股份有限公司は1940年に富山セメント工場の設備を買収した後、キルンなどの主要設備を本溪湖工場に移設し、1945年7月に満州洋灰股份有限公司と合併され、磐城セメント系列の満州磐城セメントになった。

小見セメント工場閉鎖後の1943年、東邦製鋼株式会社は、小見セメント工場跡地に小見石灰工場を建設し、操業を開始した。これは、キルンなどの主要設備がなくなり、セメントの生産ができなくなったため、石灰をそのまま販売することになったからであると考えられる。原石山から採掘された石灰は、輸送路を使用して工場内に搬入され、工場で加工し、県営鉄道で富山方面へ輸送された。

⑥ その他の貨物輸送

富山県営鉄道はセメントや発電施設関連の貨物輸送のほかに農産品輸送などの地域間輸送にも力を発揮した。農産品輸送に対応するために、大庄駅や開発駅には貨物ホームと木造の貨物上屋が新設された。現在でも開発駅には当時の貨物上屋が駐輪場の屋根として活用されている（写真9）。月岡駅には側線が設置された。また、各駅で小荷物として小規模な農産品の輸送にも対応していた。

このほかに特徴的なものをいくつか紹介する。

1つ目は横江駅と上滝公園下駅（現在の大川寺駅）から発送される石灰である。この石灰は小口川流域にある河戸周辺で採掘されたものである。採掘された石灰は立山軌道を介して横江駅へと運ばれ、富山県営鉄道に積み替え上滝公園下駅まで運び、ここで一度荷下ろししたあと、大川寺にあった焼成窯で焼成し、それを再度貨車に積み込み、富山県営鉄道にて富山方面へ発送された⁽¹¹⁾。上滝公園下駅には石灰関連の貨物を扱うために専用の側線と貨物ホームが設けられた。こうした輸送形態は富山地方鉄道の他の区間では見ることでできない特殊なものであった。

2つ目は砂防ダムの堆積土砂の輸送である。常願寺川水系の各河川には砂防事業の一環として多くの砂防ダムが建設されたが、やがてダムに堆積する土砂が問題になっていった。そこで、砂防ダムの堆積土砂を有峰ダム建設の資材へ転用する計画が立てられた。富山県営鉄道はこの計画を受けて、1941年

に後述のト 20 形とほぼ同じ形態の木造無蓋貨車ト 70 形、ト 71～ト 75 の 5 両を新製した⁽⁶⁾。しかし、太平洋戦争の激化に伴い、有峰ダム建設は 1943 年に凍結されてしまったのでこの輸送は 2 年ほどで打ち切られた⁽⁴⁾。

3 つ目は芦峯寺駅から発送された石炭である。これは本宮駅と栗巣野駅の間に設置されていた芦峯寺駅から富山へ向けて輸送されていたものである⁽⁶⁾。当時、常願寺川右岸に位置する大辻山と来拝山の間の志鷹谷^{しったかだん}には立山鉱業が操業している立山炭鉱（芦峯寺炭山）があった⁽¹¹⁾。1937 年に試掘を始めた立山炭鉱は、試掘結果が良好であったことから、1939 年から本格的な採掘を開始した⁽¹⁸⁾。立山炭鉱で採掘された石炭は「鍋トロ」と呼ばれる逆三角形の荷台を持つトロッコに積み込まれたあと、鍋トロごと索道の搬器に載せられ常願寺川を渡り、常願寺川左岸の芦峯寺駅へと運ばれた。芦峯寺駅には石炭の荷扱いを容易にするために 2 基の分岐器と、本線の川側に長さ 100m の側線を 1 線設けた。石炭輸送は 1939 年から開始され、富山県営鉄道ではこの輸送用として同年にト 20 形ト 21、ト 22 の 2 両の木造無蓋貨車を新製した⁽⁴⁾。



写真 1 芦峯寺駅に現存する変電所の建物（筆者所蔵）



写真 2 原形の単線用の箆柱（筆者所蔵）



写真 3 芦峯寺駅に現存する原形の複線用の箆柱（筆者所蔵）



写真 8 富山セメント輸送路の橋脚（筆者所蔵）



写真 9 開発駅に現存する貨物上屋（筆者所蔵）



写真 4 架橋直後の千垣橋梁を渡るデキ 1 とハニフ 2 で組成された開業前の試運転列車（筆者所蔵）



写真 5 開業直後の栗巣野駅駅舎（筆者所蔵）



写真 6 開業直後の栗巣野駅の俯瞰写真（筆者所蔵）



写真 7 粟巣野駅に停車するデキ 1 とハニフ 2 で組成された開業前の試運転列車（筆者所蔵）

(4) その他

① 人車軌道、立山軌道、富山電気局専用軌道(ガソリン軌道)、立山砂防材料運搬軌道

富山県電気局専用軌道は、富山県営鉄道の駅と発電所などの建設現場を結ぶために敷設された軽便鉄道である。この路線のルーツはかつて存在した下山石灰にある。

A 下山石灰、大山石灰販売組合

下山石灰は小口川、和田川流域で採掘される石灰を輸送すべく設立され、大川寺近傍の東文珠寺から小見まで軌道を敷設することを目指した。1898 年下山石灰は、中地山～東文珠寺間の軌道敷設工事を開始した。軌間は 609mm (2 尺 5 寸)、荷重 1～2 トンのトロッコを人夫 1～2 人で押す、という人車軌道と呼ばれるものであった(のちに人力から牛による牽引に変更)。1901 年に株式会社新川軌道に改称されてからは不景気による石灰の減産のあおりを受けて収益が減少し、小見への延伸を断念した。以降も経営は立ち直ることなく、1909 年に株式会社新川軌道は解散し、新会社である大山軌道が設立された⁽¹²⁾。翌年には中地山から石灰の採掘地である河戸までを延伸開業させ、松ノ木～河戸間の直通運行を始めた。現在でも隧道跡や橋梁跡、路盤の跡が随所に現存しており、北陸電力松ノ木発電所の導水管の上をまたぐ橋梁は公道上からも見ることができる(写真 10)。しかし、1920 年には石灰生産の衰退のあおりを受けて大山軌道も解散した。さらに、富山県営鉄道の延伸も受けて翌年 1921 年には東文珠寺～松ノ木間の線路を撤去してしまった⁽⁷⁾。その後、事業は株式会社立山軌道が引き継いだ。洪水により小口川流域の石灰産業が壊滅的な打撃を受けたために経営は危機的状況に陥る⁽⁷⁾。ここに救いの手を差し伸べたのが富山県電気局である。立山軌道の走行区間に着目した富山県電気局は軌道を富山県営鉄道の横江駅まで延伸させた。常願寺川には軌道の延伸のために亀岩橋(瓶岩橋)を架橋した。延伸工事が完了する

と富山県電気局は立山軌道を使用して横江駅から松ノ木、中地山発電所まで建設資材を輸送し、立山軌道は河戸で採掘された石灰を横江まで運び、富山県営鉄道の上滝公園下駅の焼成窯まで運んだ。松ノ木、中地山発電所が竣工すると一大荷主を失った立山軌道の経営は行き詰まり、会社は解散した。残された軌道は地域住民によって作られた大山石灰販売組合の軌道運送組合が管理することになり、横江～河戸間は荷主にトロッコを貸与したうえで周辺集落の生活物資の輸送や河戸で採掘された石灰の輸送に使用された。1928年に入り小口川第2・第3発電所の工事が再開されると再び資材輸送に横江～河戸間の軌道が使用された。この時も建設資材として様々な物資が輸送され、その中でも特徴的なものにドイツ製の水圧鉄管の輸送が挙げられる。ドイツ製の鉄管が使用された理由は、小口川第3発電所では654mもの高落差を有していたが、その水圧に耐えうる高強度、大径の鉄管を製作する技術が当時の日本になかったためである。ドイツのマンネスマン社で製造された水圧鉄管はシベリア鉄道を経由して海路で富山港まで輸送され、水揚げされた後、省線・富南鉄道経由で富山県営鉄道に運び込まれ、横江まで運ばれた後、横江からは専用軌道、馬車を使用して建設現場まで運搬された⁽¹³⁾。両発電所が竣工すると、軌道は石灰のほかに沿線の炭や薪といった林産物や食料品などの生活物資の輸送に使用されることになった⁽¹²⁾。1930年代に入り大山石灰販売組合は、南砺波に位置する柳瀬村へ貨車1両分の石灰の輸送を開始した。毎年5月に行われていたこの輸送が大山石灰販売組合として最後の大規模な輸送であった。当時石灰の多くは肥料として使用されていたが、やがて化学肥料が普及すると石灰の消費量は減少していった。大山石灰販売組合もその影響を受け、経営は徐々に傾いていき、1939年、前述の富山セメントに原石山を売却した⁽⁷⁾。

B 富山県電気局専用軌道

1927年、富山県営鉄道が千垣まで延伸すると、1930年、富山県電気局専用軌道は、千垣から小見・本宮・栗巣野・藤橋を結ぶように路線を伸ばしていった⁽¹⁾。千垣から先は現在の芳見橋下流側につり橋を架橋し、常願寺川を渡った(写真12)。常願寺川を渡った先で隧道を通り、小見の集落へと入る(写真13・14)。ガソリン軌道は現在の立山線とほぼ同じ経路を通っていたが、本宮駅を出て芦峠寺駅の手前で少しルートがずれ、現在使用されている隧道の横にある隧道を使用していた(写真15)。そこからは現在とほぼ同じ路盤を使用して進んでいたが、真川を渡る直前で線路は大きく上流側へカーブする。カーブした理由として、直進した場合、真川と交差する部分の川幅が広く、当時の技術では架橋が困難であったこと、コストや工期などの問題があったためだと考えられる。また、当時建設中であった真川発電所方面へ最短経路で向かうためとも考えられる。線路は真川発電所の手前で分岐し、一方は真川発電所へ向かい、もう一方はアーチ橋(写真16、17)で対岸に渡り、砂防軌道と接続し、水谷・有峰方面への砂防資材などの貨物輸送に活用された⁽³⁾。



写真10 松ノ木発電所導水管上に現存する橋梁跡（筆者所蔵）
幅は狭いものの、コンクリート製のものが現存している。



写真11 水圧鉄管（筆者所蔵）



写真 12 芳見橋近くに現存する吊り橋の橋台
(筆者所蔵)



写真 13 芳見橋近くに現存する隧道 (筆者所蔵)

県営鉄道のものよりも小さい。坑門上部には電気局専用軌道の隧道の特徴である独特な模様が確認できる。



写真 15 本宮～立山駅間に現存する隧道跡 (筆者所蔵)
現在の線路の川側にある。芳見橋近くに現存している隧道の坑門と同じ模様が見られる。本宮方の坑門は原形をとどめているが、立山方の坑口は崩壊している。



写真 14 反対側の坑口 (筆者所蔵)

こちら側にも写真 13 と同様な模様が確認できる。



写真 16 現在も道路橋として使用されているアーチ橋 (筆者所蔵)



写真 17 架橋直後のアーチ橋（筆者所蔵）

写真から分かる通り、アーチ橋の上に単線の軌道と分岐器が設置されている。軌道には2両のトロッコとガソリン機関車で組成された列車が走行しており、トロッコの間には大型の貨物が吊り下げられている。なお、富山県電気局専用軌道がガソリン軌道と呼ばれるようになった理由は、当時運行されていた機関車がガソリンを燃料としていたからであると考えられる。

C 和田川軌道、本宮インクライン、真谷インクライン

富山県営鉄道が1937年に粟巣野まで延伸すると発電所建設に使用する重量物を運搬する方法が模索された。索道では重量物は運搬できず、本宮駅から白樺平までインクラインを敷設する措置がとられた。インクラインの起点は本宮駅山側の平地に設けられ、富山県営鉄道によって運搬された重量物は本宮駅の3番線に着線後、貨物ホームに移されインクラインに積み替えられた。資材は標高350mの本宮駅から本宮インクラインによって標高550mの白樺平まで運ばれた。白樺平からは下部水平軌道と呼ばれる等高線に沿った形で敷設された軌道を通り真谷まで運ばれ、真谷からは真谷インクラインによって標高1100mまで運ばれた^{(4) (12)}。真谷インクラインからは上部水平軌道によって猫巾まで運ばれ、建設現場に搬入された。こうした複雑な輸送形態を採用したのは有峰周辺の急峻な地形に対応するためであり、急斜面での運搬に適したインクラインと、水平状態で大きな輸送力を発揮する軌道の長所を生かした輸送方式であった。

D 立山砂防材料運搬軌道

立山砂防材料運搬軌道は、常願寺川上流の砂防、治水工事の資材運搬を目的として敷設された軽便軌道である。建設工事は1928年5月5日に着工され、同年、千寿ヶ原～樺平間が開通した。これに合わせて沿線に資材運搬用のインクラインが敷設された。この軌道も専用軌道と同じく、軌間は610mm、機関車はガソリン機関車を使用していた。2年後の1930年11月には白岩～水谷平間が延伸開通、さらに千丈ヶ原～瀬戸蔵間の索道も架設された（瀬戸蔵は現在の瀬戸蔵堰堤、もしくは瀬戸蔵山の周辺の地名を指すと考えられる）。これにより、千垣～水谷間が軌道でつながり、常願寺川流域の砂防事業は一気

に加速した⁽¹⁸⁾。後年、水谷から先の区間にインクラインが敷設され、軌道とインクラインによって有峰方面までつながった⁽¹⁶⁾。

6. 戦中

県内の鉄道は 1943 年の大合併を経て富山地方鉄道に一元化された。有峰ダム建設は戦争激化により凍結され、その他の発電計画も同様に撤回または凍結された。詳細な時期は不明だが、立山砂防の工事でも一時凍結され、立山砂防向けの資材輸送も休止されていた⁽¹⁸⁾。

戦争の激化により、全国の鉄道路線の貨物輸送は増加した。富山県営鉄道も沿線に多くの農業地域を抱え、加えて繊維工場や金属工場もあったため、貨物輸送量は大きく増加したと考えられる。しかし、戦局の悪化に伴い太平洋戦争の末期には、富山も頻繁に空襲を受けたため、富山県営鉄道も甚大な被害を受け、輸送力は著しく低下したと考えられる。当時の詳細な状況については機密扱いであったことや、戦災によって失われたこともあり、ほとんど記録が残されていない。

7. 戦後

度重なる空襲の影響もあり、戦後しばらく間は列車の運行すらままならなかった。特に富山～稲荷町、山室間の被害は甚大で、復旧作業も難航した。一方で復興特需の影響により、農業地域や各工場からの輸送量は増加したと考えられ、特に木材や鋼材、農産物などの生活関連物資の輸送量は大きく増加したものと推測される。なお、東邦製鋼小見工場からの石灰輸送は、敗戦の影響で 1945 年 8 月から 1946 年 4 月まで中止された。同様に、立山砂防向けの資材輸送も 1948 年ごろまで休止された⁽¹⁸⁾。

8. 水力発電所建設工事の再開

戦後、電力不足に悩まされた日本は水力発電を推進することになり、戦争の影響で凍結されていた水力発電計画が再始動したことで立山線・黒部線系統の貨物輸送量は急激に増加した。

(1) 袋詰めセメントの輸送

立山線では、1956 年の和田川発電所共通水路・和田川第一発電所・和田川第二発電所・真川補給水路・小俣発電所の建設開始に伴い袋詰めセメントの輸送が開始された。袋詰めセメントの製造は小野田、磐城、秩父、敦賀セメントが担い⁽⁴⁾、セメントの種類は普通熟セメントであった。各社のセメント製造量はそれぞれ小野田セメントが 530785 袋、磐城セメントが 3338700 袋、秩父セメントが 357000 袋、敦賀セメントが 420800 袋、その他のメーカーが 13200 袋であった。袋詰めセメントの輸送は国鉄と富山地方鉄道が協力して行い、15 トン積みの貨車によって輸送された。国鉄線内の牽引機は国鉄所有の機関車を、富山地方鉄道線内では 1947 年東芝製造のデキ 14730 形 14731 号機を使用していたと考えられる。全国各地で製造されたセメントは国鉄によって富山まで運ばれ、富山田地方駅付近に敷設された連絡線を通り、富山地方鉄道線内に運ばれた。

小俣発電所向けのセメント輸送は地形などの関係から尖山駅で 200000 袋、岩崎寺駅で 30000 袋、上滝駅で 30000 袋が荷扱いされた。尖山駅では旅客用の 1、2 番線の常願寺川側に設置された貨物用の 3 番線で荷扱いされていたと考えられる。岩崎寺駅ではどのホームで荷扱いが行われていたかは定かではないが、3 番線の横にある側線と貨物ホームを使用して荷扱いしていたと考えられる。上滝駅には旅客用の 1、2 番線のほか、駅舎の反対側に貨物用の 3 番線が設けられており、セメントはそこで荷扱いされていたと考えられている。上滝駅には現在も 3 番線の線路用地とホームが現存している(写真 18)。

後年、発電所建設の増加により小見行きの列車も新設された。また、後述するバラ積みセメントの輸送能力が逼迫した際には一部を袋詰めセメントに差し替えたうえで小見駅まで運ばれた⁽⁴⁾。



写真 18 上滝線上滝駅に現存している貨物ホーム（筆者所蔵）

(2) バラ積みセメントの輸送

① 概要

1957 年には有峰ダム取水地口および一般口の建設開始に伴い、小野田セメントの中庸熟ポルトランドセメントの荷扱いを開始した。これは従来の袋詰めセメントと異なり、袋に入っていないバラ積みの状態で輸送された。山口県にある小野田セメント富田工場で生産されたセメントは 3000 トン、4000 トン積みのセメントタンカーにて富山港まで輸送した後、トラックにて小野田セメント富山工場まで運搬され、工場内で貨車に積み替えられたうえで小野田セメント専用線、富山港線、富山駅、富山操車場を経由して富山地方鉄道の富山田地方駅まで運ばれた。富山田地方駅からは上滝経由で小見駅まで運ばれ、小見駅からは東邦製鋼専用線（のちの小野田セメント専用線）を経て小見駅の栗巢野方にあった小野田セメントのセメントサイロ（1200t タンク 2 基）がある小見セメントサイトに収容された⁽⁴⁾。（小見セメントサイトは、東邦工業株式会社小見石灰工場の跡地に建設されたセメント基地である）。

② 鉄道での輸送、使用された車両

バラ積みセメントは国鉄線内では入換用の 9600 形蒸気機関車と小野田セメント私有の 30 トン積みホッパ貨車ホキ 3500 形を使用し、富山地方鉄道線内では牽引機を電気機関車デキ 19040 形（19041 号機、19042 号機）に付け替えて運ばれた⁽⁴⁾。

富山地方鉄道線内で牽引を担当したデキ 19040 形は、1957 年に東洋電機（東洋工機の子会社）によってデキ 19041 号機とデキ 19042 号機の 2 両が製造された。この機関車は、立山線の急勾配に対応すべく 190 馬力の高出力機関車として製造された。当時凸型電気機関車しか在籍していなかった富山地方鉄道で、箱型の車体を持つこの形式は茶色く塗装された車体も相まって異彩を放つ存在であった⁽⁶⁾。

セメント輸送に使用されたホキ 3500 形は、富山港線大広田駅に常備された貨車で、1957 年東洋工機によって製造された最新型の車両である。ホキ 3500 形はこれまでも製造されていたが、この時増備されたものは 18 ロットと呼ばれ、従来のホキ 3500 形とは全く異なり、エアスライド装置に対応した仕様であった。エアスライド装置は貨車の排出口に圧搾空気を吹き付け、粉状の積み荷を流動化し、円滑な積み卸しを行うための装置である。セメントは粒子が非常に細かいため、粒子間に作用する摩擦力が大きくなり（ブリッジ現象）、重力に依存して荷卸しを行う従来の方法では対応できず、バイブレータで振動を加える方法で荷卸しをしていたが、それにも限界があった。エアスライド方式はこういった問題を解決する方法として、我が国では 1954 年に試作的ではあるものの、東洋工機製造の三岐鉄道ホキ 2000 形で初めて実用化された。ホキ 3500 形はホキ 2000 形で得られたデータをもとに開発された量産型

のエアスライド方式に対応したホッパ車であり、以降のセメントホッパ車の基本形となった。小野田セメントはエアスライド方式に対応したホッパ車の入線に合わせて小見駅に隣接した小見セメントサイトにエアスライド装置に対応した荷役設備を導入した。本格的な荷役設備の導入は三岐、秩父、東部鉄道、国鉄に次ぐ5例目であった。ホキ3500形はホキ3576～3579、3583～3593、3580～3582、3594の計20両が製造・投入された⁽³⁾。

以下に貨物輸送の輸送経路を示す。太字は経由路線、細字は拠点駅を示す。

【1958年4月以前】

小野田セメント富山工場→**小野田セメント専用線**→大広田駅→**富山港線**→富山駅→**北陸本線**→富山操車場→**北陸本線**→**連絡線**→富山田地方駅→**立山線**→小見駅→**小野田セメント専用線**→小見セメントサイト

【1958年4月以降】

小野田セメント富山工場→**小野田セメント専用線**→大広田駅→**富山港線**→蓮町駅→**北陸本線貨物支線**→富山操車場→**北陸本線**→**連絡線**→富山田地方駅→**立山線**→小見駅→**小野田セメント専用線**→小見セメントサイト

上記のとおり、輸送開始時は富山駅を経由するかたちで運行された。しかし、1958年4月に富山港線蓮町駅と富山操車場を結ぶ貨物線（北陸本線貨物支線）が開通したことにあわせてセメント輸送は富山駅経由から北陸本線貨物支線経由に改められた。この影響で当初大広田駅常備とされたホキ3500形は全車の常備駅が蓮町駅に切り替えられた⁽³⁾。

小野田セメント専用線は大広田駅と小見駅の2か所に敷設された貨物線であり、このうち小見駅に敷設されたものは、小見駅の栗巣野方で分岐後、本線と並走しながら築堤を下り、小見セメントサイトへと延びていた全長750m（延長後は900m）の専用線である⁽⁴⁾。この専用線は小見セメントサイトで4線に分岐し、1線をバラ積みセメントの荷卸しに、もう1線を特大貨物の積卸しに、あとの2線は留置線として使用していたと考えられる。この専用線は特大貨物の荷扱いをする部分を除いて電化されており、本線用の機関車も入線することができた。

③ 輸送量

このセメント輸送は極めて大規模であったため、国鉄と富山地方鉄道が協力して1日8往復の専用ダイヤグラムを作成し、さらなる需要に応じるため臨時ダイヤグラムも作成された。結果として最盛期には輸送量は1日あたりホキ3500形22両で660トン、袋詰めセメントは15トン積み貨車45両で675トン（セメント袋13500袋相当）にのぼった⁽⁴⁾。

④ 索道での輸送

小見駅まで運ばれたセメントは、セメントサイロまでエアスライドとバケットエレベータにて運ばれた。セメントサイロで一時的に保管された後、スクリューコンベア、バケットエレベータ、エアスライドによって索道の停留所へと運ばれた。停留所に運ばれたセメントは小見セメントサイトから専用索道にて亀谷集落付近に位置する亀谷停留所まで運ばれた。小見セメントサイトから亀谷停留所までの約1.2kmの間にはセメント用の単線循環式架空索道が1条架設された。亀谷停留所で本宮駅近傍に設置された本宮骨材プラント（本宮停留所）から伸びる3条（A線、B線、C線）の骨材用の単線循環式架空索道と合流し、3条のうち1条（A線）を骨材とセメントを運搬できる共用線として使用する形で亀谷停留所から真谷、小杉谷、東坂森谷停留所を経由し、猪根停留所までを結んだ。セメント線は猪根停留所で分岐し、有峰ダム付近の有峰セメントサイロまで伸びていた。セメントはセメントサイロにてベルト

コンベアによって 1300t タンク 3 基に収容された。骨材は猪根停留所で荷卸しされた後、ベルトコンベアによって猪根骨材プラントへと運ばれた。索道の搬送能力は 1 条あたり毎時 80 トン、総延長はセメント線が 13.5km、骨材線が 12.57km であり、B 線と C 線は骨材専用線、A 線のうち亀谷～猪根停留所間の 11.66km はセメント線と骨材線の共用区間であった。当日の輸送量に応じて索道の使用条数は変えることができ、セメントの輸送量が減少すると骨材が 3 条全てを使用することもあった。そうしたこともあり、搬器はセメント用の 750kg 積みホッパ式密閉型搬器と、骨材用の開放型搬器の 2 種類が予備を含めてそれぞれ 410 個ずつ用意され、各停留所に留置されていた。なお猪根停留所の A 線の末端部には搬器を 200 個留置できる大規模な搬器待避所が設けられた。

セメントの積み込み・積み卸しは一部手作業によって行われた。セメントはサイロからエアスライドにて索道の停留所まで運ばれた後、エアスライドのジョイント部をホッパ型密閉搬器の積み込み口と接続し、職員の手によって計量しながら積み込んだ。搬器は計量後に支曳索（曳動索）に接続され、有峰セメントサイロの停留所まで運ばれた。停留所に到着後、搬器は支曳索（曳動索）から外され、職員が停留所内のホッパまで手押しで運んだ。ホッパの上まで運ばれたら職員が搬器の排出口を開き、セメントをホッパの中に投下する。投下後、搬器は職員の手によって再び曳動索につながれ小見セメントサイトに返却された。セメントは、ホッパからエアスライドを通してセメントサイロに収容された。セメントはサイロにて一時保管された後、チェーンコンベアにてバッチャープラントへ運ばれ、打設された。

停留所間は自動運転で 1 条あたり 34 秒に 1 個の搬器が到着する仕組みであった。一方で停留所内の移動は人力であり、到着した搬器を次の停留所に向かう路線に付け替える入換作業はすべて職員の手によって行われた。また、各停留所に留置された予備のセメント用の搬器と骨材用の搬器の出し入れも停留所内にて人力で行われた⁽⁴⁾。

(5) セメント輸送の増加、発電所資材の貨物輸送

1958 年からは和田川発電所や真川における付帯設備の建設工事が開始され袋詰めセメントの輸送量はさらに増加し、小見行きの袋詰めセメント輸送列車が新設された。小見駅に到着した袋詰めセメントは、セメント倉庫へベルトコンベアにて搬送される仕組みになっていた。小見に設けられたセメント倉庫は袋詰めセメント 30000 袋を収容できる間口 50m、奥行き 20m にも及ぶ大規模なものであった。

このほかに小見駅には常願寺川側に貨物用の 3 番線と貨物ホームが設置され、その他の貨物も引き受けられるよう小規模な木造貨物上屋が設置された。

また、セメント輸送と同時期に発電所向けの鉄筋、変圧器、機械類の輸送も行われた。鉄筋類は日本鋼管製品を使用し、小見駅はセメントや機械類の搬入で混雑していたために千垣駅と本宮駅にて分散して荷扱いされた⁽⁴⁾。千垣駅にはかつて終着駅として機能していた時の名残で 2 番線と広大なホームがあり、それを転用する形で荷扱いしていたと考えられる。1960 年ごろの航空写真には広大な敷地に複数の建物が写っており、これらも貨物輸送に関連した設備ではないかと推測される。本宮駅は本宮インクラインと貨物の引継ぎをしていた時の名残で広い貨物ホームと貨物用の 3 番線があり、さらに機廻線や通過線として使用できる 2 番線が存在したため、かなりゆとりをもって荷扱いできたと考えられる。1960 年ごろの航空写真には比較的小規模な建物が数棟設置されているのが写っている⁽¹⁴⁾。

発電所で使用される機械類は小見駅と上滝駅で荷扱いされ、変圧器やタービンといった特大貨物は小見駅で荷扱いをすることとなった。特大貨物は低床式大物車シキ 40 形を使用して運搬されたと考えられ、全国各地にある工場で製造された貨物は、大物車に積み込まれ、国鉄を経由して富山田地方駅まで運ばれた後、富山地方鉄道に引き継がれた。小見駅には大物車から荷下ろしするために 50 トン門型クレーンの新設のほか、専用線の末端部を 150m 延長するなどの対策を講じた上で荷扱いされた。小野田セ

メント専用線はほぼすべての区間で電化されていたが、この時延長された部分は荷卸しの障害とならないように架線は設置されなかった。なお、貨物や輸送手段の手配、小見構内での荷扱い、小見から先の建設現場までの輸送は日本通運株式会社富山支店が担当した⁽⁴⁾。

(6) セメント輸送の終焉

1960年に小俣ダム発電所向け袋詰めセメントの輸送が終了するとダム関連の輸送量は徐々に減少していった。やがて迎えた1961年、有峰ダムセメント打設終了に伴い富山地方鉄道のセメント輸送は終了した。結果的に普通熟セメントの輸送量は合計4660485袋、中庸熟ポルトランドセメントの輸送量は合計276351トンになった⁽⁴⁾。

袋積みセメント輸送に使用された貨車は国鉄線内の輸送に戻り、富山地方鉄道が所有する電気機関車はその他の貨物輸送に転用された。

バラ積みセメント輸送用に導入されたデキ19040形とホキ3500形は、製造当初からセメント輸送終了後に小野田セメント系列の三岐鉄道へ譲渡されることが決まっていた⁽⁶⁾。そのため、車両の規格は三岐鉄道のものに準拠するかたちで製造された。小野田セメントは車両の製造を東洋工機に一任しており、有峰ダムのセメント輸送に使用する車両も例にもれず東洋工機に受注した。このおかげで富山地方鉄道から三岐鉄道への譲渡は比較的円滑に進んだと思われる。

三岐鉄道に譲渡されたデキ19040形19041号機と19042号機は、それぞれED454号機、ED455号機と番号を改めたうえで現在も貨物輸送で運用されている。このセメント輸送に使用されたホキ3500形は、配置を三岐鉄道の東藤原駅に変更した上で1986年までセメント輸送に活躍した⁽³⁾。

小見駅に敷設された小野田セメント専用線は、架線柱や線路といった構造物は撤去されたものの、路盤はそのまま残されている。一方で小見セメントサイト、本宮骨材プラント、セメント・骨材用の索道などは一部を除いて完全に撤去された。ただし、現在も小見駅には貨物ホームと架線柱が(写真19)、小野田セメント専用線跡には今でも築堤と架線柱の台、貨車門が現存し(写真20、21)、本宮駅には貨物ホームと本宮インクラインの土台が(写真22)、本宮駅の近くには本宮骨材プラントの索道停留所の基礎が残っている(写真23)。



写真19 有峰口駅に現存する3番線と貨物ホームの跡、架線柱（筆者所蔵）



写真20 小野田セメント専用線跡に現存する貨車門（筆者所蔵）



写真 21 有峰口駅立山方に現存する架線柱台
(筆者所蔵)



写真 23 本宮駅近傍に現存する本宮停留所の跡
(筆者所蔵)



写真 22 本宮駅に現存する 3 番ホームの跡 (筆者所蔵)

3 番ホームの大半は高尾建設の敷地となっている。図中のホームは手前から 1 番ホーム、2 番ホーム、3 番ホームであり、2 番ホームは機廻線・通過線として使用されていた旧 2 番線上に貨物輸送終了後に新設されたものである。

9. 水力発電事業以外の貨物輸送

立山線は各駅からの農産品輸送のほかに、上堀駅から分岐する日清紡績専用線からの貨物輸送、山室駅から分岐する不二越鋼材工業専用線からの製品輸送、立山砂防向けの資材輸送、芦峯寺駅からの石炭輸送、小見駅からの石灰輸送などの貨物輸送があった。

上堀駅から伸びる日清紡績専用線は本線から分岐後、栗巣野方面に進んだ後、五百石方面に大きくカーブする構造だった⁽¹⁴⁾。全線単線で路線全長は約 1km であった。専用線は紡績工場内で 2 本に分岐し、それぞれ留置線や荷役線として機能していた。立山線と専用線の合流点である上堀駅には貨物ホームと貨物上屋が設置され、1946 年の時点では専用線に向けた場内信号機（出発信号機）が設置されていた。

紡績関連の輸送は戦後から高度経済成長期がピークであり、その後はモータリゼーションも相まって徐々に減衰していった。

山室駅は当時 2 面 3 線の交換駅であり、さらに構内に 2 本の留置線を備えていた。留置線からは不二越鋼材工業の専用線が上滝方面に伸びており、工場内に 2 つの貨物ホームを設けていた。不二越鋼材工業への貨物輸送は原材料輸送のほかに製品輸送などを行っていた。

太平洋戦争の影響で凍結されていた立山砂防の建設工事は 1948 年に再開された⁽¹⁸⁾。それに伴い、立山砂防向けの貨物輸送も同時期に再開されたものと考えられる。富山県営鉄道の栗巣野延伸後は、栗巣野駅にて富山県営鉄道とガソリン軌道とで貨物の受け渡しをすることになっていたが、1955 年に立山開

発鉄道が栗巣野から先千寿ヶ原へ延伸する際にガソリン軌道の軌道が邪魔になったため、軌道を山側に移設する措置が取られた。移設された軌道は立山開発鉄道の路盤よりも一段高いところを通っており、高さを上げるために石垣が組まれた。この時設置された石垣は現在も一部が道路に転用されながらも現存している。

立山開発鉄道が千寿ヶ原まで延伸した後もガソリン軌道は栗巣野駅を起点に運行されていたが⁽²⁾、1966年にガソリン軌道は栗巣野～藤橋間を廃止、富山地方鉄道と砂防軌道の貨物の受け渡しは立山駅に付随する立山貨物駅で行うことになった。立山貨物駅は現在留置線として使用されているところに存在した貨物設備である。現在駐車場になっている部分には貨物上屋が立ち並び、砂防軌道の側線が3本敷設されていた。貨物は主にセメントや材木、機械類などであり、いずれも立山貨物駅にて受け渡しを行っていた⁽¹⁵⁾。

五百石線では五百石駅から分岐する立山製紙専用線からの製品輸送でにぎわった。立山製紙の専用線は五百石駅3番線から分岐し、一度本線に沿って岩嶺寺方まで伸びた後、折り返して立山製紙の工場内に入る構造であった。貨物ホームは折り返し部分にある留置線に一般の貨物も扱えるものが1面設置され、工場内にも1面設置されていた。

立山線、五百石線における農産品輸送は他路線と比べても特に活発で、立山線では富山県営鉄道の章で説明した貨物側線が戦後も活用され、五百石線では富山電気鉄道時代に寺田駅や釜ヶ淵駅に敷設された側線が戦後も活用された。寺田駅には駅舎と4番ホームの間に貨物用の5番線が敷設され、寺田発着の貨物列車の着発線のほかに、旅客列車を退避する貨物列車の待避線としても使用された。釜ヶ淵駅に設けられた専用側線は特徴的で、本線から分岐すると一度本線と並走して岩嶺寺方まで進んだ後、折り返して農業倉庫に向かって緩くカーブする構造であった。

農産品輸送のほかにも各駅で炭などの林産品、生活物資などの小口貨物の取り扱いがあった。ここでは小口貨物輸送に活躍した車両について触れたい。一般の小口貨物には、通常の旅客用車両が用いられていた。貨物の量が多い場合、1951年までは、旧富山県営鉄道デニハ5のモハ10050形10055号車と、同じく旧富山県営鉄道デニハ7（1939年に縁起担ぎのためにデニハ4から改番）のモハ8060形8067号車を使用した貨客混載列車を運転していた。貨物を積載する場合は、車内を一部締め切って運用についていた⁽⁶⁾。1949年以降は、日本海ドックで鋼体化改造を受けた荷物合造車であるモニ6570形がこうした荷物輸送にあたっていた⁽⁶⁾。この形式は、全室を荷物室にすることができたため、農繁期には農協倉庫がある各駅から富山方面への荷物列車に多く使用されていた。なお、農閑期には荷物室部分にも折り畳み式の座席を展開し、旅客車として運用されていた。

貨物輸送には前述の荷物電車のほかに、国鉄所有の有蓋貨車や無蓋貨車、富山地方鉄道線内で完結するものには富山地方鉄道所有の貨車が使用された。富山地方鉄道が所有する貨車についてもテ30形・テム50形などについては国鉄の直通認可を取得の上、国鉄線内に直通する運用が取られた（テ30形は立山線専用車両として扱われていた）。牽引する機関車については、戦後すぐの頃には各鉄道会社から引き継いだ蒸気機関車のほかに、富山県営鉄道から引き継いだデキ8001号機（旧富山県営鉄道デキ1形）や庄川水力電気から譲受したデキ8100形を使用し⁽⁶⁾、変わった例ではモニ6570形を機関車代用として貨物列車の牽引に当たらせていた⁽¹⁶⁾。1970年頃になると、貨物列車の牽引は主にデキ14731号機・デキ12021号機が担当するようになった。デキ12021号機はもともと黒部川の水力発電所建設工事に合わせて1958年に関西電力が導入した電気機関車で、工事終了後に富山地方鉄道に譲渡されたものである⁽⁶⁾。この2両は他の電気機関車よりも車齢が若く、牽引力も強かったため貨物輸送に抜擢されたと考えられる。最末期には貨物列車の減便に伴い、牽引は専らデキ12021号機が担当した。

小見駅からの石灰輸送は、戦後一時期の中断を経て、1946 年 4 月に操業は再開された。経営元の東邦製鋼は、1946 年に東邦工業へ社名変更しており、東邦製鋼小見石灰工場も東邦工業小見石灰工場に改称された。石灰工場の操業再開後は、小見駅を起点とした富山方面まで石灰輸送の貨物列車の運行が再開されたと考えられる。しかし、1950 年代になると、有峰ダム建設のためのセメント基地を小見集落付近に建設する話が持ち上がり、用地確保のために 1956 年 6 月に東邦工業小見石灰工場は閉鎖され、設備の一部と敷地は小見セメントサイトに転用された。

芦峯寺駅からの石炭輸送については富山県営鉄道の章でも説明したが、戦中、戦後の動きについて説明したい。太平洋戦争が始まると国内の燃料事情は悪化し、石炭需要が増加した。立山炭鉱もそれに対応するように採掘量を増やし、それに伴い石炭の輸送量は増加した。終戦後の 1946 年からは不二越株式会社が炭鉱の経営を担った。しかし、太平洋戦争の終戦後、他の炭鉱からの良質な石炭が市場に出回るようになり、立山炭鉱の質の低い石炭の需要は落ち込んだ。それに伴い採掘量も減少したため、立山炭鉱は 1949 年 4 月に閉山した⁽¹⁸⁾。立山炭鉱からの石炭輸送も閉山と同時期の 1949 年に打ち切られたと考えられる⁽¹¹⁾。芦峯寺駅もそれとほぼ同じ時期にその役目を終えたと考えられるが、1946 年の配線図に芦峯寺駅の記載はなく、廃止時期について詳しいことは分からない(貨物駅だったために掲載が見送られた可能性もある)。なお、芦峯寺駅跡には小屋が残っているが、駅廃止後に設置された保線資材置き場であり、芦峯寺駅との関係性はない。

10. 貨物輸送の終焉

しかし、こうした活況もモータリゼーションの波には太刀打ちできず、荷主の撤退も相まって、1960 年代を境に貨物輸送量は減少の一途をたどった。

立山線、五百石線では 1968 年 5 月の月岡駅、大川寺遊園駅の貨物扱い廃止を皮切りに、1969 年 4 月に稲荷町駅の燐化学工業専用線以外の貨物扱いを廃止した。同年 6 月には有峰口駅と立山駅の貨物扱いを廃止し、立山貨物駅は留置線に転用された。それと同時に国鉄との連絡運輸の廃止に伴い、小口貨物の取り扱いを全線で廃止した。同年 8 月には釜ヶ淵駅、岩峯寺駅、上滝駅、大庄駅、開発駅の貨物扱いを廃止した。それに伴い、釜ヶ淵駅では農協倉庫専用側線を撤去、岩峯寺駅では側線を保線用側線に転用し、上滝駅では 3 番線の使用停止措置を取り、開発駅でも同様に 3 番線の使用停止措置を取った。1970 年には南富山駅と上堀駅での貨物扱いを廃止し、上堀駅では日清紡績専用線の撤去、貨物ホームの使用停止措置が取られた。1971 年には、貨物扱いが残っていた稲荷町駅、寺田駅、五百石駅、不二越駅の貨物の構内入換業務を日本通運株式会社などの運送業者に委託し、その他の駅では富山地方鉄道社内で定めた貨物移動作業班制度を活用し、人員の整理を開始した。1972 年には不二越駅の貨物扱いを廃止し、不二越鋼材工業専用線、構内の貨物ホームの撤去を行った。1979 年には稲荷町駅から伸びる燐化学工業の貨物扱いを廃止し、専用線を撤去した。1983 年には最後まで残った五百石駅と寺田駅の貨物扱いを廃止した⁽¹¹⁾。最後まで残った貨物輸送は、五百石駅発のものは立山製紙の専用貨物、寺田駅発のものは農協関連の専用貨物であった。五百石駅では立山製紙専用線の廃止措置が取られ、寺田駅では貨物用の 5 番線の使用が停止された。

本線での貨物輸送は 1970 年を最後に廃止されており、1983 年の立山線貨物営業廃止をもって富山地方鉄道線内での貨物営業は完全に終了した。

11. その後

貨物用に設けられた駅やホームといった設備の大半は撤去され、残されたものも自然に還りつつある。開発駅や大庄駅、上滝駅、岩峯寺駅、横江駅、千垣駅、有峰口駅、本宮駅には貨物ホームが残り、これ

らの駅に加え、不二越駅や上堀駅、月岡駅、五百石駅、釜ヶ淵駅には貨物側線の用地が現存し、特に上堀駅には貨物ホームの跡地が富山地鉄建設の社有地として残っている。貨物用に製造された貨車もその多くは解体されたものの、一部の車両はその後に残存した。富山県営鉄道からの引継車であるト25（旧車番ト22）は、貨物輸送の任を解かれてから側面のあおり戸を撤去され、クレーンが取り付けられ保守用車として1989年まで活躍した。同じく富山県営鉄道からの引継車であるテフ10形の1両は、廃車後に電気検測車に改造され⁽⁶⁾、電気設備の検査に使用された。デキ6502号機は、除籍された後も南富山検車区内の除雪のために残され、冬季の構内除雪に使用された。デキ14731号機は車籍後も前面にラッセルヘッドを取り付けて、2007年までラッセル車として冬場の運行を支えた⁽¹⁷⁾。デキ12021号機は保線用機関車として現在でもバラスト輸送などの保線作業に使用されている。

おわりに

本稿の作成にご協力いただいた皆様に感謝いたします。特に草卓人氏には本稿の校閲にあたり、多くのご助言をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

本稿がきっかけになり、より多くの方が立山線の貨物輸送について関心を持っていただければ幸いです。

注

- 1 『富山地方鉄道五十年史』富山地方鉄道株式会社 1983年
- 2 『5万分の1地形図「五百石」』大日本帝国測量部 1933年
- 3 『RM Re-Library38 有蓋ホッパ車のすべて』吉岡心平著 2025年
- 4 『常願寺川有峰発電計画工事誌』北陸電力株式会社発行 1964年
- 5 『大山町史』大山町役場発行 1964年
- 6 『RAILFAN No. 718』関崇博、大幡哲海著 鉄道友の会発行 2013年
- 7 『立山町史』新興出版社発行 1982年
- 8 『住友セメント八十年史』住友セメント株式会社、1987年
- 9 『住友大阪セメント百年史』住友大阪セメント株式会社、2008年
- 10 『満州の窯業』須永徳武著、立教大学、2006年
- 11 『旧立山炭鉱坑道入口銘板と、かつて芦峯寺に存在した炭鉱をめぐる覚書』吉野俊哉著 立山博物館紀要第25号 2018年
- 12 『人やものを運ぶ一山岳地域の物流一』富山市大山歴史民俗資料館発行 2018年
- 13 『水圧鉄管 展示案内』富山市大山歴史民俗資料館 設置年不明
- 14 『国土地理院撮影空中写真』（1960年代撮影）
- 15 『新装版 軽便探訪』新井清彦著 機芸出版社 2022年
- 16 『富山県の鉄道 1960年代～北陸新幹線開業までの記録』服部重敬著 フォト・パブリッシング発行 2022年
- 17 『富山地方鉄道 加越能鉄道』飯島巖、西脇恵、諸河久著 ネコ・パブリッシング発行 2002年
- 18 『常願寺川の歴史を尋ねて』富所憲二ほか10名著 立山砂防工事々務所 1977年

令和7年度ミニ企画展「上段地区のお蚕様」展から

森井 祐子

(立山町歴史交流ステーション日なた学芸員)

はじめに

令和4年のミニ企画展「生活の中で活躍する綿」を行った際に、地元の方々から「昔は上段地区で養蚕が盛んだった」との話を聞く機会があった。そこで、上段地区で養蚕に携わった方からの聞き取り調査の結果に基づき、立山町における養蚕についての展示を行った。展覧中には、蚕の幼虫を館内で飼育し、桑の葉を食べる様子や繭を作る様子を見学できるようにし、できた繭を使って糸取り体験のイベントも開催した。

本稿では、立山町における養蚕の実態と企画展の成果について報告する。

1 養蚕とは

養蚕農家が桑を栽培し、蚕を育て、繭を生産する一連の営みを養蚕業と言う。養蚕の起源は、現在の中国浙江省の遺跡から紀元前2750年頃(推定)の平絹片、絹帯、絹縄などが出土している。殷時代(紀元前1600年代頃～前1046年)や周時代(紀元前1046年頃～前256年)の遺跡から絹製品は発見されていることから、継続的に養蚕が行われていたものと考えられている。家蚕(カイコ)は、約5000年前までにクワコという野生の種から家畜化され、日本へは弥生時代(3世紀頃)に帰化人によって伝わったとされている。

古代(794年～1192年)には、養蚕から得られる絹は、律令国家のもとで租税や貢納と結びついた重要な生産品として位置づけられ、平安朝時代にはほぼ全国に養蚕業が広まっていた。奈良・平安時代には絹織物が貴族社会において不可欠な高級品であり、養蚕は主に朝廷や寺院の管理下で行われ、制度的な保護と奨励を受けていた。

中世には、養蚕は次第に農民層へ広がり、地域ごとの自然条件に適応した飼育法が形成された。

江戸時代に、商品生産としての性格が強まり、幕府や諸藩の奨励政策のもとで技術改良が進展し、養蚕書の普及や指導体制の整備によって生産性と品質が向上した。

近代は、開国に伴う国際市場の拡大を背景に生糸輸出が急増し、養蚕業は日本の基幹産業へと成長した。政府は殖産興業政策の一環として器械製糸の導入や試験研究機関の整備を進め、品種改良や病害対策など科学的知見に基づく生産体系が確立された。これにより日本産生糸は国際競争力を高め、外貨獲得の柱となった。しかし、戦後はナイロンなどの化学繊維の普及、農村人口の減少、輸入製品の増加などにより需要が低下し、養蚕業は急速に縮小した⁽¹⁾。

現在の養蚕業は、規模こそ小さいものの伝統産業として新たな役割を模索し続けており、近年では現農研機構・群馬蚕糸技術センターなどの研究機関により、遺伝子組み換えカイコの研究が進められているなど、新しい機能をもったシルクの開発や、医療用品、電子素材などの新たな素材として実用化を目指している⁽²⁾。

2 立山町の養蚕業

富山県では、明治中期以降、在来産業の製糸・織物などの繊維産業を中心に、軽工場が発達した。明治35年(1902)に堀川村(現富山市)に富山県織物模範工場が作られ、絹織物の生産が奨励されるようになった⁽³⁾。『立山町史』によると、五百石町にも繭が集まり、機織り工場ができ、羽二重製造の地方的中心となった。明治40年代になると、春蚕・秋蚕の伝習会が開かれるなど、しだいに養蚕は発展した。町内の養蚕業は、灌漑の便の少ない段丘付近や山側で行われた。水田の多い平坦な土地に桑畑はほとんどなく、現在の立山町総合公園の場所に段丘を利用した桑畑が多くあった。また、畦畔や山麓地に自生する桑をとって蚕を飼育する家もあった。

上段地区の養蚕に従事していた戸数は、昭和4年(1929)に85戸であったが、昭和8年には134戸まで増している(表1)。昭和8年の地区別の戸数では、福田と野沢が最も多かった(図1)。これらの集落では昭和22年頃から用水が整備され、水田化が進むにつれて養蚕農家はしだいに減少していった。『統計たてやま』には農業産出額として養蚕が記載されており、昭和35年から昭和55年までの間、立山町で養蚕が行われていることや昭和61年には生産が途絶えていることが確認できた。

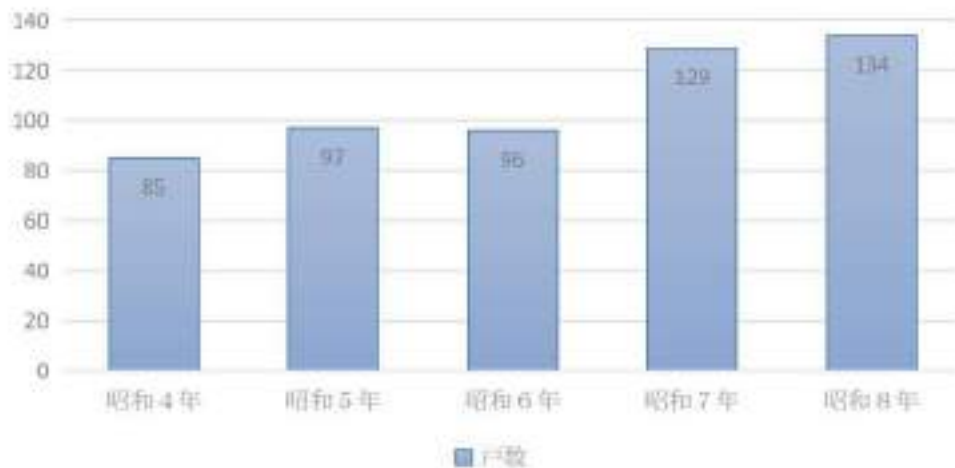


表1 上段地区の養蚕戸数 『立山町史下巻』811ページより

養蚕産出額は、昭和35年から200万円(現在の価値で1,500万円～2,000万円)あり、昭和42年～昭和46年にかけて300万円、昭和48年に700万円に達した⁽⁵⁾(表2)。

その要因の1つとして、昭和40年代前半からの米過剰問題に対し、緊急的な米生産抑制策として昭和46年～同50年度で行われた「稲作転換対策」が挙げられる。米の生産を抑制することで生産量を調整し、米価の安定や米需給の均衡を図るとともに、生産を抑えた米を他の作物(麦、大豆、飼料作物など)に転作させることで、食料安全保障への貢献および地域適作の推進を図る国の政策であり、生産調整に参加した農業者には、転作に対する支援措置として補助金が支給された⁽⁶⁾。この政策を利用して水田を桑畑に転作した農家が増えたことで、一時的に生産量が増えたと考えられる。

昭和48年にピークとなった養蚕産出額は、その後減少に転じ、昭和60年に0円となっている。上段段丘では、昭和50年代後半に町政施行30周年記念事業として立山町総合公園の建設が計画され、町の用地買収に応じた多くの養蚕農家が桑畑を手放したことで、上段地区の養蚕業は途絶えたようである。

当館のある上段地区では、昭和期に養蚕が盛んに行われた記録が残されている。上段役場には卵から2齢までの蚕(稚蚕)を飼育するための共同稚蚕飼育場⁽⁷⁾(図1)が置かれ、県の指導者として日中上野の松下亀次郎氏、技師として福田の本多隆氏が中心となり養蚕業を支えていた。

その主な活動としては、桑の葉が芽吹く時期になると本多氏が卵を孵化させ、共同稚蚕飼育場に泊り込みで温湿度管理を行い、3齢の大きさになると各養蚕農家に配布をした。各養蚕農家で育てられた繭は、日中上野小学校の体育館に持ち寄られ、岐阜県神岡町の製糸場によって半日かけて売買の取引が行われた。当時、1kg4千円(現在の価値で8千円～1万円)で取引され、米より高く売買されることもあった。

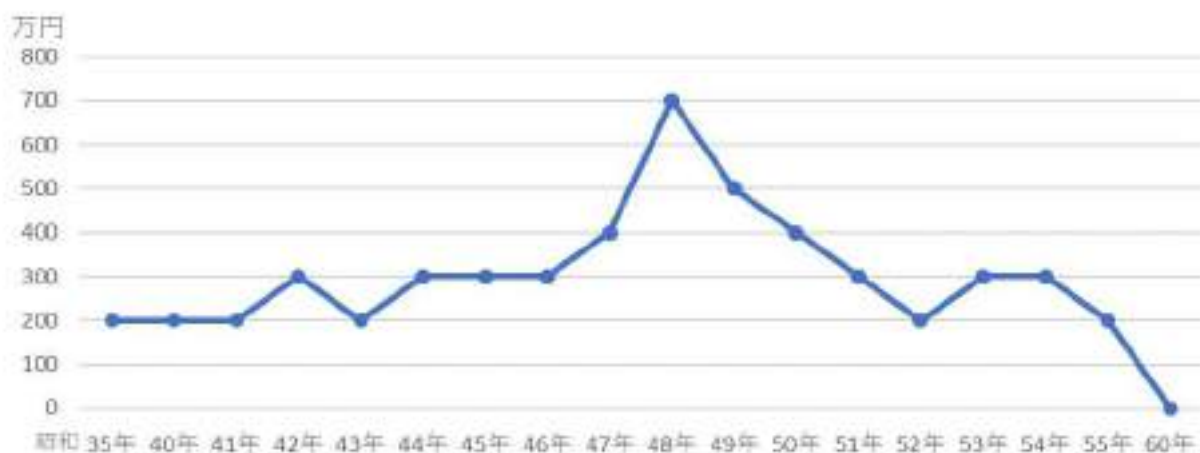


表2 立山町の養蚕産出額 『統計たてやま』より

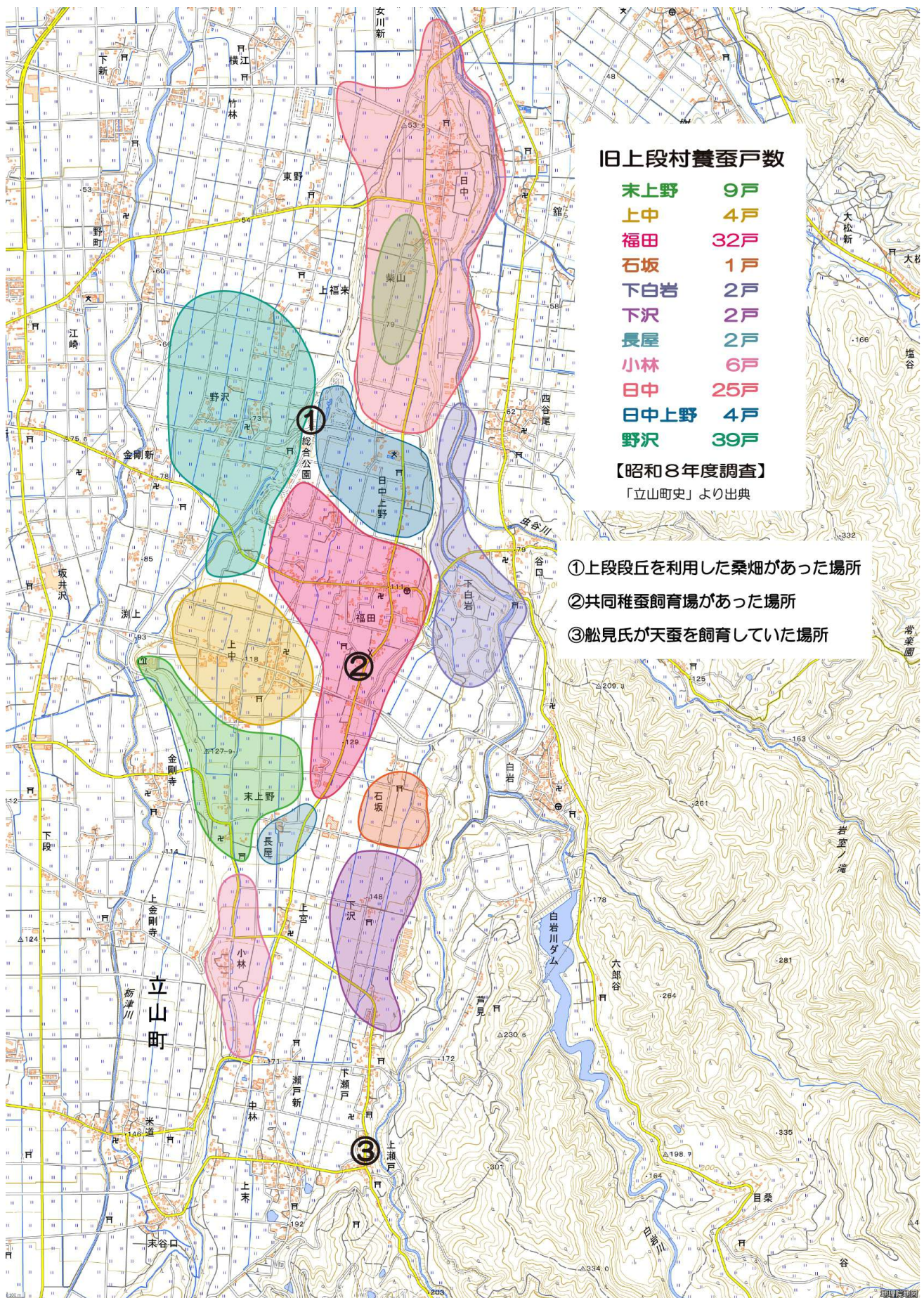


図1 上段地区の地図から見る養蚕 地理院地図より

野沢で養蚕をしていた土井氏の話により昭和 45 年頃の当時の話を伺うことができた。

当時の土井家では、6 月・8 月・10 月の年 3 回養蚕をしており、養蚕の時期になると家中にムシロを敷いて蚕を飼っていた。家の 2 階、茶の間、仏間などほとんどの場所で蚕を飼育していたため、その時期は人間の場所の方が少なかったという。家族総出で蚕の世話をするため子供も学校から帰って来たら手伝った。

作業としてはムシロの上に蚕を置き、その上から桑の葉を乗せる。3 日に 1 回掃除のために、横に新しいムシロを敷き、両手で蚕をすくうようにして移し、食べ残しや糞を捨てた(図 2)。移す時に傷ついた蚕は繭を作らず、また、カエル・ヘビ・ネズミなどが家に入って来て蚕を食べてしまうこともあり、繭まで育たない蚕も多くあった。



図 2 土井家の養蚕方法手順

餌となる桑の葉は、上段段丘にあった桑畑から収穫した。桑畑は、数カ所あり時期に合わせて食べさせる葉を管理していた。米の生産調整政策の時に、何枚か田を桑畑に転換しているが、転換した桑畑のものの方が良好な生育だったという。

熟蚕期になると桑の葉を食べなくなり、体が黄色くなってきた頃合いで横に「回転マブシ」を置くと繭を作るために蚕が移動するので、回転マブシの上に蚕がたまったら人力で回転させていた。回転マブシになる前は藁マブシを使っていたが、繭を採る作業が大変なため回転マブシに変わっていった。段ボール製の回転マブシは、使わないときは畳んで収納ができた。繭を収穫する際は、繭かき用の箱枠に入れ、繭かき棒で押し出すことで簡単に繭を取ることができ、作業効率が上がった(図 3)。繭のまわりについた糸(毛羽)は、売り物にならないが、綿と混ぜて座布団の中綿として使うと、座り心地がよくなったという。

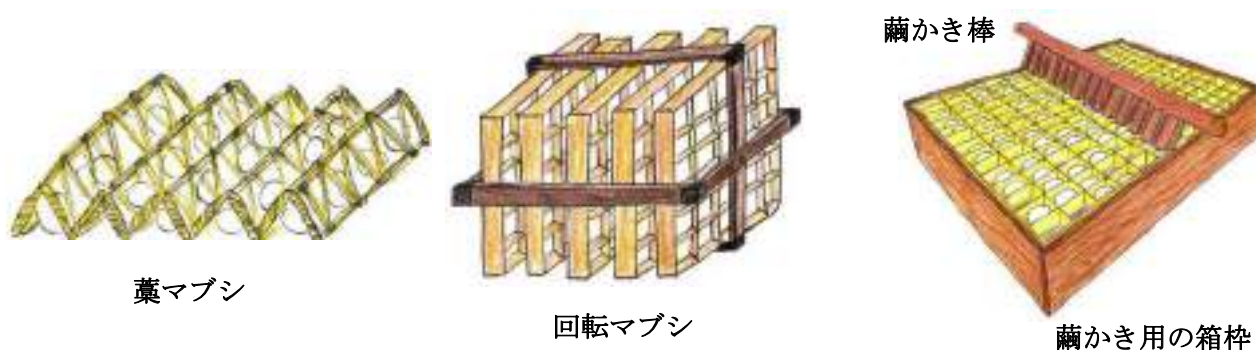


図 3 養蚕道具「マブシ」

4 天蚕

(1) 天蚕とは

立山町で養蚕業を営んでいた方を調査する中で、立山町で天蚕をしていた方と巡り合うことができた。

天蚕とは、屋内で飼育する蚕を「家蚕」と呼ぶのに対して、屋外で飼育する蚕を「天蚕」と呼ぶ。種類としては日本の山野に生息する「ヤママユガ」を屋外で飼育し、緑色の繭から糸を取るものである。家蚕が桑の葉しか食べないのに対してヤママユガは、クヌギやコナラなどの広葉樹の葉を食べ、家蚕の 3 倍ほど大きさに成長する。天蚕糸は美しい光沢のある黄緑色をしており、シワになりにくく保温性が

高い。また、染料に染まりにくい特徴を持っていることから家蚕糸と混織し、後染めすると絶妙な濃淡が生まれる。

天蚕は病気になりやすく、アリや猿、鳥などの外敵に食べられやすいため飼育が家蚕より難しい。また、繭の扱いも難しいため、家蚕生糸の100倍以上の値段で取引される高級品である。

日本における天蚕は、天保年間(1781～1788)に長野県の穂高有明地区(旧穂高町、現安曇野市)で始まったとされている。明治時代初頭、大蔵省は殖産興業政策の一つとして「全国的に天蚕飼育を進める布告」を発し各地で天蚕が試みられた。ところが、どこも上手く飼育が出来ず、長野県穂高町一帯の特異な地場産業となった。その長野県穂高町においても、微粒子病の流行や焼岳の噴火などで何度も生産の危機に追い込まれ、最終的には第二次世界大戦により生産が途絶えた。

その後、昭和48年に、特色ある地場産業を滅ぼしてしまうのはしのびないと、当時の穂高町長高山勇が、長野県有明天蚕試験地の助力を得て町の事業として天蚕の飼育を再開し、現在は安曇野市天蚕振興会が「穂高天蚕糸」の保護及び後継者の育成に取り組んでいる。

(2) 富山県为天蚕

富山県为天蚕は、昭和55年に県内为天蚕糸業の中心となっていた八尾で始まった。県の出先機関である「山村特産指導所」が家蚕の衰退に伴い、希少価値のある天蚕を始めた。はじめは5～6軒の農家から始まり、10軒になったとき、生産者が集まって情報を交換する「天蚕研究会」ができた。

山村特産指導所が配布した卵や2齢の幼虫を各農家に配布し、各農家で無事できた繭を山村特産指導所に持ち寄り、乾燥までを行った。しかし、飼育が難しく繭の量が取れないことや機械での糸取りができないことから、繭を取引する業者が見つからないという課題があった。

その後、東京で組紐を製作する老舗企業「DOMYO」の社長から天蚕糸を購入したいという話が出たことから八尾で糸ひきをしていた方達を探し出し、彼らが糸にすることで販売ルートが開拓され、その売上金が、繭の品質や量に応じて各農家に支払われた。

(3) 立山町船見氏为天蚕

立山町では、天蚕に興味をもっていた船見氏が八尾で天蚕が始まったことを新聞で知り、飼育方法などを山村特産指導所から教わりながら上瀬戸の借地の山で天蚕の飼育を始めた(図1)。最初は、餌として山からコナラの枝を取ってきて、畑のハウスで水差し栽培をして飼育をしていたが、数が取れず効率が悪いと、山にクヌギの木を植えて行く飼育方法に改めた。やり方としては年に1回クヌギの木に卵や稚蚕をつけ、数本ごとにネットをかぶせてその中で飼育するものである。しかし、傾斜のある場所で隙間なくネットをかけることは難しく、隙間からカラスや猿が入って天蚕を食べてしまうことが多かった。また、稚蚕の時期にアリに噛まれることで死んでしまう個体もいた。成長して体が大きくなると食べる量が増え、葉がなくなったところで他の木に移すが、移した先の葉を食べなくなる個体が多く出た。また、病気になったり、食害を受けたりと生産を安定させることが難しく、令和2年にサルによって全滅したのを機到天蚕の飼育を辞めてしまった。

できた繭は、山村特産指導所へ持っていき買い取ってもらっていたが、独自で天蚕糸の活用・普及ができないかと、富山市でボビンレース⁽⁸⁾の展示会をしていた東京の作家に頼んで、天蚕糸を使ったボビンレース(写真1)を数点作ってもらった。また、製糸所や染織作家を訪ね歩いて服を作ってもらう計画を立て、10年ほど繭を貯めた。しかし、服を作る量の繭を採るのが難しいため長野県为天蚕センターの方に情報提供を受け、信州大学の野蚕研究センターに何年もかけてお願いし、出殻繭^{でがらまゆ}⁽⁹⁾を購入させてもらえることとなった。

収集した繭は、長野の製糸工場「宮坂製糸所」に生糸と紬糸の製作を依頼した。その糸を富山県南砺市の染織作家に渡して羽織「天蚕布衣」(写真2)の製作を依頼した(経糸に四国の白繭生糸「あけぼの」、横糸到天蚕の生糸と紬糸を使用)。その後、余剰の糸を長野県松本市の染織作家に渡し、「作務衣」(写真3)の製作を依頼した(経糸に信州の白繭をグレーに染織した座繰糸、横糸に3種類の色合い的天蚕紬糸を使用)。



写真1 ボビンレース (船見氏所蔵)



写真2 天蚕布衣 (船見氏所蔵)



写真3 作務衣 (船見氏所蔵)

5 蚕の飼育

(1) 品種

今回、日なたでは生態展示と繭を使ったイベントのために「春嶺鐘月」という普通蚕品種の蚕の飼育を行った⁽¹⁰⁾。これは、春の気候に適した春蚕である(「春嶺」系統と「鐘月」系統を交雑したもの)。ちなみに、「春嶺」「鐘月」自体も、もともとあった日本種、中国種を改良して育成したものである。

令和7年6月27日に高原社⁽¹¹⁾より3齢幼虫100頭が届き飼育を開始した。

この時は桑の葉を与える蚕50頭と人工飼料⁽¹²⁾を与える蚕50頭に分けて飼育を始め、4齢に成長した段階で、人工飼料群のうち25頭を桑の葉飼育へ切り替えた。

(2) 桑の葉

桑の葉は、当館、日中上野公民館、旧日中上野小学校、岩峠寺のお宅から採集したものを与えた。多くは当館の桑の木から与えたが、ワキジラミやアオバハゴロモの害虫の影響で葉の裏が白くなってしまったものが多かった。葉を確認しながら比較的被害のない葉を選んで与えたが、被害のない葉は若葉が多く、大きな葉を与えることができなかった。

(3) 飼育場所

飼育場所は、事務所内の作業室である。温度管理のため、エアコンを24時間27℃設定でつけていたが、24℃～29℃とエアコンの効きによって温度変化が大きく、湿度も安定しないため加湿器を焚いていた。環境を整えるべく努力したものの、部屋を閉め切っていて換気をしていなかったことから空気が籠ってしまい、結果的に病気になりやすい環境となっていたと考えられる。また、梅雨で気温の高い日と低い日が混在する時期となり、温湿度管理が難しい飼育となった。結果として桑の葉を与えた蚕で繭を作った個体は23頭であり、繭を形成した個体の多くは、4齢から人工飼料で育成した群であったと考えられる。桑の葉を食べた蚕は、体が大きくならなかった個体が7頭、4齢の脱皮時に10頭、熟蚕期に卒倒病⁽¹³⁾により35頭亡くなった。5齢期は病気にかかりやすく、1匹が病気にかかるとすぐに周りで感染して全

減する恐れが高くなる。気を付けてはいたものの、熟蚕期の繭を作る直前で病気が広がったことが課題として残った。当初は桑の葉飼育群 50 頭、人工飼料群 50 頭として飼育した。その後、人工飼料群のうち 25 頭を 4 齢時に桑の葉飼育へ移行した。人工飼料を与えた蚕は全頭繭を作った（その内、玉繭が 2 個）。このことから 4 齢まで人工飼料を食べた個体は体が強く病気にかかりにくくなったことがわかる。また、桑の葉と人工飼料を食べた蚕を比較すると、人工飼料を食べた蚕の方が一回り大きく、繭も大きくなる傾向があった（表 3）。

(4) 結果

令和 4 年、「^{きんしゅうしょうわ}錦秋鐘和」という夏蚕を 8 月の後半に 50 匹飼育し、桑の葉・人工飼料どちらも順調に生育し、48 個の繭が取れた。6 月に桑の木に葉を散布したが、2 カ月たっていたため葉の影響はなく、害虫被害のない葉を与えた。

飼育環境が変わっていないにも関わらず、令和 7 年は繭になった割合が 4 割だったのに対し、令和 4 年は 9 割強だったことから、桑の葉の状態、蚕の種類の違いが影響したと考えられる。次回蚕を飼育する場合は、桑の木に葉を散布し、8 月に夏蚕を飼育することで繭を作る割合が増えるのか検証したい。

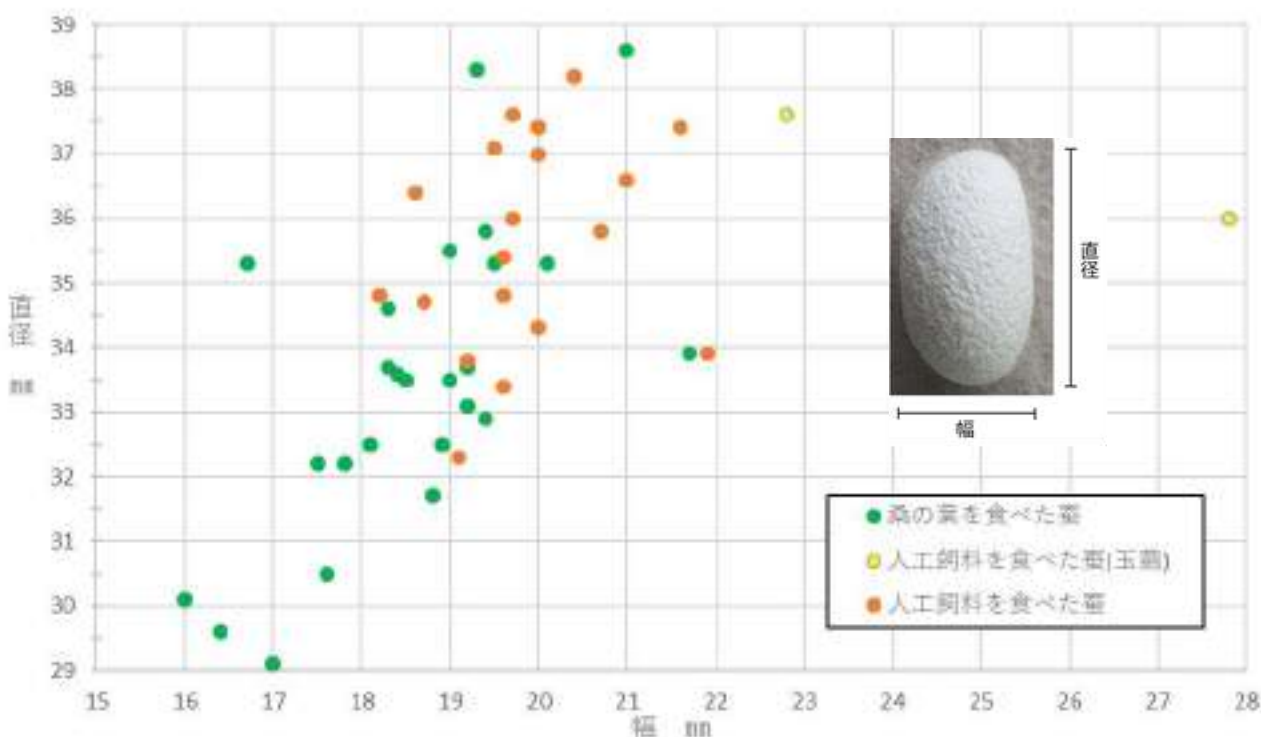


表 3 桑の葉を食べた蚕と人工飼料を食べた蚕の繭の大きさの違い

6 糸取り体験の成果

ミニ企画展のイベントとして 8 月 16 日(土)と 9 月 7 日(日)に「繭から糸をとってみよう！」を開催した。8 月 16 日には、大人 7 名、子供 4 名の 6 組、9 月 7 日(日)には大人 4 名、子供 1 名の 4 組が参加した（写真 4・5）。

最初に展示の説明を行った後に、鍋で繭を煮て糸を取り出した。昔の道具として体験用に製作した座繰り（写真 6）を使用し、糸枠に糸を巻く体験を行い、動きの仕組みや糸の特性について学んだ後、繭を 2 個渡して糸巻体験を行った。体験内容としては、外径 8 cm の木の円（毛糸を巻き付けたもの）に生糸を巻き付け、中にドライフラワーを挟むことでドリームキャッチャーのような飾りを作った（写真 7）。余った繭を使って、簡易糸巻機を製作し直径 3.5 cm の筒に糸を巻き付けた。

参加者は、ドライフラワーを真剣に選び、集中して制作する様子が印象的であり、完成した作品に満足する様子が見られた。簡易糸巻では、中のサナギが透けて見えるまで糸を取り出す参加者、繭を持ち帰り自宅で再度糸取りを試みる参加者、中のサナギを出して繭として持って帰る参加者とさまざまであった。蚕の飼育に興味を持ち、来年家で飼育してみたいという参加者もいた。

飼育が上手いかず、繭の量が少ないため、最小限の繭しか渡すことが出来ず、糸がうまく取り出せない参加者が出ることを懸念していたが、イベントは無事終了した。



写真4 座繰りでの糸巻体験風景



写真5 簡易糸巻体験風景



写真6 体験用に製作した座繰り



写真7 イベントで製作したかざり

おわりに

今回のミニ企画展では、立山町における養蚕の歴史や実態について、文献調査に加え、実際に養蚕に携わっていた地域住民への聞き取り調査をもとに展示を構成した。調査を進める中で、養蚕がかつて上段地区の暮らしや経済を支える重要な産業であったこと、また、その記憶が現在も地域住民の中に受け継がれていることを改めて確認することができた。

本展示では、資料展示だけでなく、蚕の生体展示や糸取り体験を行ったことで、来館者が視覚的・体験的に養蚕文化へ触れる機会を作ることができた。特に、実際に蚕が桑の葉を食べ、繭を作る様子を観察できたことは、写真や文章だけでは伝わりにくい生命の営みや養蚕作業の大変さを実感してもらう機会となった。糸取り体験では、糸を紡ぐための道具「座繰り」と「糸杵」を体験用に製作し、仕組みを動かしながら学んでもらった。繭から一本の糸が取れることへの驚きや感動を共有していたことが印象的であった。展覧中 165 名の来場者があり、体験イベントにも 16 名が参加した。

今回の展示を通して、養蚕は単なる過去の産業史ではなく、人々の生活技術や地域文化、家族労働の記憶と結びついた民俗資料であることを再認識した。とりわけ、地域住民からの聞き取りによって得られた体験談や道具の使用方法は、文献だけでは把握できない生活実態を伝えるものであり、地域資料の掘り起こしという点でも大きな成果であった。さらに、船見康雄氏による天蚕資料や作品を展示できたことは、立山町における養蚕文化の多様性を示す貴重な機会となった。天蚕は全国的にも飼育事例が少なく、その技術や関連資料は失われやすいものである。今回の調査によって、立山町における天蚕の飼育記録や作品制作の経緯を残すことができた意義は大きい。本企画は地域に埋もれていた歴史や記憶を掘り起こし、地域住民と共有することの重要性を改めて実感する機会となった。特に、展示をきっかけとして来館者同士が「昔は家でも蚕を飼っていた」「近所にも桑畑があった」と語り合う場面が見られ、博物館が地域の記憶をつなぐ場として機能していたことは大きな成果であったと考える。

今後は、今回得られた聞き取り記録や資料を整理・保存するとともに、養蚕道具や関連資料の収集を継続していきたい。また、学校教育や体験学習と連携し、蚕の飼育や糸取り体験などを通じて、地域の

歴史や産業を学ぶ機会へ発展させることも検討したい。加えて、天蚕を含めた地域の繊維文化についても調査を進め、立山町の民俗・産業史を伝える資料として活用していく必要がある。

地域の暮らしの変化とともに養蚕の風景は失われつつあるが、その記憶や技術を記録し次世代へ継承していくことは、地域博物館の重要な役割の一つである。本展示が、立山町の養蚕文化を見つめ直す契機となれば幸いである。

謝辞

本稿の作成にあたり、次の方々から多大なご教示を得ました。記して謝意を示します。

土井 茂 船見康雄 船見多美代 幾島かおる 古川知明 間野 達 立山町文化財保護審議委員会（委員長 佐伯 勉）
(順不同・敬称略)

注

- 1 『養蚕』（財）大日本蚕糸会 蚕業技術研究所 2010 年
- 2 『カイコってすごい虫！』 農業生物資源研究所遺伝子組換え研究推進室 2008 年 より
 - ①クラゲやサンゴの蛍光タンパク質を繭糸のフェブロインに作らせることで、蛍光を発する絹糸の開発
 - ②フィブロインタンパク質のアミノ酸組成を変えることにより、これまでにない極細の生糸の開発
 - ③蜘蛛糸の特性を付加し、従来のシルクに比べ 1.5 倍も伸び、伸縮性があるシルクの開発④細胞接着機能を持たせた糸を利用した人工血管やガーゼの開発
 - ⑤粉末、ゲル状、スポンジ状、フィルム状の材料に加工し、軟骨再生医療や床ずれ防止材、火傷などの創傷保護材などの医療保健分野における活用品の開発
 - ⑥セリシン含有率が 98%以上の繭糸を吐く蚕品種を利用し、セリシン分解をせずに溶液化できる技術を開発し、化粧品素材として活用
 - ⑦フィブロイン粉末を高温・高圧で処理し、誘電特性に優れた素材を作り、電子素材として活用
- 3 『置県百年』 富山県 1983 年
- 4 『立山町史』下巻 立山町 1984 年
- 5 『統計たてやま』 立山町 1972 年・1977 年・1982 年・1987 年・1992 年
- 6 中渡明弘 「米の生産調整政策の経緯と見直し問題」 農産環境調査室 『調査と情報第 659 号』2009
- 7 共同稚蚕飼育場とは、病気にかかりやすい稚蚕(卵～2 齢期)の時期に、施設の整った飼育場で技術をもった人が育てる手法のこと。
- 8 ボビンレースとは、ボビンと呼ばれる糸巻きを複数使って、糸同士を交差させながらピンで留めて固定していくことで模様を描くレースのこと。
- 9 成虫が出た後の繭
- 10 普通蚕品種とは、生糸を生産するために用いられる品種で、蚕糸業を支える大変重要な品種のこと。
- 11 長野県の蚕種製造販売会社
- 12 人工飼料とは、栄養価に優れ、揃いが良く体重の重い幼虫になるように作られている。しかし、一度桑の葉を食べた蚕は人工飼料を食べなくなる。
- 13 卒倒病とは、特定の細菌（パチルス・チューリングゲンシス）の感染によって引き起こされる。この病気は、蚕の食欲不振や動作不活発、下痢や糞詰まりなどの症状を引き起こし、最終的には死に至る。

立山文化遺跡調査の足跡―石原與作スケッチより―

古川 知明

(立山町歴史交流ステーション日なた学芸員)

はじめに

1960 年から 3 年間にわたって富山県教育委員会が実施した「立山文化遺跡調査」は、立山信仰遺跡の解明のため、山麓から雄山・劔岳頂上まで踏査や発掘調査を行い、基礎資料の掘り起こし・確認と性格や年代検証など重要な調査成果を挙げるなど、立山信仰史上重要な調査であった。

調査は、仏教考古学の重鎮石田茂作博士（当時奈良国立博物館長）が第一回調査団長となり始まった。

調査メンバーは、富山県文化財調査委員長島勝正が中心となり、立山町教育委員会関係者や歴史関係教諭らが参加した。その中の一人に石原與作がいた。

石原は当時立山中学校校長で、郷土史家としても活躍していた。

本稿では、石原が残した調査記録をひも解き、立山文化遺跡調査における石原の役割や成果について検証するものである。

1 石原與作の業績

石原與作は、上段村に生まれ、立山町・上市町で教職につき、立山町文化財保護調査委員⁽¹⁾として長らく文化財保護に努めた。

立山町教育委員会が保有する「石原家蔵古記録類」は、平成 20 年頃立山町郷土資料館に寄贈された資料で、町文化財保護審議委員会委員であった石原が収集した調査資料が主となる 559 件に及ぶものであるが、これとは別に石原個人の研究ノートや、町文化財保護審議会資料綴・町史編纂会議資料綴なども安田が必要と判断し、町教委に保管された。

この資料を整理し、目録を作成した安田良榮氏（当時郷土資料館館長代理、元町文化財保護審議委員）によるメモには、詳細に石原氏資料について記載があるので、紹介する。



石原與作

『大山史話』1960 より

この古記録類は、立山町五百石に居住された郷土研究家石原與作氏が収集活用されたものである。與作氏は、旧上段村上末城前家に生まれ、長じて石原家の養子となり、立山町・大山町・上市町各校の教員・校長として勤務する傍ら、各地域の郷土史の多岐にわたる研究に取り組まれた。

その初めは、昭和 10 年五百石区域小学校長会が発行した「五百石地方郷土史要」の原稿執筆に見られ、以後数多くの論文を各種の機関誌等で発表され、この方面のリーダーとして活躍された。

石原與作は、1906 年（明治 39）立山町上末（当時上段村上末）城前家に生れた。1928（昭和 3）富山県師範学校卒業。岩嶺小学校・目桑小学校・新川東部小学校・釜ヶ淵小学校の教職に就いたあと、1948 年から釜ヶ淵村教育長を 5 年務め、上市白萩中学校をへて 1959 年から立山中学校校長を務めた。

石原の研究分野は、考古学・歴史・地理・民俗の多分野にわたり、初期は条里・荘園遺跡に関心があった。その後生れ故郷の越中瀬戸焼や上末千坊についても独自の研究成果を出した。

立山町においては、立山町史編纂委員・執筆委員、立山町文化財保護調査委員・委員長を務めた。

周辺の地方史編纂にも携わり、上市町史編纂委員、大山町史編纂委員会委員長を務めた。

越中史壇会副会長を勤めた。1937 年高志人会会員であった（『高志人』第 2 巻第 3 号会員名簿に記載）。

1962 年富山県教育研究優良者賞受賞。1985 年不慮の事故で死去⁽²⁾。

年譜（資料 1）を文末に掲載した。

2 立山文化遺跡調査の概要

「立山文化遺跡調査」とは、1960年～1962年に富山県教育委員会が行った立山信仰遺跡調査である。その成果は、7年後の1970年3月に『立山文化遺跡調査報告書』（以下「県報告」という）としてまとめ刊行された。

それによると、1960年7月、1961年7月、1962年8月、1962年9月の計4回実施された。以下それらを第1回～第4回と仮称し、説明を進めることとする。

石原は、全4回の調査に調査員として参加した。当時立山中学校校長であった。前出のスケッチブックは、表題のとおり第1回調査にあたり使用を始めたものであるが、24頁以降は第2回調査、27頁は第3回調査の情報であり、それ以外にも石原が独自に調査した内容を含んでいる。よって、このスケッチブックは、石原による「立山文化遺跡調査」の調査記録のすべてを掲載したものと理解できる。

基本資料である県報告では、調査年月・主要な参加人員・個別の調査成果・総括・写真・図が示されたが、調査毎の詳細な調査日程・行程・参加人員については割愛された。

以下石原の記録について検証・評価を行うにあたり、県報告のほか、立山史蹟調査会編『立山文化遺跡調査 第1編（昭和36年度）』、立山町教育委員会に保存されていた当時の公式記録（公文書及び撮影写真）、長島勝正「立山文化遺物調査行」1961、新聞記事等によりそれを補足しつつ、4回にわたる調査の概要・行程等を整理しておきたい。

(1) 第1回調査

1960年7月9日から7月14日の5日間行なわれた。

立山参道の旧道筋、剣ヶ御前方面に至るまでを調査した。

県報告によれば、参加者は、石田茂作⁽³⁾（奈良国立博物館館長）を団長とし、杉岡まさ子（秘書）、長島勝正⁽⁴⁾（富山県文化財調査委員）、野島好二（黒部市立白鷹中学校教諭）、中野峻陽（山岳写真家）、佐伯延一（立山町教育長）、長島喜一郎（立山町教育委員会主事）、石原興作（立山中学校校長）の8人である。県報告では石原は自由参加の立場と記された。明記はないが富山県教育委員会五十嵐精一主任・中村博光が随行しており、計10人とされた。

現地調査は7月9日から13日まで行い、14日に下山した。下山後すぐに石田により成果概略が各新聞社に報告され、翌15日の記事となった。

(2) 第2回調査

1961年7月17日から22日の6日間行なわれた。

2日目には、第一班は劔岳方面、第二班は伽羅陀山方面に分かれて調査した。3日目は大日岳方面、5日目は芦峯寺周辺を調査した。

参加者は、岡崎譲治⁽⁵⁾（奈良国立博物館文部技官）を団長とし、山本泉（営林署技官）、深井三郎（富山大学）、長島勝正、佐伯延一、長島喜一郎、岡崎卯一⁽⁶⁾（富山県立中部高校教諭）、藤原良志⁽⁷⁾（富山県立高岡工芸高校教諭）、山岳ガイド（人数・氏名不詳）、県からは五十嵐精一、中村博光の計11人もしくは12人であった。

参加者の一人長島勝正は、調査後の9月発行の『教育広報』第12巻第9号に「立山文化遺物調査行」と題する調査概要報告を掲載した。

県報告には、長島勝正および県教委五十嵐・中島の名前がなく、石原の名前は掲載されているが、長島報告に石原の名前がない。

(3) 第3回調査

県報告によれば、当初1962年7月6・7日の2日間予定されたが、台風のため延期された。改めて8月25・26日の予定で実施され、28日まで4日間の調査を行った。

台風のため調査は困難であったが、護摩平・玉殿窟・虚空蔵窟・伽羅陀山の発掘調査を行なった。

参加者は、長島勝正、佐伯延一、長島喜一郎、岡崎卯一、京田（藤原）良志、石原興作である。ガイドは、藤平琳文（山岳会）ともう1名（広瀬済または竹本融司）である。長島喜一郎は立山町山岳会長でもあった。県からは野上貞二文化財係長、五十嵐精一の2名が随行した。

同年8月30日付け「北日本新聞」9面の記事によれば、長島勝正が班長となっている。

第3回の調査成果は、1962年8月29日付けで長島勝正が「調査の概要」としてB5版3頁にまとめ

た【資料2】。のちに参加者等に配布されたとみられる。「北日本新聞」はその報告内容に基づいて書かれた。長島は下山前にこれをまとめ、29日に下山したとみられる。

【資料2】（原文ママ）

調査の概要

昭和 37. 8. 28

1、調査の対象

イ、護摩平調査

ロ、玉殿窟・虚空蔵窟の調査

ハ、伽羅陀山調査

ニ、その他（賽の河原・一の谷窟）調査

2、立山は古くからの文献にあらわれ、またここから出たという遺品等と現地とを、この度の調査によって、裏付けることができた。急速に変化して来た第14号台風のために、十分に調査を続行することが困難であったが、山岳会の藤平氏をはじめ協力された青年山岳家の適切な援助によって、悪条件にもかかわらず、調査の実績を納め得たことは、感謝にたえない。

具体的には、

イ 護摩平は、今回の調査で、劔岳を正面に仰ぐ聖地で、第一段、第二段、第三段の三段階に別れている平地で、特に、第一段の平地からは、左より劔岳全山・別山・真砂岳・富士の折立・大汝・雄山本社が、頭上よりおいかぶさるが如く壮大な雄姿を示し、今日まで立山修験僧達が、諸国に伝道するために、たづさえた「立山曼荼羅図四幅一舗」の図柄は、この「護摩平」から仰ぎ見た立山連山をそのまま写真したものであることが、新発見である。

そして、この図は、誇張したものでないことが痛切に感ぜられた。平地から断崖にかけて、諸々の大岩が重り合っており、所々に、人間が2、3名あて、入れる程の洞窟を造っており、山伏たちは、この岩と岩の間に入って雨露をしのぎながら、山岳の靈感を体得する修業を積んだものであろう。

また方々に、2米から4米ほどの、野原で焼く、「護摩壇」にもっとも都合のよい自然岩の平らな、岩の集積があった。もっと具体的に発掘等を続行したかったが、天候が次第に悪くなったために基地へ撤収の余儀なきに至り十分な調査を続行することができなかったことが残念である。

第2、第3の下段にある平地は、太刀山（立山の古名）即ち劔岳刀尾大権現（ツルギダケタチオダイゴンゲン）に献げる護摩供の道場と考察されるが、台風のため下段にまで降ることができなかった。ロ、室堂が日本最古の山小屋であり、雄大な構造のうちにもやさしい曲線をもつ舟肘木（ふなひじき）にも元禄頃の建築の美しさが再確認された。

ハ、玉殿窟及び虚空蔵窟を二日間に亘って、詳しく調べた。

ここからは、明治八年（約百年前）に遺物が運び出されて、芦峯寺などに残っているが、藤原時代から鎌倉時代までのものが多い。

今度土師器系統の土器や、銅銭を沢山発見した。これを詳しく調べれば、この正しいことが確認出来ると思う。

ニ、伽羅陀山は立山地獄を支配する閻魔大王の本地である地藏様の住みたまう浄土であると信仰され、今度の調査によって、金属遺物が相当出た。

立山の地獄が全国的信仰の中心となった南北朝から室町時代頃の、丁度、謡曲の「善知鳥」の作られた時代に該当し、この遺物が多かったのは特に興味がある。

このように、日本で、唯一の千年前からの文化遺物が三千米以上の高所に沢山遺っており、それが文献と場所がピッタリと合うと云うことが解ったのが何よりの収穫であった。

今後は、この調査報告を詳細にまとめこれら文化遺物の保存方法を講ずると共に、観光資源に活用し、保護、顕彰に努める所存である。

八月二十九日

富山県文化財調査員

長島勝正

(4) 第4回調査

1962年9月25・26日の2日間行なわれた。

調査は、芦峯寺・東谷方面・千垣・本宮・説法ヶ原・錫杖岳の調査を行った。

参加者は、長島勝正、木倉豊信（富山県文化財調査委員）、佐伯延一、長島喜一郎、佐伯立光（立山町教育委員会）、岡崎卯一、京田良志、石原興作、ガイド1名、県からは五十嵐精一、中村博光が随行

したとみられる。木倉と佐伯立光が新メンバーとして加わった。

調査成果は、1962 年 10 月 1 日 富山県文化財保護委員会によって公式発表がなされた。同年 10 月 2 日付け「北日本新聞」9 面にその内容が掲載された。それによれば、常願寺川沿いの表参道に対し、白岩川沿いの裏参道の存在が確認された、寛政期（1790 年代）の道標や松倉経塚遺跡がその裏付けとなること、その他鎌倉来・室町期の信仰遺物が多数発見されたことなどが重要な成果であったという。また同日付け「富山新聞」9 面にも近似した内容の記事が掲載され、調査メンバー 13 人の氏名・所属が明らかにされた。そこには県の記録にない尾井清政・佐伯覚音・中谷覚成・山元重信の名前が見える。

県報告では、第 3 回調査のうち、7 月調査の中止延期で経過説明を終えている。実際に行なわれた 9 月の調査成果については、マスコミ報道した成果があるにもかかわらず、「その他、随時、立山山麓の遺跡遺物の調査を行ったが、これ等は、その都度の解説の場所に説明内容として含まれているものと

調査名称	調査年次	年月	調査団長	調査員	ガイド	富山県随行者	備考
第1回	昭和35年度	1960.7	石田茂作 (奈良国立博物館長)	杉岡真佐子 (石田随行者) 長島勝正 (富山県文化財調査委員) 野島好二 (黒部市立白鷹中学校教諭) 中野峻陽 (山岳写真家) 石原興作 (立山中学校校長) 佐伯延一 (立山町教育長) 長島喜一郎 (立山町教育委員会・山岳会)	志鷹光次郎 佐伯春明	五十嵐精一 中村博光 野上貞二	石原興作スケッチブック1960.7 立山文化遺跡調査 第1編 (昭和36年度) 「北日本新聞」昭和35年7月15日9面 「富山新聞」昭和35年7月15日9面
第2回	昭和36年度	1961.7	岡崎譲治 (奈良国立博物館技官)	長島勝正 (富山県文化財調査員) 山本泉 (営林署技官) 深井三郎 (富山大学) 岡崎卯一 (富山中部高校教諭) 藤原良志 (高岡工芸高校教諭) 石原興作 (立山中学校校長) 佐伯延一 (立山町教育長) 長島喜一郎 (立山町教育委員会・山岳会)	不明	五十嵐精一 中村博光 野上貞二	長島勝正「立山文化遺物調査行」1961 立山文化遺跡調査 第1編 (昭和36年度) 「富山新聞」昭和36年7月19日7面 「北日本新聞」昭和36年7月21日8面
第3回	昭和37年度 第1次	1962.8	第一班班長 長島勝正 (富山県文化財調査委員)	岡崎卯一 (富山中部高校教諭) 京田良志 (高岡工芸高校教諭) 石原興作 (立山中学校校長) 佐伯延一 (立山町教育長) 長島喜一郎 (立山町教育委員会・山岳会)	藤平琳文 (山岳会) ほか1 (広瀬済 又は竹本融司)	野上貞二 五十嵐精一	7月予定を順延 護摩平・玉殿窟・地獄谷 長島勝正「調査の概要」昭和37年8月29日付 「富山新聞」昭和37年8月30日9面
第4回	昭和37年度 第2次	1962.9	第二班	佐伯延一 (立山町教育長) 佐伯立光 (立山町教育委員会) 京田良志 (高岡工芸高校教諭) 岡崎卯一 (富山中部高校教諭) 長島勝正 (富山県文化財調査委員) 木倉豊信 (富山県文化財調査員) 石原興作 (立山中学校校長) 長島喜一郎 (立山町教育委員会・山岳会) 尾井清政 (立山町郷土史家) 佐伯覚音 (大山町念法寺住職) 中谷覚成 (富山市来迎寺住職) 山元重信 (大山町郷土史家)	1	五十嵐精一 中村博光	県発出文書昭和37年9月21日付 芦峯寺・座主坊・松倉方面 「北日本新聞」昭和37年10月2日9面 「富山新聞」昭和37年10月2日11面

表 1 各調査参加者一覧

年月日	新聞名	紙面	大見出し	小見出し	説明
1960/7/15	北日本	9	立山信仰は藤原時代から 石田博士 遺跡を調査	二つの鏡から立証 埋もれる貴重な文化財 保存したい修験道の古文化財	7月14日下山後石田団長が成果報告を記者発表。日程と調査箇所を記載。岩峯寺雄山神社の古鏡の年代から立山信仰が藤原時代(平安中～後期、9世紀末以降)にまで遡ると判明した。さらなる調査が必要と指摘。【第1回調査】
1960/7/15	富山	9	九百年前に開山 立山	遺跡調査団が鏡石で立証 貴重な十六羅漢の石像	同上。これまでは寛喜2年(1230)の立山神像が最も古いとされてきたと言及あり。【第1回調査】
1961/7/19	富山	7	信仰の立山 県教委の文化遺跡調査進む	仏像を背負って登山 玉殿窟に緑色凝結岩の仏 近江から運んだか剣岳の鎌倉末期の宝きょう印塔	2日目までの調査状況の現地取材。長島勝正・深井三郎のコメント記載。調査では宝篋印塔を計測、県内最古の鎌倉末期との藤原良志のコメントあり。室堂調査中の一行写真・宝篋印塔の写真掲載。【第2回調査】
1961/7/21	北日本	8	大日岳に岩屋発見	県教委 立山調査班が下山	7月20日に大日岳大日堂跡調査を終え下山、21日に芦峯寺で信仰遺物調査予定。岡崎団長のコメント:大日堂柱を確認、七福園岩屋を発見した。【第2回調査】
1962/8/30	北日本	9	立山曼陀ら図 護摩平で描写	県教委遺跡調査団も下山	8月29日下山、長島勝正班長が成果発表。護摩平の遺構、玉殿窟・虚空蔵窟の発掘、迦羅陀山の金属遺物について説明。【第3回調査】
1962/8/30	富山	11	心なき登山者は誰 荒らされる文化財	薄れる”信仰立山”の姿 こわされ、持ち去られ 修験僧の護摩壇を発見	同上の内容。長島勝正班長以下7名の氏名を記載。文化財の荒らされ様がひどく、石仏数十体を房治荘の一角に避難。薬師岳山頂奉納剣も激減したとの県教委コメント。【第3回調査】
1962/10/2	北日本	9	”立山参道”に裏づけ	指導標や経塚発見 立山山ろくの遺跡調査	9月25日・26日の調査結果を10月1日県文化財保護委が発表。山麓・参道調査の経路・成果内容を記載。【第4回調査】
1962/10/2	富山	11	立山開山の佐伯有頼 修行地は説法ヶ原	立山町岩峯寺の文化遺跡調査	同上の内容。長島勝正以下、調査団員13名の氏名・所属を記載。【第4回調査】

表 2 新聞掲載一覧

承されたい。」と記すのみであった。一方 11 頁本文中には、「周辺の状況と、実地とう査された人達の証言と古老の伝え等に基づき「剣岳」と「奥大日岳」との北方斜面の通称「立山川」の上流、西大谷の尾根上の断崖にある「護摩平」の調査を実施」したとあるが、発掘調査を実施した事実を述べず、古老の伝え等とあいまいな表現で明言を避けている。第 4 回調査についてはまったく触れられていない。

県報告には、これらの調査成果以外に、富山市から岩嶺寺に至る間の立山信仰石造物、また太田刀尾神社の詳細調査、薬師岳やその山麓の詳細調査など、この 4 回の調査に挙げられていない箇所の成果が多く含まれている。これらはおそらく第 4 回調査以降、県報告刊行迄の間 7 年間に追加された調査成果とみられる。県報告の内容は、4 回調査の成果を中核としつつも、周辺の調査が約半分を占めている。立山町には第 4 回以降県報告発刊までに行なわれた追加調査資料や編集に関わる記録は残されており、県教委が独自に編集方針を立て、調査を延長しつつ長時間をかけて同書を完成した。しかしそれにはその間の経緯や、最終的に本文を執筆した人物の名前が一切明記されず、責任の所在が明らかにされないまま発刊された。

3 立山町史蹟調査会の報告について

前記の県報告の他に、立山町史蹟調査会編『立山文化遺跡調査 第 1 編（昭和 36 年度）』が存在する。

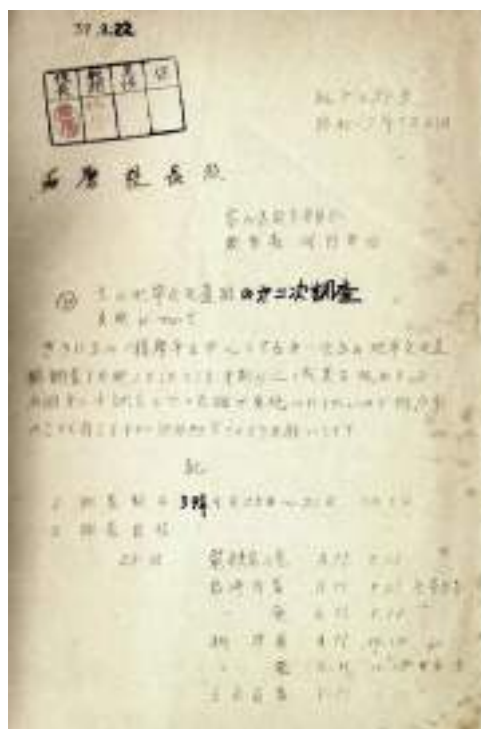
本書は、調査に参加した立山町教育委員会教育長佐伯延一⁽⁸⁾が独自に作成したもので、謄写版刷り 34 頁にわたる報告書である。富山県立図書館に所蔵（T210/20/1）しており、図書として取り扱っている⁽⁹⁾。

その内容は、2 頁目にあるように、富山県が実施する立山歴史文化遺跡調査に立山町教育委員会が協力を要請され、同行したので、その成果について「見たまま、聞いたままを書」いたものである。同書には、第 1 回・第 2 回の参加者の名簿を掲載し、かつ表題に昭和 36 年度を含むことから、その作成年代は 1961 年 8 月以降とみられる。富山県立図書館では発行を 1961? と表記している。

同書は、6 章のテーマに分け、説明・遺物等スケッチ及び部分的に写真実物を貼り付けて完成したものである。作成はすべて佐伯



『立山文化遺跡調査 第 1 編
（昭和 36 年度）』表紙



石原あて県教委からの参加依頼状（「第二次調査」は本稿でいう第 4 回調査をいう）

延一によるものと思われ、特にスケッチは素人図である。前述の調査行程からみて、調査順ではなく、第1回・第2回に実施した調査成果に基づき、佐伯がテーマ・筋道を考えまとめたものである。佐伯の図は、県報告掲載図、石原のスケッチ図のいずれとも一致しない。

またここには、第4回調査で調査を行った地点の成果も含まれている。それらはいずれも芦峯寺地内の遺構・遺物である。佐伯延一は芦峯寺出身者であり、旧立山村の収入役・助役を勤めた。村内の遺構・遺物については当然熟知していたことから、実地調査を待たずともそれらを紹介することは容易であったと思われる。その意味でここに第4回調査の内容が一部含まれているということは、佐伯が先んじて事前情報を掲載したと理解しておきたい。第4回調査における芦峯寺周辺の遺構・遺物についても佐伯の情報に基づいた可能性がある。

本書掲載の参加者名については、調査員は一致するが、県教委随行者については、野上係長の名はあるが中村係員の名はない。

さて、石原は富山県教育委員会から依頼を受けて調査に参加した。石原の残した資料には第4回調査時の依頼状が残る。また立山町教育委員会長嶋喜一郎あての同じ依頼状も町文化財資料中に存在する。

4 石原の調査記録

前記寄贈品の中には、石原作成になるB5版ノート1冊、スケッチブック一冊が含まれていた。

前者は、1955年の調査記録で、表題は「芦峯寺」とし、その下に「立山一山所蔵文書／金沢市立図書館蔵文書／尊経閣文庫 高野庄文書 高原野開拓／30.5.4～5.5」と記載する（図32）。内容は「芦峯寺一山所蔵品 三〇.三.一八調査」からはじまり、芦峯寺一山文書の翻刻や棟札・器物の刻銘等の文字資料の翻刻を記載している。表題の30.5.4～5.5は、尊経閣文庫の調査日を指すものとみられる。

後者は、立山文化遺跡調査参加時の調査記録である。表紙はオレンジ色のホルバインスケッチブック（MULTI-DRAWING PAD No.3 27cm×19cm スプリング綴じ 30枚綴じ）で、表紙裏にも追記があり全29ページにわたり鉛筆書きでメモが記載されている。

表紙には「立山文化／遺跡調査／S35.7.9／石田茂作氏／随伴」と黒色油性マジックで5行に記載する（図1）。このうち「立山文化／遺跡調査」と「S35」以下とは濃度が異なり、明瞭な「立山文化／遺跡調査」は後に上書されたものとみられる。「遺跡調査」の下には、「S35」以下と同じ濃度の文字が存在していたが、判読できない。

5 石原のスケッチブックの記載概要

スケッチブック表紙には昭和35年7月9日の日付があり、第1回調査初日からの内容を記載していることがわかる。石原は調査の最初から参加したことがわかる。

(1) 記載方法

記載方針は、冒頭に〔 〕に調査箇所を書き入れた後、調査した器物等の名称・概略図・寸法・翻刻・説明を書き入れている。複数の場合、数字を入れて順番を示すものもある。

概略図は、簡略でスケッチ程度である。平面図・立面図を主とし、断面図を加えるものもある。

頁の多くには、×や書き直し・追記の痕跡が認められる。この詳細については後述する。

(2) 第1回調査参加者

1頁目最初行は、「国立奈良博物館長／文学博士 石田茂作先生」からはじまる。

スケッチブック3頁（図5）によれば、最初の岩峯寺雄山神社前立社壇に集合したメンバーは次のとおりである。

奈良国立博物館長 石田茂作（67歳）、杉岡真佐子（47歳）、長島勝正（56歳）、五十嵐精一（49歳）、野島好二（56歳）、中野峻陽（62歳）、立山町長嶋喜一郎（36歳）、県中村博光（29



図1 スケッチブック表紙

歳)、ガイド志鷹光次郎(64歳)、佐伯春明(21歳)と石原の計11人であった。ガイドの二人と県職員の五十嵐・中村は県報告では割愛されている。

これらの名前年齢は、調査記録途中の余白に後で書き加えられたようで、鉛筆の色がやや濃い。後というのは、第1回調査の範囲内である。

(3) 第1回調査の記録

第1回調査は、前述のとおり7月9日から14日迄の5日間であるが、石原のスケッチブックには、3日目の11日迄の記載で終了している。

10日の日付記載は見えないが、行程からみて、11頁冒頭の「千寿原駅前観音堂内」が10日の調査開始場所とみられる。

14頁冒頭には、「七月十日夕四時半(石田・杉岡氏同道)」の記載があり、「姥石道観音」(西国三十三所観音第二十八番)石仏を訪れ調査している。

15頁冒頭には「七月十一日午前七時四十分発/立山荘出発」の記載があり、21頁末尾までが、山上における調査箇所と一致する。

以上のことから、石原は11日で調査を終え、当日夕方または翌12日に下山したとみられる。

(4) 第1回調査以後の独自調査

22頁・23頁は、石仏のスケッチである。22頁には芦峯寺の西国三十三所観音第六・七番石仏、23頁には岩峯寺地内の舟形石仏・笠付四角形石仏一体づつを示す。21頁までの概略図は一本の線描であったが、この4体の石仏に限り、陰影を付けたデッサン風である。タッチが違ふことから石原でない別人によるスケッチとみることもできるが、付記説明は石原の筆跡であることから、石原によるスケッチと判断しておく。中間的なデッサンは13頁左側の「弥陀ヶ原 地藏尊」がある。

また、表紙裏(図31)の千垣の西国三十三所観音第五番石仏、芦峯寺雄山神社祈願殿前燈籠についても、22頁・23頁に続く追記とみられる。

24頁以降は、後述のとおり、第2回調査の成果であることから、この3頁分の調査は第一回調査以後の独自調査とみられる。この調査がいつ行なわれたか定かではないが、第1回調査の下山後またはその後第2回調査までの間とみられる。

石原は五百石に居住していたことから、岩峯寺・芦峯寺とも立山中学校勤務途上での調査が可能であったことも付記しておく。

(5) 第2・3回調査の記録

24頁は、右に石仏、中央に玉殿窟の正面図スケッチがある。「玉殿窟」には○を付け、「七月十七日」と付記があるが、これは追記である。

26頁までは室堂・戒堂・一ノ越山側までの石仏図である。

27頁「伽羅陀山より大日岳を望む」(図29)の立面図は、行者窟・禅定窟・七福園行者窟の位置を示したスケッチである。行者窟は見え方のラフスケッチ、禅定窟・七福園行者窟は赤丸で位置を示している。

これらは第2回調査の行程上にあることから、そのときの調査成果とみられる。

なお、24~26頁の箇所については第3回調査の行程とも重なっている。今のところそれらを識別することはできない。

(6) その他

28ページ「第1図 立山禅定図」(図30)は、立山温泉から別山に至る禅定道を示したものである。

この図は、立山町史蹟調査会編『立山文化遺跡調査 第1編(昭和36年度)』掲載の1頁「第1図 立山禅定道」の図の右上部分と概ね一致する。よって本図は石原図をベースにして追加し完成したものと推定される。本書は第2回までの調査成果をまとめたものと考えられることから、石原図は前記第2回調査の記録の延長上に位置づけることもできよう。

6 追加調査の分析

前項で言及したとおり、スケッチブックにはその後石原により、書き直し・追記等が行われた。ここではその痕跡を分析し、その意味について検討したい。

スケッチブックには、鉛筆書きのほかに、ボールペンなどによる3種類の追記が認められる。

以下①～③に区分し、追記内容を検証したい。

①紫色の色鉛筆の追記である。

5 頁(図 7)には閻魔堂内の姥尊について「鎌倉ニ修正 昭和三六夏」「姥尊／承知和元年銘 ■見／昭和三六・七・二二」とある。

25 頁(図 27)にある室堂東方 150mの宝篋印塔軸の梵字に「地藏の種字」と追記がある。

②ボールペンの文字で書かれている追記・修正である。比較的多い。

1 頁(図 3) 岩峠寺雄山神社前立社壇蔵立山玉殿窟出土品のうち、室町時代⑤和鈴残欠の左に「(S46・9・17 朝、佐伯明氏) 昭和初年ころ玉殿窟を整理発掘し、出土品を岩・芦両村に分配」とある。昭和46年9月17日に岩峠寺多賀坊住職佐伯明氏より石原が聞き取った内容である。これは和鈴のみならず、発掘品全体を岩峠寺・芦峠寺が分けて、それぞれ保管したということであろう。

2 頁(図 4) 前立社壇境内湯立釜の銘について、鉛筆書きを消して梵字・銘を書き直した。

7 頁(図 9) 芦峠寺雄山神社の若宮棟札について、梵字を読み直した。

8 頁(図 10) 大仙坊蔵雄山頂上納札について、梵字を読み直した。

9 頁(図 11) 右端に文字を消し、「雄山神社蔵太閤秀吉の千成瓢箪という 注、実は南蛮鉄の原形として外国より来た時の形である。」と書いた。

不動尊頭部について、「櫓材 不動尊の首部」とし、高さ1尺8寸、幅6寸の寸法を書き加え、頭頂に「八葉蓮華」と書き加えた。これらの文字下にも鉛筆書きがあり、これを消して書いている。

11 頁(図 13) の千寿ヶ原駅前の西国三十三所観音石仏について、「拾番？」としていたものに「三」を書き加え「拾三番」として丸で囲んだ。

同頁中ほどに、鉛筆書きの「[] 地藏□□下」を消し、「美女平の下、大杉下の地藏」と書き直した。

同頁末尾の美女駅前の西国三十三所観音石仏について、「十七番」の番号を書き加えた。

13 頁(図 15) ぶな小屋付近の第十九番西国三十三所観音石仏について、未読刻銘2ヶ所6文字を読んだ。

同頁末尾「同所傍ニ切損シタ観音像 二十六番」に「追分」と追記した。

14 頁(図 16) 「姥石道観音」図下に「二十八番」を付記し、西国三十三所観音石仏であることを示した。

16 頁(図 18) 「弘法像 木靴 落書」の未読2文字について追記した。

18 頁(図 20) 「畜生原一小松坂一天狗小屋着」にある昭和11年9月建立の室堂平供養塔(宝篋印塔)について、軸1南面の梵字タラク、東面の梵字ウーン(阿閼如来)を書き加え「金剛界四方仏」と書いて総括した。

19 頁(図 21) 室堂横の石標(梵字六字名号塔)の梵字について、横に正確なものを書き直した。

20 頁(図 22) 右半アビラウンケン石の正確な梵字を横に書き直し、左上に「大日如来真言」の鉛筆書きの上に「大日如来報身真言」と書き直した。

同頁左端の鏡石前西国三十三所観音石仏に「二十九番」と書き加えた。

22 頁(図 24) 右半の西国三十三所観音石仏六番のスケッチ図横に「十一面？」と書き足した。

23 頁(図 25) 右半の文化十二年舟形石仏のスケッチ図横に「虚空蔵菩薩」と書き足した。

同頁左半の岩峠寺永井金五郎宅横の笠付四角形石仏横に「(大日如来) 虚空蔵菩薩」と書き足した。

24 頁(図 26) の玉殿窟には、表記文字を丸で囲み、上に「七月十七日」と付記した。同頁左端窟内石仏群スケッチ下に「羅漢像計15軀、虚空蔵窟／地藏石仏一体」と書き加えた。

25 頁(図 27) 左半室堂祓堂東方の舟形石仏に「祓堂川／懺悔坂」と書き加えた。

26 頁(図 28) 一ノ越山側の坐像石仏に「如来形」と書き加えた(地藏菩薩坐像か)。

27 頁(図 29) には「伽羅陀山より大日岳を望む」として山稜を書き、「行者窟」「禅定窟」「七福園行者窟」の位置を赤で記した。

28 頁(図 30) には「第1図 立山禅定図」として山頂の位置とそれを繋いだラインを図で記した。

表紙裏右半には、西国三十三所観音石仏第五番の刻銘を記した。これは千垣集落東端に所在するもの

である。同左半には、「祈願殿前石灯籠」として元禄二年佐伯大隅守寄進燈籠の刻銘を書いた。

③万年筆による修正である。

10 頁（図 12）左側の芦峠寺閻魔堂前の宝篋印塔について、室町時代を見え消しし、吉野時代に書き直した。また関連して「千垣大五輪塔ハ室町初メ／（藤原良志）」を書き足した。

以上分類した追記内容は、それぞれ追記時期が異なることに由来するとみられるため、その追記年代等について検証する。

①には、調査翌年の 1961 年 7 月 22 日の日付があり、一年後の第 2 回調査時に修正したものである。

②は、28 件の追加修正がある。追記年月を記載する箇所は 2 つがあり、一つは調査の 11 年後 1971 年 9 月 17 日の岩峠寺雄山神社前立社壇での聞き取り、もう一つは年次不明 7 月 17 日玉殿窟での確認成果を加えたものである。28 件の内訳を見ると、岩峠寺での追加修正は 3 件、千垣・芦峠寺での追加修正 6 件、千寿ヶ原から立山山上までの追加修正 19 件である。

1971 年は、1970 年 3 月県報告の発行の翌年である。岩峠寺の 3 件もこのときの調査であろう。現地調査から 11 年も経過した後の再調査は、県報告掲載内容が契機となり、自身での確認を必要と判断したためであろう。

千寿ヶ原から立山山上までの 19 件のほとんどは第 2・3 回調査対象と重なっている。このうち山上での調査日を示す「7 月 17 日」は、石原の参加した第 2 回調査の初日に当たる。第 2 回調査の初日の行動は、長島の「立山文化遺物調査行」によれば、朝富山駅を出発し、昼頃弥陀ヶ原立山荘で一行は昼食をとり結団して調査が始まっている。石原は、五百石在住であることから途中の五百石駅で一行と合流するのが当然と思われるのだが、始発で先行するなど一行より早く山上に向かったことも十分考えられる。この場合数時間の先行調査時間が確保できることになるが、この時間で 19 件の追加調査が行えるとは思えない。その他の可能性として、A：前日から宿泊して独自に調査を行っていた、B：第 1 回調査終了後数日をへて再び独自の追加調査に出向いた、C：1962 年 7 月以降のいずれかの年の 7 月に独自の追加調査に出向いた、のいずれかになろう。日付のある玉殿窟は、1962 年 8 月第 3 回調査において発掘調査を実施している。石原の追記内容は発掘調査以前の状況を示していると推定されることから、これは A または B によるものとみてよいだろう。なお芦峠寺の追加修正 6 件については、先述のとおり石原は立山中学校校長であることから、校区内の場所でもあり、いつでも調査に行くことができた。

いずれにしてもボールペンの追加は少なくとも 3 回以上の追加調査の成果といえる。

③は、京田良志氏の指摘事項の記載である。石原と京田氏が一緒に調査参加したのは第 3・4 回調査であり、いずれかの時の修正と考えられる。

7 立山町保管の調査資料

立山町に保管されている立山信仰遺跡調査関係資料には、本稿で紹介した石原の調査スケッチブックのほか、『立山町史』編纂に関連して保管された写真集・新聞記事【町史番号なし】、写真アルバム【町史 150】等がある。

(1) 写真集（写真 37～58）

B4 横版に写真を貼付け、調査成果の記録写真集としたものである。当時は綴り紐で左綴じしていたが、その後紐を外し、バラバラとなって順序も不明のまま保管に至った。教育委員会内部用記録資料として作成したものとみられる。その後町史編纂室に移管された。

全 22 枚があり、うち 2 枚にはタイトルがある。

一枚は「昭和 36 年 7 月 17 日～22 日 立山文化遺蹟調査写真集」（写真 37）、もう一枚は「昭和 37 年 8 月 25 日～8 月 28 日 立山文化遺蹟調査写真集（第 1 次） 立山町」（写真 53）の記載がある。

前者は第 2 回調査、後者は第 3 回調査を示すタイトル内容である。

第 2 回調査分として、この表紙のほか 17 枚がある。おおむね行程順に配列したが当時の編集どおりかわわからない。全 62 カットの写真が残る。剥がれている写真は 4 カットまたは 5 カットで、もともとは 66 カットまたは 67 カットが貼られていた。それぞれに見出しが付けられ、細かい付記説明がある

カットもある。ここから欠落しているものの一部は、前述の『立山文化遺跡調査 第1編（昭和36年度）』の編集用に抜き去られたものかもしれない。なお写真38～52は17枚のうち15枚分全写真54カットで、残りのうち2枚8カットは、芦峯寺一山文書写真である。残るもう一枚は、立山町宮路導引地藏石仏⁽¹⁰⁾の寸法及び台座刻銘の調査成果のメモである。

岡崎技官の採拓作業中のカットがある（写真49下段）。これは明念坂に現存する一石五輪塔2基のうちの1基である。天正14年（1586）銘品である⁽¹¹⁾。採拓場所は閻魔堂内であろうか。

第3回調査分として、表紙のほか5枚（写真54～58）がある。行程や調査内容から見ると当初のものが完結していない可能性がある。

全22カットの写真が残る。剥がれている写真は2枚で、もともとは24枚が貼られていた。それぞれに見出しが付けられている。

これらのうち県報告に掲載された写真とは、11枚が重複しており、立山町教委から提供されたものとみられる。県では第1回調査時に山岳写真家中野峻陽氏を同行させており、主要な写真は中野氏撮影になるものと思われる。

(2) 新聞記事切り抜き

表2に掲載した新聞記事のうち、①1961年7月19日「富山新聞」7面、②1962年8月30日「富山新聞」11面が台紙に貼り付けて残されていた。

①記事掲載写真「室堂で仏像を調査する一行」には、調査参加者のうち6人の名前を手書きで追記している。左端の人物から「藤原氏、佐伯延一氏、岡崎卯一氏、深井氏、岡崎技官、長嶋」とある。

(3) 写真アルバム

写真アルバム3冊が、立山町史編纂室作成の大判封筒に入っていた。封筒の表には「昭和37.9 立山地帯文化遺跡 第二次調査 記録写真」とあり、第4回調査に該当する。これは筆跡からみて安田良榮氏によるもので、おそらく立山町郷土資料館勤務期間中（1995年～2002年）において整理されたものと思われる。

アルバムには計22枚の台紙に計100カットが貼り付けられており、うち2枚が台紙から外れている。また貼付跡が残され、写真がないものは20カットがある。よって元々は120カットが貼り付けられており、うち102カットが残る。写真の各カットには下に見出しがある。

後半の芦峯寺から弥陀ヶ原までの西国三十三所観音石仏等は、調査当時の写真と併せて、新規に作成されたコンクリート龕内に安置された同石仏の写真が追加して貼り付けられている。石仏のコンクリート龕が建造されたのは昭和40年代であり⁽¹²⁾、アルバムへの貼り付けはそれ以後のことになる。

本稿ではこれら102カットの写真掲載は割愛した。掲載については後日に譲るものとする。

またアルバムにはさまって、1962年10月2日「北日本新聞」9面の切り抜きが同封されていた。

8 富山県の報告に関する補足

県報告は、前述のとおり、調査完了後7年後に刊行された。時間の経過をみると、刊行まで追加調査や編集作業など、紆余曲折があったことが想像される。

この間、富山県教育委員会が発行した『富山県教育要覧』には、調査直後の成果が短くまとめられ、掲載されている。以下に転記する。

【第1回調査分】『富山県教育要覧』1961（昭和36年6月30日発行）、「2.文化財の調査」項

特に、昭和35年では、国立奈良博物館長、石田茂作氏を講師として、1,000年の修験道信仰を有する立山登拝道を中心とする文化財の調査究明を6日間にわたって行った。その結果、立山登山の最初は本宮から、鬼が城よりの下方、または湯川ぞいに登拝したとみられ、次で中宮芦峯寺ができ、江戸時代の登拝道が完成されたとする学説が成立することが立証された。

【第2回調査分】『富山県教育要覧』1962（昭和37年6月30日発行）、「2.文化財の調査」項

立山方面の史跡については昭和36年は前年度に引続き国立奈良博物館の岡崎譲治技官によって、地獄谷から剣岳方面、奥大日岳から前大日岳、芦峯部落奥地不動滝方面にわたって詳細な調査を行った。その結果、従来雄山頂上は、奥の院でその周辺が、立山宗徒の修練道場と考えられていたのであるが、この大日岳山系から剣岳方面が、修練の苦行を続けた場所であることが立証され

たよつて、一般大衆の登拝する雄山山頂社殿は、前の奥の院であり、剣岳方面は、最奥院として修業者のみ危険をおかして登拝していたことが判明した。(原文ママ)

【第3・4回調査分】『富山県教育要覧』1963(昭和38年10月1日発行)、「2.文化財の調査」項

立山方面の史跡については、昭和35年以来3ヵ年に亘つて調査を進めていたが、この程一応完結したこととして、これが遺跡の保存を具体的に進めることとなつた。

以上が報告概要である。第1・2回は執筆者の踏み込んだ解釈がなされ、第3・4回は内容がない。

また、要覧1963年版に記された保存を具体的に進めるとした結果、県補助事業として、立山道の西国三十三所観音石仏の保護覆屋(コンクリート製祠堂)が建築された⁽¹³⁾。事業主体は立山町教育委員会とみられる。



1963年撮影とみられる立山遺跡石仏保存堂建設直後の写真。室堂平32番石仏。写真は立山町教育委員会が保管する第4回調査写真の後に、着工前の写真と比較対照しながらアルバムに貼ってある。

9 石原の調査活動 まとめにかえて

立山中学校長であつた石原與作は、富山県が主催した4回にわたる立山文化遺跡調査のすべてに調査団員として参加した。4回すべてに参加したのは、石原のほか長島勝正、佐伯延一立山町教育長、長島喜一郎立山町職員の4人であつた。

石原は主に昭和35年第1回の調査の記録を、スケッチブックに残した。スケッチブックに調査記録を残す方法は、この頃長島勝正が文化財調査の際行なってきた方法であつた。帝塚山大学杉崎貴英教授の言葉を援用すれば「実見の機会を得た古美術／文化財にはジャンルを問わず向きあい、多少とも記録を心がけていた」⁽¹⁴⁾形を、石原も参考にしたことがうかがい知れる。この調査において長島は、スケッチブックによる調査記録は行なわなかつたとみられる。長島が残したスケッチブック類には該当する記録は見られなかつた⁽¹⁵⁾。長島は山行きは得意ではなく、必ずといっていいほど不調を訴えたという。とてもスケッチや記録を行なう気にはなれなかつたらしい⁽¹⁶⁾。

石原の記録は、特にスケッチ・デッサン力において長島との能力差は一目瞭然であつたが、文化財的視点に基づく詳細な記録資料としては合格点であり、高く評価できよう。長島は調査の中心的人物であり、県教委・立山町職員が随行していたことから、記録はそちらに任せたのかもしれない。一方石原は、それとは別に学問的意識から独自に記録したとみられる。古文書・文化財調査では主にノートを使用していた石原であつたが、今回スケッチブックを使用したのは、この調査では長島が常日頃行なっていたスケッチブックという方法を参考にしたのかもしれない。第2回以降の参加調査記録については、第1回調査の記録を修正する形を基本として進めた。また立山文化遺跡調査期間以外にも独自に調査を進めた。県報告が出された後であっても、石原の問題意識に基づいて調査は継続した。このことは、「組織の一員」として動いただけでなく、自らの研究テーマや使命感に基づいて主体的に行動していたことを裏付けている。

このようにして検証を重ねた石原であつたが、石原の分析成果は県報告には取り上げられなかつた。正式な依頼に基づき全行程に参加し、詳細な記録を残している実態に反して、県報告書では『自由参加』と記されている。この記述の不正確さは、石原の果たした役割が正当に反映されているとはいひ難く、当時の県側の石原に対する認識の低さを露呈しているといえよう。

石原の動向として、昭和32年2月「立山神像」についての自身の見解をまとめると、知己の長島へ送りつけ、長島に判断させるなどした⁽¹⁷⁾。そして長島の非公開の決断に対し、反論することもなく受け入れた。この行為について藤井喜代美氏は、石原は自身の考察について周囲に公開することが意味を持つのであつて、論争を求めたのではないと評価する。このエピソードからは、石原は周囲との衝突や名声を求めるのではなく、「自分自身が納得できるまで調査を尽くし、完結させる」ことに価値を置いていたことがわかる。

以上のことから、石原の人物像とは、非常に強い探究心と、自らの足と目で確かめた事実を重んじる実証主義的で孤高な研究者であり、学問的な誠実さと同時に、強い「個」を持った人物であったと理解される。

今回の立山文化遺跡調査に即していえば、石原は、立山という聖域を、学術的・客観的な視点と郷土愛に裏打ちされた情熱の両面から記録し続けた、ストイックな記録者であり、調査全体を自分の中で体系化しようとする徹底した姿勢で取り組んだ。周囲の評価に左右されず、対象（立山）と真摯に向き合い続けたという、純粋な探究心を持った研究者であったと評価したい。

地元を知り尽くした石原は、地域の知の守り手としての役割を果たしたといえるかもしれない。

筆者は、石原の調査成果の一つ一つに対する評価を行なう知見は持ち合わせないが、改めて内容について詳細に分析評価が図られることを期待する。

付記

石原氏の著作目録については、「越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ／研究用データベース／関係者人物一覧（復興期を中心に）／石原興作」項に掲載したので、参照されたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、次の方々のご教示ご協力を得た。記して感謝いたします。

佐藤武彦 杉崎貴英 高野靖彦 中島由美子 西井龍儀 平井一雄 藤井喜代美
藤田富士夫 三鍋久雄 間野 達 安田良榮（故人） 立山町文化財保護審議会（委員長
佐伯 勉）（順不同・敬称略）

注

- 1 昭和 38 年立山町文化財保護調査委員会が設置され、委員となった。就任期間は昭和 60 年（死去）まで。
- 2 古川知明 2025「3 人物編 石原興作」『越中瀬戸焼 関係人物・団体事典（越中瀬戸焼歴史研究 第 2 号）』越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ
- 3 石田茂作（1894-1977）は、日本を代表する仏教学者、文学博士、文化功労者。1925 年東京帝室博物館鑑査官補、同鑑査官、1947 年東京国立博物館、1951 年同学芸部長をへて 1957 年から奈良国立博物館長（『日本美術年鑑』昭和 53 年版）。
- 4 長島勝正（1904-1990）は、入善町櫛山生まれ。富山県文化財調査委員。仏教美術や工芸に詳しい。『越中瀬戸焼』、『越中の彫刻』富山文庫 8、『富山の美術と文化』、『とやまの古美術』などがある。古川知明 2025「3 人物編 長島勝正」『越中瀬戸焼 関係人物・団体事典（越中瀬戸焼歴史研究 第 2 号）』越中瀬戸焼歴史研究会ホームページ
- 5 岡崎譲治（1925-1985）は、大阪市立美術館長、文化財保護審議会委員会専門委員。昭和 22 年九州帝国大学文学部で日本美術史を専攻、昭和 29 年奈良国立博物館学芸課、同工芸室長、同学芸課長、昭和 52 年大阪市立美術館長。
石田茂作奈良国立博物館長のもとで仏教工芸、とくに金工品を専門とし、密教法具に詳しい。『仏具大事典』の監修・執筆にあたった（『日本美術年鑑』昭和 61 年版）。
- 6 岡崎卯一（1915-1991）は、中国古代仏教や日本考古学に詳しい。東京大学卒業、富山中部高校教諭等をへて立山町史編纂に携わる。『富山の史蹟』富山文庫 10（原始担当、共著）、などがある。
- 7 京田良志（1932-2003）は、石造美術・考古学研究者。富山大学卒業後、高校教員等を勤めた。『石燈籠新入門』、『富山の石造美術』富山文庫 5、『石の表情』、『石の説話』などがある。
- 8 佐伯延一は、芦峯寺宿坊日光坊住職。1950 年立山村収入役、1953 年同村助役。1955 年立山町役場立山支所長、1956 年立山町商工観光課長、立山町教育委員、同年立山町教育長就任、昭和 41 年 1 月まで 4 期勤めた。1970 年から立山町史編纂委員長となった（『北国年鑑』『北日本年鑑』）。
- 9 立山町教育委員会ホームページ 立山町歴史・文化財リポジトリに掲載済。
- 10 導引地蔵石仏についての詳細な調査成果は、立山町教育委員会編 2012『立山信仰宗教村落一岩峯寺一石造物等調査報告書』参照。
- 11 富山県〔立山博物館〕編 1993『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』掲載 D-73・D-74 に該当、石造物研究会編

- 2012『北陸の石造物—研究の現状と課題—』135 頁越中の主な石造物「五輪塔」表中 38・39、同 150 頁第 11 図 38・39 に該当。なお、近年芦峯寺善導坊付近にも天正年銘のある一石五輪塔 1 基が確認された。詳細な調査は未実施である。
- 12 これらの石仏が「立山参道の石塔並びに石仏群」として富山県有形文化財に指定されたのは昭和 42 年 1 月 12 日であり、それ以後に立山町が龕を作ったものか。
- 13 富山県教育委員会編 1965『教育要覧』1965。県補助事業として「立山遺跡石仏保存堂建設」とある。
- 14 本書 1～22 頁 杉崎貴英「調査野帳としてのスケッチブック——昭和期富山の美術史家／文化財有識者、長島勝正の遺品資料から——」参照。
- 15 本書 76～95 頁 古川知明「長林館文庫【長島勝正コレクション】の概要」参照。
- 16 孫の松倉千尋氏による。
- 17 古川知明 2025「石原与作未公表遺稿「立山御神像銘の考察」の紹介—長島勝正遺品から—」『立山町歴史交流ステーション日なた 研究紀要』第 3 号 立山町歴史交流ステーション日なたホームページ

和暦	西暦	月	日	年齢	事項	引用先	備考
明治39	1906	9	21	0	上末・城前家に生れる		
大正14	1925			19	この頃越中瀬戸焼調査を志し、古老の聞取りを行う	1960『越中史壇』20	
昭和2	1927			21	富山師範高等学校卒業		
昭和3	1928	3		22	上末山寺坊跡（のち「上末千坊」）の測量調査	1935『五百石地方郷土史要』161頁に図掲載	
昭和4	1929			23	岩嶺尋常高等小学校訓導	御大礼記念表誠帖	城前姓
昭和8	1933			27	杉本文書古絵図調査	石原調査ノート	町史編纂988号資料
昭和10	1935	12	8	29	『五百石地方郷土史要』「上段村の史蹟及伝説」に上末山寺坊跡図を掲載	『五百石地方郷土史要』161頁	
昭和11	1936	6		30	『上段村誌』に名前・経歴紹介	『上段村誌』174頁	石原姓
昭和16	1941			35	大森国民学校訓導	国民学校の経営並に施設に関する研究	
昭和20	1945			39	目桑（東峰）小学校校長	立山町史下巻1381頁	
昭和21	1946			40	目桑（東峰）小学校校長、釜ヶ淵小学校長		
昭和22	1947			41	釜ヶ淵小学校長	北国年鑑	
昭和23	1948	10		42	釜ヶ淵小学校長・釜ヶ淵村教育長	教育年鑑	
昭和24	1949			43	釜ヶ淵小学校長・釜ヶ淵村教育長		
昭和25	1950			44	釜ヶ淵小学校長・釜ヶ淵村教育長	富山県教育要覧	
昭和26	1951			45	釜ヶ淵小学校長・釜ヶ淵村教育長	北国年鑑	
昭和27	1952			46	釜ヶ淵小学校長・釜ヶ淵村教育長、上市町史編纂委員	教育年鑑、白萩小史	
昭和28	1953			47	上市町白萩中学校長	北国年鑑	
昭和29	1954			48	上市町白萩中学校長	北日本年鑑	
昭和30	1955	3	18	49	上市町白萩中学校長	北国年鑑	
		5	4		芦峯寺一山会文書調査	石原記録ノート	～5日
昭和31	1956			50	芦峯寺一山会文書調査	石原記録ノート	
					上市町白萩中学校長	北日本年鑑	
昭和32	1957			51	上市町白萩中学校長	北日本年鑑	
		2	11		「立山御神像銘の考察」原稿執筆	古川2025	長島勝正氏に郵送、公開されず
		8	2		有峰文化総合調査団員、「有峰史考」分担執筆	1957有峰を語る	～3日
昭和33	1958			52	上市町白萩中学校長	北国年鑑	
昭和34	1959			53	立山中学校校長	北日本年鑑	
昭和35	1960			54	立山中学校校長、富山県中学校教育研究会評議員	北日本年鑑	
		7	9		立山文化遺跡調査調査隊員（第1回）	石原スケッチブック等	～11日
昭和36	1961			55	立山中学校校長	北日本年鑑	
		7	17		立山文化遺跡調査調査隊員（第2回）		～22日
		8			大山町東黒牧窯を発見	北日本新聞1961/8/8/10面	沢田一雄・前田英雄とともに
昭和37	1962	8	25	56	立山中学校校長		
		9	25		立山文化遺跡調査調査隊員（第3回）		～26日
		11	2		立山文化遺跡調査調査隊員（第4回）	富山新聞1962/10/2/11面	～26日
昭和38	1963			57	県教育委員会表彰（教育研究優良者）	北日本年鑑、富山県教育要覧	
		9	2		立山中学校校長、新川郷土研究会創立	北日本年鑑、大山史話	
昭和39	1964			58	立山町文化財保護調査委員	委嘱状	
					立山中学校校長退職？	北日本年鑑	
		6	17		立山町史編纂開始	石原メモ	
昭和42	1967			61	大山町史編纂委員長として「あとがき」執筆	大山町史1715頁	
					立山町文化財保護調査委員	委嘱状	
昭和43	1968	2	17	62	富山民俗の会講演「楡原法華について」	平井一雄氏提供情報	富山市山王公民館
昭和44	1969			63	富山第一高校講師？、立山町文化財保護調査委員	自然と社会35	
昭和45	1970	3		64	『立山文化遺跡調査報告書』県教委刊行		石原執筆なし
昭和46	1971			65	立山町文化財保護委員	委嘱状	
		7			立山町利田横枕遺跡調査参加	1971『立山町利田横枕遺跡予備調査報告書』	
		9	17		雄山神社前立社壇調査	石原スケッチブック	
昭和47	1972	4		66	立山町史編纂委員・立山町史執筆委員	委嘱状	
昭和49	1974			68	富山民俗の会幹事	とやま民俗1号	
		7	6		富山民俗の会講演「姥信仰」	平井一雄氏提供情報	富山市山王公民館
		8			金剛新遺跡発掘調査団長	金剛新遺跡	
昭和52	1977	10	8	71	立山町文化財保護調査委員長		
昭和53	1978	12		72	『立山町史』上巻刊行 執筆	『立山町史』上巻	
昭和55	1980			74	立山町史下巻執筆委員	委嘱状	
昭和59	1984	2	15	78	立山町文化財保護調査委員長	委嘱状	
昭和60	1985			79	立山町史下巻刊行 執筆	『立山町史』下巻	
				79	死去		

資料1 石原與作氏年譜

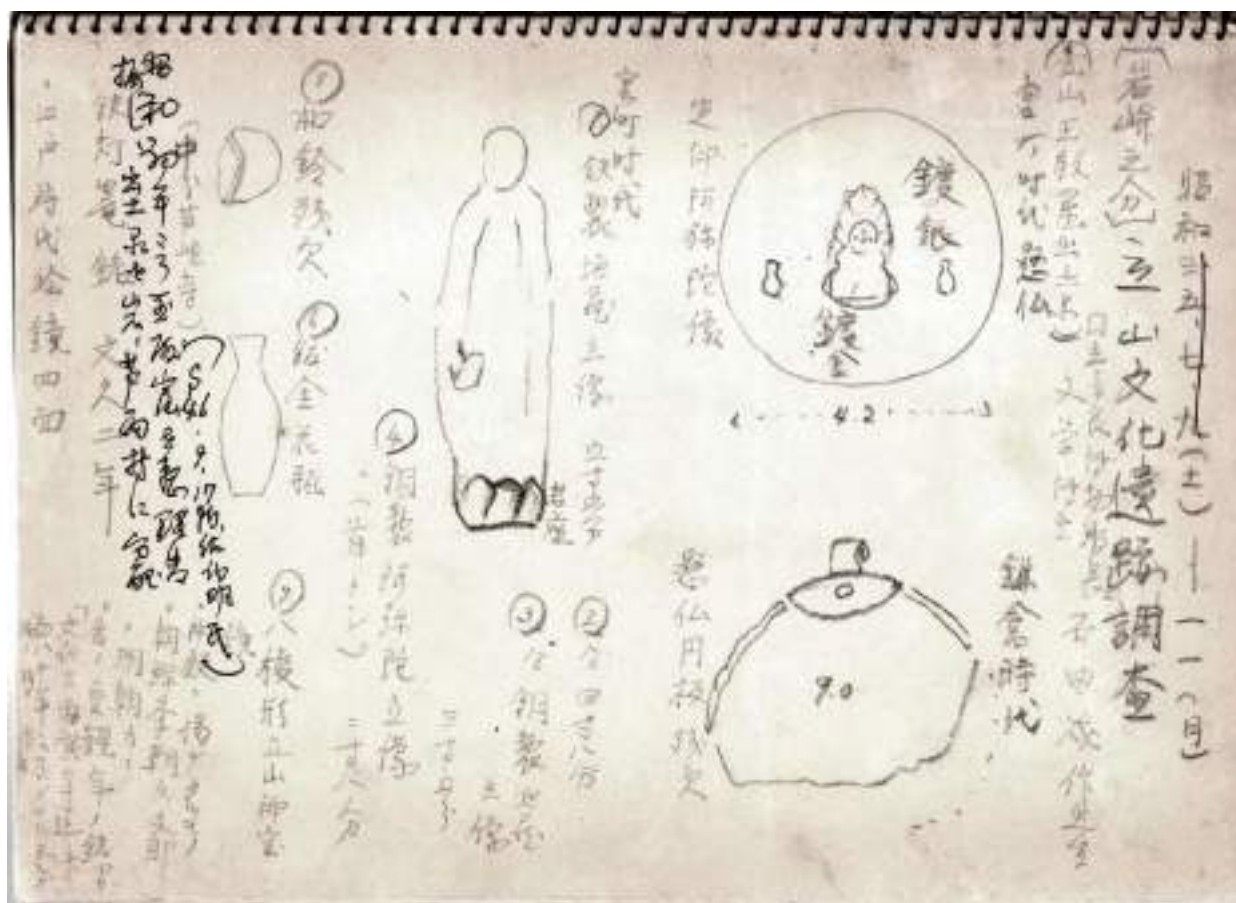


图3 1 頁 岩峠寺



图4 2 頁 岩峠寺



図5 3頁 岩嶺寺・調査団員名・本宮

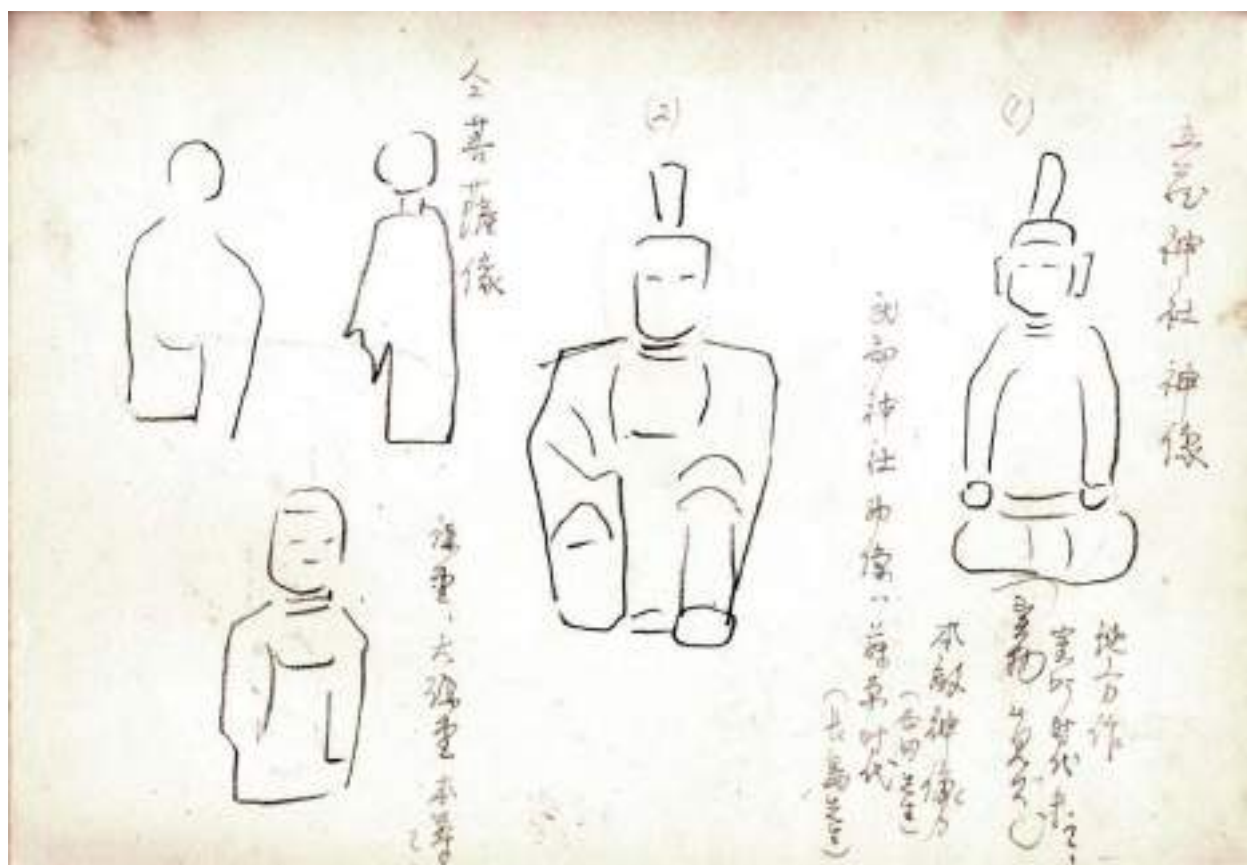


図 6 4 頁 本宮

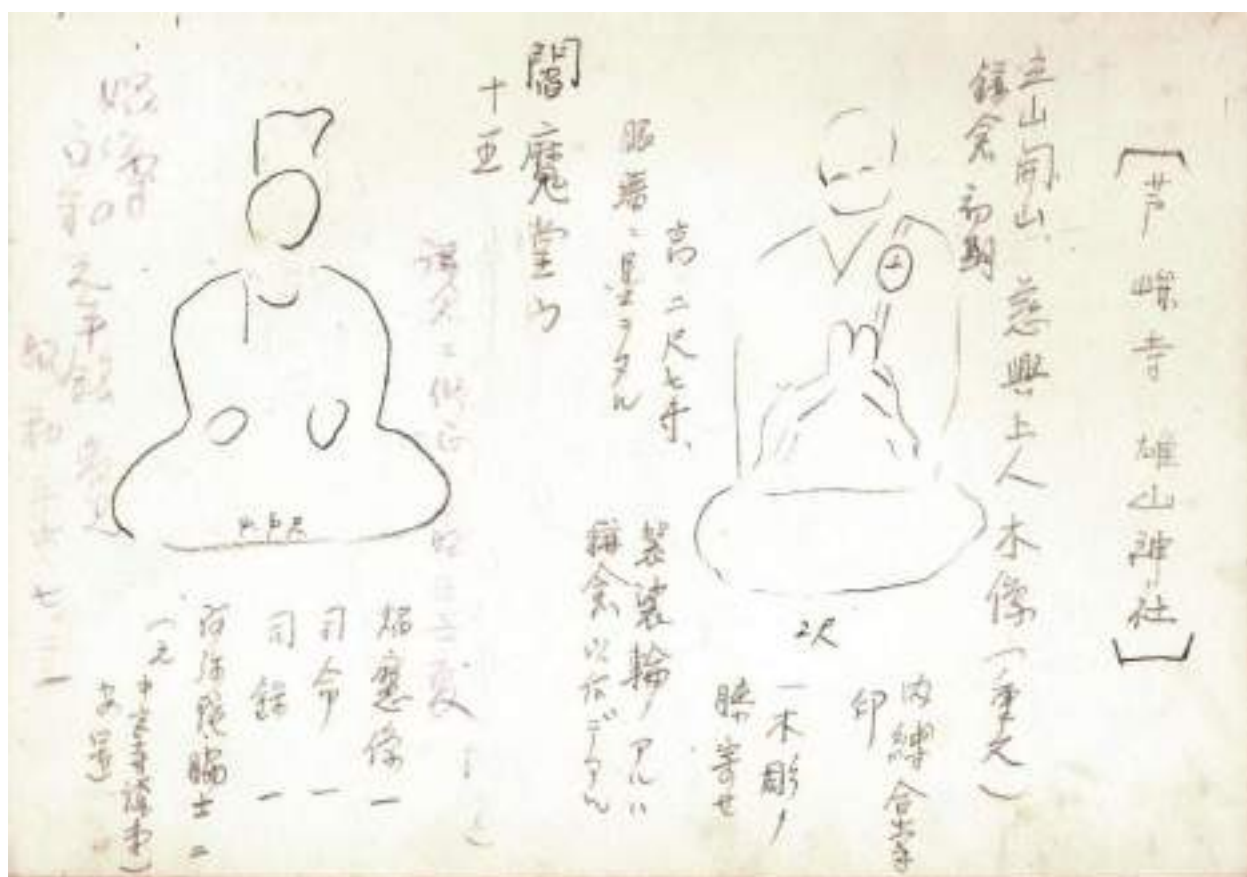


図7 5頁 芦峯寺



図8 6頁 芦峯寺



図9 7頁 芦峯寺



図10 8頁 芦峯寺



図 13 11 頁 千寿ヶ原・美女平

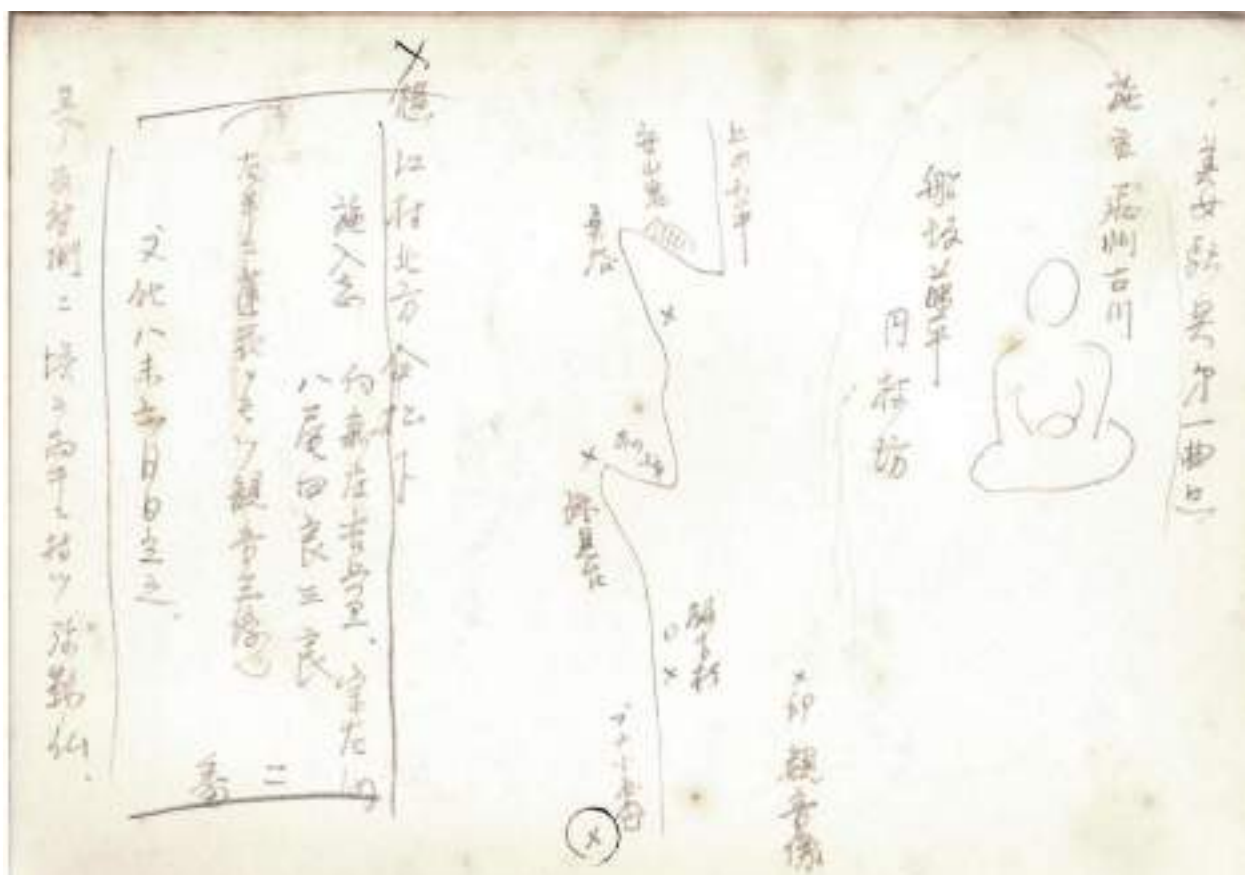


図 14 12 頁 美女平・横江



図 15 13 頁 ブナ小屋・弥陀ヶ原



図 16 14 頁 姥石道・姥石



図 17 15 頁 天狗の俎板・獅子鼻洞穴



図 18 16 頁 獅子鼻洞穴

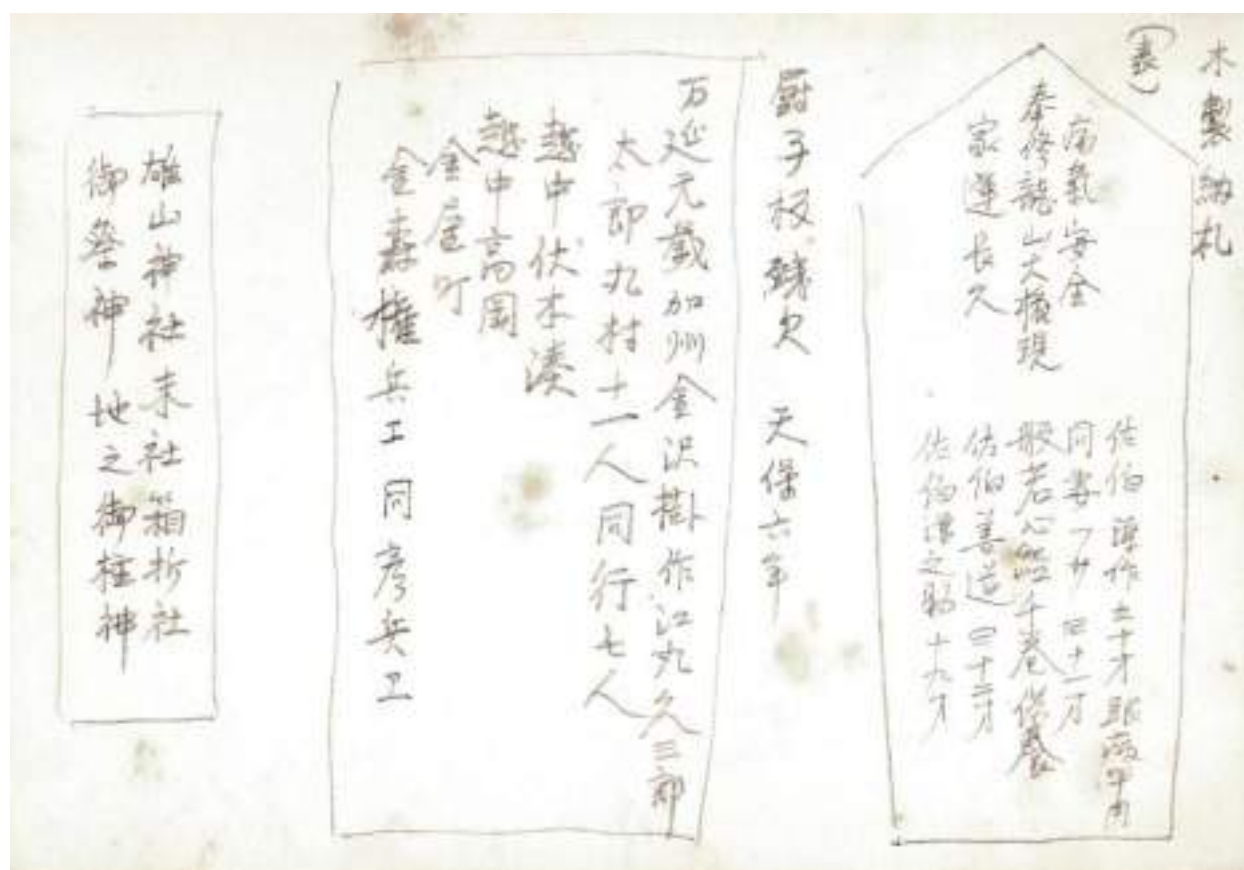


图 19 17 頁 獅子鼻洞穴



图 20 18 頁 室堂平



図 21 19 頁 室堂

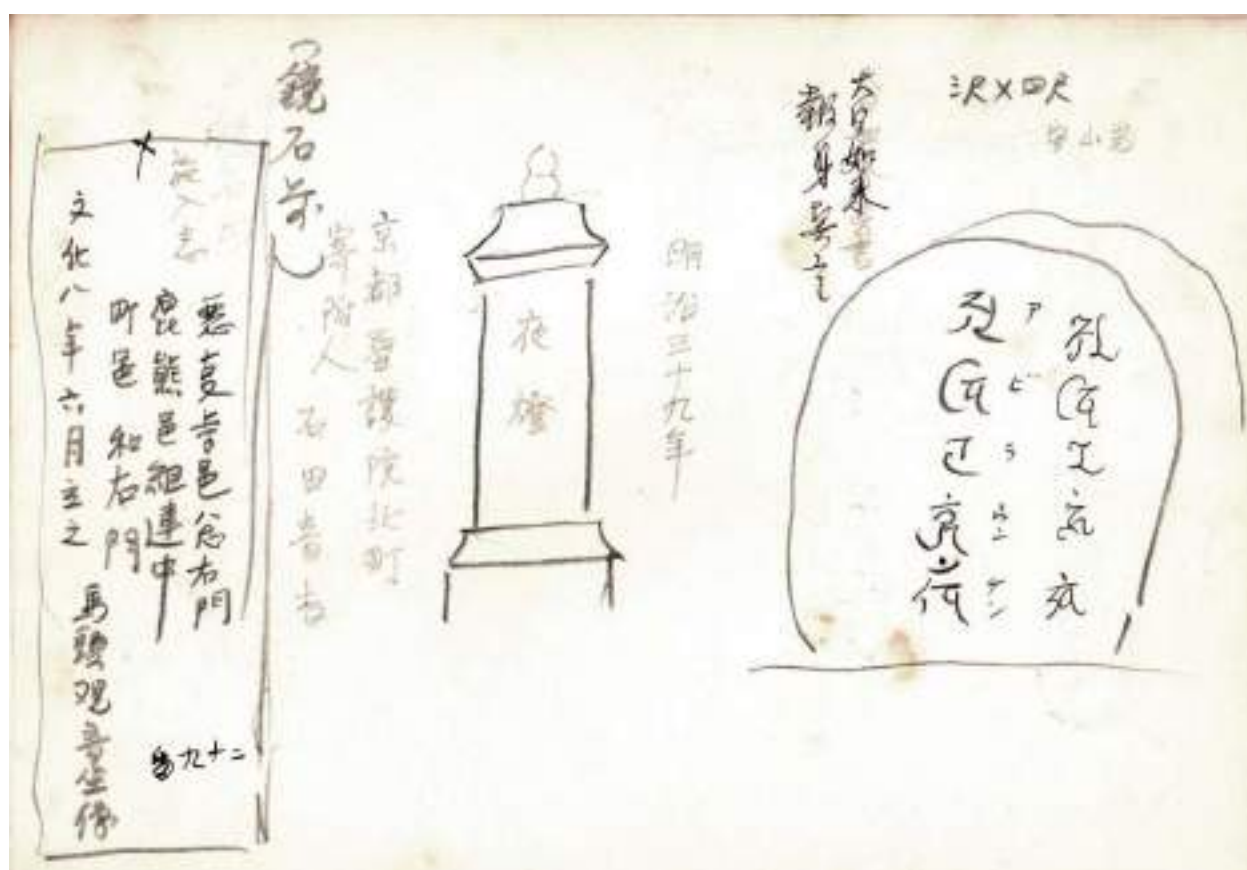


図 22 20 頁 室堂・鏡石前



図 23 21 頁 鏡石



図 24 22 頁 芦峯寺 三十三所観音 6・7 番石仏



图 25 23 頁 岩嶺寺 石仏



图 26 24 頁 玉殿窟 (7月17日)



図 27 25 頁 室堂・祇堂



図 28 26 頁 一ノ越



図 29 27 頁 伽羅陀山より大日岳を望む

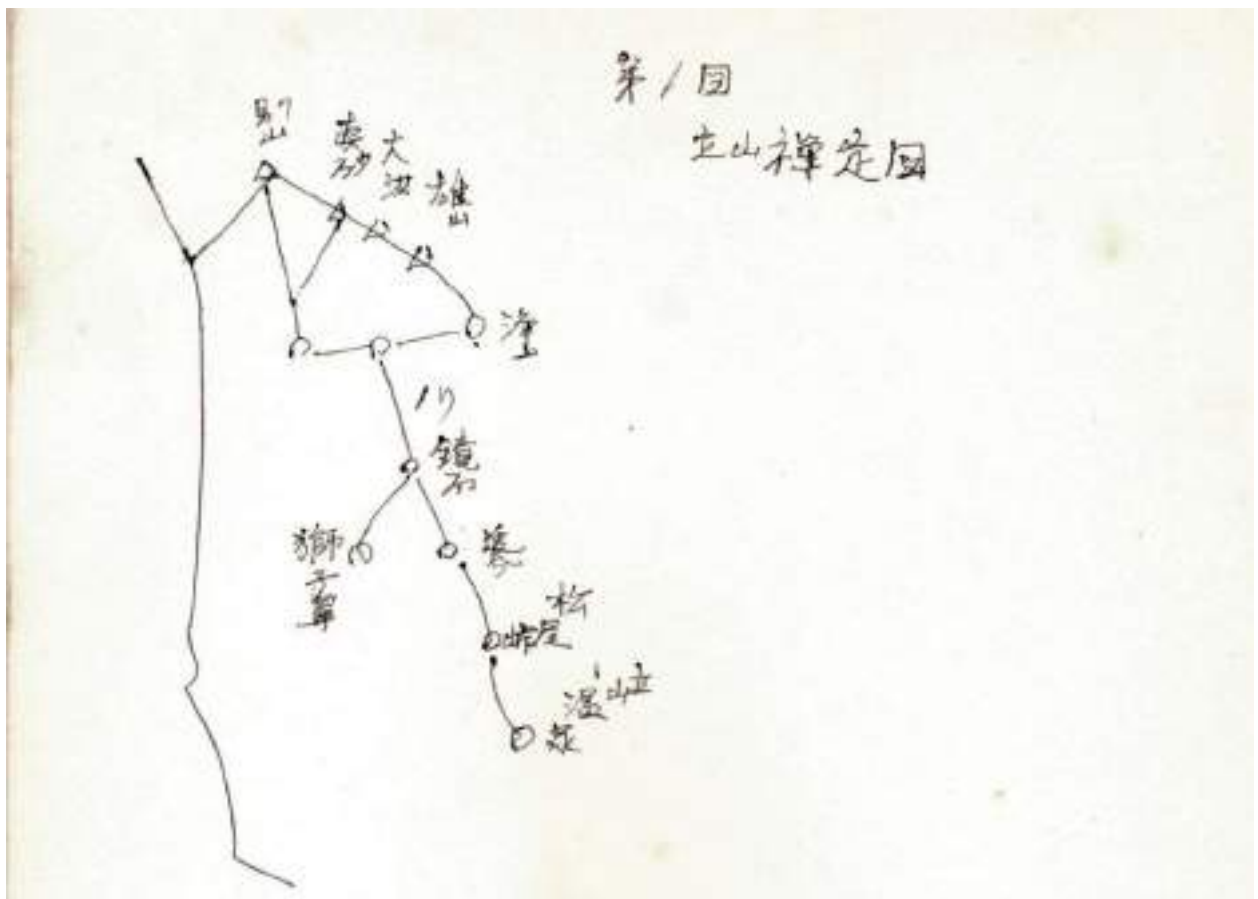


図 30 28 頁 第 1 図 立山禪定図



図 31 表紙裏 千垣 三十三所観音 5 番石仏、芦峯寺雄山神社 燈籠銘



図 32 昭和 30 年調査ノート「芦峯寺」

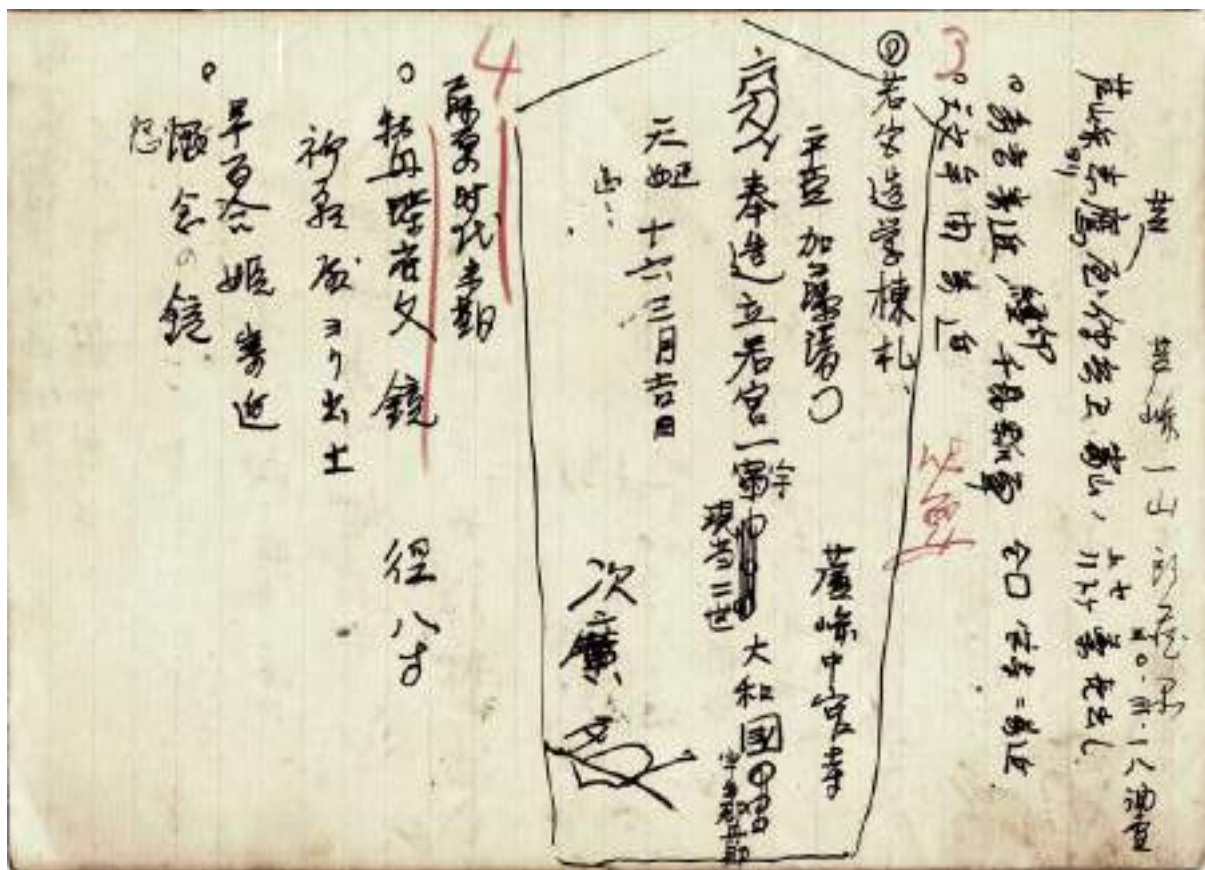


図 33 1 頁 「芦峯寺一山所蔵品 三〇.三.一八調査」

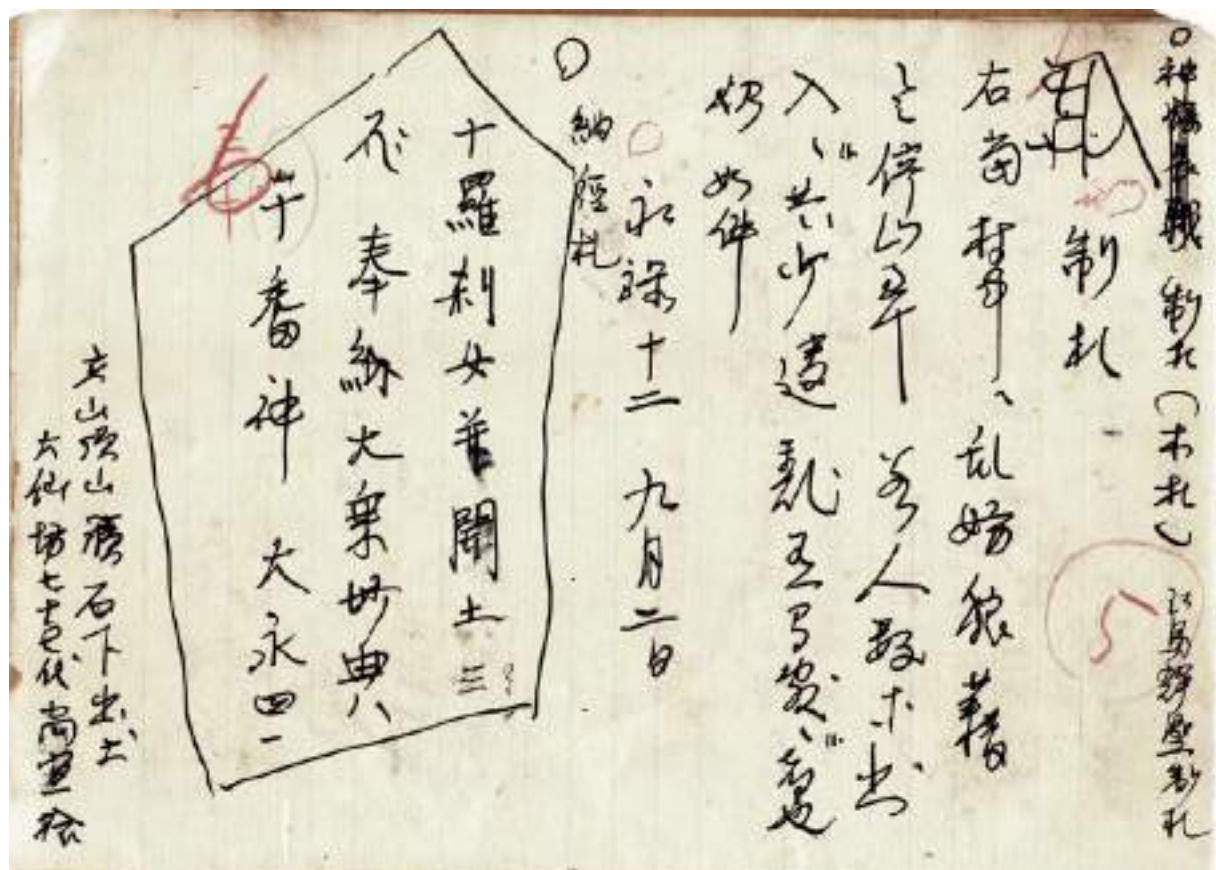


図 34 2 頁

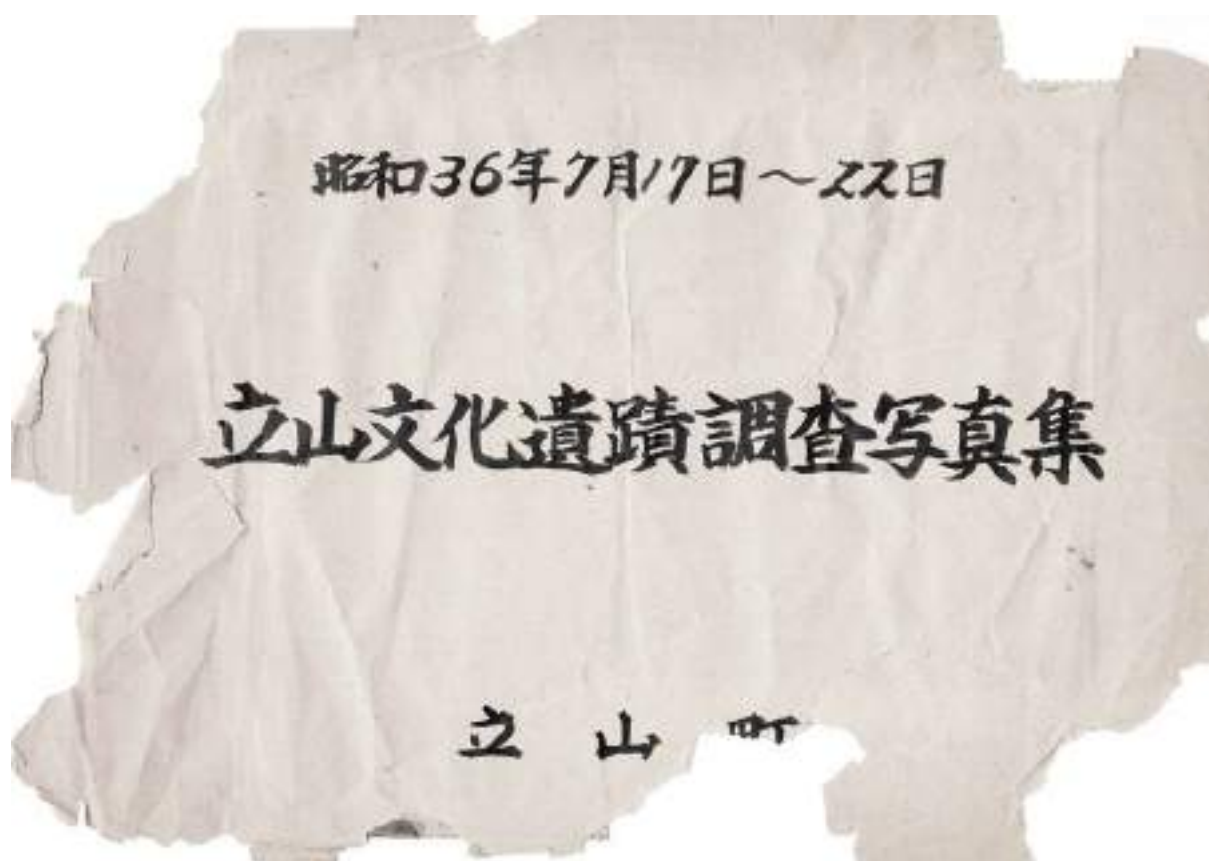


写真 37 第2回調査 1



写真 38 第2回調査 2



写真 39 第2回調査 3



写真 40 第2回調査 4



写真 41 第 2 回調査 5



写真 42 第 2 回調査 6



写真 43 第2回調査 7



写真 44 第2回調査 8



写真 45 第2回調査 9



写真 46 第2回調査 10



写真 47 第 2 回 調 査 11



写真 48 第 2 回 調 査 12



写真 49 第2回調査 13



写真 50 第2回調査 14



写真 51 第 2 回調査 15



写真 52 第 2 回調査 16

昭和37年8月25日～28日

立山文化遺跡調査写真集 (第1次)

立山町

写真 53 第3回調査 1

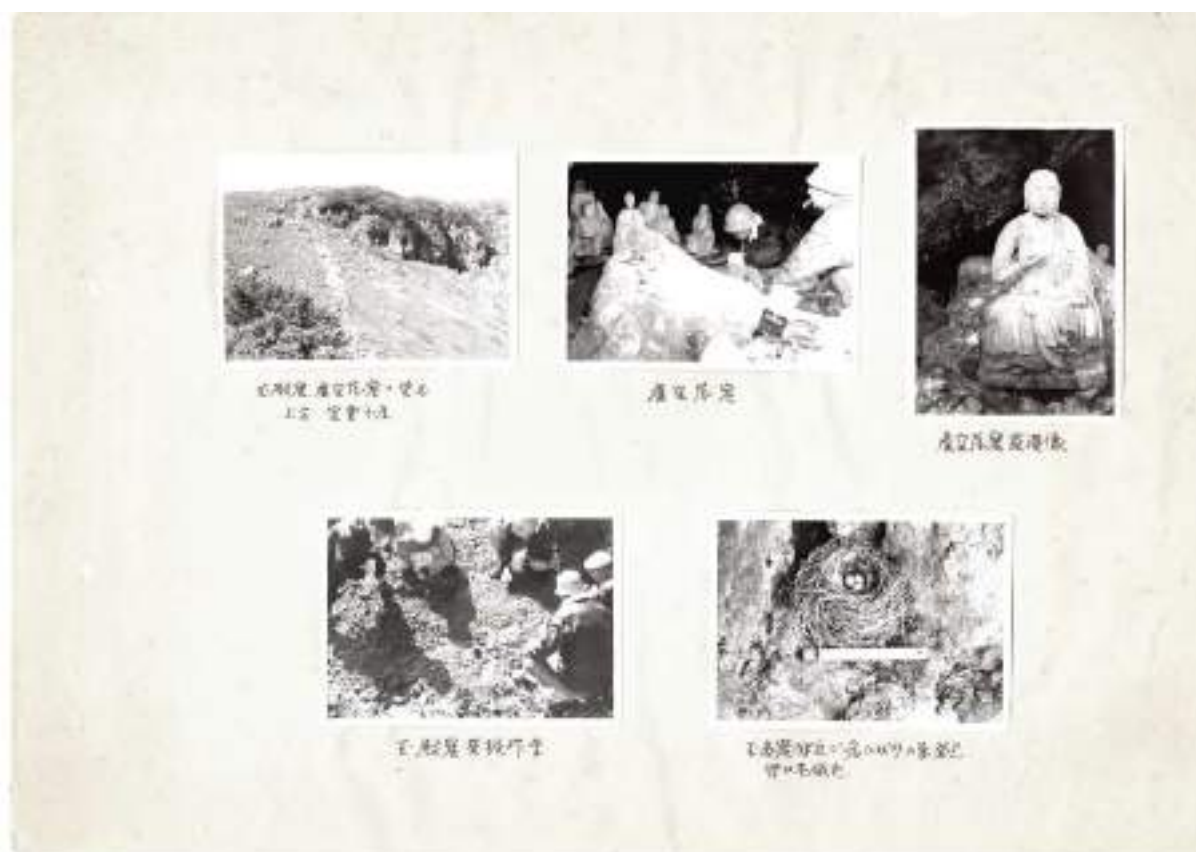


写真 54 第3回調査 2



写真 55 第 3 回調査 3



写真 56 第3回調査 4



写真 57 第3回調査 5



写真 58 第3回調査 6

Abstract

The Sketchbooks Used as Field Survey Notebook for Cultural Properties: From the Personal Effects of Katsumasa Nagashima, Who Was Active as an Art Historian and Cultural Property Specialist in Toyama Prefecture During the Showa Period.

Takahide Sugisaki

Katsumasa Nagashima (1904–1990) was an expert on the art history and cultural properties of Toyama Prefecture who was active throughout the Shōwa era, as well as an artist. He used his sketchbooks as Field Survey Notebook for Cultural Properties. Among the personal effects he left behind, which his family donated to Tateyama Town in 2025, these items are particularly distinctive and hold special significance. In this article, we examined the periods during which the sketchbooks were used and selected and explained some of the most significant entries from them. Furthermore, outlined perspectives that will help deepen our understanding of his academic knowledge and intellectual orientation in the future.

Bibliography and Chronology of Katsumasa Nagashima.

Takahide Sugisaki

Regarding the biography and writings of Katsumasa Nagashima (1904 - 1990), a booklet was produced over half a century ago to commemorate his 70th birthday. Compiled by Hisao Ota, a librarian at the Toyama Prefectural Library, the booklet organized his achievements by category and included a separate chronological table of events. Building upon this highly significant and valuable catalog, I have reexamined Nagashima's life, writings, and artistic works, and attempted to substantially expand the available information. With the aim of visualizing Nagashima's life trajectory, I adopted a method that integrates bibliographic data and chronological records into a single timeline, differing from the catalog compiled by Ota. As there are aspects that remain to be addressed in future research, I have included a memorandum for future reference.

Overview of the Chorinkan Bunko: The Katsumasa Nagashima Collection

Tomoaki Furukawa

Katsumasa Nagashima (1904 - 1991), an art researcher, was a key figure who devoted himself to preventing the overseas outflow of the "Taishakuten Ritsuzo" (Standing Statue of Taishakuten) and to the revival of Etchu Seto ware. The Tateyama Town Board of Education received a donation of approximately 12,000 items from Mr. Nagashima's bereaved family—including books, his own paintings and sculptures, and cultural property survey records—and named this collection the "Chorinkan Bunko". The donated "Chorinkan Bunko" includes the following precious materials: Unpublished Autograph Manuscripts: These include "The Art of Jodo Buddhism," his first full-scale treatise based on a school excursion report during his student days, and "Three Amida Buddha Statues," a massive unpublished manuscript spanning 165 pages. Exquisite Sketchbooks: These records of cultural property surveys from the 1950s contain drawings and measured diagrams executed with superb descriptive power. They are also vital for understanding cultural properties whose current locations are unknown. Extensive Collection: In addition to ceramics and paintings created by Mr. Nagashima himself, the collection encompasses over 5,000 books inherited from his father's generation, more than 1,600 postcards, and old photographs that document his family lineage. By analyzing these materials, it is expected that not only his illustrious activities after 1965—which have been the primary focus until now—but also the roots of Mr. Nagashima's life during his formative years will be brought to light.

The Fukuoka Tile Factory and the Revival of Etchu Seto Ware.

Yusuke Hirota

This report focuses on roof tile production in the Uwazue and Kamiseto districts of Tateyama Town, specifically highlighting the Fukuoka Tile Factory and the efforts of Sakumitsu Fukuoka, who was instrumental in its revival.

Originally a production center for Sueki (Ancient unglazed pottery) ware in ancient times, the district shifted from Etchu Seto ware to roof tile manufacturing during the Meiji era. Founded in 1903 (Meiji 36), the Fukuoka Tile Factory produced glazed tiles using climbing kilns (norigama) across three generations.

Based on testimonies from Takamitsu Fukuoka, who managed the factory until the mid-1960s (Showa 40s), the report reveals the raw realities of tile manufacturing. It provides a detailed record of everything from the excavation of raw clay to the grueling labor of firing the climbing kilns, as well as the daily lives of the craftsmen—including their wage structures and typical meals. Through these meticulous accounts of labor and lifestyle, the report illustrates how the techniques of roof tile production served as the foundational bedrock for the eventual restoration of Etchu Seto ware.

On the Kansyō (Small temple bell) of Ashikuraji (Bunka 6 / 1809)

Tomoaki Furukawa

The kansho (temple bell) made in 1809 (Bunka 6), which was preserved at the Ashikuraji Community Center in Tateyama Town, was dedicated to Tateyama Gongen by devotees from the Matsumoto region of Shinano Province through Hoden-bo, a shukubo (pilgrims' lodging) in Ashikuraji. It was crafted by Hama Iwaminojo Kiyotsuna, a renowned master caster from Matsumoto. As a precious historical artifact that has been passed down without ever leaving the area, it is highly valued as significant physical evidence of the fervent Tateyama faith held by the people of Shinano during the late Edo period.

A History of Freight Transport on the Tateyama Line

Kento Fukai

The history of freight transportation on the Toyama Chihō Railway Tateyama Line began in 1911, when the Nakaniikawa Light Railway obtained its license. Initially, the service primarily transported agricultural products and goods from the Tateyama Paper Mill. However, the focus soon shifted to the transport of construction materials for hydroelectric power plants, leveraging the region's abundant water resources. To meet this demand, the line underwent electrification and gauge conversion to enhance its transport capacity.

In the post-war era, freight volume reached its peak with the transport of cement for the construction of the Arimine Dam. This period saw the introduction of specialized electric locomotives and air-slide hopper cars for bulk transport. However, from 1969 onwards, freight operations declined rapidly due to the rise of motorization and the abolition of through-traffic services with the Japanese National Railways (JNR), eventually leading to the termination of freight handling at every station.

From the 2025 Mini Exhibition at Tateyama Town History and Culture Exchange Center, "Hinata" : "O-kaiko-sama (The Honored Silkworms) of the Uwadan District"

Yuko Morii

This report clarifies the history and current state of sericulture in the Uwadan district of Tateyama Town through interviews and documents, and also presents the results of a mini-exhibition and silkworm rearing and silk reeling experiences. Sericulture in the Uwadan district flourished during the Showa period, but disappeared due to the conversion of land to rice paddies and the construction of Tateyama Town General Park.

Footsteps of the Tateyama Cultural Heritage Survey: From the Sketches of Yosaku Ishihara

Tomoaki Furukawa

During the Tateyama Cultural Sites Survey conducted by the Toyama Prefectural Board of Education (1960-1962), local historian Yosaku Ishihara (1906-1985) participated as an investigator, engaging in extensive field surveys and excavations from the foot of the mountain to its summit.

His detailed records, including sketchbooks, serve as invaluable primary sources that supplement information omitted from the official reports, such as daily schedules and participant details. The survey yielded significant results, including the discovery that Tateyama worship dates back as far as the Heian period.

ONLINE ISSN 2758-6367

PRINT ISSN 2759-4769

立山町歴史交流ステーション日なた研究紀要

第 4 号

令和 8 年（2026）3 月 31 日発行

編集・発行 立山町歴史交流ステーション日なた

〒930-3213

富山県中新川郡立山町日中上野 83

☎ 076-462-2387

E-mail Tateyama-hinata@ma.net3-tv.net

HP https://www.town.tateyama.toyama.jp/kosodate_kyoiku/shogaigakushu_bunka_sports/bunka/5390.html